
狐火！～狐少年の奮闘記～

鈴雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狐火！〜狐少年の奮闘記〜

【Nコード】

N6049D

【作者名】

鈴雪

【あらすじ】

人として生きるために山を降りた妖狐の空狐。再び訪れた街で、幼馴染の彼女、舞と再会する。まったり、学園ファンタジーもの。初めての投稿作品です。まだ、文章は拙く、面白くないかもしれませんが、読んでいただければ幸いです。感想、評価お気軽にお願いします。

八十一話より、宮座頭数騎氏の作品『妖狐玉藻伝・幻惑の美狐』の主人公玉藻 美狐がゲスト出演しております。

登場人物

登場キャラの紹介を少々させていただきます。
キャラが出るたびに更新する予定です。

Update:

12/8一部キャラのプロフィール削除

8/18草薙 アルトの設定を追加

2010年1/7 修正

2010 7/20 サブキャラクター追加

名前：木霊 空狐

性別：男（オス？） 種族：半妖（人間と妖狐族のハーフ） 年齢：
15歳 クラス：1-B

身長156.8cm 体重53.2kg

趣味：新術開発と料理 好きなモノ：試合（喧嘩は嫌い） 空 嫌
いなモノ：怖い話

プロフィール：
のほんとした穏やかな性格。ただし、キレると若干性格が変わり、
ちよつと怖い。

それなりに勘が鋭いが、女の子、特に舞の事になると鈍感になる。

女装が得意で、本人も一種の才能として諦めている。（が、させられるかどうかは別の問題）

年の割に剣術と魔術の能力は高く、一級退魔士の資格の持ち主。尻尾と母親が弱点。

尻尾は四尾。魔道師ランク：A+ 退魔士ランク：一級 属性：火

名前：倉田 舞

性別：女 種族：人間 年齢：16歳 クラス：1 - B

身長：157.2cm 体重：それは秘密です

趣味：料理 好きなモノ：家族と友達 嫌いなモノ：大切な人を傷つけるもの

プロフィール：

明るくちよつと天然な性格。でも、面倒見もよく割りとしっかりしている。

演劇部に所属。演技がうまく、よくヒロイン役を任される。趣味の料理の腕前は朱音も認めるほど。空狐を弟のようにかわいがっている。

魔道師ランク：なし（潜在はA相当）属性：風・聖

名前：柊 ハル

性別：女 種族：人間 年齢：15歳 クラス：1 - D

身長：155.7cm 体重：それは秘密なんだ

趣味：物語作りと衣装作り 好きなもの：着せ替え 嫌いなモノ：毛虫

プロフィール：

明るい元気っ子。でも中身は割りと乙女。空狐と舞の幼なじみ。演劇部に所属。主に台本書きと衣装のコーディネートを担当する。空狐の衣装も彼女が舞に頼まれて作ったこともある。

名前：秋山 龍馬

性別：男 種族：人間 年齢：16歳 クラス：1-D

身長：173.5cm 体重：60.4kg

趣味：筋トレと読書 好きなモノ：人から頼られること 嫌いなモノ：人が泣くこと

プロフィール：

見た目は不良だが、気のいい性格。空狐と舞の幼なじみ。髪は地毛だが、よく教員に注意されるのが悩み。他の三人と同じく演劇部所属。主に大道具担当。ハルのことが好きだが、正直に気持ちを言えないので悩んでいる。

名前：アルト・テストロツサ

性別：女 種族：人間(?) 年齢：15歳

身長：143.5cm 体重：秘密ですから

趣味：物語作り　好きなモノ：甘いもの、母親　嫌いなモノ：苦いもの

プロフィール：

朱音の親友『圭一』の娘。

明るく無邪気で、ほんわかのんびりな子。
転校生として1-Bに転入してきた。

名前：天野 刹那

性別：男(?)　種族：人間(?)　年齢：16(?)歳　クラス：
1-B

趣味：読者、空想。　好きなモノ：楽しいこと　嫌いなモノ：気に入らない人間

身長：166.6cm　体重：53.2

プロフィール：

明るく能天気に見えるが、時に影がさす。
いろいろな秘密を隠している。連載が続けば、そのうち色々明かす予定。

妙な特技が多く、数少ない特級退魔士の一人。

演劇部所属。主に役者兼大道具担当。

魔道師ランク：S+　退魔士ランク：特級　属性：混沌

名前：天野 朱音

性別：女（？） 種族：人間（？） 年齢：二十歳（本当は刹那と同じ年齢）

身長166・8cm 体重：秘密なんだよ。

趣味：料理とぬいぐるみ集め 好きなモノ：買い物、かわいいもの
嫌いなモノ：虫

プロフィール：

刹那の家のメイド。

知的な大人の女性といった感じだが、けっこう好戦的な性格。

この人も秘密がかなりあつて、そのうち明かす予定。

一級退魔士の資格の持ち主。遠距離型だけど接近戦も空狐とは互角の实力者。

魔道師ランク：S - 退魔士ランク：一級 属性：雷・星

名前：木霊 月狐

性別：女（メス？） 種族：妖狐族 年齢：443歳（外見年齢10代後半）

身長158・7cm 体重：秘密なんだつてば。

趣味：料理と新術開発 好きなモノ：息子たち 嫌いなモノ：不正

プロフィール：

空狐の母、現木霊家当主。

性格は無駄に明るくノリがいい。空狐が苦手にする人。

妖狐の中でもトップクラスの実力者で、数少ない特級退魔士の一人。
尻尾は八尾。魔道師ランク：S 退魔士ランク：特級 属性：火

名前：木霊 銀狐

性別：男（オス？） 種族：妖狐族 年齢：247歳（外見年齢20代前半）

身長：174.9cm 体重：64.5kg

趣味：戦闘 好きなモノ：人にモノを教えること 放浪 嫌いなモノ：不自由

プロフィール：

空狐の兄。木霊家当主候補。

さっぱりした兄貴肌の性格。

空狐に剣術の基本を仕込んだ。兄弟そろって少々戦闘狂の気がある。放浪癖があり、現在二年間家に連絡を送っていない。

尻尾は六尾。魔道師ランクS - 退魔士ランク：一級 属性：火

名前：イヴ

性別：女 種族：聖霊 年齢：不明

身長：自在 体重：無し

趣味：歌　好きなモノ：空、歴代の使い手たち　嫌いなモノ：怖いこと。

プロフィール：

空狐の持つ刀『月天』に宿る聖霊。

明るくさばさばした性格。

この人も謎が多い。

属性：聖

サブキャラクター

小泉 加奈子

性別：女　種族：人間　年齢：二十三歳

プロフィール：

今年赴任したばかりの教師。演劇部顧問。

教師になったばかりで、まだ学生気分が残っている節がある。

朱音の教え子でもある。

依田 桜子

性別：女　種族：人間　年齢：十八歳

プロフィール：

常磐学園三年生、演劇部部长。

ノリがよく、さばさばした性格で、部長と呼ばれることを嫌っているため、部員に名前と呼ぶように言っている。

部員の鈴宮 理香とは幼馴染の親友。

鈴宮 理香

性別：女 種族：人間 年齢：十七歳

常磐学園二年生。演劇部所属。

引っ込み思案でおとなしい性格。

学年は違うが、桜子とは親友同士。

石田 和人

性別：男 種族：人間 年齢：十六歳

プロフィール：

常磐学園二年生。演劇部所属。

マイペースな人物で、演劇部に所属したのは女の子いっぱいいるという理由。

剣道の経験があるため、殺陣などで剣を使う役をよくする。

山田 宏

性別：男 種族：人間 年齢：十六歳

プロフィール：

常磐学園二年生。演劇部所属。

おおらかな人物で、周りから頼りにされるタイプ。

部員のまとめ役でもあり、次期部長。

設定資料

ステータスのランクはA～Eで表示します。
知力のステータスは経験も加味しています。

木霊 空狐

力 C 俊敏性 A 持久力 C 魔力 B 耐久力 E 精密性 C 知力 C 運 C

解説：

幼少の頃、自分の非力さと耐久力のなさに悩んでいた頃、イヴに「早さは全てに届く力」と教えられ、以来、早さを求めるようになった。また、術の収束、射程距離は短め。

スペック的には決して低い方ではないものの、経験で劣るためその実力は半端。

倉田 舞

力 D 俊敏性 C 持久力 D 魔力 B 耐久力 D 精密性 B 知力 B 運 A

解説：

身体的には恵まれた方ではないが、反して頭のキレと回転速度は早い。

まだ経験のない駆け出しなため、今後の成長に期待。
能力タイプスターをもつ。

イヴ

力 D 俊敏性 C 持久力 C 魔力 E 耐久力 E 精密性 B 知力 B 運 B

解説：

サイズのままのステータス。

空狐の身体を借りることで本来の姿を取り戻すこともできる。

天野 刹那

力 A 俊敏性 B 持久力 A 魔力 A 耐久力 B 精密性
B 知力 B 運 E

解説：本来スペック的にはトップクラス。ただ、ほとんど力を発揮できない状況に追い込まれるのが多々あるため意味がない。攻撃魔術では細かい制御が苦手だが、探査などの補助系の術は非常に細かい制御ができる。

天野 朱音

力 B 俊敏性 B 持久力 D 魔力 B 耐久力 B 精密性
A 知力 A 運 B

解説：どれかの能力に偏った空狐たちと違い、全ての能力がバランスよく高い。

ただ、持久力に関しては若干動力の燃費の悪さが残っている。能力タイプスターをもつ。

アルト・テストロッサ

力 D 俊敏性 C 持久力 C 魔力 E 耐久力 E 精密性
B 知力 C 運 A

解説：運がいい程度的一般人程度のステータス。ただし、この能力は本来の彼女のものではない。

木霊 月狐

力 C 俊敏性 B 持久力 B 魔力 A 耐久力 C 精密性
A 知力 A 運 B

解説：日本で数人しかいない特級退魔士だけにステータスは非常に高い。

ただ、息子の空狐に似て、力と耐久力がやや低い。

木霊 銀狐

力 A 俊敏性 D 持久力 B 魔力 D 耐久力 A 精密性
D 知力 B 運 C

解説：母、弟とは逆に敏捷性よりも力と耐久力の高いステータス。魔力も低く、精密な術を使うのも苦手なため気を操る攻撃を得意とする。

タイプスター

周囲のマナを自身の体内で魔力に変換せずに、自身の力として利用できる能力。

外部からエネルギーの補完を行え、また、周囲のマナ量と、自身が耐えられること前提ながら、出力の上限もない。

作中に登場する術・技

代表的な術

昇躯

体中に巡らせた魔力で身体を強化する術。

退魔士の基本術。術者によって効果に差があり、空狐の場合は脚力を中心、舞は身体能力全般の強化。

状況に応じて強化する部位を変化させることもある。

強化部位によって術名が変わることもあり、

腕力強化：強力の術

脚力強化：風脚の術

ともなる。

消費量微小（強化の部位、強化度合で変動）

治癒術

傷口に魔力を流して回復を促す。

回復は人間の治癒力で可能な範囲のみで、失った部位の再生は出来ない。

消費量：小（傷の深さ、範囲によって変動）

虚脚

足元に魔力を集めて空気、水を固着させることで、空中または水上での移動を可能とする術。

肉体強化と同じく退魔士の基本術。

消費量：微小

口寄せの術

任意の道具および生物を、手元に転移させる術。

転移させる物体、距離に応じて消費する魔力は変わる。

基本的に口寄せするものはあらかじめ術式を組み込んでおかないと
ならない。

無生物の口寄せは割と簡単。退魔士の基本術。

消費量：小（対象の大きさ、距離に比例）

人払いの結界

一定空間を隔離し、空間外の認識をずらす。

ずらされた空間内で起きたことは周囲には気づかれずらい。

ただし、あまりにも目立つ行動をすれば認識される場合もある。

消費量：中

隔離結界

一時的に一定範囲内を異界へと隔離する術。

退魔士と人外のように一般人と違う知覚のあるものだけ動き回れる。

この結界内は異界となるため、現実世界にはほとんど影響を与えない。

ただし、現実世界と薄皮一枚離れた世界であるため、なんらかの拍子に現実に影響を与えることもある。

退魔士の基本術。

消費量：中（結界範囲に依存）

非殺傷結界

魔力によるダメージを全て衝撃に変換する結界。

主に訓練などで使われ、殺傷力は落ちるが、打撲、擦り傷程度の怪我はする。

退魔士の基本術。

消費量：中（結界範囲に依存）

木霊 空狐

術

狐火

青白い高熱の炎を作り出す。妖狐の基本術。
基本術だが、威力は高い。

また、妖狐内での魔力の目安にもこれが利用されている。

消費量：微小 射程：E 攻撃力：B

螢火

誘導操作可能な炎術。生成した炎の弾を発射する。

大掛かりな術式制御や増幅を必要としないため、発射速度は比較的早く連射も可能。また、炸裂することで威力を上げることにも可能。その使い易さに空狐はメインにこの術を使用する。

誘導や操作を切り捨てて、ばらまきだけなら幾らでも出せる。

消費量：微小 射程：C 攻撃力：C

不知火

誘導可能な炎術。螢火に対して威力と貫通力が重視されてるため、誘導能力は若干劣る。

槍状の炎は速度、威力で螢火を上回るものの、発射速度、連射性は低い。

消費量：中 射程：D 攻撃力：B

蒼炎

螺旋状に回転する炎で貫通力を上げている。威力は不知火と変わらないが、誘導機能を失くした分、不知火よりも早く、螢火並みに制御は楽。

消費量：中 射程：C 攻撃力：B

炎剣

剣状に収束した炎。

空狐は主に投擲に使用するが、場合によっては剣の代わりにも使用可能。

消費量：中 射程：E（投擲の場合射程：C） 攻撃力：B

獄炎

純粹に練れるだけの炎を敵にぶつける術。

威力、爆発力は空狐の炎術の中でもトップクラス。

消費量：大 射程：D 攻撃力：A

桜火砲

朱音に教わった砲撃のノウハウを元に空狐が作った砲撃術。

獄炎クラスの炎を収束した術であり、威力は炎龍飛翔と同等クラス。

ただ、空狐が術の収束が苦手なため、砲撃にしては射程が若干狭い。

消費量：大 射程：B 攻撃力：A

陽炎

敵を攪乱するための幻術。

炎術で温めた空気によって、塵気楼に似た現象を発生させることで自身の位置を誤認させる。

問題点は自分からの視界も歪んでしまうこと。

消費量：小

雪月花

幻影を敵の前方に発生させ、そつちに気を逸らせながら、敵の死角に回り込む術。

空狐の場合、気、または魔力を幻術の周りに漂わせることで、より

誤認性を高める。

消費量：小

炎界

炎を全身から放出する防御術。

術式破壊の特性を持つ炎を全身から放つことで全方位をガードする。範囲優先のため、若干防御力は低い。

消費量：大

神術

顕現

空狐の身体に天月内に保存されているイヴの情報を上書きすることで、イヴの全盛期の姿を再現する。

現状、三割の再現率ではあるが、それでも十分な戦力を発揮する。

消費量：極大

聖母の箱庭

イヴとの融合状態でのみ使用可能

一定範囲内に神力を広げること、魔術的に『なにも起きない』空間を作り出し敵の術を無効化する防御術。

使用時に大量の神力を使うため融合時間は短くなり、効果範囲内の味方も術を使えず、使用している間、維持を続けるためには動くこともままならない、といういくつかの弱点が存在する。

消費量：極大

狐流剣術

下弦の月

炎を籠めた上段からの斬撃。

防御ごと相手を断ち切る一撃を放つ。

消費量：中 攻撃力：B

迅雷

地面を鞘代わりにした抜刀術。

逆手に持った刀の切っ先を地面に潜り込ませて走らせる。

地面の抵抗から解放された剣速は相当なものとなる。空狐の場合、切っ先を爆発させることで速度をさらに上げている。

消費量：中 攻撃力：C

烈光斬

刀身で加速させた魔力を光刃にして発射する術。

速度は蒼炎ほどはないものの遅くはなく、またバリアなどに「啣む」特性を持つため敵の足止めにも使える。防ぐなら避けるか、相殺するかのどちらか。

主に天月の一之太刀「夜光」で使用するが、通常状態でも使用可能。その場合、魔力の消費量が若干上がる。

消費量：中 射程：C 攻撃力：C

炎龍飛翔

鞘の中で気と練り合わせた炎を圧縮して放つ、中距離における空狐の決め技。

龍を模したこれは斬撃であるが、威力、射程は砲撃のカテゴリーに入る。

消費量：大 射程：B 攻撃力：A

桜龍飛翔

三ノ太刀『桜花』で使用する。

番えた矢に炎を上乗せして放つ。貫通力に優れた術。

纏った魔力によって、矢はある程度の軌道遷移が可能。

消費量：大 射程：A 攻撃力：A

朔夜

空狐オリジナルの技。

強化した肉体強化術、対抵抗魔術を展開し、最速の一撃を放つ。

かつて理論優先で作りだした『死夜』の反省を込め、術はある程度弱めに抑えてある。

ただし、それでも魔力の大部分を消費し、肉体に多大な負担をかけるという、変わらない問題点が存在する。

消費量：特大 射程：D 攻撃力：A

死夜

空狐オリジナルの奥義。

朔夜の元になった術で、理論などはまったく変わらないが、こちらに限界まで身体能力を高めて使用する。

高速の突撃時、速度と対抵抗魔術の圧力に押された空間から、断裂空間が形成され、それを刀身に纏わせて放つ。速度、威力ともに朔夜の倍以上。

反面、反動は尋常でなく、試し撃ちの結果、空狐は全治二ヶ月、意識不明の重体となった。

消費量：極大 射程：D 攻撃力：A A

天野 刹那

術

キューレブリッツ

範囲系の術。撃ちだした黒い弾丸が対象に接触、または設定した位置で炸裂する。

範囲、炸裂位置などの細かな設定も可能。連射性も高く、刹那は好んでこれを使用する。

消費量：中 射程：C（弾丸の炸裂範囲は1～5m程） 攻撃力：C

ナハトブリッツ

槍状に魔力を収束した術。貫通力に優れた槍。

主に刹那は投擲に使用するが、普通の槍としても使用可能。

消費量：中 射程：E（投擲の場合射程：C） 攻撃力：B

シュヴァルツ・ヴァルト

術者または収束した魔力スフィアを中心とする球形の範囲内全てを攻撃する広域攻撃魔術。

スフィアを迎撃されたとしても炸裂することで広域攻撃を行う。また、この術は術者が味方と認識するものにダメージはない。

消費量：大 射程：魔力スフィアから半径1000m 攻撃力：A

剣術

斬魔閃

魔力を籠めた斬撃を飛ばす。

空狐の烈光斬と似ているが、こっちは純粹に斬撃を飛ばす術であり、断ち切ることを目的にしている。

『散』の合図で斬撃を炸裂させることも可能。

消費量：中 射程：C 攻撃力：B

天野 朱音

術

サンダーバレット

誘導操作可能な雷術。

雷だけに速度が速く、誘導性も高い。

速射性もよく、朱音は牽制、または相手の出方を見るのもっぱらこの術を使用する。

消費量：微小 射程：C 攻撃力：C

サンダーブレイク

槍状に収束した雷を撃つ術。

空狐の蒼炎に似た特性であり、威力、貫通力に優れている。

消費量：小 射程：B 攻撃力：B

サンダーファランクス

サンダーバレットを秒間十発。最大二百発の連射する術。

一点集中、または広範囲どちらにも対応可能な術。基本は一点集中で使用する。

消費量：大 射程：A 攻撃力：B

サンダーインパルス

サンダーバレットの上位互換。

威力はサンダーバレット以上だが、連射性は落ちる。

消費量：中 射程：B 攻撃力：B

轟雷円舞

屋内外問わずに雷雲を発生させ、広範囲に雷を落とす術。

主に相手を追い詰める、または対多勢用の術。

雷雲の発生には多少のインターバルが必要。

消費量：特大 射程：術者を中心に半径500m 攻撃力：B

シューティングスター

誘導操作可能な星術。

サンダーブリッツをタイプスター用に変更したもの。

消費量：微小 射程：C 攻撃力：B

スターダスト・インパクト

大気中のマナを収束させて撃つ収束砲撃魔術。

その特性上、本人の魔力に依存しない術。

レアスキル・タイプスター専用の術。現状、朱音の中でトップの威力を誇る。

消費量：中 射程：C 攻撃力：A

スターダスト・フルブレイカー

スターダスト・インパクトの強化版。

朱音の『戦闘天使翼』に装備されている術式収束の羽を展開することで、スターダスト・インパクト以上のエネルギーを発生と同時に収束力を上げている。

朱音最大の攻撃術。

消費量：大 射程：C 攻撃力：A A

倉田 舞

術

スターライトバスター

膨大な魔力を対象に放出するというシンプルかつ高威力の砲撃魔術。

射程、威力、精度が高く、舞が一番最初に覚えた攻撃魔術。

純粹に魔力を放出する攻撃なため、術式破壊などの効果は薄い。

消費量：中 射程：B 攻撃力：B

アクセルバスター

スターライトバスターのバリエーション。

魔力を加速することで、速度、貫通力が上がっている。

反面、威力はスターライトバスターに劣る。

消費量：中 射程：A 攻撃力：C

ヘヴィーバスター

スターライトバスターのバリエーション。

アクセルとは逆に速度を落とすことで、破壊力に重点を置いた。

反面通常のバスターよりも射程と速度が劣る。

消費量：中 射程：C 攻撃力：A

トルネードバスター

トルネードの名の通りに魔力に乱回転を加えた砲撃魔術。

乱回転を加えられた砲撃は、舞の砲撃の中でも貫通性が特に高く、

「抉り抜く」攻撃となる。

殺傷力が高いため、非殺傷でも全力で撃てば、ただでは済まない術。

刹那との決闘では手加減して使用した。

消費量：大 射程：B 攻撃力：A

スターダスト・インパクト

大気中のマナを収束させて撃つ収束砲撃魔術。

その特性上、本人の魔力に依存しない上に、威力も周囲のマナの密度にもよるが、上限がない。

朱音の十八番の術であり、舞は数度見て、模倣してみせた。

レアスキル・タイプスター専用の術。現在の舞の切り札。

消費量：中 射程：C 攻撃力：A

木霊 月狐

術

鳥籠

月狐が得意とするトラップ系炎術。

範囲内に入ると設置された炎が敵を攻撃する術で、月狐の場合、設置範囲や数がずば抜けて高い。

消費量：大 射程：術者から半径500m以内で10m四方の空間
攻撃力：C

狐流剣術

疾風炎雷

雷と融合させて出力を上げた炎で敵を薙ぎ掃う。

範囲が広く、掠るだけでも全身を貫くような電撃が走る。

消費量：特大 射程：B 攻撃力：A

他、空狐の使う技は天月が必要なものを除いてだいたい使える。

木霊 銀狐

狐流剣術

上弦の月

気を籠めた上段からの斬撃。

防御ごと相手を断ち切る一撃を放つ。

気は魔術破壊の特性を持つものの、威力の面で炎術に劣る。

精龍飛翔

鞘の中で気を圧縮して放つ中距離における銀狐の決め技。

炎のない分炎龍飛翔に威力は劣るものの、術式破壊及び発射速度に優れる。

消費量：微小 射程：B 攻撃力：A

序章 二人の再会

静岡の端にある外岡線鳴海駅。

電車から一人の少年が降りた。

灰色の短い髪と、紅い目が印象的な少年だ。小柄で整った顔立ち、服装はワイシャツとジーンズ。柔らい表情と雰囲気ですら服装を変えれば女の子と間違えられる事も有りそうなの……

「よつと、」

彼は、荷物を持ち直して歩き出した。

駅から出ると懐かしい町並みが僕を迎えてくれた。

「着いた〜」

ぐつと僕は伸びをする。

とと、忘れてた。

みなさん始めまして。僕の名前は、木霊空狐こだまくうし。十五の妖狐です。

僕は今まで山の中の里で母さんと暮らしていたんですけど、この歳になって、やっと里を出る事が許されました。

母さんはすごく心配してたけど何とか折れてくれて、これからこの町、『常磐市とこわかし』で暮らすことになりました。

お世話になる家は、母さんの友達の娘さんで、僕の幼なじみの倉くら田らた舞まいさん。

彼女は人間だけど妖怪に理解のある人であることや、最近ご両親を亡くして、一人暮らしだったからちようどよかつたんでしよう。

僕も、相手が初恋の人だったから、ちよつと嬉しかったな。

「懐かしいなあ」

ぐるつと周りを見る。五年ぶりに訪れたこの町は、相変わらず緑が多く懐かしい匂いがする。商店街のレンガ通りも久しぶりだな。

狐里には舗装された道なんてなかったもん。

「さーてつと」

時間を確認。まだ大丈夫だけど、早めに行った方がいいかな？
僕は荷物を持ち直して、約束に遅れないよう歩き出した。

待ち合わせは昔よく二人で遊んでた公園。けっこう広くて相変わ
らず子供たちの楽しそうな声が聞こえる場所だ。

「変わらないなあ」

ベンチに座る。携帯を見ると、約束の三十分前。少し早かったか
な？

ぼかぼか気持ちいいし、のんびりと待つ事にするか。

十分後

「ぐー」

彼はベンチで眠っていた。

そこに一つの人影が射す。

そして、彼女は彼の顔を見てにこっと笑った。

「んっ」

どうやら眠っていたらしい。あれ？後頭部に何か柔らかい感触を
感じる。

「あ、起きた？」

ん……えーっと。

僕の顔を覗き込んでいる人は……

「お姉ちゃん？」

「うん」

にこっと笑う彼女に思わず見惚れる。

そりゃあね、六年間逢わなかったんだから成長してるのは当たり前
前んだけど……ここまで変わるとは思ってたなかったな。

流した墨のように艶やかな髪を昔みたいにリボンで結んである。

そして、ピンク色の血色のいい頬とにこっと笑った顔は、とても魅

力的だった。身長は……僕と同じくらいかな？ だけど、僕は小さいほうだから十五歳の女の子としては、普通な方か。でも……その胸はなんとというか、ほっそりしている割に、でかい。Dか？ それとも……ゴホンゴホン（自粛）

着ている服も学校の制服のブレザーみたいだけど、彼女が着ているとおしゃれに見えるから不思議だ。

体を起こして、彼女と向き合う。

「久しぶり。来たなら起こしてくれてもよかったのに」

「だって、クーちゃんの寝顔かわいかったんだもん」

ニコニコとほんとに幸せそうな顔を見て息を吐く。見た目は変わったが中身はさほど変わってないご様子だ。

「まあいいや、これからよろしく」舞さん

「こちらこそよろしく。」空狐くん

二人とも前々の打ち合わせどおりお互い名前で呼んでから握手をした。

序章 二人の再会（後書き）

初投稿です。

とりあえず一週間に一回投稿する予定です。

第一話 懐かしい顔

「じゃあ、行きましようか」

僕は荷物を持って立ち上がる。

「うん。でも、今日のご飯の材料買わないといけないから、先に買い物に行こうよ」

まあ荷物もそんなにないし、いいかな。

「わかりました」

三十分後、商店街の雑踏の中。スーパーで大体の買い物を終えて歩いてる。

「大体の買えたし、そろそろ家に行こっか」

「はい」

朗らかな顔。きつと、満足するぐらい買えたんだね。つーか、満足してくれないと僕の腕が死ぬ。

正直予想より多めだったもので、荷物を持った両腕がプルプル震えてる。背中の荷物でできるだけ少なくしてよかった……

「多いなら持つよ？」

「いえ、これぐらい大丈夫です」

強がって歩き出して、アーケード街の出口まで、

「あ、舞ー」

そこでどこかで聞いた声。振り向くと、一人の女の子が駆け寄ってくる。

「ねえ、例の話なんだけど」

その女の子は、僕を見ると驚いたように目を見開く。

「おい、ハル。いきなり走り出すなよ」

今度は男の人だ。

「ハル？どうし……え？」

彼もこっちを見ると、黙った。

「やあ、龍馬^{りゅうま}、ハル、久しぶり」

二人とも僕の幼馴染だ。女の子の方は柊　ハル。男の子の方は秋山　龍馬

五年ぶりだけど、二人とも変わったなあ。

龍馬は僕よりずっと背が高く、体もがっしりしている。男らしくて正直うらやましい。そして相変わらずきれいな茶髪だ。

ハルの方は昔、ショートだった金髪が長くなって女の子らしくなっている。しかし残念ながら舞さんほどあそこは成長してないようだ。そして瞳から元気が相変わらずあふれている。

ちなみにハルは舞さんと同じ制服。龍馬も基本は同じ制服。二人とも同じ学校か。

「え、空狐？」

龍馬が僕を指差して聞いてきた。

「うん、そうだよ」

「うわー、久しぶりだね」

ハルが、ニコニコ笑って再会を喜んでくれた。

「五年ぶりだけど、今回はどれだけこっちにいるの？」

ハルがそう聞いてきた。あれ？

「舞さん、あれまだ二人に言っていないの？」

「うん。明日驚かしてあげようと思ってたんだ」

二人を見ると何を言っていることを余り理解できてないみたいだ。

「こほん、では、発表します」

舞さんの言葉を僕が続ける。

「明日から、僕はこの街の常磐学園に通うことになりました」

二人とも少しの間沈黙する。

『ええええええええ！！』

二人とも大声で驚いた。何事かと、周りに人が集まってくる。

「うそ！　いつのまに！？」

「マジかよ！？」

興奮した二人が詰め寄ってくる。

「お、落ち着いて二人とも」
「ひ、人が集まってきてるよ」
野次馬から逃れるため、とりあえず、興奮する二人を連れてその場を離れることにした。

というわけでまたも公園。

四人でぶらぶらしながら話す。

「ふうん。これからは舞の家で暮らすんだ」

ちよつとばかり驚いたかのような顔をするハル。

「うん。そうなんだ。よろしく」

「女の子と同棲ってうちの学校OKだったっけ？」

「親戚だから平気だよ」

たぶんと舞さんが龍馬の疑問に答えた。

僕の父さんは舞さんのお母さんの兄なのだ。

だから妖狐の母と人間の父を持つ僕は半妖なんだ。

「学校も明日から常磐学園だから、よろしくね二人とも」

「おう、明日から楽しみだよ」

にかつときもちのいい笑顔で龍馬がばんばん僕の肩を叩く。

「うん、よろしく。空狐」

それから、少しの間四人で話して、

「じゃあね、二人とも」

そう言って龍馬たちは去ろうとする。

「え？ もうちよつと話そうよ」

「わりい、まだ用事が終わってねえんだ」

「それに、久しぶりなんだから夫婦水入らずにしてあげないと」

と、からかう様にハルが笑う。

とたんに僕らの顔が赤くなった。

「ななな、何を言っただよ、ハル！」

「あはは、二人とも顔真っ赤だよ」

あつひつひつ……

「ほら、ハルふざけてないで行くぞ」

そう言っつて龍馬がハルの襟を掴んで引っ張ってつてくれた。感謝。

そして、二人が行つてからちよつと経つて。

「……じゃあ、わたしたちも行こつか」

「はい……」

そんな感じで僕らは歩き出したのだった。

第一話 懐かしい顔（後書き）

前週一と言いましたが、火曜と土曜に変更します。

第二話 二人で歩く

「いっぱい買ったね」

「そうですね」

僕は買い物袋を見る。どれもかなり膨らんでいて中身がもれてしまいきそうだな。

「でも、久しぶりだったねえ。四人そろったのって」

「ですね。舞さんたち思ってたよりずっと変わっててびっくりしちゃった。ハルの中身もあまり変わってなかったみたいだけど」

「だって、五年も会わなかったんだよ。当たり前よ」
「ですね、つと僕は相槌をうつ。」

十歳から十五歳までの五年間、僕は里で母さんに体術や、魔術など様々なことを仕込まれていた。しかも実戦形式で、たまに母さんの仕事まで手伝わされた。

かなり大変で一部は死ぬんじゃないかと思ってしまっほど辛かったけど、おかげでかなり強くなったと思う。これでも一級退魔士の資格を持っている。

え？　なんで五年間鍛えられていたかって？

それは、一応僕が木霊家の次期当主候補（兄もいてその人も候補）だからでもあるのだが、一番の理由は舞さんだ。

昔、いじめられていた僕を助けてくれた憧れの人だ。いつかこの人みたいな人間になりたいと思ってた。だから強くなりたかった。

「空狐くん？」

「あ、ごめん。なに？」

言うのは恥ずかしいから誤魔化すように聞き返す。

「うつん、なんでもないよ」

そう言ってから彼女はにやりと笑う。その笑いに背筋がぞつと冷える。

やばい、なんかわからないけどやばい。逃げようとしてもう遅か

った。

「えい」

舞さんが抱きついてええええええ!!

うわ、わき腹に柔らかい感触が二つ！ しかもなんかいい匂いが漂ってきた！

「な、なにをするの!!」

しかし、反応はない。あり？ なんか難しい顔して固まってるよ。

「なんで？」

「えっ？」

「なんで硬いの？」

「えっ？ そりゃあ、男だから」

「そんな!!」

何かシヨックを受けたように後ずさる。

「ふわふわ柔らかくなくちゃクーちゃんじゃないよ！」

なんじゃそりゃ！

「なんで筋肉なんて付けちゃったの！ スカート穿いたりしてあんなに女の子っぽかったのに」

「それは、単に子供の時は女の子っぽかっただけで、僕もれっきとした男です。そして、スカートとか穿かせたのは、舞さんと母さんでしょ！」

しかも、その時の服は舞さんが着てた服だったから余計に恥ずかしい。

「いいじゃん。似合ってたんだから」

そう言いながら、舞さんはしばらくの間憎々しげに僕の腹をグーでこずづいたのであった。

うつつ、やっぱりまた着せられるのかなあ？

そう考えると、なんだか憂鬱な気分になるのであった。

第三話 新たな家

二人で騒いでいたら、いつの間にか舞さんの家に着いていた。むむ。いつの間に……にしても、

「久しぶりだなあ」

僕は家を見上げる。なんせ、舞さんの家はお屋敷なのだ。

うちの方が山奥だから、庭はずっと広いけど家の方は負けている。たぶん、うち三つ建ててもお釣りが来る。

そして、庭には色とりどりの花が咲いていて舞さんの性格も現れてよく手入れされているみたいだ。

家上がる。うん、やっぱり掃除が行き届いている。

ために指で靴箱の上を擦ってみただけ、埃はほとんどついていない。って、姑か僕は！

「空狐くん」

いつの間にか、舞さんが先に家になって、僕の前に立っていた。そして、満面の笑みで

「おかえりなさい！」

僕は少しの間きよんとしていたけど、すぐに言ったことの意味が分かった。

「ただいま。舞さん」

それを言った時、本当に新しい生活が始まった気がしたのだった。

「はい、ここが空狐くんの部屋」

舞さんに案内されて入った部屋は昔から僕と母さんが泊まりに来るたびに使わせてもらっていた部屋で、すぐ隣が舞さんの部屋だ。

「やっぱり変わってないね、ここも」

「当たり前だよ。増改築とか必要ないもの」

まあ、そうだね。こんだけ広いし立派だし。

部屋は畳の張つてある六畳の和室。日当たりがよくてぽかぽかして、懐かしいにおいがする。うーん、久しぶりにここでごろごろしたい。

ただベッドとタンスにが置いてあつて、その二つは微妙に相性が悪いなあ。

「あつ」

柱を見る。

「まだ残つてたんだ」

それは、僕が来るたびに背の高さを記録するために付けられた傷だった。つつつと指でなぞる。六歳から九歳の時の傷が団子つて言うのが悲しいような懐かしいような気分になる。

「あの時は本当に小さかったもんね」

懐かしそうに舞さんが笑う。ちよつと複雑。

次に窓を開けてみる。お？

「お隣の柿の木まだ残つてたんだ」

よく二人で柿とつて怒られてたっけ。甘くておいしかったなあ。とそこで、

グ

腹の虫が鳴った。うーむ、けつこう大きくてちよつと恥ずかしいぞ……

「ねえ、空狐くん、そういえばお昼食べた？」

「いえ、まだです」

うん。忘れてたけど、思い出すといきなりお腹が減ってきた。

「じゃあ、今からご飯作るから待ってて」

そして、リビング。

とんとんとんと、小気味いい包丁の音が聞こえてくる。

なんだかそれを聞いているだけで食欲が湧いてくる気がしてきた。

程なくして、二枚のお皿が持つて舞さんが来る。

「はい。できたから食べよ」

置かれた皿に盛り付けてあったのは焼きそばだ。むむ、具はにんじん、ピーマン、モヤシとキャベツにメンマやナルト、それに豚肉盛りだくさん。そして、上には青海苔、鰹節に紅しょうががトッピング。なかなかゴージャスだ。ちよつと、色が濃い気もする。

かぐわしいソースの匂いがさらに食欲をそそる。

「いただきます」

「いただきます」

さつそく一口。こ、これは……

「おいしい！」

野菜はしゃきしゃきで、肉も中まで火が通ってるけど硬くならず柔らかい。僕は硬くなっちゃうんだよなあ。そして、ソースとコシヨウの味付けもちょうどいい濃さだ。

ドンドン箸が進む。

「おいしいよ。舞さん！」

「本当？」

「うん。僕や、母さんより上手じゃないの？」

お世辞抜きでそう思う。

「お世辞でも嬉しいな」

「そんなことないよ」

くうう、やっぱり嫁に欲しい！

「明日からうちの学園に通うんだよね？」

「うん」

常磐学園。そこが僕が通うことになる学校だ。予定では舞さんと同じクラスになるはずである。

「驚かないでね。上の学年にまりもさんいるんだよ」

「え？ まりもさんが？」

まりもさんとは、僕らが子供の頃一緒に遊んでくれたお姉さんだ。懐かしいな。

そんな風に、しばらく二人で食べながら雑談を続けると

「へへ、嬉しいな」

んっ？ 何か声色が違うような？

「うわ！」

舞さん、涙ぐんでる！ どうして？

「ど、どうしたの？」

「わたしね嬉しいの。また、誰かと一緒にご飯食べられて……すごく嬉しいの」

舞さんが目尻を拭く。

そっか、今まで明るかったからおじさんとおばさんのこともう大丈夫だと思ってたけど、やっぱり寂しかったんだ。

「ねえ、お姉ちゃん」

「なに？」

「僕でよかったらいつでも一緒にご飯食べるよ」
舞さんの目からポロポロと涙がこぼれ落ちる。

「ありがとうクーちゃん……ありがとう」

しばらくの間、舞さんのすすり泣きが部屋に流れる。その間、僕はずっと黙って焼きそばを食べていたのだった。

第四話 空狐、家族を語る

「うし、はじめますか」

食事、僕は荷物の整理を始めた。大体はすでに宅配で送っておいてさつき着いたのだ。

中の荷物は服と日用品と本を少々後はゲーム。服をタンスに入れて、机に物置いて、本棚に本を入れるだけだけど。

まず、僕はタンスに服を入れる。ありゃ？

「これって」

出てきたものを見てあははと、つい乾いた笑いを漏らす。

それは、僕の母さんが僕に着せて楽しんでた服の内の一着で、ふりふりひらひらのゴシックな黒いドレス。あの人、こっそり忍びこませたな。

この服を見たら、なんとなく昨日家を出たときのことを思い出す。

『クーちゃん、ちゃんと荷物持った？ ハンカチは？ ティッシュは？』

『持った。持ったから！』

心配になって駅まで送りに来た母さんを腕からなんとか引き離す。母さんは髪と目の色は僕と同じで、長く伸ばした髪は紐で束ねている。張り艶のある肌はどう見ても二十半ばも越しているようにも見えない。

さらに服装はひらひらふりふりのレースをたくさん使った、ブラウスとスカート。しかも似合っているんだからさらにすごい。

自分でいうのもあれだが、絶対に二児の母には見えない。いくら純粹の妖狐とはいえ十年に一つは歳をとるはずだから、人間年齢で40は過ぎているはずなんだけど。

『本当に大丈夫ね？ もうお母さん心配で心配で』

「大丈夫だよ！　ちゃんと兄さんと違ってちよくちよくメール送るから！」

「本当ね？　嘘ついたらだめよ」

汽車に乗り込み窓の外に顔を出す。汽車の外ではまだ心配そうに僕を見る母さんがいた。

そこで汽車が動き出す。母さんは手を振りながら、

「がんばってね！　次に逢う時孫の顔見れるの楽しみにしてるから！」

「はあ」

ラストはあれだったが心配してくれるのは嬉しいな。だけどこのドレスは邪神封印級の処置を施しとかないと。

服をタンスにつめた（ドレスは袋にいれて固く縛って奥に）次に本を片付ける。持ってきた十冊の本と明日から使う教科書を机の棚に入れる。

最後に筆記用具や、大事なものを袋から出して机の中に入れる。

と、一枚の紙切れが落ちた。

「おっと」

ぱっと取る。

それは、写真だ。子供の頃の僕と男の妖狐と女の妖狐が写っている。

僕の家族みんなの写真。

そして、この男の妖狐は僕の兄さん木霊　銀狐。

見た目は、僕の背をずっと伸ばして、男らしくした感じ。あと髪は僕と違って月明かりを弾けば銀色ではなく、名前の通り銀色だ。

小さな頃から父親のいない僕にとって、父親代わりの人。剣術もこの人に教わった。

ただ、問題がある。

「今、どこにいるのかな？ 兄さん」

兄さんには放浪癖という困った性分があるのだ。

そして、現在。また放浪に出てて、僕が生まれてから三回目だ。

一回目は僕が四歳の時の二年間。次は八歳の頃の三年間。そして現在、十三の時から二年間の間消息不明。

まあ、心配はしてないけどね。

ここまでくるといい加減心配する方があほらしくなる。しかも僕が生まれてからは自重しているほうらしいし。

確か母さんの記録には僕の生まれる前に最長二十三年間の間、放浪していたとか。旅先で弟が生まれるということを知りて慌てて帰ってきたらしいが、もし僕が生まれなかつたらきつとさらに放浪していたらうとは母さんの言葉。

そして、あの人は強い。状況によっては母さんと互角に渡り合える。そして、当時、二級なのに（一級の筆記でちよつとミスつたらしい）異例として特級退魔士に推薦されたほどの実力者だ。でも、本人にその気がないからその推薦蹴ったけど。

こんだけ強ければ心配する必要すらない。

そんなことを考えながら片づけを終えた。

「よし」

そこで、こんこんとドアがノックされた。

「空狐くん、片付け終わった？」

「うん、終わりましたよ」

舞さんが部屋に入ってきた。

「あれ？そんなに変わってないね」

「変わってますよ」

僕は指をさす。

「まず、机の本棚に本が入ったでしょ。それに鉛筆立てに鉛筆が四本と筆に定規が入ったし、そこに刀だつて置いてありますよ」

「ずいぶん細かい変わったところだね……」

あははは、と微妙な笑みを浮かべる舞さん。

「で、何の用ですか？」

「あ、うん。あのね」

舞さんのもじもじしてから

「久しぶりにあれ触らせて欲しいな」

第四話 空狐、家族を語る（後書き）

先日の登場人物紹介でこっちより先に銀狐の名前出ちゃってたのに
気づきました。失敗しちゃった……
あと、内容をちよつと変更しました。

第五話 空狐の尻尾

僕はベッドに座って、あれを出す。

「うわあ、前より大きくなつたね」

確かめるように舞さんが触ってくる。

「ふひ！」

表面なぞられただけなのに形容しがたいむず痒さが……

「あれ？ 前より敏感になつた？」

「いや、普段はそうじゃないんだよ。強くつかまれないと……」

「て、あー！ 僕のばかあ！ 何自分で弱点ばらしてるんだよ

おおおおっ！！

「ふーん」

舞さんが小悪魔っぽく笑う。

あ、やば……

「えい」

かわいい掛け声がかけてられてえええええええつ！

「や、やめやめえええつ！！」

だ、だめだ。つ、強く握られたから、ち、力が入らな……

「えいえい」

今度はごしごし擦ってきたあああああ！！ 背筋に稲妻がああ！

「ひゃああ！！！！」

も、もうだめ。がつくつと、体から力が抜けていく。

「ふふ、相変わらず手触りいいね。空狐くんの尻尾」

うっ、し、尻尾も、もう……

「ふわふわもこもこで気持ちいいなあ」

「ひゃふっふっふ！！」

舞さんが尻尾に抱きついたああああ！

「ああもう、こんな枕欲しいなあ」

舞さんが先端から根元のほうに、毛に逆らうように尻尾を撫でて

「ひゃっほう」

背筋にむず痒さが稲妻のように駆け抜けた。ついでに腰も抜けた。ああ、もうだめだ。このままだと……

僕の様子にさすがに舞さんも冷や汗をかいてぱっと手を離してくれる。はあ。

「つらそうだから休憩ね」

やっと、人心地つける。うう……尻尾を労わるようになってやる。にしても、すごい反応だったね」

「そりゃあ、そうですよ。尻尾は狐にとって一番敏感な部位ですから」

息も絶え絶えに答える。

「ふーん。他の人もそうなの？」

「いえ、ここまで反応するのは僕ぐらいです」

母さんもいつてたが、僕の尻尾はちょっと敏感すぎるのだ。ちなみに、当たり前だけど尻尾を触らせていいのは家族か、心が許せる人にだけである。

「ふーん、でも、そろそろいいかな？ では」

舞さんがわきわきさせながら手を伸ばしてきた。くっ。

ひよい。

なんとか残った力を振り絞り、避ける。

「……」

また、舞さんが手を伸ばす。僕は避ける。

ひよいひよいひよいひよいと何度も舞さんの手が伸びるたびに逃げる。

正直、今はやばい。いろんな意味で。

「まあ、いいや。空狐くん嫌がつてるし」

やっと諦めてくれた。

「また、触らせてね」

できれば、御免被りたいな。

第五話 空狐の尻尾（後書き）

バランスが悪いという指摘を受けたので、第五話の内容を二つに分けました。

どうでしょうか？

第六話 歓迎パーティー

尻尾を触られて二時間ほどたった。

その間、舞さんと明日のことをいくつか相談しようとしたのだが、なぜかすぐに部屋に戻されてしまった。

そして、その間、家に誰かが入る音も何度かあった。むー、何してんだ？

しかたないから、やることのない僕は自分の刀『天月』の手入れをし始めている。鞘から抜いた『天月』は僕が見習いというのも含め、滅多に使わないから、刃こぼれも、余計な汚れもない。長さ約六十センチ鑄造り、刃紋はのたれの打刀。それなりの重さで重量バランスがよく、どんな体勢でも振りやすい。

この刀は僕が十三歳になった日に、母さんがくれた木霊家の家宝だ。はつきり言って値段は付けられないほどの価値がある。

本来なら木霊家当主が持つものなんだけど、刀との相性が僕が一番いいからといって渡された。

術式増幅率も、魔力強度も高く、ついてる特殊能力も含めて僕には少し宝の持ち腐れ感がある。

だから、手入れは念入りにしているし、この刀に相応しい使い手になるのは僕の目標の一つである。

拭い紙で刀から古い油を取り去る。

それからぼんぼんと打粉を振りかけて、満遍なく塗り付けていく。次に新しい紙で粉を拭いてく。そして、最後に油を塗りなおして完了。

手入れの終わった刀を鞘に戻したら、

「空狐くん」

とんとんとドアがノックされる。タイミングバツチシ。

「何ですか？」

「準備終わったからこっちきて」

準備？ なんのことだろ？

呼ばれて居間に入る。とそこに舞さんだけでなくなぜか龍馬とハルがいた。そして、その後ろには色とりどりなご馳走。

「え？」

にっと三人が笑って、

『ようこそ木霊 空狐くん！』

えーっと？

「あの、なんで二人が？」

舞さんの方を見る。だって、今日僕が来ること知らなかったよね？

「えへへ、実はね、さっきのあれ嘘」

「……嘘？」

舞さんが頷く。

「最初からみんなで、空狐くんの歓迎パーティーをやることにしていたんだ」

「え？」

くくく、っと三人が笑う。

「でも、今の空狐の顔よかったな」

「うん。びっくりしたって感じがありありと感じたよ」

「写真準備しといたほうがよかったね」

「なんか、はめられたって感じがする。けど、三人が僕のためにパーティーの準備をしてくれたのは、とても嬉しかった。

「では、改めて空狐くんの歓迎パーティーを始めたいと思います」
舞さんが仕切りなおす。

その言葉を合図にソラがグラスを配って、龍馬がそれに紅い液体

を注ぐ。

「それでは、このパーティーの主演空狐くんに一言お願いしたいと思えます」

「え？ あああああ」

いきなり指されても、コホン。

「えっと、本日はこのようなパーティーを開いて頂いて、まことに恐悦至極、感激極まりなく」

「空狐、何か変だぞそれ」

と龍馬が野次を飛ばす。うう、なるようになれ。

「うん、細かいことは除いて」

グラスを掲げる。みんなも掲げる。

『かんぱーい！』

チーンと澄んだ音が鳴って、中の液体が踊った。

よし、まずは一口。

おお、これは濃厚なフレーバーと奥行きのある風味、そしてフルーティー………つてかこれ、

「ワインじゃん！！」

しかもかなり上等だよこれは！

「わざわざ、奥の倉庫から引つ張り出してきたんだよ」

舞さんが朗らかに告げて一口飲む。

「僕ら未成年ですけど！」

「よいではないか、よいではないか」

「びみよーに用法が違うような」

「なら……お主も悪いのう？」

「聞かないで。あとその用法も違うと思うよ」

僕のつつこみに、舞さんがため息を吐く。

「もう、空狐くんは硬いなあ。ほら、ハルたちは普通に飲んでるよほんとだ。二人とも普通に、しかもハルお代わりまでしてるー」

！！しかも、こっち見ながら龍馬ニヤニヤしてるし。ハルは、少し不機嫌そう。

「やっぱ僕がノリ悪いから？」

「ね？ 硬くならずには」

「そう言っただけで舞さんがぐいっと飲み干してお代わりを注ぐ。お代わりするんかい。」

「はあ、まあいつか。せつかくだもんね。」

「気を取り直して、僕もワインをもう一口飲んだ。」

第六話 歓迎パーティー（後書き）

あと、一話か二話で一日目が終わりそうです。
がんばろう。

第七話 異変

パーティーが始まってしばらくたち異変に気づいたが、しかしもう遅い。

「みやつたく、空狐は三年間も連絡しにやいななんて何ひてたのよ」
気分を出すためと、舞さんが用意したランプの明かりの下でもわかるくらい顔が真っ赤に染まったハルが僕の右側でぐちぐち言いながらワインを飲む。

「ほんろに、空狐くんわたひがどれらけ心配ひてたかわはる？」
左側にも眼の据わった舞さんがこっちもワインを飲み続ける。

龍馬の方は、先ほど二人に絡まれてワイン一気飲みなんて所業を敢行してひっくり返ってる（お酒は正しい飲み方で楽しみましょう）
うう、この現象はやっぱり……

「二人とも正気に戻って。酔っ払ってるでしょ？」

「なあにいつてんの、わらひはよってなんかおひまへーん」

いや、呂律回ってない言い方では説得力が爪の垢ほどもないんですが。

「そおだ！ わらしは酔ってなんかひなひよ！」
舞さんも乗って来る。

「わらしを酔っ払い扱いするのはこの口はのかな？」

「痛い、痛い。止めて舞さん！」

舞さんが頬をぐいぐいと横に引っ張る。何とか逃げ出そうと身を
擦る。

「はによ、そんなに嫌がらなくても……。空狐くんはわらしのことが嫌いななの？」

「なんでそうなるの！」

だめだ、酔っ払いには勝てないよ。

「ねえ、ろうなの」

「嫌ってなんかないよ」

「ん、じゃあ、わらしのこと好き？」

「はい、好きです」

お愛想程度に答える。

「わ、い、空狐くんが好きだっていてもらったあ！」

「よかつたねえ、舞」

二人ともなにがなんだか。

「ん？空狐くんさつきからぜんぜんお代わりしてないね」

舞さんが僕のグラスを覗き込む。

「え？だってあまり飲むわけにいかないよ。明日から学校」

「はいはい、グイーっと」

舞さんが無理やり酒を注ぐ。ちよつと待った、二日酔いになつた

ら洒落にならないよ！

「ま、舞さん！ だめですよ！」

無理やりグラスを離す。

「わらひの酒が飲めらいというのら！？」

「いただきます」

わーい、このヘタレ。(一人つつこみ)

ん？なんで一人だけ酔つ払ってないかって？自慢ではないが、僕は酒には強いほうではある。散々酒好きの母さんと兄さんに鍛えられたのだ。

『クーちゃん。いいお酒手に入ったのよお』

そう言つて母さんは何度も僕に酒を飲ませた。兄さんも帰つてくるたびに

『おう、空狐。珍しい酒手に入ったぞ。飲め飲め』

と言つて子供の頃から僕に飲ませてた。しかも、二人ともかなり度がきつい酒ばかり。

おかげで、僕には生半可な酒はきかないのだ！ あっはっはっは。

……ここで酔つ払えたらどんなに幸せだろ？

「みやつたく、ハルもひいてよ。ひどいんらよお」

「んー？ なに？」

もうすっかり出来上がってるなあ。

「優柔不断でさあ〜み〜んなに親切でね〜」

「うんうん、あいつのことれしょ」

どうも二人は共通の人物話題を話しているみたいだ。

「大体さ〜本人に自覚がないのがいけらいのよねえ」

「ほうほう」

「ほんろ、夕子悪いのよね〜」

「しかも鈍感なのよね〜」

「変なかんは鋭いのになえ」

なんか、二人がこつちちらちら見てるんだけど？ なぜ？

「よつぽど酷いやつなんだね。その人」

ここまでぼろくそ言われるとは、かわいそうだが自業自得だなその人。

と、そこで背筋に薄ら寒いものを感じて顔を上げる。

凍りついた空気の中、二人が僕に未知の地球外生命体を見るような眼を向けていたのだ。

「な、なに」

そして、一切にため息をついた。

「お酒〜」

「け〜」

二人ともグラスを掲げた。

この後、三十分ほど僕は酔っ払いの相手をしたのだった。

「う〜、頭いてえ」

しばらくして、龍馬がやっと起き上がった。

「龍馬大丈夫？」

僕は後片付けを続けながら声をかける。

「あ〜、水くれ〜」

「はい」

準備しといた水を入れたコップを渡す。

「用意いいな」

「慣れているから」

僕は手を止めず答える。十歳を越える頃には母さんも兄さんも僕より先にダウンするもんだから、いつも片付けは僕の役割だった。

「ハルは？」

「そこ」

指で指す。

彼女は舞さんとソファで寝ていた。

ちなみに、その前は凄かった。色んな意味で。

「さっきまでずっと飲んでたから起きないと思うよ」

「そうか、なら俺がつれて帰るよ」

龍馬が立ち上がる。一瞬ふらついたが足腰まできてはないようだ。

「帰るぞ。ハル」

龍馬がハルに肩を貸して持ち上げる。その時、ハルが一言。

「ん〜、酒は飲んでも呑まれるな」

呑まれてますあなたは。

「じゃあな、明日からよろしく」

そう言つて、龍馬はハルを引きずりながら部屋を出る。

少しして扉を開ける音がして、すぐにばたんとしまる音が聞こえた。

窓から外を覗くとハルを引きずりながら家を出る龍馬の後姿が見えた。

僕の視線に気づいたのか、龍馬はぴらぴら手を振ってから門を閉めたのだった。

第八話 宴の後

二人が帰ってから舞さんをベッドに運ぶ。

舞さんの膝の裏と脇の下に手を通して持ち上げると、思ったより軽く、少し拍子抜けした。

そのまま、居間から彼女を部屋に運びベッドに横たわせて、寒くないように毛布をかけてあげる。

「よし」

食器洗いとか残った片付けをしに行こう。

と、思って立ち上がるうとしたら、

グイ。

「……」

服の裾を舞さんに掴まれた。

少し引つ張る。

グイ。

放さない。

グイグイグイ。

ダメだ。放してくれない。

仕方なく、上の服を脱ぐ。そろそろ夏になる頃だから寒くはない。

それに、寒かったとしても炎術は得意だから自分の周りの空気だけ暖めることもできる。

もぞもぞと舞さんが動いて僕の服を抱きかかえる。

そういえば、舞さんはいつも何かを抱えて寝てたっけ。主に被害

者は僕。

一度、舞さんが焼き芋食べてる夢を見て、僕の尻尾に噛みつかれたことがあったな（遠い眼）

僕は明日ちゃんと服を返されることを願って今度こそ立ち上がった。

皿を洗い終わってから、お風呂に入る。

相変わらず広い風呂場だな。足を伸ばしてゆったりできるくらい
(うちは五右衛門風呂だった)

尻尾もきれいに洗ってから上がると、舞さんが居間でソファーに座っていた。ほんのり顔が紅い。まだ酔いが抜けきってないみたいだ。

普通、一眠りしたら酔いなんて飛ぶもんだよな？

「あ、空狐くん。後片付けしてくれたの？」

「うん。ちよつと待って。今、水注ぐから」

僕はコップを取って水を注いで彼女に差し出す。

「うん。ありがとう」

コップを受け取った舞さんが中身を一口飲む。僕はソファーに座る。

しばらくして

「ごめんね」

舞さんが一言。ちよつと俯き加減だ。

「何がですか？」

「空狐くんの歓迎パーティーなのに、君に後片付けさせちゃって」

「なれてますから」

僕は苦笑する。

「そうなんだ」

舞さんがじつとコップに視線を落としてから

「空狐くん。こっち向いて」

「はい？」

舞さんがじつと僕の眼を見る。

「これからよろしくね」

酔いでほんのり紅くなった顔でにこつと笑う。ちよつとドキつてした。舞さんの笑顔は柔らかくなくてずつと愛でていたいと思ってしまう。

第八話 宴の後（後書き）

やっと二日目終了。二日目からは学生生活の始まりです。

第九話 新たな日々始まり

「んっ」

僕は朝の日差しで眼を覚ます。

朝かあ。でもまだ寝ていたいな。

もう一度布団の中に潜り込む。

「空狐くん朝だよ。おきなよ」

ああ、母さんが起こしに来たのか。でも、声や口調が少し違うな

……

「母さん、あと五分」

「お決まりのセリフだね。それとわたしは君のお母さんじゃないよ」

んっ？ あ！

僕はがばつと布団から起き上がる。

「おはようございます」

そして、相手を見る。

「舞さん」

「うん。おはよう」

もう制服に着替えてある舞さんが満足そうに頷く。

「すぐ朝ごはんの準備するから、着替えたらすぐに来てね」

そう言ってから舞さんは部屋から出て行った。

ベッドからもぞもぞ出て、ハンガーにかけてあった新品の制服に袖を通す。

パリッとした新品の服に袖を通すのはそれだけで気持ちがあきさきする。

そして、着替え終わった僕はカバンと刀を取って部屋を出た。

居間に入ると、舞さんがテーブルに朝ご飯を並べてる所だった。

「あ、ちようどよかった。今できたよ」

そう言ってから彼女は僕を見て微笑んだ。

「似合ってるよ制服」

「そうですか？」

「うん」

へへ、嬉しいな。

「それでは」

「うん」

二人とも席に座って。

「「いただきます」」

荷物を持って二人とも玄関で靴を履く。と、その時気づいた。

あ。おじさんとおばさんの写真……

下駄箱の上に置いてあった。なつかしいな。最後あった時と変わらない笑顔がそこにあった。

これからよろしくお願いします。

僕は軽く頭を下げた。

「どうしたの？」

先に玄関から出ていた舞さんが不思議そうにこっちを見ている。

「ううん、何でもない」

僕も腰を上げて、玄関から出る。

舞さんの横に並び、顔を合わせる。

二人とも微笑して振り返る。

「「行ってきます」」

・ ・ ・ 行ってらっしゃい。

誰も居ないはずなのに、そんな声が聞こえた気がした。

第九話 新たな日々始まり（後書き）

本日、卒業式でした。イエイ。

第十話 新しい友

「おーす」

後ろから誰かが近づいてきて舞さんの肩を叩く。

「あ、おはよう刹那くん」

舞さんが隣に並んだその相手に応えた。僕もそつちを彼を見る。

刹那と呼ばれたその人は僕と同じ制服を着ていた。つまり、常磐学園の生徒。

顔立ちは整っている方で、銀色の髪と蒼い眼が印象的だ。背は僕より高いがこれぐらいなら普通の身長だろう。すらつとしてるが、体付きはけっこう鍛えていそう。右手にカバンを、左手に竹刀袋を持っている。

あと、なんか胡散臭い臭いがする。よくわからないけど、違和感というかなんと言うか、なんとも表現ができない臭いだ。

あえて表現するなら、まったり濃厚で、それでいてしつこくなく、ただどいつまでも記憶の中には残って、井戸の底から這い上がってきた美女の絶叫のような……すみません。やっぱり表現できないや。「どうしたの？」

舞さんが不思議そうに僕の顔を覗いてきた。

「うっん、なんでもない」

違和感の原因はとりあえず保留しておこう。

僕は天野くんの方を見る。彼は、舞さんを挟んで立っている。

「はじめまして、ええと……」

「刹那。天野 刹那。よろしく。木霊 空狐くん」

天野くんが人付きのよさそうな笑みを浮かべる。て、おい！

「なんで僕の名前知ってるの!？」

まだ名乗ってないし、初登場だよね君は?!

「銀狐からいろいろ聞いてるから」

ああそうなのか。兄さんから。

「知り合いなの？」

「知り合いつつつかマブダチ？」

そういえば前、旅先で兄さんの知り合いに会った事あったな。それに、兄さんも何度かこの町に来てるし珍しくないだろう。

「いや、俺は去年ぐらいにこの町に越して来たの。銀狐とは別の場所知り合った」

おい。

「なんで、僕の考えがわかんの？」

僕は顔を少し強張らせる。

「俺は地の文が読めるのさ」

メタな発言だー！

「うそうそ、そう顔に書かれてただけだよ」

ぱたぱたと刹那くんが手を振る。

嘘か。そして、そんなにわかりやすいのか僕の顔。

「さてふざけるのもいい加減にして」

たしかにふざけすぎです。

「よろしく、空狐」

「うん、よろしく。天野くん」

「はは、刹那でいいよ」

刹那くんが笑った。

「じゃあ、よろしく刹那くん」

「おう」

三人で話しながら歩くと生徒の数が増えてきた。そろそろ学校かな？

「やつほう、空狐、舞、天野」

後ろから元気な女の子の声。振り向けば予想通りハルが小走りで見つけてきた。そして、その少し後ろにいる龍馬。

「おはようハル、龍馬くん」

「はよ」

「おはよ、ハル、龍馬」

にこにこ笑顔のままハルが、ちよつと苦笑気味の顔で龍馬が僕らと合流した。

「じゃあ、ハルと龍馬は違うクラスなんだ」

ハルと龍馬が頷く。

「うん。部活はあたしたち全員同じだけどね」

「部活？」

「そうだよ。わたしたちみんな同じ演劇部なの」

舞さんが嬉しそうに笑う。

「俺や龍馬は主に裏方。舞さんと柊は役者」

そう言いながら刹那くんがぼんと龍馬の肩を叩く。

「といつても、部員が少ないから仕事の掛け持ちしてるのがほとんどだけどな」

龍馬が苦笑。ふーん。大変だな。

「そつだ、空狐も入っちゃいなよ。演劇部」

ハルが名案とばかりに手を叩く。

「そうだね。それいいよ。ちよつど今度の劇の役が足りないし」

ハルと舞さんがきゃっきゃと騒ぐ。演劇か。ちよつと面白そうだな。

「うん、いいかも。で、どんな役？」

「えつとね、主人公……」

いきなり主役？！ 大抜擢だ！ こりゃがんばらないと！

「の妹」

「チヨイ待て」

「ここでもか？ ここでもなのか？」

「ここでも僕に女装しろと？」

少しの間みんな黙って。

「……うん」「……」

全員肯きやがったあー！ー！ー！！

「嫌じゃー!」

僕が絶叫してみんなが笑う。僕はふてくされてそっぽを見る。

「ただど何だか心地よい。この雰囲気、妖狐の里ではちよっとなかっとな。」

「たぶん、尻尾を具現化させればぶんぶん振ってしまっているだろう。」

「こんな生活が始まると思うと気持ち弾んできた。」

「この時までには。」

第十一話 出現！『MSN』！

五人で合流してからしばらくして校舎が見えてきた。

レンガ造りの古く立派で威厳のある校舎。なんだかっこいい。

「いいなあ」

思わずそう漏らしてしまった。

「でしょ」

嬉しそうに舞さんが笑う。

そして、校門をくぐって

壁に出会った。

「はい？」

眼を擦ってもう一度見る。今度はちゃんと脳が理解してくれた。

人だかりだ。しかも整然と並んでいて、まるで壁のよう。全員胸

元になんかのバッジがついている。

ああ、なるほど、僕が見た壁は。

この人たちから立ち上る殺気だったのか。

「こえーよ」

思わず本音を漏らす。額から冷や汗まで出てる。

ちらっと横を見る。

まず、刹那くんの反応。同じように冷や汗をかいて、ちよつと引いている。

次にハル。呆れたような表情で集団を見ている。そして、龍馬はなんとも言えない顔をしている。

最後に舞さん……額を押さえて渋面を作ってた。珍しい表情だな。「な、なんなのあの人たち」

それに答えてくれたのは刹那くんだ。

「あいつらは通称『MSN』」

MSN? なんの略だ?

「端的に言えば」

人だかりが動き出す。

「倉田 舞ファンクラブだ」

……なんじゃそりゃ!?

ばつと舞さんが僕の後ろに隠れる。

「倉田さん! その男は誰ですか?」

「昨日、公園で男の子に膝枕してたって本当ですか?」

「秋山と柘さん以外と買い物をしてたって本当ですか?」

「その男に、その男に抱きついてたって本当ですか!?!」

マスコミかよ。

「倉田さん付き合ってください」

「舞さん。スリーサイズ教えてください!」

どさまぎに妙な質問をした二人が後ろに連れて行かれる。二番目の人は主に女子が。

しばらくして、ギャー! だのごめんなさい! だの肉を打つ不吉な音がしたけど聞かなかったことにしよう。うん。

「で、どうなんですか?」

「答えてください」

ずんとにじり寄ってくる。僕らは少し後ろに引いた。

「まあ、待ちたまえ」

そこで静かな声が響いた。

そつちを見ると、一人の青年が立っていた。肉を打つ音すら止まってる。

メガネをかけた物静かな印象を与える人で、年に不釣り合いな威厳が漂っていた。パリッと着こなしたスーツ、もとい制服が異様に似合ってる。政治家だって言われても信じちゃいそうだ。

「誰？」

「うちの生徒会長の瀬戸 海先輩」

今度は龍馬が答えてくれた。

「人望もあるし、学生にしては妙にやり手で、不良、教師問わずに一目置かれた存在だよ。将来は大物政治家かも」

ようするにすごい人が。ファンクラブの人たちも動き止めているし。

かつかつと海先輩が近づいてくる。

「君は転校生だったね。確か名前は」

「木霊 空狐です」

自分から先に名乗る。正直、知らない人に名前を呼ばれるのはぞつとしない。

「そうだったね。確か出身は稲荷学園だったかな。諸所の都合でこの学校に進学するはずだったけれども、二ヶ月遅れたらしいね」

何で知ってんの？

「私には独自の情報源があるのでね」

「プライバシーの侵害だー！そして、なんで、僕の言いたいことわかったあ！」

「私には地の文が神の声として聞こえるのだよ」

「それ、刹那くんと似たような事言ってますよ」

むつと瀬戸先輩は押し黙る。

こほんと一度咳払いして、

「倉田君とは従姉弟どうしで、柊君と秋山君とは幼なじみ。誕生日は七月三日。血液型はB型の童貞。得意分野は理数系で、苦手分野は美術」

身内の誰かがばらしてんじやないのか？ これ。

「好きなモノは空とふもふもかわいいもの。特に動物は猫が好き。嫌いなモノは怖い話と幽霊。子供の頃の夢は『お姉ちゃんのこと』」

「わあああああああー！！！！」

止めてくれー！ これ以上は恥ずかしいからダメー！

「訴えますよ！」

「大丈夫だ。裁判官を脅すネタぐらい一週間で準備できる」

うわ、言い切りやがりましたよ。この人。

なんか、初日。始まってすらいらないのにいきなり疲れた。

「ひっさしぶり。クーちゃん」

と、そこでいきなり横から軽い衝撃。顔をそっちに向けると朗らかに笑うのはまたも懐かしい顔。

「まりもさん？」

「うん、久しぶりー」

水瀬 みなせ まりもさん。僕が子供の頃いつしよに遊んでくれた人だ。

歳は僕らの一つ上。溢れる元気に男らしさを持つ頼れる人。

エルフ族と人のハーフラしく。端正な顔を縁取るのは紅い髪。耳は横に長い。（まあ、他の人からはそう見えないよう視覚を誤魔化してると思っけど、妖狐には意味がない）

彼女も舞さんと同じ制服を着ている。そして、盛り上がっているその胸の大きさはおそらく舞さん以……ごほんごほん。

「ははーん、さっそくMSNの連中に絡まれてるんだ」

じーっと面白そうにまりもさんが人だかりを見る。

「そりゃあ、舞の将来の旦那様だもんねえ。目付けられるよ」

ちよーっと待ったあ！

「な、なんですかそれは！」

や、やばいよ。みんな殺気立っているよ。

「だって、子供の頃からずーっと仲がいいじゃん」

連中をちらりと見るのも怖くなってきた。

「あー、今ので全校男子の半分を敵に回したね」

刹那くんが面白そうに告げた。

「そ、そんなにいるの？」

「カミングアウトしているのは男子全体の三分の一ほど、隠れてる人間も捜せば半分はいるはず」

すげーなあ。暇人たちめ。

「ふふん、だって、舞が言ってたよ。クーちゃんは結婚するならちやんと仕事もってから、そして子供は男の子と女の子一人ずつがいって」

得意げにまりもさんが告げる。そして、舞さんがあわわと慌て始める。

「ま、まりもさん！」

将来かあ……

それって、

「これを切り抜けないと将来みきなんてないいいいいいい！！」

そして、一切に人が飛び掛ってきた。

前に楽しい日々が始まりそうって言ったけど、前言撤回。

慌ただしい毎日になりそうだ。

第十一話 出現！ 『MSN』！（後書き）

王道展開にしたいんですけど、なってるかなあ？

ちなみに『MSN』は『舞ちゃんセントナイツ』の略です。（適当に付けてみました）

第十二話 激突！ 空狐 vs 『M S N』

「りゃああああ！」

一番最初に掴みかかってきた大柄な男の腕を掴んで、体を捌き投げる。

次に飛び掛る相手がいることを予想して身を縮める。

「うわ！」

軽い衝撃が背中にかかると共に、僕の前に頭から地面に落ちる人が見えた。背がちっちゃくてよかった！

……うっ、小さい（自爆）

すぐに反転。伸び上がるついでに一番近い相手の顎に怒りを込めて肘撃ち。

「小さくて悪いかあ！」

「ぶぐ！」

ひっくり返る飛び掛ってきた人。ちょっとやつあたりだったな。

その後ろから胴衣を着て竹刀を持った人がああああああ！

「にゃあああああ！」

身を捻って何とか回避。いくら竹刀とはいえ防具抜きで打たれたくはない！

「ぶんまわすなそんなもの！」

足払いをかけてから念のため竹刀を遠くに蹴り飛ばす。

さらに何人も飛び掛ってくる。一体、僕が何をしたのさ？

「ああもう！ キリがない！」

それらを捌きながら、ちらっと舞さん達を見る。

舞さんは右行ったり左に行ったりどうすればいいか悩んでる様子。

そして、刹那くんは……

「現在四人抜き！ さあ、張った張った！ 転入生の空狐が『M S N』のメンバーを何人抜きするか?!」

どこから持ってきたのか机をハリセンで叩いて、賭けをしていた。

うおい！ 龍馬も賭けの記録をメモに採ってるし！

「十人抜きに千円！」

「八人抜きにコロツケパン三つ！」

「六人抜きに二千円！」

「十五人抜きにカツパン四つ！」

何人もの生徒たち（&教師っぽい人）が、財布からお金。もしくは、カバンからパンを出して、刹那くんの前にある机に置く。

何故に賭けるものがお金とパン両方？ どっちかにしようよ。

一方、ハルは……

「あたし、空狐が逃げ出すのに今月のお小遣い全部！」

ばん！ つと勢いよく財布を机に叩きつける。

おおつとハルの思いつきりのいいベッドにどよめきが起こる。

己らもう友達じゃねええ！！

「この！」

八人目を後ろ回し蹴りで吹き飛ばす。そして九人目。武術を学んだ人間がいない事だけには感謝。これなら、今の僕でも十分対応できる。

だけど、めんどくさいし、付き合う理由もない。

十人目をネコダマシでびびらせてから後ろに飛んで、舞さんの横に、

「舞さん」

「な、なに？」

少し目をつぶる。

「ごめん！」

「え？ きゃ！」

とんとと舞さんを押し壁にする。それに全員怯んだ。

その僅かな間に魔術演算。足に仕込んだ呪符が反応して淡く光る。

「行きます！」

だんつと一歩目。脚力強化のおかげで最初つからかなりの速度。驚いて目を見開くファンクラブ会員一同。

「ほいっと」

突撃の途中で舞さんを掬い上げる。

「きゃっ！」

そのまま突っ込む。

そして、一人目、二人目、三人目、と次々と避けて校舎の入り口まで走り抜けた。

「それではー」

そのまま、僕は呆気にとられるファンクラブ会員を尻目に校舎に入ってしまった。

「ふう」

職員室の前まで、僕たちは逃げた。さすがにここで騒ぎを起こすことはないだろう。

「あ、あのさ、空狐くんそろそろ下ろして」

舞さんが恥ずかしそうに身じろぎする。

「あ、うん」

舞さんを下ろす。すると、すぐに舞さんがぼこぼこ僕を軽く握った拳で殴ってきた。

「もう、酷いよ空狐くん。人を盾にするなんて」

「いた、いた。ごめんなさい。でもさ、他にあの集団から抜ける方法思いつかなくて」

詠唱する時の集中で一瞬だけ無防備になる。その時攻撃されたらたまったものじゃない。

「まあいいけど、次から先に言ってね」

「……先に言えば許すの？」

「じゃあ、僕、先生に会ってくるから」

「うん、がんばってね」

朗らかに舞さんが笑う。

「はい」

「じゃ、また後で」

舞さんが背を向けて去っていく。その背中を見送ってから僕は職員室を見る。

「ちとと」

がらっと扉を開く。さあ、学園生活の始まりだ！

第十二話 激突！ 空狐vs『MSN』（後書き）

なんだか話が壊れてきてる気が……

ご指摘、もしくは質問があったら何でもいいのですので教えてください。
さい。

第十三話 新しいクラス（前書き）

タイトル変更してみました。

内容そのものは変わっていません。

このタイトルはいかがでしょうか？

第十三話 新しいクラス

「はじめまして。稲荷学園より転校してきました木霊 空狐です。これからよろしくお願いします」

僕は壇上で一度頭を下げた。にしてもやりづらい。

朝の騒動は知れ渡ってるらしく、今もひそひそ話してたり、怖いくらいの殺気を放ってる人もいる。ほんと、僕が何をしたらっていうんだよ。

このクラスの担任の先生は女の人で、名前は小泉^{こいずみ}先生。

いかにも新任といった感じの若い先生だ。制服着て先輩だ、って言われたら信じてしまいそう。

亜麻色の髪は肩まで届くほどで、目は綺麗な黒。

背はそれほど高くなく、ほっそりした体系で優しそうな雰囲気の人だ。

「はい、それでは木霊君の席は」

しばらくの間

「そこね」

そう言っ指されたのは……

「やっほ〜」

舞さんが手を振ってた。その斜め前には刹那くん。

ええっと、目を擦ってもう一度。ちょうど舞さんの席の横に席はなかった。なぜこんなご都合主義的展開が？

「男子で取り合いになっちゃったのよ。だからしかたなく舞ちゃんの席が一番後ろにしたの」

「先生まで僕の心を読まないでください」

「なんのことですか〜？」

とぼけた笑顔を見せる先生。

この学校に通うと読心術でも身につくのか？

「じゃあ、木霊君は席に座って」

「はい」

しかたなく席に座る。うつ、男子の視線が痛い……

「よろしくね、空狐くん」

舞さんが嬉しそうに笑った。僕は苦笑いするしかなかった。

「木霊つてどこから来たんだ？」

「ねえねえ、なんで灰色の髪と紅い目なの？」

「倉田さんとは本当はどんな関係？」

「呪ってやる」

休み時間になると、新しいクラスメイトに一瞬で囲まれた。

最後に不吉な声も聞こえたけど気にしないでおこつ。うん。

どうも、みんな今朝のインパクトが強くて色々聞きたかったらしく、朝のHRが終わつたらすぐに取り囲まれてしまった。。

「えつと、僕が前に暮らしてたのは秋田の山奥にある稲荷の里」

「遠いいな」

「聞いたことある？」

「ないよ」

まあ、普通は知らないだろう。妖狐の里なんて。

「髪は？ 染めてるの？」

「違うよ。これは地毛。家は銀……」

慌てて口を塞ぐ。やべえ！ 間違えて銀狐つて言うところだった。

(兄さんのことじゃないよ。種類のことだよ)ここは人外関係者の通う学校ではあるけど、一応表向きは普通の学校である。半分くらいから一般人の匂いがするし、隠しておいたほうがいいだろう。

「ぎん、ぎん、銀髪の家系だから」

「なんとか誤魔化す。」

「え？ 灰色じゃん」

よかった。どもつたことは気にされなかった。

「月明かりを跳ね返すと銀色になる特別な家系なんだ」

ふふ、けっこうきれいなすよ、その色は。

「では、倉田さんとの関係は？」

にじりと輪が縮まった。これが目的か……

「従姉弟で幼なじみ。それ以上でもそれ以下でもないです。はい」
はつきり言い切る。これ以上、面倒なことは嫌だ。

「ふーん、ただの幼なじみね、ただの」

にやにやと笑いながら刹那くんが呟く。

えっと、刹那くん？あなたは何を言いたいのですか？

「舞さんの家に居候してて、今朝だって一緒に登校するのにただの幼なじみねえ」

キミハナンカボクニウラミデモアルノデスカ？ ソシテ、ナンデ

ソノコトシツテンノ？

「いや、俺の賭け金がブラックホールに飲み込まれちゃってね。その恨み。あと、舞さん部のみんなに嬉しそうに話してたし」

それは君が勝手にしたことでしょうおおお！君の一言で、みんなの視線が痛いよおおお！

「ふーん、同棲してんだ」

男子の一人がそう呟く。

「いや、親戚だから同棲ではないかと」

一応、反論してみたけど大して意味はなさそう。

「『MSN』の連中が聞いたら大変だな」

「うちのクラス会員何名だっけ？」

「確か二十人だったな」

それって、クラスの半分じゃ？

「ふふふふふふふ」

「くっくっくっく」

「ひひひひひひひ」

「けけけけけけけ」

「ははははははは」

不気味な笑い声が連鎖のように起こる。

ああなるほど、ここは肉食獣の檻の中か。そして、僕はその中に

放り込まれた哀れな狐。

「がんばれよ」

ぼんと聞いてきた男子に肩を叩かれる。その目は、罪悪感と哀れみの色に染まっていた。

ああ、平和な学園生活の夢……もう届かないほど遠くに行ってしまったのか。

『死ねええええええええええ！』

「ぎゃあああああああああ！」

第十三話 新しいクラス（後書き）

どもー、鈴雪です。

調子がよくて、土曜日より早く出せました、ブイ。

でも、なかなかアクセス件数が伸びません。

新参者のくせに偉そうですが、目指せ一萬Hit！ はまだまだ先
です。がんばらないと！

評価、感想待ってまーす。

第十四話 空狐は天才？

その後、すぐに授業が始まったおかげで何とか助かった。

そして、現在一時間目。内容は『物理』

「で、あるからにして」

にしても、なんだこの授業。

「ここではこの式を使います」

つままない。こんな家でもうやつちやったよ。

暇なのでなんとなく空を見る。

ぼかぼかと暖かい。陽気の匂いがこの部屋に満ちているのを感じて、このまま寝たくなってきたなあ。

ざわざわとしているクラスの声も心地いい。

「ふあ」

思わず欠伸をしてしまう。

今日の晩御飯にかなあ、そう言えば、今日日課の素振りしてないなあ。帰ったらやらないと……

「転校生」

取り留めのない事を考えていたら、いきなり指名された。

「は、はい!!」

なんだ、なんだ？ いきなり。

今、指名してきた先生は、えつと……名前忘れた。髪がだいぶ貧相になってきて、白髪も混じっていて、それなりのお歳を感じさせる人だ。背もそれほど高くなく、ちょっとお腹も出ている。

「えつと、名前は……」

「木霊です」

「そうそう、木霊。オレの授業中に欠伸するとはいい度胸だな」

だって、知ってるもんその内容。

「欠伸するぐらいつまらないならこんな問題くらい解けるよな？」

ん？」

ええ、楽勝です。

心の中で勝ち誇る。

「ちよつとやってみろ」

「はい」

席を立つ。

「大丈夫？ 空狐くん。あの先生、気に入らない生徒に容赦ないんだよ」

ふーん、さつそく目を付けられてしまったってことですか。

「大丈夫、大丈夫」

そういつて、僕は黒板に向かった。

一分後。

「はい、どうでしょうか？」

ちよつと長々と式を書いてしまった。

『……………』

みんな黙ってる。

「あの？」

みんなハツとする。

「すごい」

「てか、こんなの習ったっけ？」

みんなが口々に言う。

「知らなかった……………」

なんか先生が自信喪失しているー！！

「すごいね空狐くん！」

舞さんが褒めてくれる。

そんなすごい？ 魔術の制御のために勉強しただけなんだけどな
あ……………

「君、席に戻りなさい……」
肩を落とした先生の横を通り過ぎて僕は席に戻った。

その後、二時間目『数学』三時間目『現国』と続く。そして、四時間目の『外国語』。

これらに関しては問題なしなので飛ばします。

そして、昼休み。

「起立、礼」

四時間目が終わって昼休み。みんな休みだー！ と、すごくにぎやかだ。

なんとなく、僕は机の上に身を投げる。

教室にいるんな食べ物の匂いが漂ってくる。そっか、昼休みだからみんな弁当食べるのか。でも、そういうば僕、弁当持ってきてないや。

「空狐くん」

舞さんがちよんちよんと僕の肩をつつく。

「なんですか？」

ちよつとお弁当を期待してしまう。

「ちよつと着いて来て」

そう言って、舞さんは僕の手を引っ張った。お弁当ではなくて少しがっかり。

この事に関して、

『倉田さんと手を繋ぐのは何ごとかー！』

と『MSN』の連中がくれたがそれは別の話

僕が連れて行かれたのは、校舎の外れだった。人はあまりいなくて、日当たりが悪くなんとなく湿気くさい。

「どっ、どこ？」

「部室が集中している通称『部活棟』だよ」

「ふーん、そういうえば、バスケットや野球のボールとかが転がってる。で、ここが」

「そう言っただけで案内されたのは、それなりに広そうな部屋。」

「我らが演劇部の部室です」

舞さんが嬉しそうに扉を開けたのだった。

第十四話 空狐は天才？（後書き）

刹那（以下刹）：「どうも、刹那です」

鈴雪（以下鈴）：「どうも、鈴雪です」

刹：「このたびは、狐火を読んでいただきありがとうございます」

鈴：「ありがとうございます」

刹：「このたびは作者が思い至った企画についてご報告いたしたいと思えます」

鈴：「次回より、後書きの場において、作中の設定、もしくは作中の質問に関しての雑談をしたいと思えます」

刹：「もし、よろしければ、どしどしご応募お願いいたします。それでは」

鈴&刹：「またの機会に」

どでしょ？ この企画は？ つまらなかつたらはつきり言うてください。その時は別の事しますので。

第十五話 空狐は女装がお好き？

部室は適度に広い。大体普通の教室二個分ほど。さらに。隣の準備室に続く扉があるからそれを入れるともう少し広いだろう。

そして、あつちこつちに大道具らしきものがつまれているのは、たしかに演劇部の部室っぽい。

その教室に部員が集合していた。昼休みは大体みんないるらしい。で、僕らは壇上に立って自己紹介。

「と、言うわけで彼が新戦力の木霊 空狐くんです
舞さんが紹介してくれる。」

「どうも、木霊 空狐です。よろしくお願いします
ぱちぱちぱちと拍手が鳴った。」

ちなみにここにいるのは、僕を入れて九人。一年生が僕を入れて五人。二年生が三人と三年生が一人ずつ、これで部員は全員らしい。その中には見知った顔であるハルと龍馬も入ってる。

「て、俺は!？」

「っと、刹那くんが主張するけどいちいち心を読まないで欲しいな。ちなみにハルは龍馬と一緒に賭けで巻き上げたパンを食べていた。では、なんか質問ありますか？」

「そう言っつて舞さんがみんなを見る。」

「はいはい」

背の高い女の人が手を上げる。後ろで束ねられている髪は黒。目も黒い。背が高い以外はいたつて普通の感じの人だ。

「はい、桜子先輩」

「どんなことができますか？」

「ん〜? できることねえ。いざ聞かれると何って、ぱつと出ないもんなんだな。」

顎を押さえて考えて

「(子供の頃は)女装が上手だったよ」

と、悩んでいたら勝手にハルがああ！

「ハル！ 言わないでよその事を！」

もっとも知られたくなかったのに！ 思わず頭を抱えてしまう。

「はいはい」

もう一人の女子が手を上げる。こっちは対照的に小柄で、ショートのカットで眼鏡をかけている。

なぐんか嫌な予感がして顔を上げる。

「実際にやってみてください」

朗らかな女子の笑顔に僕の背筋が瞬間的に凍る。

そして、舞さんがこっちを見て……にやつと笑いやがりました！

――！！

「自由への逃走！」

僕は出口に向かって走る。嫌だ、学校でまで女装なんて絶対嫌だ！

走れ！！ 走るんだオレ！！ 全てを風に変えて！！

しかし、部室から出ようとした瞬間、後ろからがっちりと羽交い絞めされる！

後ろを振り向くと楽しそうに笑ってる刹那くん。

「刹那くん放して！」

刹那くんは残念そうな顔をして、

「諦める空狐、お前の未来は今終わった」

嫌じゃあああ！ なんとか逃げようとバタバタ暴れるけど思ったより力が強い。体重の軽い僕はあっさり引っ張られてしまう。

「はいはい、こっちこっち」

ハルががちゃつと隣の部屋に続く扉を開ける。その中にはたくさんの衣装が……はう。

「ハルまで！」

救いを求めるように龍馬を見るが、肩を震わせながらそっぽを向いて

「がんばれ」

それだけ、

「薄情モノおおおおお！」
そして、僕は準備室に連行されて……

十分後 - -

舞さんに連行されて僕は準備室から出てきた。
そして、

「はっ」

くらっと桜子先輩がふらつく。

「うわあ」

もう一人の女子B（暫定名）が口に手を当てる。

「ぽかーん」

呆けた顔の刹那くんが擬音をわざわざ口にする。

「すげえ。女は化けるって言うけど男も化けるんですね」

「女だって言われたら信じてしまつかも」

男子Aと男子B（こちらも暫定名）がぼそぼそとそう言う。

「相変わらずすごいな」

龍馬が冷や汗をかいている。

「ふふふふ」

ハルが満足そうに笑ってる。

「さすが空狐くん！」

舞さんが褒めてくれる。嬉しくねえ！

「うっうっうっ」

今の僕を解説すると

ウィッグを頭につけて長髪に、服はさほど派手ではないものの豪華なドレス。簡単な化粧も施されている。

くっくっくっ。せめてパッドだけでも断固拒否しとけばよかった。

「倉田さん」

ひそひそ話してた四人がこっちに顔を向ける。

「……オッケー！」「……」

びっと四人が指を立てた。

世界よ滅んでしまえ。いや、滅ぼしてしまおう。うん。

「ねえねえ、く〜う〜こくん」

舞さんが僕にぱつと鏡を見せる。ああ、今はこの人の笑顔が憎い。「ね、ね、いいでしょ？」

本当に嬉しそうな顔だなあ。きれいに着せ替えれば僕が喜ぶと思つて……

「うっ！」

思わず一歩引く。

しまった、いいと思つてしまった。

鏡に映る女の子（注：僕）ははつきり言つて可憐。よく見知つた顔のはずなのに、まるで知らない女の子の顔。衣装一つでここまで変わるんだ。

品のいい顔の造作。長く綺麗な灰色の髪。鮮やかな紅い瞳はまるでルビーのよう。そして、アクセントに引かれた薄いピンクのルージュが彼女の美しさを引き立てている。

ドレスもほつそりした体にぴったり合つて、その上品さを損なわない程度に存在を主張してて……

もーとにかく美少女なんですよ。うん。（わーい、投げやり）

……ここだけの話、実は嬉しいかも。いや、女装がじゃないよ！

こんな風に綺麗になれることが……って何を言つてんだ僕は！

「舞さん、そろそろ昼休み終わりますよ。そろそろ元の格好に」
そこで

カラーン、カラーン。と鐘が鳴つてしまった。

「ええええええ！」

嘘！ もうそんな時間？ 僕、弁当食べてないよ！

「安心しろ。俺たちは食つた」

刹那くんが親指を立てる。だけど、君の腹が満ちても、僕の腹は満ちてない！ そして、何度も言つけど僕の心を読むなー！！

「わわ、急がなくちゃー！」

さすがに舞さんも慌てた。

その後、ハルと舞さんに手伝ってもらってなんとか二分で着替えを完了。

三人とも急いで何とか五時間目に間に合ったのだが……

「木霊……なんだその髪」

「やだ、ルージュなんて引いてる……」

教室に入った時にそう言われてやっと化粧しっぱなしだと気づいた。そう言えば、道行く人が微妙な顔で見てたような……

うわああああああん！ 僕は好きでやってんじゃないんだああ！

結局、僕は顔を洗ってたために、五時間目の授業に遅刻したのであった。

第十五話 空狐は女装がお好き？（後書き）

鈴：「どうも鈴雪です」

刹：「どうも刹那です」

鈴：「先日のご報告通り質問のお便りの返事をさせていただきました」
刹：「まずは最初のお便り『爆弾蛙』さんより『“九尾の狐”の尻尾の数はどのような基準で決めていますか？』」

あと、数にレア度ってありますか？（例えば九本の尻尾はめちゃくちゃ珍しいとか）です。これはどうなのですか？」

鈴：「端的に言えばかなりレアです。刹那！ 解説」

刹：「尻尾の数は妖狐にとって位の高さや妖力の大きさを示しています、がんばってもほとんどの妖狐は七、八で止まってしまいます」

鈴：「ふーん。じゃあ、強いのか？」

刹：「それとこれとはまた別の話」

鈴：「あ、そう……」

刹：「例えば、体が大きいからって小さい奴には必ず勝てるのか？
って事と同じ」

鈴：「なるほど」

刹：「たしかに妖力が高いと戦いに有利だけど、妖狐の強さは例外を除けば大体が幻術による 駆け引きや術の細かな制御の高さだから、

強いと隠蔽とかに不利になるし」

鈴：「ふむふむ」

刹：「実際、この五百年間に三回会ったけど、強さはまちまち。まだ四尾だった銀狐の方が強かったのが一人いたし」

鈴：「ふーん」

刹：「ようするに尻尾の数が絶対的な戦力の差にはなりえないということ」

鈴：「貴重なご意見ありがとうございます！ と、ここでお別れ

の時間のようです。この番組は鈴雪と」

刹：「天野刹那がお送りしました」

鈴&刹：「みなさまよい一日を」

鈴：「この番組は『舞ちゃんセントナイトFC』と常磐学園新聞部の提供でお送りしました」

ちよっち長かったかなあ？ まあ、楽しめたしいつか。

番外一 第一回座談会

「どうも、鈴雪です！」

「どうも、刹那です！」

二人とも椅子に座ってます。

「今回は特別編です」

「イエーイ！」

「とりあえず、大量の質問もしくは物語の節目が来たらこの座談会を行うつもりです」

「ま、後者が多いだろっけどな」

そう言っつて、刹那がテーブルの上のはがきをとる。

「それでは最初のお便り、豚骨うどんさんから五つの質問をいただきます」

「少々、多いので本編でないこの場で解説します」

「それじゃあ、最初の質問」

1：一般にどの程度の武器が流通されてるのか（4話で刀について気にしていないので皆武器とか持っているのかな？と思って）

「えーと、どうなの刹那？」

「まず、武器について、この世界は一応人外とかいるけど、基本は現代と一緒に」

「刀についてみんなが気にしないのは、刹那は竹刀袋に入れているから。空狐の場合、刀を魔術用の杖を入れておく袋に入れて幻術で偽装してるから」

「ちなみに退魔士は基本銃などを使わないけど、その理由はまたの機会に」

「じゃあ、次々」

2： 学校ではどんなことを学ぶのか（魔術とか肉弾戦とかでコース分けとかもあるのかな？と思って）

「学校の質問か……」

「今回の手直しで改めて決まったことだけど現代と一緒にだから」

「ちゃんと決めてたらこんな事になんなかったのに、ごめんなさい！」

「おう、猛省しろ作者」

3： 退魔士について（何と戦うのか、常磐学園ではどの程度退魔士がいるのか等）

「実はよく考えてなかった……空狐がそれなりに強いつていう表現程度くらいにしか」

「このアホ！」

スパーンと刹那がどこからか出てきたハリセンでぶっ叩かれる作者。

「痛い。一応こんなもんでのはあるけどね」

「ふ〜ん、それお兄さんに言ってみ？」

「主な仕事は魔道師協会からの依頼。その時によって内容は変わるから絶対これと戦うってものはない」

「ふむふむ」

「あとの仕事は魔道犯罪者の取り締まり。二級以上は執務官として、魔道犯罪者を逮捕する権限を持つてる」

「十分考えてあるじゃねえか」

スパンともう一回叩かれる作者。

「スパン、スパン叩くなあ！！」

「いいだろ別に。ついでに資格の取り方も解説しろよ」

「まったく……資格取りは主に試験。筆記と精神鑑定の後の実技を

受けて合格点ならOK。例外として上位者の推薦を受けたものや、特別な能力の保有者なら最初つから上位の試験も受けられる。ちなみに空狐と刹那は二人とも月狐の推薦」

「一級の試験はね。特級は俺自身の力だよ。十年前に取ったんだあ」

「特級試験は極秘で詳細は不明。月狐も空狐に話そうとしない」

「あと、常磐学園には生徒、教師含めて俺と空狐以外資格保持者はいない。あくまで俺たちは例外だから」

「こんな所かなここは、じゃあ次四つ目行こっか」

4：人間と他の種族（妖狐やエルフ等）の関係（敵対してるとかを・・・銀狐であることを隠してたので）

「んー、まあ、一つずつ行こっか。まずは一つ目、妖狐含む妖魔から」

「敵対関係は無し。それなりに協力関係は結べてる」

「ただし、表向きにないことになっているから正体を隠す必要あり。これに関しては他の種族も一緒」

「がさがさとノートを広げる二人。」

「次にエルフ。魔術に関しては彼らに技術提供してもらうことが多いし、ハーフのまりもがいるように良好な関係を作れてる」

「ただし、ダークエルフや、一部のエルフはあまりよく思っていない場合もある」

「その次、まだ出てないけどドワーフ」

「敵対もしてなければ、味方でもなし。と言うより積極的に他の種族と関わろうとしないんだよな。エルフっていう例外を除いて」

「人間族はエルフを通してしか彼らの持つ希少鉱物を手に入れない」

「お次は龍族」

「中立。他の種族とはあまり関わらないものの、個人的な友人関係

をごくたまに結ぶこともある」

「人間より寿命がずっと長いため、何世代にも渡って友好関係が続く事もあるしな」

「ま、一部には利用しようとして、滅ぼされた国もあるけど」

「じゃあ、次あれか？」

「うん、魔族。よろしく」

「OK。魔族、この世界の暗黒面を体現する存在で、人間を含む全ての敵」

「作中では魔王が神王と相打ちで滅んでる上に個体数も少なくなってるため、さほどでかい勢力ではない」

「と言つても、一般的な退魔士との戦力差は下級でも十対一。上級ともなれば、一人で一国を墜とせるな。一般人との戦力差は押して知るべし。物理攻撃効かないし」

「ちなみに空狐の戦力は下級魔族よりちよつとだけ下くらい」

「俺は秘密」

「いや、たぶんお前の戦力は物差しで測る意味がないぞ」

「まな」

「んで、神族は完全に全滅。生き残りの確認は無し」

「ま、完全にそうとは言い切れないけど」

「ついでに言えばこれらの種族は表に滅多にでないし、表沙汰にならないよう魔術師協会が必死になって隠してる」

「それと、彼らの里には結界が張られており、普通の人には近づけない」

5： 15話の後書きで刹那500歳 っぽいかきかたですが種族

何やねんw

「来たな……」

「来ちゃったよ……」

「どつする？」

「正直に言うよ。刹那は人間ではありません！」

「元人間だけだね」

「どんな存在かはそのうち語るつもりではありませんんで」

「こっご期待！」

「うーん、やっと終わった。つーか、一つのはがきだけで終わったな……って刹那？」

刹那がぶつぶつ壁を見ながらしゃべってる。

「空狐っていいよなあ」

「は？ 何をいきなり」

「主人公だし、かわいい彼女いるし……うらやましい」

「お前だっているだろう？ 幼馴染の」

「はあ？ 彼女？ あいつが？」

「見てて、うらやましいぞ俺は」

「あれのどこが！」

がっとな刹那が作者の首を絞める。

「顔はいいけど、わがままで馬鹿力の乱暴者で」

「せ、刹那、絞まってる、絞まってる……！」

作者が腕を叩くけど一行に放さない刹那。

「幼馴染だからって、人にとんでもない事を頼んで！ 拳句の果てに人が久しぶりに再会した時あいつが何をしたか覚えてんのか！

……ん？」

作者が泡を吹いて白目を剥いてるのにやっと気づいた刹那。

「おい！ しつかりしろ！ 誰にやられた……！」

あんただあんだ。

作者を揺する刹那。次第に画面はフェードアウトしていく。

ではまた次回。

番外一 第一回座談会（後書き）

本編は明日投稿する予定です。

第十六話 朱音さんのお茶会

そんなこんなで、学園生活初日は幕を閉じた。
でもって現在の問題。

「舞さん」

「何、空狐くん？」

僕はできるだけ明るく聞く。

「今日の晩御飯は何ですか？」

「ハンバーグだよ。空狐くんが起きる前にちゃんと仕込んでいたんだ」

「ハンバーグかあ、楽しみだなあ」

あははははと僕たちは笑う。

「木霊」

「見せ付けやがってえ」

はい、ごめんなさい。私が悪かったです。お願いだから許して。
現在校門前でFCの連中に囲まれています。放課後、すぐに家に帰ろうとしたのだが、学校を出たところで発見され、家まで後少しの所で囲まれてしまった。

後ろに石の壁、前には人の壁。

うーむ、どうしよう。逃げ道ないし、今の現実逃避で余計に皆様怒ってらっしゃるし。

さすがにこんな場所で魔術使うわけにいかないし。

と、そこでコンコンコンと背後から石を叩く音が聞こえた。

「あ、すいません。騒がしいですよね？ なるべく早く終わらせませう」

『違っ』

あれ？ これって、

「刹那くん？」

出来るだけ声を潜めて聞く。舞さんはどうしたの？ っていう風

な顔をしたけど、僕が口の前に指を一本立てるとわかったと頷いてくれた。

『うん。俺』

『どうしたの?』

『いや、大変そうだから手伝ってやろうと思ってさ』
持つべきは友とは本当だな。

『いいか?一、二の三で目を潰って耳を押さえる。そしたらすぐに
この壁をよじ登れ』

ふむ、一、二の三で……

「つて、他人の家に入るわけには」

『ここ俺んち』

「お言葉に甘えさせていただきます」

素直は美德だよ。舞さんに指示を耳打ちする。

『よし。じゃあ、一』

『二の』

『三!』

僕たちは耳を押さえて目を瞑る。

ちよつと好奇心で薄めに何が起きるのか見ると、空中に何か変な筒が飛んでいた。そして……

バン!!

押さえてるはずの耳ですら劈く音が響き、強い光が……

ぐあ! 片目やられた! スタングレネードかよ!

僕は左目を押さえる。音が収まると、回りの人間はほとんど気絶してた。中には目や耳を押さえてごろごろしてる人もいる。

「今だ! 早く!」

声が上がらした。片目を押さえながら見上げる。

刹那くんが塀の上から手を伸ばしていた。

「舞さん!」

「はい!」

僕がしゃがんだ理由にすぐに気づいて、僕の肩に足をかける。

勢いよく僕の肩を踏み台に刹那くんを引き上げられる。
僕もそれに続いて上に上がる。
そのまま二人とも刹那くんの家に転がり込んだ。

刹那くんの家はかなり広いお屋敷だ。中庭に鯉の住んでる池があるくらいは予想できたけど案内されてる途中、家の敷地内に道場まであるのにはちょっと驚いた。

そして、刹那くんにはばらくの間ここで隠れることを提案されて居間まで案内されて……

「やあ、いらつしやい。ゆっくりして行ってね」
すごい美人に出会った。

歳はおそらく二十代前ほどか。半腰よりも長く柔らかそうな（あるいはない）ピンクの髪、紫の瞳。バランスの取れたプロポーシオン。凛々しく包容力のありそうな雰囲気。

服は陽光の中でも霞むことはない闇と言えるように黒く、彼女の印象をさらに強くしてる。

そして、彼女も刹那くんとはまた違うどこか普通の人とは違う匂いがしていた。

「にしても、珍しいよね。刹那が友達を家に連れてくるなんて」
ふふふ、と彼女は笑った。

「あの？」

「ああ、名乗り忘れてたね」
彼女は優雅に一礼をする。

「私は朱音。この家のメイドだよ」
慌てて、僕らも頭を下げる。

「ど、どうも木霊 空狐です」
「倉田 舞です。はじめまして」

僕らが名乗ると彼女はにこっと笑った。その顔は思わず見入ってしまうほど綺麗だった。

「そうだ、みななでお茶にしない？ いい葉が手に入ったんだよ」

嬉しそうに朱音さんは笑った。

それから、居間でお茶をご馳走してもらった。

「ちょうどシュークリームが焼けた所だったんだ。暖かいうちにとっぞ」

そう言っつて朱音さんは色とりどりのシュークリームが載ったお皿を置く。焼きたての皮の香ばしい匂いとクリームの甘い香り。うん、すごくおいしそう。

それから一人ずつ紅茶をついでいく。

「さあ、召し上がれ」

さっそく紅茶を一口。馥郁とした香りが口の中いっぱい広がる。う、うまい。これだけで満足してしまいそう。

「いつもより甘いな」

刹那くんが呟く。

「何かわかる？デイン……」

「デインブラですね？」

舞さんがそう呟くと、朱音さんが嬉しそうな顔になる。

「わかるの？」

「はい、紅茶好きですから」

そう言えば、こっちに来ると必ずおやつには紅茶が出てた気がする。

「そうか、なら……は？」

「ええ、いいですよね。……もいいですよね」

「私はどちらかというと……かな？」

二人が自分たちの世界にトランスしていく。

僕にはついていけない……コーヒーならまだ大丈夫だけど。しかたなく、カラムルのシュークリームを取って一口。

……っは！

意識が一瞬空の彼方に消えていた。

こ、こいつは。うますぎる。

今まで食べたシュークリームなる存在とは何ぞや？ と、問いかけたくなるほど別物だった。

焼き加減、さくさくした皮。中の甘く滑らかなカスタードの味……ああもう、言葉にするのもおこがましい！

「すごいだろ？ 俺も初めて朱音のシュークリーム食べたとき似たような感じだったぜ」

こくこくと頷きながらもう一つ。今度は砕いた胡桃が載ってるもの。

「はっ」

もう、普通のシュークリームは食べられないな……

「ふふふ、そうなの」

「そうなんですよ。みんなびつくりして」

「俺、危うく一目惚れするところだった」

「お願いだから人の恥をばらさないで」

それからしばらく和やかに四人で話し続けた。

そして、一時間くらいたって

「木霊くん」

「なんですか？」

朱音さんが真剣な顔でこつちを見る。

「一手手合わせ願えないかな？」

はい？ いつの間にか彼女の手には長い棒があった。

「い。いきなりなんでですか？」

ぴっと、朱音さんは懐から一枚の紙を取り出す。

「木霊 空狐。推薦とはいえその歳で仮免だけど一級退魔士であり、特級退魔士である月狐の息子。しかも、剣術家として勇名を馳せる銀狐の弟で剣の手ほどきを受けてる人間。仕事の成功率はそこそこのもの」

な、なんで知ってるのさ？

「知らないの？ 君はこの業界ではかなり有名なルーキーなんだよ。ぜひ手合わせ願いたい。そのために刹那に連れてこさせたんだ」
そつぽを向く刹那くん。そのためだったんか僕をここに招き入れたのは。

でもなあ、女の人とはちよつと……

「私では不満かな？ これでも君と同じく一級退魔士なんだけど」
それはちよつと戦ってみたいかも。

「で、でも戦う理由はないし」「はい」
刹那くんが一枚の紙を渡してきた。

「？ なにこれ？」

そして、中身を見て、

『親愛なる空狐殿へ』

戦え、以上

く兄より』

兄さんだ……この字は兄さんだ。この、ミミズが毒を飲まされて苦しみのたくるような字は。

舞さんが覗き込んでくる。

「何これ？ 暗号？」

違う。兄さんは素で普通の人には読めない字を書くことが出来るのだ。なるほど、兄さんの手紙があるって事は最初から仕組まれてたんだなこれは。

「わかりました……手合わせいたします」

その言葉に朱音さんは柔らかく微笑んだのだった。

第十六話 朱音さんのお茶会（後書き）

鈴：「前回の座談会での設定に対してまた質問をいただきました。ありがとうございます！」

刹：「GUCCIONさんから。退魔士について」

鈴：「収入安定しなさそうだって。どうなの刹那？」

刹：「俺は大丈夫だけど？」

鈴：「いや、一般的にはどうよ？」

刹：「うーん、四級や三級は少し厳しい。収入が安定するのは二級か一級でそれなりに仕事が出来るようになったらかな？」

鈴：「特級は？」

刹：「それは、別格。大体がとんでもない肩書きを持つてる上に、一回の仕事で一年問題なく暮らせるくらいの大金は手に入る」

鈴：「月狐は妖狐の代表な上に炎術の第一人者だからなあ金には困らないかきつと。刹那、お前は？」

刹：「金は権力者をおど……もとい、提供してもらって研究を続けるし、朱音もがんばってくれてるから」

鈴：「ふーん。この頃はどんな研究を？」

刹：「退魔士用の兵器開発」

鈴：「物騒な……」

刹：「いいんだよ。銃とかあるんだから対策打たないと。と、これどうだ？」

鈴：「おおかつこいいい！ どんな風に使うんだ？」

刹：「これはな、こうして」

鈴：「すげー！」

二人が自分たちの世界に行ってしまったのでこの辺で。

今回の話の流れ急だったかな？ でも、こうでもしないと朱音と戦う機会をなかなか作れないんです。すいません。

第十七話 空狐 vs 朱音

「いらつしゃい。いやー、やっとここを活用できるよ」
そう言つて刹那くんが案内されたのは……

地下室。しかもかなり広い。天井までの高さは建物二階分。横と縦は学校の校庭の半分はあるだろう。

「なここに」

「地下訓練室」

平然と答える刹那くん。

「何でそんなものあるの？」

「いや、あると便利だろ？ いろいろさ」

いや、使い道がわからんって。

そんな事を考えながら刀を袋から取り出す。

「じゃあ、やるうか」

朱音さんが持つてきた棒の布を取ると中から折りたたまれた大鎌を取り出した。黒い服と合わせてまるで死神。見目麗しき死を運ぶ女神。なんてね。

鎌のほうはかなり強い魔力を発している。たぶん装飾に見える刃と柄の間の紅い宝石は魔石だろう。すごく怪しい光を放っている。

「でも、平気なんですか？ こんな地下で暴れて崩れたりしませんか？」

「大丈夫だよ。ここらの地質はしっかりしてるし、周りは三メートルの鉄板とコンクリの二重構造だしね。それに、模擬戦中は刹那が結界術で補強してくれるよ」

なら安心だ。

「じゃあ、模擬戦開始。ルールは協会の戦闘訓練準拠で気絶、もしくは降参したほうの負け。攻撃は非殺傷設定よろしく」

刹那くんが改めてルールを言つて、

「それでは……試合開始！」

ばつと僕らはお互いの間合いから離れる。

「ガンバレー、空狐くん」

舞さんに親指を立てて笑ってから天月を鞘から抜く。そしてまずは、蒼い拳大の炎の塊を空中に五個作る。

呼応するように朱音さんは雷の塊を十個。

「蛍火！」

五個の炎の弾が跳ぶ。同時に前へ！

「サンダーバレット！」

朱音さんの雷の塊からも雷撃が跳ぶ！

こちらの炎と朱音さんの雷がぶつかる。八個相殺！ 残り二個！

「破！」

残り二個を走りながら叩き落す。そのまま、切りかかる！

受けられる。すぐに朱音さんは後退。僕はそれに追いつがる。

一合、二合と打ち合うが、長い柄をうまく使われてなかなか懐に入れない。

「不知火！」

槍の形に似た自動追尾の炎を撃つ。弧を書く軌道で朱音さんに向かう。

「サンダーブレイク！」

手の平から撃たれた高速の雷の槍で撃ち落とされる。慌てて避ける。そのまま、術は壁にぶつかりかなりの大穴を作った。当たりたくねー。

予想通りこの人、強いことがわかる一撃だ。

「木霊くん」

朱音さんがつぶやく。その顔は顰められている。

「もう少し本気を出しなよ」

！ はい？

「な、何をいきなり」

「耳も尻尾も出てない」

最後まで言う前に止められる。確かにまだ変化の方にも力を割い

ている。

「天月だって力を全然使ってない」

いや、これ訓練でしょ？　そこまでやるわけ……

「私は楽しみにしてたんだよ？　あの銀狐が褒めてた使い手と戦うことを」

だんだん声が険悪に、

「まあいいよ」

そう言っつて朱音さんが大きく後ろに跳ぶ。そして高速詠唱。追いかけてよとすると……

「バインド」

がしんと妙な手ごたえを感じると共に光の帯に足が捕まった！

「げ」

朱音さんが足を止める。

「君が本気を出さないなら……ここで終わりだから」

彼女の腕に二重に円環が回る。

「サンダーフラックス」

呪文名と共に、腕の輪からいくつももの光の筋が……

爆発、轟音。

隣で舞が悲鳴を上げるがその音すら飲み込まれてしまう。ま、死んでないだろうからほっとこう。

朱音の攻撃の寸前に何とか空狐は防壁を展開していた。だけど、フラックスは秒間十発。最大二百発の連射が可能。

「さてと、どうなるかな」

今日会ったただの少年ならここで終わり。だが、銀狐が言ったことが本当なら……

「お前は本物かな空狐？」

隣の舞に聞こえない程度の音量で呟く。

そして、連射が終わり、土煙の向こうに……

「ははは」

なるほど、とりあえず、そこにはいてくれるか。
耳と尻尾。妖狐としての姿の空狐と、光を纏う刀がそこにいた。

っつ、

ぎりぎりだったな。まだ、周りの空気がバチバチいつてるよ。

変化の術に割いてた魔力を防御に回し、天月を開放することで何とか防げた。

『やっぱり私がないとダメね』

「かもね」

僕の横に立っている金髪の美女が微笑む。

陽光を編んだかのような綺麗な金髪。海の深さを連想させる深く蒼い眼。神がかった造作の顔。清楚な雰囲気の白いドレスをしっかり着こなしている。

本邦初公開！ 僕の相棒にして天月に宿る聖霊『イヴ』

普段は刀の中で眠ってるけど呼びかければ答えてくれるし、戦闘では補助もしてくれる。

そして、天月も開放第一段階。『夜光』

刀の中に眠っているイヴを起こし、魔術の制御を分担。同時並行制御が可能な状態だ。さらに、天月も魔力光を纏うことで、魔術的な攻撃力が飛躍的に向上している。

「やっと、本気になってくれたかな？」

朱音さんが嬉しそうに微笑む。

「ええ、まあ」

よく考えると本気を出さないのは彼女にちよつとだけ失礼だったかもしれない。

「じゃあ、続きと行こう」

「はい」

僕も笑う。少し……楽しくなってきた。

「槍炎！」

青白い一点に集中した炎を撃つ。一直線だが速度はかなりのもの。突き出された朱音さんの手の前に防御陣が展開されて受けられる。「疾っ！」

そのガードした瞬間に瞬身の術で速度を上げて相手の後ろに回り込んで斬りこむ。

ぎりぎり受けられる。もうちよいだったな。後退する朱音さんに追いつがる。

右上から斬りかかる。刃で受けられる。すぐに退いて突き。上体を逸らして避けられるが浅く肩に入る。

「くっ！」

朱音さんが蹴りを出す。それを右腕で受ける。かなり重く、ちょっと腕が痺れた。

「サンダーインパルス！」

かざされた手の前に浮かんだ魔法陣から大きめの雷の弾丸が走る。足元を爆発させて緊急回避。いきなりの急加速に体がみしみし言う。

しかし、すぐに自分の間合いまで朱音さんが迫る。

「はっ！」

朱音さんが強く踏み込んで上段からの一撃。刀じゃガードできそうにないな、なら！

「陽炎！」

周りの空気を一瞬で暖めて朱音さんの眼を誤魔化して避ける。ただ、問題としてこの術、自分の視界もぼやけるんだよね。すぐに解除する。

すると少し離れたところで印を結ぶ朱音さん。

上にいくつもの魔力球。帯電した空気。まさか……

「轟雷円舞！」

やっば範囲系の呪文！ 魔力球よりほとばしった雷で目の前に雷の壁が出来た。避けられない、なら！ 魔力を見て密度の薄い場所に飛び込む！

「炎界！」

ぶつかる瞬間に体中から炎を吹き出してガード。だけど、まだこっちの方の勢いが弱くてガードを突き破られる。刀で斬るけど、

「ぐう！」

数歩後ろに下がる。ちょっとしびれた。

だけど、すぐに体勢を立て直し、刀を向ける。

近づけば斬りあい。離れば魔術。なかなか均衡が破れない。

正直あっちの方が強い。スピードは負けない自身があるけど、中、近両方が技はこつちが劣っているのははっきりしている。

ちよつとまずい。

「獄炎！」

練れるだけの炎を練って地面に叩きつける。轟音。同時に眼を眩ます。

僕がそのまま突っ込む。

煙の向こうに朱音さん。そのまま踏み込んで、

「サンダーブレイク！」

僕に向かって雷の槍が飛ぶ。そして、その槍が突き刺さり、

- - 霞の如く消えた。

「えっ!？」

実は今のは幻影。『雪月花』気を幻に残して本体は相手の後ろに回りこむ技だ。

本体の僕は朱音さんの死角に回り込んで刀を振りかぶる。

『充電完了! 何時でもいけるよ!』

天月が強く光る。

先に袖下のナイフを投げる。朱音さんが鎌で切り落とした瞬間に、

「烈光斬！」

刀から纏う光を斬撃として、撃ち出す。

「プロテクション！」

振り向いた朱音さんが防壁で受ける。

- - 予想通りに。

朱音さんの表情が強張る。

烈光斬。防御に『咬む』ことで、一時的に相手を足止めすると同時にその防壁を削る特性を持つ技だ。

攻撃でしか相殺できず、退くにも防御を止めれば直撃が待つ、我ながら陰險な技を作ったものだ。

足止めしてる間に彼女に接近。刀を鞘に納めて深く踏み込む。

「斬！」

居合い。が、

後ろから伸びた魔力の糸に足が捕まる。半端に刀を抜いた状態であつこ悪く床とディープキスしてしまう。

「ぶぎゅっ！」

うそ、畏！？ いつの間にも！

「戦いは一手先を読むものだよ木霊くん」

烈光斬を防ぎきつた朱音さんが後ろに跳び、こつちに鎌の先端を向ける。

「バレル展開」

その言葉と共に彼女の前に魔法陣ができる。

慌てて立ち上がるとかなり強い魔力光が……

な、なんかでかいの来る？！

イヴと平行処理してるけど、ディスプレイ間に合うか？

「星屑たちよ我が手に宿れ。道を照らす光となれ」

「『スターダストインパクト』?! いくらなんでもやり過ぎだ朱音!」

刹那くんが切迫した表情で叫ぶ。そ、そんな大技？

彼女の前で少しずつでかくなる魔力光。だめか、間に合いそうにない。なら!

刀を鞘に納め直し、魔力を籠める。

逃げられないならこつちの大技で相殺する!

お互いの溜めてる魔力の余剰出力が静電気を生み出す。

「一撃入魂、スターダスト……」

朱音さんが鎌を振り上げる。

「全力全開！ 炎龍……」

姿勢をさらに前傾に傾ける、

「インパクト！！」

魔力球から光の奔流が迸る！

「飛翔！！」

抜き放った刀から龍の形をした斬撃が跳ぶ。

ぶつかり合う魔力と魔力。

「どうだ！」

お互い押し合って……こっちの技が破られた。

「うそ！」

僕の必殺技が！

足を捕まった僕は逃げることも出来ず、防壁も展開したが一瞬で碎けて光の奔流が目の前まで迫り……

光に包まれた瞬間、強い衝撃と共に僕の意識は闇に堕ちた。

第十八話 戦いの後に

「んっ」

眼が覚めると後頭部に柔らかい感触。その感触を中心に眼が覚めていく。

「あ、起きたの？ よかったあ」

心配そうに覗き込む舞さん。

「あれ、僕なんで寝て……」

そこで思い出した。切り札の『炎龍飛翔』を朱音さんに破られたんだっけ。

柔らかい太ももの感触に名残惜しみながら体を起こす

「朱音さんは？」

「あっち」

舞さんが指差す方向で朱音さんは……刹那くんに折檻されていた。「お、ま、え、は、な〜んで、模擬戦で、あんなもの使うんだ！非殺傷設定してなきゃ今頃、空狐はお空のお星様になってたんだぞ！！ え？」

空狐くんがみょんみょん朱音さんのほっぺを横に引っ張る。

「ひたい、ひたい」

「ん？ 今度は額か？」

そう言っでごしごし自分の額を擦り付ける刹那くん。

「なんだかなあ〜」

さっきまでの戦闘がうそのような和やかさだった。

「なんか楽しそうだねえ」

舞さんの言葉に僕は頷くしかなかった。

「それではおじやました」

「また明日ね〜」

「おう。すまなかつたな」

「また遊びに来てね」

その後、簡単な治療（非殺傷設定でも打撲や切り傷はできる）を受けてたから、だいぶ暗くなってから僕らは帰路についた。

帰り道で

「まだまだなんだなあ」

空の月を見ながら思わず呟く。

あそこで罫にちゃんと気づいていたら勝てた……かもしれない。まだ、修行の身ではあるけど、つくづく自分の未熟さを実感した。

「がんばらないとなあ」

「そうだね。がんばって今度は勝てるといいね」

舞さんがそういってぼんぼん肩を叩いてくれた。

「で、実際に戦ってみてどうだった？」

俺は晩御飯の準備をしている朱音に聞いてみた。

「あの歳にしてはなかなかだったね。妖狐状態なら身体能力は今の私と同じくらいかな？ スピードだけをとれば今まで戦った相手の中でもまあまあの方かな？」

「ふーん、まあ思ってた以上の使い手だったね」

「ま、こっちはまだ奥の手を使わなかったけどね」

「人に本気出させて言ったくせに……」

「あれを使うとすぐに体にガタが来ちゃうし、空狐だって『本気』ではあるものの『奥の手』は隠していたでしょ？」

二人とも笑う。

「まあ、天月の方も第一段階までしか見れなかったけど、予想以上の力は持ってたし」

「そっか」

朱音が皿を配る。そこで、ギギギツと鈍い音が聞こえた。

「そろそろ定期メンテナンスの時期じゃないか？」

「そういえば、そうだったね。今日も暴れたし、そろそろしなくち

「やね」

体を捻ってみる朱音。そのたびにぎしぎしなる。

「と言うかそのボディ、基礎フレームから作り直したほうがよくないか？ 移し変えてそろそろ二十年だし」

「そうだね、けっこう気に入ってたんだけど」

「本当ならもう少し保つもんなんだが……悪い。無理ばかりさせてさ」

俺は頭を下げる。

「いいよ。そのかわりこれからもずっといてくれれば」

朱音がにっと笑ってくれる。

「定期メンテナンスとなればあの世界に行くことになるな？」

朱音が料理を並べながら懐かしむような顔をする。

「ノエルもねえ。やっぱり親ばかしてるのかな？」

「懐かしいなあ。俺は数える程度しか会ってないけどなあ」

「ははは。夏休みになったら久しぶりにあっちに行こっか」

「いつつもやることは目白押しだな。あっちこっちに友達作ってるから」

ははは、と楽しそうに笑う朱音。

「まあ、そつちばかりじゃなくて仕事も頑張らないと。一応私たち神サマなんだから」

「こんなに忙しいなら引き受けんじゃなかったよ」

グダァとテーブルに体を投げる。昔の俺のバカー。

「元気出して、私もいるんだから」

朱音がぼんと胸を叩く。俺はそのしぐさに頼もしさを感じた。

「頼むよ相棒」

「任せといて」

そこで、俺は笑う。

「さてと、これからいろいろ楽しくなりそうだ」

これからのことを考えて、俺は胸が高鳴るのを感じるのであった。

第十八話 戦いの後に（後書き）

鈴：「やりました！ もうすぐ夢の一万Hit！ みなさんの応援のおかげです！！」

朱音（以後朱）：「と言う訳で座談会です」

鈴：「どう繋がってんだよ。ていうか刹那は？」

朱：「今日は眠いからパスだそうだ」

鈴：「何なんだあいつ……」

朱：「まあ、代わりに私が相方を務めるよ」

鈴：「よ、よろしく願います。じゃあ、なんについて話す？」

朱：「この作品そのものについて」

鈴：「OK。この狐火は僕が作った四つ目の作品」

朱：「残りの作品は？」

鈴：「断片的なのが残ってるだけでぜんぜんできてない」

朱：「あつ、そう」

鈴：「一作目は少々欲張ってSFもファンタジーもとにかく思いついたものをどんどん入れたんだっけ」

朱：「もともと私はその作品の主役だった。ちなみに私たちが主役として活躍してたはずの作品は今後出す予定あるのか？」

鈴：「ない。はっきりいって中学の頃のは全部恥ずいから」

朱：「そうか……」

鈴：「では、みなさんそろそろ……って朱音なんだその物騒な釘つきバツ」

朱：「いやなあに、作者に旅立ってもらおうのさ」

鈴：「……どうして？」

朱：「その上で私がこの作品を乗っ取る！！ 私が活躍しないならお前はいらん！」

鈴：「うわ！ 落ち着け。まで、お前性格変わってる！ それに、俺が死んだらお前たちはああああ！」

逃げ出す作者。それを追いかける朱音。しばらくしてグシャっと
いう音がしてカーテンが閉まる。

次回より狐火ではなく『朱音の雷』が始まります（嘘）

番外二 第二回座談会

「ハロー、エブリヴァデイ！ 座談会の時間なのですよー！！」

「い、いつもよりハイテンションだね……」

ちよつと体を引く朱音。

僕は気にせずステップを踏む。

「だつてさ、だつてさ！ この前ついにこの狐火が一万Hit越え
たんだよおおー！！」

「そ、そうだったの。それはめでたい事だけど」

「ていうか、今日は朱音が相方？」

「ああ、今日は風邪気味だそうで」

「神のくせに風邪ひくんかい」

「神と呼ばれるのはあくまで通称だしね。怪我もすれば場合によつては死ぬ事もある」

「そう……」

そこではたと作者の後ろのドアが開く。

「騙されるな作者！ 俺は不意打ちで」

「究極！ 朱音キークー！！」

「やられただけぶるぼはあ……！！」

部屋に飛び込んできた刹那に朱音は華麗な跳び蹴りを喰らわせる。
「ちよつと待つてて」

ずるずるとぼろ雑巾みたいになった刹那が運ばれていく。

「えつとお、見間違いかなあ。ははは今作中どころか俺の作品全て
の中で最強の男がぼろぼろの状態で簀巻きにされて猿轡の後がある
状態で引きずられていったのは……」

顔を青くしてかわいた笑いをあげる作者。その顔にさっきまで
浮かれたお祭り気分の後はない。

しばらくしてがちゃつと扉が開く。

「ただいま」

びくうつと背筋を伸ばす作者。

「や、やあ、お帰り。せ、刹那は？」

「ん？ 何を言っているの？ 彼は家でゆっくり病気療養中だけど」「うそだ、うそだ、うそだ！ 見たぞ俺は！ 簀巻きにされてずたぼろだった刹那が引きずられてい」

言っている途中で首筋に突きつけられる朱音の大鎌『ゼーレアーベント』が突きつけられる。

「何も、見ていない、ね？」

「はい。見てません」

弱かった。

「で、今回はどうする？」

「そ、そうですね。朱音さんはなんかありますか？」
気づけばいつのまにか敬語になっている。

「なら、この前バトルをやったし各キャラの戦闘スタイルの解説とか」

「戦えるのたつた五人しかいないけどいいか。じゃあ、最初は主人公の空狐から朱音さんよろしく」

「接近戦重視かな。不意を打たれたとは言え後ろに回り込まれたからスピードはかなり。そこに幻術も加わるからあまり戦いたくないかな」

「そんなに？ まあ変わりに打たれ弱いけど」

「後は射程が短いことかな？」

「そうなん？」

ぼつと朱音が手元に炎を生む。

「炎が拡散しやすい性質で遠距離まで跳ばないから。本人もその性質よくわかってると思うから圧縮したり接近戦では手元で放出したりするのが基本かな？」

「ふーん？ じゃあ君は？」

「基本なんでもできるよ。まあ、魔術なら中距離かな？」

「ふむふむ。まあ、もう少し戦闘で見せ場を出せたらいいんだけど」

「頼むよ。あと、私が全力で戦える話もね」

「この世界が滅びちまうぞ、そんな事したら……」

「そこを何とかするのが作者の腕の見せ所でしょ？」

「無茶言うな。つーか、パワーがジャンプ系漫画並みにインフレ起こしそうで悩んでるのに」

「すでになりかけてると思うが、空狐と私の実力差とか」

「そこで二人とも時計を見る。」

「そろそろ時間だな」

「そうだね」

「最後にかんたんにこれからの予定を言ったらどうだ？」

「うん、じゃあこれから空狐たちは、まったりとした学園生活をしばらく続けます。それと、申し訳ございませんが、しばらくの間更新を停止します」

「作者が手直し含め、ちょっと世界観など全体的に見直したいらしいので」

「それでは、この番組は作者、鈴雪と」

「天野 朱音がお送りしました」

「質問などのメッセージお待ちしています」

「それではさよなら」

画面がフェードアウトしていく。おそらく二週間ほどです。もつとよく出来るようにがんばります。

第十九話 空狐の訓練

日の光と鳥の声で眼が覚める。

「んっ」

ぐっつと伸びをしてから、携帯をとって時間を確認する。昨日と違っていつも通りの時間に起きられたな。

ん、よし。

布団から出て普段着に着替える。

そして、天月を取ると、

『おはよう空狐』

今日はイヴもちゃんと起きていてくれた。

「おはよう、さっそく今日もよろしく」

『OK』

部屋を出るとパタパタと舞さんが走っていく。

「おはよう、空狐くん。早いね？」

「おはようございます舞さん。別に普段はこのくらいですよ？」

昨日はお酒を飲んだせいで、今日は大丈夫だ。そういえば、みんな二日酔いしてなかったなあ。意外と強いのか？

「なんか手伝う事ありますか？」

「ううん。洗濯物も終わつたし、今から朝ごはんまで自由時間」

舞さんがあははと笑う。

「そうなんですか。じゃあ、中庭を使わせて貰いますね」

「いいけど、何するの？」

僕は天月の鯉口をちらちらさせる。

「特訓です」

魔力を籠めた呪符を周りにばら撒く。

「よしっつと」

準備完了。

「蛍火」

術名を呟くとぼつと空中に小さな火の玉が出る。

目の前に出た玉を斬る。返す刀で新たに左下に現れたものを、さらに呪符からランダムに球が現れる。それを切り裂いていく。

「何してるの？」

僕の訓練を見ていた舞さんが不思議そうに聞いてくる。

「ランダムに発動時間をずらした蛍火を斬る訓練です。全部で百個。目標は九十個以上」

答えながらも次々と現れる蛍火を斬る。大体一個の蛍火は出現から消滅までのタイムは二秒。それらを斬っていくことで、反応を磨くのがこの訓練だ。

最初は五秒間現れる炎を落とす所から初めて、徐々にタイムを短くしていつてもうすぐ一秒になる予定である。

「と、これでラスト」

最後の蛍火を斬って刀を納める。

『お見事。最高記録の九十五個。完全クリアまで五個だよ』

イヴが報告のために出てきてくれる。

「九十五個かあ」

もうちょいで百個。

あ、そうだ。

(ねえ、イヴ。君の事を舞さんに紹介しようと思うんだけどいい?)

思念通話で聞いてみる。

『なんで?』

(ほら、彼女は僕が一番信用できる人だし、隠し事してるみたいでちょっとさ)

彼女は少し考えて、

『いいんじゃない?』

と頷いてくれる。

よし。

「舞さん」

「なに？」

縁側に座っていた彼女と向き合う。

「忘れてたから今紹介しますね。僕の相棒、天月に住む聖霊『イヴ』です」

ポンツと刀から身長30センチの二対の透明な羽根の生えた妖精ヴァージョンのイヴが出てきた。

「はじめまして、舞。よろしくね」

笑顔でヒラヒラと手を振るイヴ。まあ、見た目はかわいいな。

あれ、舞さんはほけつとした顔で反応ないんですけど？ そんなに驚いたのかなあ？

「ま、舞さん？」

僕が声をかけると同時に舞さんがふるふると手を震わせながら手を伸ばした。

「か」

やばい。と思ったがもう遅かった。

ガシツとイヴを掴んで

「かわいい〜！」

そのままものすごい笑顔でイヴに頬ずりする舞さん。

「かわいいかわいいかわいいよお。空狐くん何で内緒にしてたの？」

「こんなにかわいい子を〜！」

いや、だって色々あったから……

イヴがバタバタ暴れるが、舞さんは意に返さないで頬ずりする。

「た、助けなさい！ 助けて！ く、空狐！ 痛い痛い痛い〜！！」

「あゝもう！ ちっちゃくてお人形さんみたい！ 今度いろいろ服探さなきゃ〜！」

「ごめん、イヴ。今の無敵状態の舞さんに何を言ってもダメだから。」

がんばって耐えてくれ。

「薄情モノ〜！！」

イヴの叫びは青空に消えていった。

第十九話 空狐の訓練（後書き）

鈴：「お久しぶりです。鈴雪です」

刹：「やっと修正完了したな。これでやっと俺も活躍できる」

鈴：「まだ、しばらくは日常編だけだな」

刹：「そっぴやそっぴだな」

鈴：「これからがんばっていきますので、なにか変なところや誤字脱字があつたら遠慮せず教えてください」

刹：「それと、作者が学校始まったので更新も少し遅くなるかもしれません」

鈴：「これからは、土曜だけでたまに火曜更新の予定です」

刹：「それでは」

鈴&刹：「「またの機会に」」

第二十話 刹那って？

「あーん。もつと触らせて〜」

「ダメだから！ イヴおびえてるから！」

なんとか舞さんからイヴを引き離す。

イヴは半分涙目で僕の腕に引っ付いている。

「うう、空狐。あんたの事、幸せ者って言ってたけどあれ訂正するわ……この不幸もの」

僕も子供の頃あんな風に抱きつかれて頬ずりされてたんだよ。

その事言ったらイヴに『幸せね』なんて言われたんだっけ。

「うう、またねイヴちゃん」

諦めて舞さんが家に引っ込む。それを見てイヴが一言。

「いやよ、死んじゃうから」

確かに。

その後、ご飯を食べて現在学校に行くため家を出たところ。

「よっ！」

いきなり後ろから肩を叩かれる。

「おはよう。刹那くん」

「おはよ」

刹那くんがにかつと笑う。

昨日わかったことだけど、実は刹那くんの家はうちの斜め向かいの屋敷だったのだ。舞さんの家もかなり広いけど、刹那くんの家には負けていた。

「おはよう。それと昨日はありがとな空狐」

ポリポリ頬を掻きながら刹那くんが笑う。

「いいよ、僕もけっこう楽しんでたから」

いい経験になったし。

それと少し気になっていた事を聞いてみる事にした。

「ねえ、刹那くん」

「何だ？」

「君も退魔士なの？ そうだとしたら何級？」

「ちよこつと気になっていたんだよね。刀を持ち歩いているし。家の人に退魔士いるし。」

「んっ？ そうだけど。ランクは」

「少し考える素振りをしてイタズラっぽく笑う。」

「魔道師ランクはS+ランク」

「ちよい待て。」

「だから、魔道師ランクじゃなくて退魔士ラン……ク」

「はい？ S+ですと？」

「S+？」

「S+」

「こくと頷いて僕の言葉を刹那くんが肯定する。」

「うん、みなさんと一緒に。さん、はい。」

「ええええええ？！ S+!？」

「マジですか？ と、だったら、刹那くんの退魔士ランクはもしかして……」

「特級なの?!」

「まあ……な」

「母さん以外に初めて会った……」

「ねえねえ、空狐くん。それってすごいのか？」

「舞さんが不思議そうに聞いてくる。」

「う、うん。特級は退魔士全体を見ても数人しかいないんだから！」

「確か十人くらいしかいないと母さんは言っていた。」

「ふーん、とよくわかってなさげに舞さんは相槌を打つ。」

「それから、舞さんは僕に顔を向ける。」

「じゃあ、空狐くんは？」

「魔道師ランクはA+、退魔士ランクは一級」

「個人的にはこれでも、この歳では十分な能力であると思っている。」

ちなみに、A＋ランクとS＋ランクの差はけっこうある。アリと戦車は言いすぎだけど、少なくとも術の力だけで見るなら歩兵のラィフルでバズーカに挑むような差がある。

「それじゃあ朱音さんは？」

次に刹那くんは顔を向ける舞さん。

僕もちよつと気になるなあ。

「S－ランクの一級。その内Sランク試験を受けるつもりらしい」

……実はこの町、化け物ばかり？

それから、ふと気がついた。

「にしても、君が15歳だとすると最年少じゃないの？」

特級の情報は協会内でも機密事項ではあるが、少しぐらいは噂ぐらい流れてくる。でも、人間の少年が特級をとったなどついぞ聞いた事がない。

刹那くんはふんと鼻を鳴らして、

「別に俺が十五の人間だなんて一言も言っていないよ」

え？

「もしかしたら人間ですらないかもしれないし、俺が本当の事を言っているとも限らないんだよ？」

えつと、そんなの疑いだしたらきりがないんじゃない？

でも、確かに刹那くんも人外なら、この匂いの変なものも少しは納得できるし……でも、やっぱ今まで会ったどの種族とも違うしなあ。本当に何者なんだろうか。

「ま、冗談はこのくらいでさっさと行こうや」

そう言って刹那くんはすたすたと歩幅を大きくした。

「あつ、待って」

「わわ」

僕らは慌ててスピードを上げた。

いつかは、教えてくれるかな？

第二十話 刹那って？（後書き）

次にまた座談会をやりますんで。

番外三 第三回座談会

「どもー、座談会の時間です。本日は私、鈴雪と」

「刹那がお送りいたします」

そう言って二人が頭を下げる。

「本日は帽子猫さんからの質問の四つにお答しようと思います」

「それでは」

1. 魔族や龍族はどうなっているのか、人間以外の種族はなぜ存在しないことにされているのかなど。

「鋭い指摘です」

「ほれ、回答しろ」

「はいはい、えっと、基本は同じ。龍族は龍族の隠れ里に住んでますし、魔族もまだいます」

「ただし、魔族は人数少ないし、世界を滅ぼすために行動したいけど、主がないから行動は控えている。それに、何にもしなくても存在し続けるだけの負の力が得られるからわざわざ動かない」

「まあ、一部の物好きとかは人間に溶け込んで世の権力者になり世界を混乱に陥れたりもするけど。いい例がヒットラー。正体は魔族で、退魔士によって滅ぼされている」

「ちなみにたまたまいた俺も殲滅戦に参加。頭はいいけど、弱かった」

「そして他の種族がないことになってるのは人間に弾圧されないため」

「基本的に人間より妖魔の能力は高いけど、人間は人数が多いから、正面からぶつかり合ったら互角。どっちも滅んでしまう可能性がある」

そこで、刹那がため息。

「もう少し人間が賢い生き物ならそんな事にはならないんだけど、残念だけどそこまで頭いくくないし」

「後は裏の存在である自分たちがわざわざ表に出る必要もないって考えが妖魔の長たちの考えだしね。暗黙の了解として不可侵規定が存在する。一部、空狐たちのような例外はあるけど」

「龍の方は一部除き他種族にたいして中立を貫いています」

「じゃ、次」

2. 僕としては成長性が非常に気になります。例えば空狐、年齢15歳で桁違いの強さを持っていますが、一体子供の頃の実力はどれほどで、

どのように今の実力まで成長し、これからどうなっていくのか。

「まあ……そうだな」

刹那がたらりと汗をかく。

「うう、考えなしの設定が恨めしい」

「だから汗をかく作者。」

「まあいいや、今回はこれのためにわざわざスペシャルゲスト呼んでるから」

うむと頷く作者。

「空狐の母にしてもう一人の特級退魔士。息子たちがかわいくてかわいくてしかたないお母さん。その名も木霊 月狐さん！ 本編より先に出ていただきます！」

そう言って現れたのは狐耳と尻尾の生えた美女。

「どうもー！ みなさん！ うちのクーちゃんがお世話になっていきます！」

「というわけで、彼女に聞いてみたいと思います。月狐さん、空狐の子供の頃はどんな子でしたか？」

「ん、スッゴくかわいかった」

大輪の華が咲いた。

「…………あの？」

「あつ、別に今はかわいくないってわけじゃないのよ。でもね、小さい頃はフワフワ柔らかくて、本当に女の子みたいで」

「もしもーし、お姉さん帰ってきておいでー」

「ああつ、ごめんなさいセツちゃん。ちょっとだけ興奮しちゃった」

「危ないから」

「セツちゃん…………」

ぶぷつと笑う作者。

「うるさい。で、月狐さん、子供の頃の空狐はどうだったの？」

「はいはい、クーちゃんの子供時代ね。そうね…………はつきり言ってるのは魔力の高いだけの子だったわ。その反面制御能力が低くてしょっちゅう暴走させて大変だったわ。友達も少なくて引っ込み思案だったし」

「典型的な半妖の子供だな」

「半妖は基本的に魔力は高いかわりに制御能力は低いという問題を抱えています」

「それである子にはちゃんと自分の力を制御できるように訓練を積ませたの。おかげで六歳の頃には魔力を暴走させることはなくなっただし、十歳の頃には魔術をちゃんと使えるようになったわ」

「確かその時点ですらAAランクとれたんだよな。未恐ろしい…………」

「で、その後は私の仕事を手伝わせたり、私やギンちゃんが実戦に近い形式で訓練を積ませたの」

「で、五年間の訓練で一級退魔士になったわけね」

「私もびっくりしたわ。だから、もう少し後で渡すつもりだった月天を渡したし、木霊家の切り札を与えたのよ」

「なるほど」

「訓練とかも好きだし、今もよくしてるんでしょ？」

「ええ。朝にちゃんと訓練してますよ。夜もこっそりやっていますし

(こっちに来てから二日目から)「」

「授業中もな」

作者が目をぱちくりさせる。

「……マジ？」

「マジ」

「どうやって？」

「天月と思念通話しながら戦闘シミュレーション」

「いいんかそんな事してて」

「まあまあ。授業も平行してちゃんとやってるから」

「わかったよ。次、成長性ね。二十歳まで今の速度で成長。背も伸びるし、魔力もあがる。二十歳超えれば遅くはなるけど二十歳後半まで魔力や技術、身体能力が上がってその頃が魔力や身体能力のピークかな？ そのくらいで成長は止まるだろうし、身体能力の緩慢な減少と技術経験の上昇が同時に起る」

「で、その後は老化による能力低下が起きるだろうから五十代で引退かな？」

「じゃあ、次行こうね」

3・倉田舞の潜在能力はどのような理由からか

「舞の潜在能力についてね」

「倉田家の人間で常磐市に住んでいるから」

「あの町はちよつと特別なの。残念だけど倉田家について含めて今は語れないけど」

「言ってみれば『スレイヤーズ』のリナがゼフィーリア出身である故郷の姉ちゃんの妹に生まれたおかげで高い魔力を持ったに近いな」
「それでは次ですよ」

4・日本刀の精霊なのになぜイブという西洋風の名前で金髪碧眼なのか

「うにゆう、それについてはイヴの秘密に触れない程度で」
「もともと天月は木霊家があるお方から預けられたもので、預けられた当時は両刃の大剣だった。元の名前もいつの間にかかわれなくなっただけだったし」
「で、その剣には使い手に合わせて形状変化する機能があるから、それで木霊家の人間に合わせて刀の姿になっていったの」
「ま、こんな感じかな。次で〜す」

4・魔道士と魔術師の違いは何か

「違いはないです」
「人によって名乗るのが変わるから定義が曖昧なのよねえ」
「現在、魔道師協会で統一化を計画してるもののなかなか決まらな
い」
「正直、どっちでもいいし」

「と、一通りの回答は終わったな。二人ともなんかある？」
「ぱつと刹那が手を上げる。」

「はい、刹那」
「一応、読者の皆様に主張、前回の座談会や人物紹介で朱音が自分の方が弱いな発言をしたけど、あれは間違い。俺と同じくらい強い」

「そうなの？」
「おう。こっちのレパトリーが少ない中距離砲撃で攻撃されたら勝てないよ。威力あるし、あいつ空中機動滅茶苦茶早いんだ」

「だけど、人物紹介で朱音より強いつて明言されてるわよ」
「あれは作者の凡ミス。純粋な魔力と破壊力に射程は確かに俺の方が上だけど、中距離戦で使える魔術が少ないんだもん。戦いようによっては朱音の方が上だつて」
「つまり、お互いが得意な面で相手より上つてわけね」

「そ
」

「じゃ、じゃあ、他に何かない？」

特に二人は行動しない。

「じゃあ、今日はこのくらいで……」ここまでのは放送は鈴雪と

「刹那と」

「月狐の提供でお送りいたしました」

「それでは、みなさま」

「」「よい一日を」「」

番外三 第三回座談会（後書き）

質問などのメッセージお待ちしております。

第二十一話 決定事項

放課後の演劇部部室。本日は次の公演作の発表だそう。タイム
ング妙にいいな。

「それでは次の公演用の作品について決めたいと思います」

教壇の上から桜子先輩が部員を見渡す。この人が演劇部部长さん
だったが、本人は部長と呼ばれるのを嫌って名前で呼ばせているら
しい。ちなみに本名は依田 桜子だそう。

桜子先輩がノートを広げる。

「公演作品はハルの書いてきた『シスターズプリング』」

何、その題名？ 妹の季節？

「内容は十二人の妹が」

「『『ちよおつと待ったあ！！』』」

僕と刹那くんともう一人の男子の先輩がツッコむ。周りの人間が
ちよつと引いたが気にしない。

「何その某恋愛アドベンチャーみたいな展開！ パクリですか！」

「亜 亜とかちっさい子はどうするのさ！ まさか初等部から借り
てくのか！？」

「大体女子四人しかいないし、男子が女装するとしても最低三人少
ないわ！ まさか、部員以外の人間を募集するわけじゃないよね！
？」

僕、刹那、石田先輩（先日の暫定名男子Aで中肉中背で黒髪の前
輩）の順。

「ぜはー、ぜはーと三人仲良く肩で呼吸する。」

「よ、よく知ってるね三人とも」

「当のハルが微妙な笑みを浮かべる。」

「いや、アニメ見てたから」

山田先輩。

「俺、ゲームと漫画」

これは刹那くん。

「僕はゲーム」

けっこう面白かったよ。

お気に入りには咲 だった。

「まあ、冗談は置いて」

そう言っばつと、桜子先輩がノートを変える。

ずでつとこける僕ら三人。

「ねえねえ空狐くん、それ面白いの？」

舞さんが僕の肩を突つつく。僕はちよつと考えて、

「人によります」

とだけ答えた。

僕はけっこう気に入っていたな。もちつと続いてくれればよかったのに。でも、女の子には勧められんな。あれは。

「じゃあ、今度こそ本当の内容ね。ある家に引きこもりの娘がいました。彼女の名前は遥」

ありそうな展開だ。

「兄である武と姉の忍は彼女を家から連れ出そうとします。しかし」

こつから急展開？

みんなが次の言葉に注目する。

「彼女が家に出ない理由は……実は彼女が吸血鬼だったからなのだった！」

はい？ 吸血鬼？

てか先輩、テンション高くなりましたね。

「もともと彼女は母親が連れてきた連れ子で、彼女の一族は代々続く吸血鬼の家系。そして、引きこもり始めた十五の夜から彼女の体は吸血鬼化してしまっていたのだった」

実は正しいんだよねそれ。

吸血鬼は確かに血を飲むし、体を霧にしたりもできる。ただいくつか、伝承と本物の吸血鬼には違いがある。血を吸った後に相手を同族にする能力とか、繁殖法とか。

まず一つ目、血を吸った後相手を同族にする力はない。そんなのあったら今頃、世界中吸血鬼が溢れかえって、食料困難に陥ってしまっているだろう。

次、繁殖法。これは普通に人間と一緒に 吸血鬼同士で子を儲けることは可能だ。生まれた子は十五歳前後で吸血鬼化が始まるまで普通に人間と同じように成長する。

人間との間でも半吸血鬼のダンピールは生まれる。この場合、子は人間の寿命と同じではあるが、身体能力などでいくつか親すら超える力を持つ事がある。これは半妖に近いな。

そういえば、ハルは父親が退魔士のはずだからこういう事はよく聞いているだろう。

「そして、三人は彼女を狙う吸血鬼ハンターと戦う事に！」
ぐつと拳を握る桜子先輩。

あー、今だにあるんだよそれ。大体が対吸血鬼能力持っていたりしてるから吸血鬼だけじゃどうしようもないから退魔士もお呼ばれするんだよね。

めんどくさいんだよな。今度は逆恨みでこっちに襲い掛かってきたりするし。僕も前その仕事があったからよく知っている。

魔道師協会が長年悩んでいる問題の一つでもある。

「じゃあ、配役発表するよ〜」
そうして、先輩が黒板に書いていく。

一分後。

「ちよおつと待ってください」
黒板に配役を書くのに僕がストップをかける。

「何？ 木霊君」

書きかけの手を止めて桜子先輩がこっちを向く。途中で止められたからかちよつと不機嫌そう。

でも、僕は気にせずに続ける。

「えーえー、舞さんがヒロインなのは別にかまいませんよ。似合っ

てますし、兄の武役が刹那くんでハンターが石田先輩（昨日の暫定名男子Bでがっしりした体格で髪は刈り上げ）なのは文句ありません。ですが……」

僕はきつと黒板をにらみつける。

「なんで僕が姉の忍役なんですか!？」

そこには厳然と『忍役、木霊 空狐』と書かれていた。

桜子先輩は何だそんな事と言った感じで笑う。

で、腰に手を当てて一言。

「似合うと思ったから」

「はつきり言われたー!」

僕は頭を抱えて絶叫する。

みんなが次々にぼんぼん僕の肩を叩いてくれる。

「じゃあ、残り書くよお」

そんな僕の様子を気にせず桜子先輩は書きを書くのであった。

「はあ」

帰り道。僕はため息をつく。

あの後、僕はみんなより出遅れてるという事で、まずは発声練習など基本的な内容を練習させられた。

「大丈夫?」

「うん……思ったより疲れただけだから、後はいきなり女装させられるとは思わなかったから」

でも、演劇って（女装以外は）けっこう楽しい。この後も家で舞さんが練習を見てくれる予定だ。

「がんばろうね、空狐くん」

「はい、舞さん」

僕は楽しみな気持ちで答えた。

あと一ヶ月。がんばるぞー!

第二十一話 決定事項（後書き）

鈴：「どうも、鈴雪です」

刹：「どうも、刹那です」

鈴：「やっと二十話越えたくー!!」

刹：「そして、一万五千Hit記録！ 皆さんのおかげです！」

鈴：「ありがとうございます！」

刹：「これからしばらくの間は一話完結の話になる予定です
よろしく願います」

鈴：「それではまた」

刹：「次回で会いましょう」

第二十二話 朱音の趣味

「ふふふん」

機嫌よさげに舞さんが鼻歌を奏でる。

「嬉しそうねえ、舞」

と呟くのはイヴ。

僕は肩にイヴをのせて舞さんの隣を歩いている。

今日は舞さんとの買い物で、彼女はお気に入りのレースをふんだんに使ったワンピースを着ている。

歩く姿ははつきり言っただけがさつきから注目を集めまくりで、男の『てめー、うらやましいじゃねえか』と言った感じの視線が手を引つ張られている僕に突き刺さっている。痛い痛い。

「着いた」

そう言っただけで嬉しそうに彼女が止まったのは……

「えーと、舞さん？」

「何？ 空狐くん？」

はち切れんばかりの笑顔がそこにあつた。

「……？」

「……」

その店はいわゆる……ファンシーショップだった。

柔らかな暖色系で書かれた店の看板に入り口横のウィンドウには数々のぬいぐるみやキャラクターグッズ。男には入りづらい店だなと思わせる雰囲気を持つ店だった。

舞さんが古びた感じのドアを開けると控えめな歌を奏でるドアベルが鳴って、僕は慌ててついていく。

その店の中は見た目より広くて明るい。置いてある人形や小物もいい感じで店長のセンスのよさを感じる。

なんとなく見ててほのぼのとした気分になんてさせてくれる。

最初は躊躇うかもしれないけど一度入れればあまり気にならなくなるだろうな。

それに、よく見れば、男の人もけっこういるし、（女の人もいるから多分カップル中心）それほど恥ずかしくはないかな？

「うーん、どれがいいかなあ？」

そう言っただけで舞さんが見ているのは人形用の服。実はこの買い物、イヴの服を買うために来たのだ。

イヴも僕の肩を蹴って舞さんの横に跳ぶ。

「私はこっちの方がいいかなあ？」

「うーん、こっちもどう？」

何というか……女の人の買い物って口出しづらいな……でも

「空狐くん何してるの？」

僕が舞さんの横に並んで頷いたり首を傾げたりしてみせていたのだ。

「ほら、イヴって普通の人に見えないから、舞さんが僕に話しかけているように見せてるんだよ」

舞さんがイタい人に思われたくないからね。

「健気な行動ね。空狐。私は応援するわよ」

イヴが何かうんうん頷いていた。

そんなこんなで舞さんとイヴが選んだのは二人の好みを反映したこの時期に着るのはちよつと辛そうなフリルやレースを多用したフリドリドレス。色は黒とピンクの二つ。

まあ、イヴに似合いそうだなこの服。

「値段は……ゲッ」

払えるけど思ったより高い。人形って意外と金がかかるんだなあ。そういえば、UFOキャッチャーでも狙った商品が当たらなくてかなり金もかかるし。（微妙に違う）

「大丈夫。わたしが払うから」

舞さんがそう言ってくれるけど……

「いいよ。イヴの保護者は僕だから、僕が払うよ」

「誰が誰の保護者なの？」

イヴがちよつとだけ怒っている雰囲気を漂わせるけど無視。

ふん、とイヴが鼻を鳴らす。

「なによ、私のおかげで一級の試験合格したくせに」

「えっ？ もしかしてカンニング手伝ったの？」

驚いたように舞さんが僕を見る。

確かに他の人には見えないからカンニングに便利そう。だけど、

「違うよ。実技の時にちよつと力を借りたんだ」

イヴとの並行演算で実技を乗り切ったのだ。多分、イヴがいなかったら落ちていただろう。

僕は彼女がいなければ（当たり前だが）半人前なのだ。今の戦闘スタイルも彼女のアドバースのおかげだし。

「それもズルいんじゃないの？」

確かにそうかもね。いや、実技でいい杖や刀を使うのはみんなやっている。ずるくない。うん、きつとずるくない。（自分に言い聞かせるように）

「まあ、いいじゃん。お会計済ませようよ」

僕はドレスを入れた籠を持ってレジに向かった。

「逃げたわね」

イヴがそう呟いたけど気づかない振りをした。

レジに向かうと知ってる後ろ姿を見つけた。

ピンク色の髪に、黒いドレスっぽい感じの服。

あれって……

「朱音さん？」

舞さんが呟いた通り朱音さんがいた。だけど、なんかソワソワしているな。

僕はこっそり近づいて、

「あーかねさん」

「うひゃうー!!」

ポンツと彼女の肩を叩くと変な声を上げて朱音さんが振り向いた。
「ななな、なんだ空狐?!」

あれ? 木霊じゃない。そして、反応すごいな。
顔も赤いし。

「どうしたんですか? こんな所で」
舞さんが聞いてみる。

「やつ、何でもないよ。どんな店か気になって入ってみただけで…」

とそこまで言いかけて、
「朱音買えたぞ〜。お前の欲しがっていた人形」
タイミングよく刹那くんが現れる。

その手に抱えられているのは大きな袋で、中からデフォルメされた
かわいらしいドラゴンと熊のぬいぐるみの顔が飛び出していた。
僕らが振り返ると耳まで真っ赤にした朱音さん。

「朱音さんって……」

「意外と可愛いもの好き?」
よっぽど恥ずかしかったのか頭を抱える朱音さん。
それから、ちよつとたつて、

「バツ……バカバカバカバカバカバカバカバカ、バカア!」
ポカポカ刹那くんを叩き出す朱音さん。大人っぽい彼女だけどそ
う言う行動がかわいく見えてびつくり。

「なんでこんなにタイミングがいいの!」
「狙ったから」

刹那くんがそう言った瞬間、朱音さんが強く踏み込みテンブルに
フック。チョップピングレフトを決めてからトドメにアッパー。

そして、床に投げ出された刹那くんから放れた袋を見事にキャッ
チ。

「悪は滅んだ……」

静かにそう告げたのだった。

もちろんその後、店長に（何故か僕らも）お叱りを受けてしまった。

店長からお叱りを受けてから店を四人で出る。

「いや、なあ。店に空狐と舞さんが入ってきたのを見てこういった事起きるんじゃないかって思ってたさ」

あつという間にダメージを回復させた刹那くんがそう告げると、朱音さんが頭を叩いた。

「全く……そういうことはするのは止めてよね」

恥ずかしそうにそっぽを向いてしまう朱音さん。

「いやあ、意外とかわいいところって滅多に見せてくれないからつい、ね」

「恥ずかしい事を抜けぬけと人前で言わないで欲しいなあ」

僕の中で今お二人はバカップルに認定されました。

そんな二人をみていたらすぐに家についてしまった。

「じゃ、またな」

刹那くんの家の前で別れる。

「うん。またね」

「朱音さん。今度お人形見せてくださいね」

舞さんが楽しそうに笑う。

朱音さんは微笑みながら。

「ええ、いいよ」

そんな感じで今日は終わる。

おまけ

「うつつつつ」

僕と舞さんはテレビを見続ける。

後ろの怨嗟の声に気づかないふりをするために。

「なんでこんな小さいのよおお!!」

イヴの僕らにしか聞こえない叫びが後ろから響く。

せっかく買った服にお腹が通れなかったとき。

「体貸しなさい」

またかい。

僕はため息を吐く。舞さんが不思議そうにこっちを見ている。

あゝ、もう。

「この前貸したばかりでしょ。またこん……」

「あれの場所も舞にはらすよ？」

「どうぞどうぞ使ってください」

弱いと言っなけれ。男としてあれの場所をばらされるのは辛いのだ。

部屋に戻る。くそ、イヴのいない間に隠し場所変えなくちゃな。

天月を部屋持って外に出る。

僕はため息を吐きながらイヴを見た。

「じゃあ、やるよ」

「よろしく」

イヴが刀の中に戻る。少ししてから刀から光が漏れ出す。

「天月第四形態」

しゅるつと刀から漏れ出す光が体に巻き付いていく。

「『顕現』、イヴ」

ぱつと光が辺りを明るくする。

光が収まるといつもと違う感覚。

「やっぱり慣れないなあ」

こきこきと体を動かす。

いつもより体が軽い。背は変わらないけど、なんだか動き辛い。

胸元の二つの感触も男としてはちょっと恥ずかしい。実はイヴはわりと胸が大きい方だ。舞さんより少し小さいくらいか？

だけど、それ以外に特に違和感を感じなくなってきた。そういえば、これ十回以上やってるんだっけ。か悲しくなってきた。そういえば、これ十回以上やってるんだっけ。

「体の支配権渡すよ」

『OK』

僕は自分の体の支配権を手放し傍観者になる。すぐにイヴが体の支配権を手する。

今は僕の体を使ってるのはイヴだ。姿もね。

「やつほー、舞。この姿は初めてね」

驚いてポカーンとしている舞さんに声をかける。

自分が言っている訳じゃないけどなんとなく新鮮な気分だ。

「えっとお」

舞さんはちよつと悩んで、ポンツと手を叩く。

「イコちゃん？」

「『名前まで合体させなくていいから』」

二人同時につっこむ。

「じゃあ、どっち？」

「イヴよ。今は空狐に体を貸してもらっているの」

普段はこの状態でも、主体は僕だけだね。

「うん。わかった」

舞さんが頷いた。

まずは、走る前に準備運動から始める。

「そういえば、妖精なのにイブちゃんも太るんだね」

一緒に走ろうと準備運動していた舞さんが思い出したように呟いた。

「うーん。まあね」

実際は単に服が着れなくて悔しくてダイエットし始めようと思っただけだね。

太ったわけじゃないんだよなあ。

「空狐、うるさいわよ」

はいはい。すいません姫さま。

ぐっぐつと身を捻る。この状態は体も柔らかい。

にしても……何だかなあ。

体を動かすたびに二の腕に柔らかい感触がするのはなかなか恥ずかしい。

胸の方も触られた感じがして……うっう。

「ねえねえ、その身体ってどういう仕組みなの？」

舞さんの目、好奇心でいっぱいになってるなあ。

イヴはちよつと考えて、

「変化の術の応用かな？」

適当に誤魔化した。

これは、宿したイヴの情報を元に彼女の元の姿を再現する術だ。

変化の術も使っているかもしれないが、原理はよくわかってない。

「ついでに言えば人格の方もね、共有はしてないわよ」

体は共有してるけど、人格そのものは別個になって存在する。多

重人格に近いのかな？ どんなのかは知らないけど。

もちろん、問題がないわけじゃない。初めての頃はどっちが自分かわからなくなる時もあった。一度だけだけど、体が入れ替わったりした事もある。

その時は母さんに手伝ってもらってすぐに元に戻れたが。

でも、慣れるとこの体は女になる事に目を瞑ればなかなかいい。

空を飛べるし、能力もいろいろ上がる。

イヴがぐりぐり首を捻って、

「さてと、そろそろ行きましょ」

その言葉とともにダイエツト作戦がスタートした。

第二十三話 イヴのダイエット（後書き）

『イヴのダイエット』修正しました。

変身、ジョギング、その後の三本にします。

それと、座談会の内容募集してます。

メッセージや感想で何かお願いいたします。

第二十四話 ジョギング

と言うわけで二人（三人？）で走り出す。

現在、僕の体は融合によりイヴの姿になっている。

もう少し詳しく言うと走るために尻尾と耳に羽を变化の術で隠してあるが、イヴの姿をベースに尻尾と耳が生えて、髪と目の色が僕の色に変わっているのだ。一応、走るのに邪魔だから髪は一括りに束ねてある。

軽快なペースで走るイヴ。うーむ、背中に束ねた髪がぼんぼん当たるとのってなんだか変な気分。

にしても、長い髪って事で段々実感してきたけど、今の僕って女の子の格好してるんだよなあ、なんか恥ずかしくなってきた……

僕だけがなんか周りより浮ついてるって言うかなんというか、女装してるときと似てる感じだけど、なんだかそれとも少し違う。うつつ。

「合体し続けるのって大丈夫なの？」

「うーん、まあ大丈夫かな？」

戦闘中はイヴの力で体を強化したり特殊能力を付加するけど、今はそんな必要もないから長くやれる。だけど、僕はさっさと解放されたい。こっちでも制限時間があればいいのに。

公園まで走り、

「はあ、いい汗かいたわ」

グイツとイヴが額を拭う。「休憩しよっか」と言って舞さんが自販機でポカリを買う。

舞さんがちよつとだけ飲んで、

「はい、どうぞ」

僕らにそのポカリを渡す。

「ありがとう」

グビグビとイヴが飲み、ふと半分ほどで考え込む素振りを見せる。舞さんが不思議そうにこつちを見る。

それからちよつとたつてから、

「これって間接キスだよな」

何言い出すんだイヴ？

「そうだけど、どうしたの？」

イヴはニヤリと笑つて、舞さんに聞こえないぐらい小声で、

「喜ばない空狐。大好きなお姉ちゃんとの間接キスだぞ」

そう。

「……ずいぶん淡泊な反応ね」

いや、子供の頃かわいいつて愛でられた時に散々、頬とかにされてたからいつの間にか気にならなくなつちやつた。

うるたえなくてごめんね。

「そう……」

イヴはつまらなさそうにため息を吐いたのだった。

そして、飲み終わったペットボトルをゴミ箱に投げる。きれいな放物線を描いて見事シュート。

「あれ？ 舞？」

と、そこで聞きなれた声が後ろから、

「あ、ハルちゃん」

振り向くとハルがいた。今日は龍馬は隣にいない。

普段着でブラウスとカジュアルパンツと、動きやすそうな格好だ。

「ねえ誰？ その人、知り合い？」

ハルがこつちに視線を向けながら聞いてきた。

「あつ、彼女は」

「初めましてハルさん。私は木霊 イヴ。空狐の姉です」

嘘つくの早！！

そして、いつの間にか服をジャージから母さんがよく着ていたブラウスとスカートに変えてあるし。全然気づかなかつたよ。ひらひらしたものがたくさんついててなんか不思議な感じ。

ハルはあれつと首を傾げる。

「空狐つて兄弟はお兄さんだけじゃないんじゃない？」

「ま、正確には従姉ね」

「そうなんですか」

まあ、髪や目の色は同じだから嘘とは思われないかな？

イヴは上品に笑いながら、

「ハルさんの事はよく空狐から聞いてました。いい子だって」

「そ、そんな」

ハルがほんの少し頬を紅くする。

てか、イヴ。なんか猫被ってない？

さらに一言、二言話して、

「ハルさん弟の事よろしくね」

ぎゅつとハルの手を握る。ハルは目をキラキラ輝かせる。

「はい！ 義姉さま！！」

ハル何かキヤラ違う！！　そしてオネエサマの部分ちょっと変じ

やなかった？！

「じゃあ、舞さん行きましょうか」

そう言つて、イヴはキラキラ目を輝かせるハルを置いて公園を出

たのだった。

なんだか、嫌な予感がするなあ。

第二十四話 ジョギング（後書き）

鈴：「みなさんやりました！ ついに『狐火！』二万Hitです！」

刹：「おめでとー」

鈴：「ううう。なんかむっちゃうれしい」

刹：「うんうん。記念になんかしたらどうだ？ キャラの人気投票とか」

鈴：「それは、調子に乗りすぎだよ。でも、やってみたいよな」

刹：「もう少し、物語の半分ぐらいになったらやってみたらどうだ？」

鈴：「そうだな。と、そろそろ時間。ここまでの提供は私、鈴雪と」

刹：「刹那の提供で放送しました」

鈴&刹：「それでは、みなさまよい一日を」

第二十五話 そっいえば……

「何かハルちゃん目が輝いてたね」

舞さんがぼつりと呟く。

「そっね」

イヴが頷く。何でハルのキャラが変わったのか考える。

そしたら、イヴが小さく笑っていた。

どうしたの？

「べっつにい」

はぐらかされた。

と、そこで後ろから気配を感じる。

「よっ、空狐、舞」

「あっ、刹那くん」

刹那くんに声をかけられた。って、あれ？ 今僕の名前呼んだ？

「イヴも久しぶり。この前声かけなくてごめん」

「いいわよ。でも何時ぶりだったけ？」

え？ 知り合い？

そっいえば、兄さんと知り合いだって言ってたし、もしかしたら

前から知ってたのかな？

「あれ？ 二人とも知り合いなんだ」

舞さんがちよつと驚いたかのように聞く。

刹那くんは「まあね」と答える。それからまたこっちを見た。

「どう？ 調子は？」

「ぼちぼち、残存魔力素跡から調べてやっぱり六十パーセントの確率でここに流れ着いているとは思っただけど、なかなか見つからないんだよ」

なんの話だろうか、僕にはさっぱり見えてこない。融合状態とはいえ記憶の共有はないのだ。

二人はいつの間にか真剣に話している。舞さんも口出ししない。

「いざという時の用意はしてるけど……」

「もしもの時には言ってるね。空狐に手伝わせるから僕ですかよ。」

こくりと刹那くんも頷いてにっと笑う。

「もち。そのつもりだったから許可貰えてよかったよ」

勝手に話進めるな！ なんの話だよ！

しかし、二人は説明してくれず、お互いに背を向ける。

「じゃあ、またね」

「おう。舞さんもまた明日」

「う、うん」

結局、何の話をしてるのか分からずに僕らは別れた。

家について

「ねえ、何の話をしてたの？」

舞さんがイヴに聞いた。

イヴは彼女に背中を向けて、

「ごめんね。今は話せないの」

「そう」

残念そうに舞さんが笑う。

「じゃあ、今日のデザートケーキはなしね」

さらりと告げる舞さん。

「ええ！ どうして?!」

イヴが慌てて振り向くが、舞さんはどこ吹く風と言った感じだった。

「だってダイエット中なんでしょ？ ケーキは天敵だよ」

と舞さんは笑って「空狐くとわーけよ」と嬉しそうにくるりと回った。

うつうつと、とイヴは恨めしそうに彼女を見て、諦めたかのように息を吐く。

「わかったわ」

残念でした。

それから庭で分離する。元に戻るとイヴが僕の頭の上に乗った。やっと戻れたよ。こきこきと肩を鳴らす。

「ところでね。気になってたんだけど」

「なに？」

舞さんがじつとこつちを見てから、

「空狐くんの体を借りてたけど、イヴちゃんの体の負担になるのかな？」

「言われてみれば……でも、霊的な繋がりもあるし。」

うーん。

隣のイヴも腕を組んで考える。てか、

「そもそも霊的な存在のイヴが痩せたりすんの？」

「つい根本的な疑問を口にしてみる。」

イヴははつとした顔になって、

「そもそも、この体だってイメージで作ってるんだからちょっと痩せたイメージにすれば」

「おーい。僕が体貸す意味なかったんじゃない？」

そして、一度刀に戻ったイヴが出てきて、例の服に袖を通す。

「やった！ 通った！」

嬉しそうにイヴが小躍りする。

舞さんも嬉しそうにイヴを見ている。

なんつうか、体貸した意味がないんだけど……今のイヴを見ると、まあいいかと言う気になれた。

次の日、学校の昼休みにて、

「く、空狐！」

舞さんとお弁当を食べていたらハルが来た。

「ん？ なにハル？」

「こ、これ！」

そう言っ て差し出してきたのは……弁当箱？

ハルは顔を真っ赤にして、

「た、試しに作っ てみたから食べて！」

「う、うん」

なんか妙な迫力。

それから舞さんを見る。

「ま、負けないから」

なんか宣言して帰っ ちゃった。

「なんだったのかな？」

「さあ？」

どうも、昨日の嫌な予感がしばらくの間続きそっ な予感がした。

第二十五話 そういえば……（後書き）

鈴：「はい、今回は空狐お疲れ様」

刹：「まあ、聖霊が太るわけないからな」

鈴：「イヴはよく空狐たちとごはん一緒だったから太ったって錯覚しちゃったんだよ」

刹：「にしても、女装だけでなく、本当に女にするとはな」

鈴：「お前だつてノリノリだっただろ？」

刹：「まね」

鈴：「まあ、合体状態はこれからたまに出るので」

刹：「空狐大変だな」

鈴：「いいんだよ。これぐらいいいじなの」

刹：「そうだな」

鈴：「と、そろそろ時間だね」

刹：「では、ここまでの放送は刹那と」

鈴：「私、鈴雪の提供でお送りいたしました」

鈴&刹：「それではみなさんよい一日を」

第二十六話 カナツチでした

どうも、だいぶ暑くなってきました。夏服に衣替えしました。空狐です。暑い中、舞さんと教室に入って机に座った後グダーっと身を投げ出す。

「だ、大丈夫？ 空狐くんって暑さに弱かったっけ？」

心配そうに僕を見る舞さん。

「ねえ、舞さん。知ってるよね？ 雪が降ると犬は喜ぶんだよ。つまり、冬が好きなんだよ」

「う、うん」

何を言いたいのかわからない様子。だから、言った。

「つまり、犬科の動物は冬の反対である夏は嫌いなんだよ」

「なんじゃそりゃ」

じつとこつちを観察していた刹那くんがつっこんだ。だけど、そんなの気にする暇はない。

「うう、暑い嫌い」

さらに体を机に投げ出す。ちょっとだけ机が冷えていて気持ちよかった。

冬なら炎術の暖房でちょうどいい温度にできるけど、夏では無理なんだよなあ。冷氣系は苦手だし。

「なら、いい報告があるぜ」

ほづ、いい報告？ 何だろ？

表情が緩んでる刹那くん。それが本当に楽しみのようなようだ。

「来週からプールなんだよ！ 楽しみだなあ！」

……………返事がない。ただの屍のようだ。

ふふふ、いい報告？ どこが？ 僕にとつちやあ死刑宣告ですよそれ。

「く、空狐くんどうしたの？」

さらに気力を失った僕を舞さんが揺する。

力なく僕は口を開く。

「……げない」

「「はい？」」

二人とも何と言ったか聞こえてないみたいだから、はい、もう一度。

「僕は、泳げないの」

しばらく沈黙して、ぎくしゃくと二人が動き出す。

「そ、そうだったね。空狐くん海に行くたびに浮き輪使ってたものね」

「で、でもさ、ヤバイよ。水泳の担任森本だから、仕返ししてくるかも」

あう。剣道の実技で勝っちゃって以来目をつけられてるんだっけ。どうしようか？

「しかたないね」

何かを決意するように舞さんがグッと拳を握る。
なんか嫌な予感。

「次の休みに特訓だよ！」

何か決定してしまった。

と言うわけで土曜日。

「暑いなあ」

「だなあ」

「ま、女子は着替え長いから」

特訓のためプールにやって来た刹那くと龍馬で舞さんたちを待っていた。

龍馬がいるのは、ハルが僕らの特訓を聞きつけて、自分もついてきたからだ。

ちらりと、二人を見る。

刹那くんの体は鍛えているためか余計な肉がついてない。

龍馬も背が高く、体もがっしりしててうらやましい。

「お待たせ」

と、そこで後ろから声。

「あっ、舞さん、朱音さん、ハル。遅かったです……ね」
後半がしだいに尻すぼみになっていく。隣では刹那さんと龍馬もポカーンとしていた。

何というか……ねえ？

朱音さんは黒いビキニで、大人な彼女によく似合っている。しかもスタイルも抜群だから。すごい。

ハルは白いビキニ。白い肌とマッチしていてよく似合っている。

そして、舞さんは競泳用の水着。

ただね、何というか……すごい。

そりゃあ、前から舞さんと朱音さんのスタイルの良さはわかってたよ？ だけどね、いざこう見るとね？

すらつとした手足は健康的で、濡れた髪がなんとも艶めかしい。そして、ほっそりしたわりに抜群のプロポーションが水着のおかげではつきりわかってしまう。

そんな美女と美少女たちにさっきから男女問わず注目しているんですよ。

「空狐くん、どうしたの？ 顔真っ赤だよ？」

舞さんが不思議そうに僕の顔を覗き込んでくる。

そんな時に自己主張する豊かな谷間が目に入って……ぐっ！

「な、何でもないよ！ ちょっと暑いだけだから！ 早く準備運動してプール入って準備運動して準備運動しよっか……！」

「何回準備運動する気だよ」

刹那くんの声も今の僕には届かなかった。

第二十六話 カナツチでした（後書き）

僕は小学校の後半まで泳げませんでした。

みなさんは？

とりあえず、今は空狐が泳げるようになるか暖かく次回まで見守ってください。

第二十七話 泳げた！

「じゃあ、まずはばた足からね」

舞さんに手を引かれればた足をする。それをじつと見る刹那くと朱音さんにハル、龍馬の視線。ふにふにした舞さんの手の感触。ううう、ちよつとだけ恥ずかしい。

「これは、特に問題なしか」

「だな。さっき見たけど手も問題なさそうだし」

刹那くと龍馬がそう評価してくれる。

お？ 意外といい評価いただいてますか僕？

「一度やらせてみようよ」

「確かに、腕と足ができるなら他に問題があるんだろっしな」

ハルと朱音さんの言葉に刹那くんは、うむと頷いた。

と言うわけで早速泳ぐ事になります。

「空狐くんがんばれ〜！」

プールサイドから舞さんの声援。

僕は親指を立ててから、壁を蹴って泳ぎ始める。

沈まずに浮く。手をかき足で水を蹴ると前にぐいぐい進んでいく。

おお、なんだ僕けっこういけるじゃんと自画自賛してみる。

だけど、何故か段々と息が苦しくなっていく……

僕は半分ほどで力尽きて舞さんたちに回収された。

プールサイドに引き上げられる。刹那くんがライフセーバーの資格もってて助かった。

「ぜはー、ぜはー」

ああ、空気がこんなに美味しいなんて……

舞さんは「大丈夫？」と背をさすってくれる。

「なんで沈んだのかなあ？」

刹那くんたちが顔を突き合わせて相談している。

「いや、単にさ」

「呼吸してないからじゃない？」

と龍馬とハルの意見。

あまりにも簡単な回答だった。

と言うわけで呼吸の練習を見てもらってからもう一度。

今度こそ！

ぱつと泳ぎ始める。そして、呼吸を！

「すはー」

口を開けて空気を吸う。

……大量の水と一緒に。

「がぼっ!？」

最初の十メートルで、また沈んでしまった。

「げほげほげほ」

器官に水が入って何度も咳をする。舞さんとハルが背中をさすってくれるおかげでちよつとだけ楽になった。

またも三人が顔を突き合わせて相談している。

「今度は呼吸と一緒に水を吸い込んだか……」

刹那くんが深いため息をつく。

「器用と言うか何というか」

「難儀な子だな」

龍馬と朱音さんも深いため息をついた。

うっ、呆れられてるっぽい……

「仕方ない……」

そう言っつて刹那くんがおもむろに腰を上げる。

「最終手段だ！」

そして、二十分後。

「おお！ 泳げてる、泳げてる！！」

やった！ やりましたよ！ うう、苦節十五年、ついに僕は水を克服したのだ！！

その様子を遠巻きに眺める舞さんたち。

「……嬉しそうだな」

ぼそりと龍馬が呟く。

「まあ、やっと泳げるようになったんだから」

ハルが生暖かい目でこつちを見ていた。

その間も僕はバシヤバシヤと泳ぎ続ける。

「やったね。空狐くん！」

ただ一人、自分の事のように嬉しそうな舞さん。

「いや、犬かきだし……いいのかい？」

朱音さんが視線を刹那くんに向ける。

刹那くんが微妙な笑みで頬をポリポリかく。

「まあ、本人が喜んでるんだし、いいんじゃないか？ それに狐

はイヌ科の生き物だし」

みんな何か言ってるけど、この時の僕にはちゃんと聞こえてなかった。

後日、水泳の授業の内容がバタフライで結局、やり直しだった。

森元ティーチャーはしばらくその事でもらかってきた。

……また剣道の授業になったら思いっきりぶったたいてやる！

にしても、うう、がんばったのに！！

……でも、一歩前進できたからよかったかも。そう思いつつプールで練習する僕であった。

第二十七話 泳げた！（後書き）

すいません。ストックしてた別の話の後半入れちゃいました。修正
しときます。

そして、空狐ごくろーさまでした！

にしても、初めて泳げたときすごく嬉しかった事を覚えてます。
皆さんはどうですか？

第二十八話 捨て子？

困ったなあ。

「えーっと」

ピンチです。今までの人生の中でこれほどのピンチは数えるほどしかありません。

ああ、どんなピンチかこれじゃあ、みなさんわかりませんか。では、これを聞いてください。

「あぎゃあ」

わかりましたか？ わかりませんか？

つまり、その……僕は赤ちゃんを見つけてしまいました……愛くるしい顔がこっちを見ている。

うーみゆ。赤ちゃんが公園にいるのはいいとして、なぜダンボールの中？ しかも、猫と一緒にだ。つまり、捨て子？

考え出したらキリがない。仕方ないから拾い上げる。

思ったより軽くちよつと驚く。

そして、そのまま帰路についた。

そして、家の前。

「ただいま」

家の中に入る。抱えた赤ちゃんは眠っているらしく静かだ。

「おかえりなさい。いつもより散歩早いね。どうしたの？」

舞さんがひよこつと部屋から顔を出して……固まった。

あー、痛い沈黙が流れる。

「あのね、これは」

「不潔よおお！」

お決まりのセリフだった。僕の反論すら許さない。

「わたしにこっそり子供なんて作って」

「ちよつと、それ誤解」

「相手は誰!」

「落ち着け馬鹿姉!」

「はあはあ、と舞さんが荒い息を整える。

そして、

「そうだね。わたしと再会する前のことだもんね。しかたないね」

「ちっがー!」

思わず大声で否定。

「僕じゃない! 僕の子じゃないよ! 大体この街にまた来たのだから、半年前で、その前は、三年も山のなかで暮らしてたんだよ。だいたい、僕の子なら尻尾と耳があるよ!」

ポンツと舞さんが手を打つ。

「そういえば、そうだね」

ふう。やっとわかってくれた。

それから、舞さんが首を傾げる。

「じゃあ、この子は?」

「散歩してる時に拾ったんだよ……」

「まあ、かわいそう」

よしよしと舞さんが赤ちゃんをなでてあげる。

今に二人で相談を始める。

「どうするのこの子?」

今は、舞さんが抱っこしている。

「どうするって、やっぱり警察に届けででしょ?」

「そうだね。と舞さんが頷く。

「でも、酷い親もいるんだね。こんなかわいい子を捨てるなんて!」
ぶんぶんという形容詞がつきそうなご立腹加減だ。

と、そこで、

「おぎゃあ」

あ、起きた。

「あー、よしよし」

「わあ、かわいいね」

舞さんが嬉しそうに赤ちゃんを見つめる。

すぐにお皿が空になると、おなかがいっぱいになったのか安心してように赤ちゃんはすやすやと眠る。

「よく食べるね。この子きつと大きくなるよ」

感心したように舞さんが微笑む。

「やとと」

落ちて着いたようだからな。

「今のうちに警察に連れてこ？」

「うん……」

彼女は名残惜しそうに頷くと立ち上がった。

第二十八話 捨て子？（後書き）

はい、投稿日を火曜から水曜に変えさせていただきました、以後よろしくお願いします。

火曜は大学が五時間あってなかなか作業がしづらいけど、水曜なら午前中は授業ないんで。

第二十九話 親発見！

警察署までの道のりは、なんか……痛かった。

こつちを見てこそこそおしゃべりしているおばさんとか、好奇心な視線を向ける学生とか。

なんか僕たちの事話してないか？ と被害妄想を浮かべてしまう。「わたしたちどう見られてるのかな？」

舞さんが僕の方を向く。

なんとなく嬉しそう。腕の中の赤ちゃんも嬉しそうに笑っている。僕は顎に指を一本当てて、

「迷子を連れた従姉弟」

と答えた。まんまじやんと、舞さんが笑う。

そうこうしている内に警察署に着く。

なんだかじつと見られているような……

恥ずかしくなりながらも建物の中に入る。中では一人の女の人が、なにやら深刻そうに係りの人と話してた。

僕らはその隣の窓口に。

「すみません、迷子がいたのですけど」

「あぎや」

ちようどよく赤ちゃんが鳴いた。

くるつと女の人が振り向く。するとばあつとその人の表情が明るくなった。

「ああ！ 幸子……！」

えっ？

女の人はこちらに駆け寄ってきた。

「どこにいたんですかこの子？ うちの娘ですつと捜していたんです……！」

どうやら、捨て子ではなかったようだ。

でも、だつたらなんでダンボールの中に？
ちよつと首を捻る。

「さつき、散歩してたらダンボールの中にいたんですが」
と言つたら合点がいったように赤ちゃんのお母さんがぼんつと手を合わす。

「まあ、また？」

…また？

「どうということですか？」

舞さんが聞く。

お母さんは恥ずかしそうに頬に手を当てて、

「この子、なんでかダンボールがお気に入りなんです。前、家でもダンボールの中に隠れたりして、慌ててしまったこともあるんですよ」

ああ、なるほど。猫と一緒にいたのは、捨て猫のダンボールに興味を持って、中に入っちゃったからか！

って変な事に納得すんな僕！

「ありがとうございます。ご迷惑おかけして」

ぺこぺこ赤ちゃんのお母さんが頭を下げて来た。

「いえ、この子かわいいですから、また逢いたい位です」

舞さんが笑う。

赤ちゃんのお母さんもふんわりと笑う。

「ふふ、ありがとう。ところで、お二人とも仲がよさそうですね。」

恋人ですか？

こ、恋人お！？ あまりの不意打ちに僕の顔が赤くなる。

「ちがいますよ」

「そ、そうですね！ぼ、僕ら従姉弟です！」

僕は顔を真っ赤にして、舞さんは涼しい顔で否定する。

なんか、がくつとくる。

「あら、そうなの？」

ああ、恥ずかしいし、悲しい……

「それでは、ご迷惑おかけしました」

頭を下げてから幸子ちゃんのお母さんは、警察署を出る。

「いいお母さんみたいだね」

「そうだね」

「ふぎゃあ」

幸子ちゃんも同意するかのように鳴いて……はい？

よく見れば、いやよく見なくても、幸子ちゃんはまだ舞さんが抱っこしていた。

二人とも顔を合わせて……話している間に渡すのを三人とも忘れてた。

「ちよ、ちよっと待って!!」

「お母さん、幸子ちゃん忘れてますよ!」

慌てて走り出す僕ら。うっかりしすぎですよ!!

そんなこんなでお母さんに追いつく。

「あら、私ったら」

恥ずかしそうに頬を押さえるお母さん。

僕らはぜひぜひ肩で息をする。

「あの……」

舞さんが幸子ちゃんを差し出す。

今度こそちゃんと幸子ちゃんを渡した。

「ありがとうございます。そうだ、よかったらうちに来ませんか？

お礼をしたいんです」

僕らはちよっと考えて、

「「お供させていただきます」」

正直、この人を一人にするのはすごく怖かったりする。

お母さんはにこっと笑って、

「ああ、そうでした自己紹介まだでしたね」

それから一礼。

「私は上月 涼子といいます。よろしくお願いします」

第三十話 贈り物

そして、涼子さんの家に着く。彼女は鍵を開けようとして、

「あら？」

扉の前で止まった。

そして、いきなりがちゃっと開ける。

「あらら、鍵かけ忘れちゃった」

大丈夫ですかー！！

すごく不安になってきた。よく見れば、庭もちゃんと手入れが出来ておらず、草が伸び放題になっている。

泥棒とか入らないのかなあ？

怖くなりながらも涼子さんの家に入った。そして、居間に入る
うとして、

「動くな」

涼子さんに覆面の男がナイフを突き出した。

本当にいたー！！

予想、裏切らねえよこの人。

それにしても……泥棒ぼろぼろだなあ。

「あの、なんでぼろぼろなんですか？」

思わず聞いてしまう。

泥棒はこつちを見て、

「庭に入ったらよ、草に隠れてて気づかなかったけどレンガがあつて、それにつまずいてこけたんだよ」

うわ。

「しかもよ、切れ易い草ばかりで服から出てる場所は切られるし、とどめに鳩の糞は落ちてくるし、鍵を開けようと思つてがんばつてたら実は開いててかけちゃったとか」

なんか泣いてる。

とりあえず、ご愁傷様。そして、

「運がなかったですね」

僕は涼子さんを後ろから引つ張り、後ろに送る。

僕はそのまま踏み込み、まずはナイフを叩き落す。そして、腰を落として驚くどろぼうの鳩尾を右の拳で打つ。

鈍い音と、空気が漏れるようなうめき声とともに男は気絶した。

その後、警察にその男を突き出した。

「いいですか？ 次からはちゃんと鍵をかけるように気をつけてくださいね」

「はい」。気をつけます」

涼子さんが警察官に注意された。子供かいな。

そして、警察が去って、やっと居間の椅子に座る。幸子ちゃんはベッドで寝ている。

「ごめんなさいね。ばたばたしていて」

涼子さんは申し訳なさそうに笑うと、お茶を目の前に置いた。恐る恐る呑んでみるけど、なんともなく普通においしくて安心した。

「改めて今日はありがとうございました」

ペこりと向かいの席に座った涼子さんが頭を下げてきた。

「あ、いえ」

「ただ、公園にいた迷子を連れてきただけです。次は気をつけてくださいね」

また、僕らのような人間が拾うとは限らないし。

涼子さんは苦笑いして、

「はい。わかってます」

と、答えてくれた。

少しの間、三人ともしゃべりながらお茶を飲む。

「あ、そうでした」

思い出したかのように涼子さんが立ち上がる。

そして、がさがさとそばにあった籠を調べる。

「ありました。どうぞ」

そう言って涼子さんが出したのは、

「旅館の宿泊券？」

そう、それは旅館の宿泊券であった。

「懸賞で当たったんですけど、夫が仕事で行けないので、お二人が使ってください」

涼子さんはここにこ笑ってそうおっしゃってくれましたよ。

僕らはじつとその券を見て、顔を上げる。

「ほ、本当にいいんですか？」

僕は思わず聞いてしまう。

涼子さんはにこつと笑って、「ええ、どうぞ」と言ってくれた。

「ありがとうございます。涼子さん」

舞さんも嬉しそうに笑ってお礼を言った。

そして、帰り道。涼子さんと幸子ちゃんに見送られて家に帰る。

すでに空は暗くなっていた。

にしても、冷静によく考えると、旅館に男女で泊りがけ……なかなか緊張します。

「空狐くん」

つんつんと肩を突っつかれる。

「な、なに？」

僕は慌てて舞さんのほうを見る。

舞さんは嬉しそうに笑って、

「よかったね、できればもう一日あったらよかったけど」

僕は一泊二日の方が安心できますからよかったです。ピンクの妄想に頭が犯されそうだから。

と、そこで前にいる人物に気づいた。

黒い服にピンクの髪。あれって？

「朱音さん？」

舞さんの声に反応して朱音さんが振り返った。

「やあ、空狐、舞。こんばんわ」

朱音さんがにこつと笑う。その手には買い物籠を持っていた。買い物帰りかな？

「あれ？ それは」

舞さんの手の中にあつた券を見る。

「あ、これはさつき知り合つた人からお礼にいただいたんです。次の土曜から二日間行こうと思つてます」

ふくと朱音さんは僕らを見て、

「ごめん用事思い出した。またね」

「はい、また」

そう言つて僕らは別れた。

さて、今日から三日後。楽しみだな。

次の日、

「ね、ねえ空狐、舞」

学校に行く途中いつもの場所で息を切らせてハルが走ってきた。なんだなんだ？ ただ事じゃない雰囲気だぞ？

「あ、あのさ、昨日つれていたので二人の」

ああ、はい、そんな誤解できるんですか……

僕は息を吸つて、

「ちっがーうー!!」

と、大声で主張した。

この後も同じ質問が何度もあつてなかなか疲れる一日だった。

第三十一話 将来？

僕が居間で新聞を読んでいたらがしゃんと言う音がした。

「まさか……」

僕が新聞を畳んで立ち上がると同時に誰かが駆けてくる音。

襖が開けられると、銀色の髪と紅い目と狐耳の女の子が入ってきた。

「パパー、りよーまがおさらわっちゃった」

この子名前はイヴ。僕の娘。

「うん。わかったよ」

台所に行く。

すると割れたお皿と散らばったクッキーの前で右往左往している

龍馬がいた。

龍馬は尻尾が着いている子で、イヴとは双子の弟。

「あううう、とーさん」

すぐにこっちに走り寄ってくる龍馬。

僕は手を伸ばして……ほっぺを引っ張ってやった。

「ひあいひあいひあい……」

あっという間に涙目になる龍馬。

意外と痛いんだよねえ。これは。

「なぐにをしたのかな？ 君は？」

僕はひょんひょんほっぺを引っ張る。

実は柔らかくてついつい楽しんでるのは秘密だ。回してみたりいろいろやってみる。

しばらくして解放してあげると涙目でほっぺを押さえる龍馬。

「イヴがクッキーをとってっていったからとろろとしたらおとしちやっただの」

ほっほう。

チラリとイヴを見ると視線をそらした。何となく本家イヴを思い

出す。

僕はイヴ近づいて、手を上げる。ピクッとイヴが身を縮める。

「次から僕に言いなよ。怪我したらお父さんもお母さんもお心配するんだからね」

そう言っつてポンポンと頭を叩く。後ろで龍馬が『ずるーい！』と叫んでいるけど、まあいいか。相手は女の子だし。

僕は二人に危ないから部屋の外に出るように言っつてから割れたお皿を片付ける。

と、そこで玄関のドアが開く音がした。

「ただいまー」

聞きなれた彼女のキレイな声が家の中に響く。

途端に沈んでたイヴと龍馬の表情が明るくなった。

「おかあさんだ！」

「ママ」

二人がすぐに玄関に向かって走る。

全く、まだまだ甘えん坊なんだな。

僕はちゃんとお皿の処理が終わったか確認してから玄関に向かう。

「おかえり。舞」

そこには、昔よりずっと大人っぽく、ずっとずっとキレイになった舞がイヴと龍馬、そして、舞さんに似た顔立ちの小さな女の子、

末っ子のハルの三人の子に囲まれていた。

舞はこっちを見てとびつきりの笑顔で

「ただいま、空狐あなたくん」

目を開けると見慣れた天井があった。

……えーっと。頭の回転が追いつかない。

ゆっくりと現状を確認する。

まずここは倉田家の一角にある僕の部屋で、今の僕はベッドに寝っころがっている。

つまり、今僕は起きたばかりって事で、今のは……

「夢え？」

みよ、妙にリアルな夢だったな。

起き上がって頭を振る。

やっぱりあれかな？ 昨日の幸子ちゃん事件のせいかな？ まあ、

子供ってかわいいなあとは思ってたけど、ここまで飛躍した夢をみるとは。

うつつ、今思い返せばなかなか恥ずかしい夢だったよ……

僕は頭を抱える。

はあ、こんなんでも今度の温泉旅行を乗り切れるかなあ？

部屋から出ると、いつも通り舞さんが洗濯物を抱えて歩いてた。

「あつ、空狐くんおはよう」

僕に気づいた舞さんが明るい笑顔でこっちに顔を向けた。

途端になんだか恥ずかしくなって顔が赤くなったのがわかった。

「お、おはよう。舞」

ちよつと声の上擦っちゃったかなあ？

……じゃなくて!!

ああ、舞さんがキョトンとした顔でこっち見てる。

「あれ？ 空狐くん。今……」

「な、何でもないよ!? おはよう。舞さん！」

慌てて誤魔化す。

舞さんは納得のいかなさそうに顔を怪訝そうにするけどすぐにい

つもの顔に戻った。

「うん。おはよう。空狐くん」

そう言っつて、舞さんはいつもの仕事に戻った。

その後、雑念を振り払うためにいつもより朝練に気合いが入っていた事は秘密である。

第三十一話 将来？（後書き）

空：「うう、人の夢を公表するなんて……」

舞：「あ、あのね、空狐くん、こ、子供が欲しいなら……」

空：「いえ！ まだいいです！ まだいいですから！……」

舞：「う、うん」

はい、空狐の妄想大爆発な夢でした。

けっこうありそうなネタですけど、にまにまして見ていただけたら幸いです。

第三十二話 温泉へGO！

そして、金曜日を迎えた。

「しゅっぱーっ！！」

「ぱーっ！！」

元気よくイヴが腕を振り上げる。それに舞さんも合わせて振り上げる。

どうでもいいけど、リュックを背負ってる状態でよく飛べるなあ。僕はため息をつきながらリュックを背負い直す。

そして、家を出て、

「よお、遅かったな」

リュックを背負った刹那くんが立っていた。

「……はい？」

あははーと刹那くんは笑いながらこっちに来る。

「まさか、俺たちが行くこうとしてた旅館と同じ場所におまいらもいくなんてなあ」

ええつと、まさか、

「君らも同じ旅館に行くの？」

刹那くんが胸を張って、

「おう」

そういえば、券を見せた時、朱音さん微妙な顔してたなあ。

しかし、当の朱音さんは顔を出さない。

「朱音さんは？」

「車出してるよ」

舞さんの質問に刹那くんが答えるのとほぼ同時に、家の前に車が止まった。

ピカピカに磨かれた車体の紅が眩しい。

「やあ、舞、空狐」

窓を開けて朱音さんが顔を出す。

今日はいつもの黒いメイドさん風の服ではなくシンプルなカットソーにミニスカート。

「同じ場所だからさ、乗っていきなよ」

僕らはお言葉に甘える事にした。

そんなこんなで刹那くんたちの車に乗せてもらう。

朱音さんの運転は上手くて、いい乗り心地だった。母さんの乱暴な運転とは天と地ほどの差がある。

「今日はイヴちゃん浴衣なんだ。いいね。かわいいね」

そういえばイヴが着てきたのは浴衣だった。

大きなヒマワリが描かれているかわいらしいデザインだ。

「やっぱり旅館なら浴衣でしょ！」

と舞さんの肩の上で胸を逸らすイヴ。

まあ、確かにね。

「ちよつと音楽かけよっか」

そう言って、朱音さんがラジオのスイッチを入れる。

流れてきたのはクラシッくな音楽だ。

イヴがそれによって歌い出す。

舞さんがリズムにのる。朱音さんがハンドルを叩いてリズムを取

り、刹那くんがラジオの音量をちよつとよく調整する。和やかな雰

囲気が車内を包み込んだ。

僕は窓の外の空を見る。

なかなか楽しい二日間になりそうだ。

一時間ほど車に揺られて旅館につく。

「おお、なかなか風情があるなあ」

刹那くんの言うとおり風情の感じる旅館だった。

ちよつと小高い丘の上であり、林に囲まれた静かな感じの旅館だ。

「すいませーん。常盤市から来たものですが」

刹那くんが言うつとすぐに女将さんが来て、部屋まで案内される。

僕らの部屋と刹那くんの部屋は隣同士だ。

「じゃあ、荷物置いたらすぐに温泉な」

そう言っつて刹那くんたちは部屋に入る。

舞さんたちも楽しみにしてたっけ温泉。

そんな事を考えながら僕らも部屋に入る。

「おお」

部屋は畳のしかれた和室でなかなか広い。

ああ、畳のいい匂い。

荷物を置いてゴロゴロする。

「いい場所だねえ。風も気持ちいい」

舞さんが窓を開けると、彼女の長い髪がはためいた。

「ですねえ」

僕らがまったりしていると、

「二人とも、温泉行くよー」

朱音さんに呼ばれた。早いなあ。

「「はーい」」

脱衣場前で男女に別れる。

そして、服を脱いでタオルを持って温泉に足を踏み入れる。

「わー、ひろー」

思わずそう呟いてしまった。

普通に広い温泉だけど露天風呂という事が余計に解放感を与えてくれる。

と、先客がいるな。

「こんにちは。いい所ですね」

「そうですね」

……はい？

今の声、聞き覚えあるよっな？

相手が振り向く。

「「「あっ!?!」」」

その相手は、

「龍馬!？」

「空狐!？」

意外な相手だった。

第三十三話 温泉ならこれ！

「びつくりだな。みんな同じ旅館だなんて。まあ、俺らは刹那に誘われたからきたんだけどさ」

龍馬がのんびりと言う。

確かにいつものメンバーが揃うなんて……刹那くんなに考えてんのさ。しかも二人は先に電車で送るなんて工作しておいて。

龍馬が言うには、ハルも来ているらしい。なんだかなー。

僕は何となく女湯の方を見て、

「そして君は何やってるんだ!？」

女湯と男湯を阻む壁に耳を当てている刹那くんにつっこむ。

彼は指を一本立ててシーっとなんと、ちょいちょいところこちに招き寄せる。

僕と龍馬はそれに従って静かに刹那くんのそばに行くと、

「温泉と言えばのぞきだろ？」

ぐっとな親指をたてる刹那くん。

王道パターン!？」

「ダメだよ！ それはん、」

ガシツと口を塞がれる。

「ほれ、静かにあつちに声が聞こえるぞ」

そう言っつて刹那くんは耳を壁に当てる。

全く何が楽しいやら。まあいい。僕も何が楽しいか確かめさせて

もらおうか！

龍馬も耳を当てる。

『朱音さんって肌綺麗ですねえ』

あつ、ハルの声だ。

本当に来てるんだ。

『そうだねえ、それにスタイルもよくて羨ましいなあ』
舞さんの声が聞こえてくる。

うーむ、あなたがそれを言うのはどうかと？

『そうかな？ 私は舞の方がスタイルいいと思うけどな』
今度は朱音さんだ。

その言葉にうんうんと刹那くんが頷く。チクるぞ。

と言うか、なんか恥ずかしい。この壁の向こうに一糸纏わぬ彼女たちがいるとは……やばい。想像してしまつて、鼻血出そう。

なんせ三人ともタイプの違う美女と美少女なのだ。想像するなというほうが無理。

『だよねえ。舞がスタイルよくないって事になったら世界中の女性の七割がスタイルよくないって事になつちゃうよ』

『そ、そうかな？』

どうも、前から思つてたが、舞さんは自分が美人という自覚が少し欠如しているみたいだ。

学園トップの美少女の評価を受けているのに何故欠如しているのかよくわからない。

以前、買い物途中にスカウトを名乗る人に声をかけられた時だつて、何で？ っていう顔してたし。

スカウトの電話も来たことあるし、適当に置かれてた名刺は僕も聞いたことのあるアイドル事務所の名前だったこともある。

つまり、それほどの美少女なのであるが、それでも自分が美人なことを理解していないみたいだ。本当に何で？

まあ、謎は謎のままにしておこう。

『そうだよ。ほら！』

『きゃふうー！』

ハルのかけ声と共に舞さんの裏返つた声。

な、なんだ？！

『やつ、ダメだよお。ハルちゃん止めて……』

『うりうり』

『きゃん！……』

ま、ま、まさかー？！

『舞の胸、すごく大きいねえ。それに柔らかくて、むみゅ、羨まし
い。ねえ、何カップ？』

やっぱりー！！

ほ、本当に鼻血出ちゃうかも。

『ちよ、ちよつとハルちゃあん』

『うりうりー！！』

『きゃふんー！！』

ああああああ！！ いい、一体どんな事をしてんのおおおお！？
鼻を押さえながら耳をさらに引っ付ける。

『うつつ、言ったら、止めてくれる？』

息も絶え絶えな舞さんの声だ。

『うん』

ハルの楽しそうな声。

男たちはさらに耳を引っ付ける。何やってんだというツッコミは
なしの方向で。

これは、もう男の本能なんですによ。ええ！（断言するように）

『い、いー……』

その瞬間、壁が倒れた。

『……はい？』『……』

どうも、壁は老朽化してたらしく、力をかけられた瞬間に耐久力
が0になったみたいだにや。

バツタン！ と僕は壁ごと女湯側に倒れ込む。

息を呑む気配。そして、その先に一糸纏わぬ彼女たちが……あり
や？

『ゆ、湯浴み？！』

『そ、そんな……』

龍馬と刹那くんがガクツと力を失う。

そう、彼女たちは湯浴みを着て風呂に入ってたのだ！ ま、まさ
か予想されていた！？

『くっ！ 殺られる前に生を拝みたかった！！』

と、刹那くん。正直だね。

そこで、ゆらりと朱音さんが立ち上がる。

「予想通りと言えば、予想通りだけど、まさかこんな大胆な作戦に出るとはね」

いやあ、こうなったのはこの壁がたまたま老朽化してたからですよ。

だけど、んなこと主張したって許されるはずない。

いつの間にか、朱音さんの左手にはあの大鎌が握られている。

口寄せで呼び出したのかな？

さらに、服装にも変化が。

いつもの黒いメイド風の服ではなくて白い服。ロングのスカートとブーツと首にチョーカー。さらに背中から、少しメカニカルな翼が二組生えている。翼以外はな　はさんのエクシードモードに似てるなあとなんとなく思った。

「げっ、リミットオーバー形態」

刹那くんの顔がさっと青くなる。

や、やばいの？

まあ、尋常じゃない魔力がああ姿から感じるけど。

「り、龍馬まで」

ひくひくとハルの顔が引きつる。

あははーっと龍馬はそっぽを向いた。

「く、空狐くん……見たいなら言ってくれれば」

舞さんが顔を紅くしてそんなことをたまう。

いえ！　できませんよ。そんなこと！　見れたら嬉しいけど！！

「覚悟はできたかな？」

朱音さんが一歩、僕らに近づく。その前にはあの球状の魔力光。

しかも、なんか前より大きい！？

すつと僕らは引く。

そして、刹那くんが刀を口寄せする。

よし、僕も……あれ？　できない？

「わたしが拒否してるからねえ」

舞さんの頭の上にいるイヴが笑顔で言った。しかし、その眼は軽蔑の色。

いや、そんな眼で見ないでよ。

「じゃあ、サヨナラ」

朱音さんの前にでかい魔力球が強い光を放っていた。

早い、早いよ朱音さん！！

「一撃入魂、スターダスト」

ゆつくりと時間が流れる。

鎌が振り上げられ、刹那くんが防壁を展開する。僕も刀がないからブーストはできないけど術を発動させる。

そして、鎌が振り下ろされ……

「インパクト！」

魔力光が炸裂した。

第三十四話 すいませんでした……

「はっ！」

目を覚ますと旅館の部屋。

側では舞さんがハンカチを濡らしていた。

「あっ、起きたんだ。よかったあ」

舞さんがにつこりと笑いかけてくる。

今はその顔を真つ直ぐに見えない。

「そうね。あんな事した後だものねえ」

テーブルの上に座っていたイヴがげしつと僕の額に蹴りを入れる。
痛ひ。

「龍馬たちは？」

僕は頭を振りながら聞いた。

舞さんはうーんと頬に指を当てて、

「りよーまくんはハルちゃんの部屋で寝てるはずだよ。刹那くんは
後片付けだつて」

後片付け？ ずいぶん大変な事を……

「『戻れ』」

言霊に術式を載せて理に介入。元の姿まで指定領域内の時間を巻き戻す。

あつという間にスターダストインパクトで吹き飛ばされた温泉は元の姿に戻った。

「終わったつと」

グリグリ肩を回す。

けっこつ疲れんだよこれ。

「お疲れ様。部屋に戻ろうか」

朱音の言葉に頷いて部屋に戻った。

うーん。気まずい。

起きてから一言も話さない。話そうとすれば、お互いに「あの」
「ってなって話しづらい。」

『仕方ないわねえ。私に任せなさい』

と、イヴがニヤニヤ笑いながら精神会話をしてきた。

お願いします、と僕は心の中で頭を下げる。

コホンとイヴが咳払いをして

『さつきはごめんね。舞さん』

「さつきはごめんね。舞さん」

イヴが言ったことをそのまま続ける。

舞さんはブンブン顔を振る。

「べ、別に平気だよ。き、気にしてないから」

いや、さつきから空気が重いし、悪いことしたんだから謝らない
と。

そして、イヴがさかさず続きを、

『にしても、舞さんってEカップだったんですねえ。やっぱり大き
いんですね』

「にしても、舞さんってEカップだったんですねえ。やっぱり大き
い……っておい……！」

見れば、イヴがにやにや笑っていやがりました。

見れば、舞さんが顔を真っ赤にしている。やりやがりましたな……

「や、やっぱり変？ 自分でも大きすぎる気がしてたんだけど……」

「いやいや、別に変だとは！」

「いーうーうー……！ と怒りの思念を送るけど、当のイヴは
どこ吹く風といった風にそっぽを向いていた。」

舞さんはあうあうと腕を振って主張する。

「十歳までは普通だったんだよ！ だけどね十一歳頃から大きくな
りだしちゃって……わたしはもう少し小さい方がよかったのに。肩
こりヒドいんだよ……！」

あつ、それは知ってる。イヴもけっこう大きくて合体の後、肩が痛いんだよなあ。

って何理解してんじゃああああ!!
軽い自己嫌悪に陥る。

「あ、あのね、く、空狐くんはやっぱり小さい方が好みなのかな？
大きいと嫌い？」

何言いやがりますか、この人はー!!

「い、いえ。むしろ舞さんぐらいの大きさが好み……って何言ってるんだ僕!？」

えっ、と舞さんがキョトンとした顔になる。

あつ、何ちゆう事言ってしまったんだ僕は。

「そ、そうなの？ よかったあ」

ほっとため息をつく舞さん。何で安心してるの？

「鈍感」

イヴが耳元で囁く。う、うるさいな。

さらに空気が重くなった。

「じゃ、じゃあ、僕、刹那くんたちの部屋行ってくるから!」

居たたまれなくなって部屋から逃げ出す。

そんな僕を見てイヴがぼそりと言。

「弱虫」

今度タワシで磨いちゃう!!

刹那くんたちの部屋は鍵がかかってなかった。

「どうも、刹那くんいる？」

僕は部屋に入る。

と、そこで、

「んっ、あふっ」

艶めかしい声が聞こえましたー!!

えええええ!?! ま、まさか……

「んっ? ここか?」

「そう、そこ」

「オーケー」

「あああ、そこ、いい……はああ」

朱音さんの悩ましい声……

やっぱりそうなんですかー!?

「し、失礼しましたー!!」

僕は慌てて部屋を飛び出したのだった。

あれ？

「今、気配感じなかったか？」

「そう？」

うーん、まあいいか。

俺は気を取り直して朱音の方を向く。

「じゃあ、続きお願い」

「うん」

朱音の肩を揉んでやる。

なかなかこっぺているなあ。仕事任せっぱなしだから仕方ないかも

しれないが。

にしても……

「ああん」

「いちいち悩ましい声出すな」

とりあえず、一発スリッパではたいてやった。

第三十五話 ギャンブルは計画的に

仕方なくちよい離れた龍馬たちの部屋に訪れる。

「やっほう。龍馬、ハル」

ノックもせずには部屋に入る。と……

龍馬が土下座してましたー！！

部屋はとてつもなく重い空気。な、なんだこれ？

僕だってそれなりに修羅場はくぐっている。だけど、この空気はそれでも戦慄が走るほどだ。

「やあ、空狐何しにきたの？」

部屋に入ってきた僕をハルが底冷えする目で睨んできた。

あまりの威圧感に一瞬で土下座の体勢に。なんとなく、龍馬が土下座してる理由がわかった。

うつつ、これなら舞さんと部屋で二人っきりの方がまだ気が軽いよ。

よ、よし！こ、こうなったら！

「ねえ！ハル、ポーカーしようよ！」

きらんとハルの目が光って、にやりと笑う。

「上限は？」

「千円」

「よろしい」

よかった……彼女が根っこからのギャンブル好きじゃなければ使えない手だったよ。

楽しそうにカードを切り始めるハル。僕の横では何でか頭を抱える龍馬。

この後、僕ら三人でポーカーを始めるのだが、もし、この時僕に未来予知の能力があったならすぐにでも逃げ出していただろう。

ところ変わって空狐と舞の部屋。

イヴと舞はなんとなく二人で外の景色を眺めていた。

「空狐って意気地なしね」

最初に口を開けたのはイヴだった。

舞は苦笑いする。

「そうだね」

そう言うってから二人ともまた窓の外の風景を眺める。

「がんばってね」

「うん」

あとは静かな時間が二人の間を流れていくのだった。

龍馬とハルの部屋にて、十分後。

「……………」

僕は燃え尽きて外の景色を眺めていた。

現在僕は二万も負けてしまっている。なんやねんこれ。

強いどころの話ではない。これはすでに強さを超越している。

龍馬がずっと下りていた理由がなんとなく理解できた。

「あのさ、空狐」

ハルが僕の肩を突つつく、

「君、ポーカー向いてないよ。すぐに顔に出るもん」

すいませんに顔によく出るタイプで。

あと、とさらに付け足される。

「君さ必ずカード同じのそろったらそろえるよね。ばればれだよ」

……………まじ!?

ためしにもうワンプレイ……………本当だ。無意識にやってた!

はあ、だからあんなに『ツーパー』とか『ストレート』って言い当てられちゃったのか。

恐るべし、ハルの観察力。

そして、また敗北。ふふふ、でも次からはその手ではわからなくなりますよ。

「他にもいっぱいあるよ? いい手なら前のめりになるし、悪い手

「なら心待ち少し引くし」

……二度とハルとポーカーするもんか！！

僕は固く決意するのであった。

と、そこでこんこんとドアがノックされる。

「お食事の準備ができました」

僕はその言葉に助かったと思ったのだ。

第三十五話 ギャンブルは計画的に（後書き）

鈴：「どうも！ 作者です！」

空：「空狐です」

鈴：「次で新キャラ追加です！」

空：「しかも、僕がよ〜っく知ってる相手。何だかなあ」

？：「まあまあ。クーちゃんと久しぶりに会えるんだから」

空：「ちゃんと次回で出てください！」

どうも、鈴雪です。

感想、ご指摘、何でもいいのでお願いします。

第三十六話 キツネママ参上！（兄貴もいるよ）

食事の時間になってそれなりに広い部屋に案内される。たぶん、僕の部屋二つ分の広さを持っているだろう。畳の敷かれた和室で真ん中に長いテーブルがあった。奥には掛け軸もかけられていて、旅館に来たんだなああって気になれる。

朱音さんが六人みんなが友達だから一緒にしてくれるよう頼んだため、みんな同じ部屋だ。

「……おお！」

「……わあ！」

部屋に入る前から匂いで予想していたけど色とりどりのご馳走がテーブルに並んでいた。

刺身に天ぷら、ぐつぐつ煮込んでいる鍋などなど。あ、やっべ、よっだれ〜。

すぐにみんな席について、いただきますと……

「ちよつと待って」

そこで刹那さんに止められる。

ハルと龍馬と僕は少し不満げに刹那くんを睨む。

「刹那〜」

「なんで〜」

「止めるの〜？」

龍馬、ハル、僕の順番で文句を言う。

刹那くんは苦笑いして頬をかく。

「ごめん。もうすぐ俺たちの友達がくるから少し待ってくれ」

ふーん。刹那くんの友達が？

どんな人かな？

と、噂をすればなんとやら、襖が開く。

「こーんばーんは！！ みんな元気だった？」

そう言っって現れたのは……

「か、母さん!?!」

「月狐さん!?!」

「おばさん!?!」

「月狐姉さん!?!」

みんな突然現れた人物にびつくりする。

灰色の腰まで届く長い髪と紅い眼の妖狐。相変わらずひらひらふりふりのレースを多用した服が似合う人で、やっぱり二児の親にとっても見えない。

母さんは僕らを驚かせたのが嬉しいのか、尻尾をくねらせている。僕と同じで尻尾は幻術で隠してるんだろうけど、狐の眼には簡単な幻術なら見抜く能力があるから、まるで隠してないように見えてしまいハラハラしてしまう。

付け足すと月狐姉さんと呼んだのは龍馬だ。

子供の頃、見た目が若いから(今の僕と同じ年にも見える)僕の姉さんだと思ってたらしい。

まさか、母さんが来るなんて……

!?!

直感にしたがって頭を左に振る。と、右耳の横で風を斬る気配がして……

舞さんと頭をぶつけてしまった。

「~~~~!!」

「つた~~~~!!」

僕は後頭部を押さえる。

たぶん舞さんも頭を押さえてるのかな。

「七十点。惜しかったよ」

そう言っただけいきなりの襲撃者が姿を現す。どうやら姿を消す幻術『朔』で隠れてたようだ。

この声、こういうことをする人はあの人だ……

「ひ、久しぶり……兄さん」

「えっ? ぎ、銀さん?」

舞さんが痛そうな声で聞いてくる。

僕は痛む頭を押さえながらも、滲む視界で数年振りに会う兄さんを見る。

僕と母さんの灰色とは違い完全な銀髪と血のように紅い眼。髪は後ろで縛られていて、下に向いてるけどちよっとだけちよんまげに似ている。その手には、鞘に入ったままの刀。たぶんこれで叩こうとしてたんだろう。あぶねーよ！

襲撃が失敗したけど僕にダメージを与えられたのが嬉しいのか兄さんは笑っていた。久しぶりだけど、さっそく殴りたくなる。

「久しぶり。空狐」

と、そこで頭の上に座ってたイヴがトンツと頭を蹴って、兄さんに飛びつく。

「ぎーん！」

「やあ、イヴ」

兄さんは爽やかにイヴに笑いかけて……イヴの眼が光った！
兄さんが思いつきリアゴを殴られる。

悲鳴を上げる暇もなく兄さんは後ろに投げ出された。

地面に大の字で倒れて、

「ワン、ツー、スリー、フォー……」

すぐに刹那くんがカウントを取る。

「ナイン、テン！ イヴの勝ち！！」

カンカンカンとゴングが高らかに響いた！（気がした！）

刹那くんは勝者であるイヴの腕を掴んで高く掲げる。

「って、何でいきなり殴るんだよ！？」

すぐに兄さんが復活した。

「ちっ、しぶとい」

「イヴ！ 空狐まで?!」

兄さんが嘆くけど、ハッキリ言っただけいきなり襲撃してきた相手を心配する気はさらさらなかった。

「あのねえ銀？」

妖しい微笑みをたたえながらイヴが兄さんの頬に触れる。

う、一瞬くらって来た。

「私はねさつきまで空狐の頭の上に座っていたんだよ？」

つまりね……とイヴが言葉を区切る。

そして、思いつき息を吸って、

「当たってたら私が大怪我するところだったんだよ！！」

兄さんが耳を押さえて歯を食いしばる。まあ、あんな大声なら耳が痛くなるもんな。

一方、イヴは幾分すっきりしたのか笑顔で僕の肩の上に座り直した。

第三十六話 キツネママ参上！（兄貴もいるよ）（後書き）

鈴：「月狐おめでとー。やっと本編に出れたね」

月：「とつても嬉しいわー」

刹：「でも、まだまだ新キャラ出んだよな」

鈴：「怒涛の四連撃。内、レギュラー入りは二人」

朱&？「たのしみにしてくださーい！」

鈴：「まだ出るなや！」

次の回でさらに二人追加です。

第三十七話 アルト登場！

「ええ？ な、なんで？」

と、そこでハルが僕らの方を見てるのに気づいた。

あ、そうか。今、イヴは打撃のために神力を優先したから、ハルたちにも見えるようになったのか。

「なんで、お姉さんが小さくなってるの?!」

そういえば、ハルには姉さんってことで誤魔化してたっけ。すると、イヴは立ち上がった。

「ごめんねハル。あれはウソ」

悪びれた感じをさせずにイヴはぺろりと舌を出す。

そして、一礼。

「改めてこんにちは。私は木霊家と共にある聖霊イヴ。今後ともよろしくね」

イヴは満面の笑みでそう言ったが、ハルは不思議そうに首を捻る。ぴよこんとポニーテールも揺れた。

「この前は私と同じくらいの背でしたよね？」

うわ、一番聞かれたくない事を。

イヴはあはは、と笑って、

「あの時は空狐の体を借りてたからね」

なんだか嫌な視線を感じる。

僕はそっぽをむいた。そして、

「おかま？」

ハルがぼつりと呟く。

だああああ！ 一番言われたくない事を!!

「違う！ 僕は好きでやってるんじゃない！ イヴに頼まれたからやったんだ!!」

立ち上がって猛抗議。

ハルは「そう……」と言って目の前の料理に視線を戻した。

僕は釈然としないまま座りなおす。

と、刹那くんが「そろそろかな？」と言って襖を見る。

？ もしかしてまだ誰か来るのかな？

と、そこでタイミングを見計らったように小さな女の子が現れた。歳はたぶん十歳に届くか届かないかくらいかな？ ふりふりのワンピースを着こなして、綺麗な金髪とルビーのように澄んだ紅色の眼をしている。にこにここと笑っている顔は愛らしくて思わずかわいいといってしまいそう。

女の子は朱音さんを見ると満面の笑顔で。

「あかねおねーちゃんー！！」

と抱きついた。

朱音さんもうれしそうに微笑みながら女の子を抱きしめる。

「久し振りアルトちゃん。圭一は元気？」

「うん！ ママも元気だよ」

元気に頷くアルトちゃん。

しかし……女なのに圭一って、変な名前。

そして、舞さんとハルに母さんが眼をきらきらさせていた。あー、

この三人かわいい物好きだったっけ……

しばらくして朱音さんがその子の肩に手を置いてこっちに向いた。

「紹介するよ。私の友達の娘のアルト・テストロツサ」

ぺこりとアルトちゃんが頭を下げる。

「アルトです。よろしくおねがいます」

その様子はひじょーに微笑ましいものなのだが……なんだろう。

この子も刹那くんや朱音さんのような違和感を感じる。

すぐに舞さんとハルに母さんがアルトちゃんのそばに寄る。

「こんにちはアルトちゃん。わたしは倉田 舞です。よろしく」

溶けた笑顔で舞さんが自己紹介をする。

ハルも似たような顔だ。

「あたしはハルっていうの。よろしくね」

「私は木霊 月狐。よろしくアルトちゃん」

僕らもするべきだよな。

「木霊 空狐です。よろしく」

「秋山 龍馬。よろしく」

男側も名乗る。

それからアルトちゃんを囲んでいた舞さんたちが質問をし始めた。

「ねえ、アルトちゃんって何歳？」

舞さんの質問だ。楽しそうににこにこしている。

アルトちゃんはうーん、と考えてから。

「十五歳です」

……はい!?

刹那さんと朱音さんを除いた全員が眼を見開く。

渦中の人物であるアルトちゃんはまだにこにこしている。

「ごめんなさい。まちがえちゃった」

えへへ、とアルトちゃんが笑う。

ほ、驚かせないでよ。

僕は胸を撫で下ろす。

「この前誕生日だったから十六歳」

アルトちゃんがえへへと頭をかく。

まあ、いるよねそういう人。かくいう僕もそうだし。

そこでパンパンと手を叩く音。そっちを見ると刹那くんが立っていた。

「さてつと、全員揃ったことだし、自己紹介はこの辺にして」

刹那くんが仕切りなおすと、すぐにみんな席につく。

みんな楽しみにしてたんだね。

「それでは……」

刹那くんがパンと手を合わせる。

それにみんなが続いた。

「……いただきます!」「」「」

全員の声が部屋に響いた。

第三十七話 アルト登場！（後書き）

新キャラ登場です。

月狐と銀狐は温泉編終わったらしばらく登場しませんが、彼女はレギュラー入りです。

第三十八話 宴会ですよ

さて、皆様は僕がこの町にやって来た初日の晩の出来事を覚えていらっしやるだろうか？

覚えてない方や見ていない方は第七話まで一度お戻りください。

「さけー、もってこーい！」

イヴが小さな体で一升瓶を逆さに振る。本当に酒を浴びて飲んでいたんだから、服と綺麗な金髪は酒でびしょびしょで肌に張り付いている。

うん。服が体に張り付いて目に毒だ。少し自分のプロポーションが青少年に悪影響与えかねない武器だっってこと理解してくれ！その横では兄さんが一升瓶をマイク代わりに熱唱している。

で、龍馬は母さんに酒を飲まされすぎてダウン。相変わらずよっわいなあ。

そして、とうの母さんは今度はハルと飲み比べをしている。

「あらあら、ハルちゃんお酒強いのね〜」

「ええ。もつと飲みましょお母さん」

うん。楽しんでるならいいや。

チラッと刹那くんを見る。

彼の周りには一升瓶やウイスキーやワインがゴロゴロ。

今だっって度の強いブランデーを一気飲み。ぷはあっと美味そうに一息ついて今度はワイン。

……本当に人間か？ 僕なら今ので眼を回してるぞ。

朱音さんはホロ酔いな感じで舞さんと一緒に飲んでいる。

「そうなんですか〜。刹那ちゃんと朱音さんって幼なじみだったんですか〜」

「そうなのよ〜。その時の刹那ってすごく鈍くてね〜」

なんかこっち見られてるような……

二人は互いにコップに酒を注ぎあう。仲いいなあ。

てかあの二人幼なじみだっただ。

見ているうちにどんどんテンションが上がる二人。

「いいか舞。幼なじみはサインが分かり難いから分かりやすいようアピールするんだ！」

「サーイエッサー！」

「押して押して押しまくるんだ！」

「サーイエッサー！」

盛り上がったるなあ。

アルトちゃんは僕のそばでジュースを飲んでいる。

この子は飲めないらしく朱音さんからみんなに強く止められている。

「みんないい感じに盛り上がってますね〜」

アルトちゃんがにははと笑う。

まあ、素面じゃあこの中に飛び込み辛いよなあ。

「そうだね〜」

僕はちびちびとで酒を飲みながら答える。なんでちびちびかかって？ もし僕が酔いつぶれたら旅館の人に片付けさせる事になっちゃうじゃないですか。でもね、僕も好きでちびちび飲んでんじゃないんですよ！ やっぱお酒はぐいっといきたいですよ！

「じゃあ……行ってきます！！」

「グッドラック！」

ビシッと朱音さんが指を立てる。

どうやら二人は何か相談してたようだ。

僕は気にせず一升瓶を取ろうとして……すかした。

あれ？ 確かに目の前にあったと思ったんだけどなあ？

すると、舞さんが僕の前目の前に一升瓶をちらつかせる。

どうやら彼女が僕の前からかつさらったらしい。

「うふふ〜ん。空狐くん、飲みたい？」

舞さんが一升瓶を持って聞いてくる。酔っ払ってるなあ。

「飲まないとやってられませんよ」

そう言ってコップに残ったのを一息に飲む。
そして、舞さんにコップを差し出す。

注いでくれるのを期待していたけど一向に注がれる手応えがない。
舞さん？」

舞さんの方を見ると、舞さんが酒を飲んでいた。

なんだよ。自分で飲むために取ったのか。

お酌してもらえるかなと期待してたのに。

……いや、飲んでるんじゃない？ 頬がまるでリスのように膨ら
んでる？

しかも口を離したら迫ってくるんですけど！？

「ま、ま、舞さん何するつもりなの！？」

「ん〜？ ふひふひひ」

何ですとー！！

す、少し嬉しいけど、みんな見てますよー！！

助けを求めるように周りを見るけど、ダウンしたハルと龍馬以外の
みんなはニヤニヤ見てるだけ。アルトちゃんはその眼を期待に輝
かせながら僕らを見ていた。

止めて。そんな眼で見ないでお願いだから、助けて……

「いや、舞さん。おおお落ち着きましよう?!」

お前が落ち着けというツツコミはなしの方で。

そして、舞さんが覆いかぶさってきて……

つて、あれ？ 舞さんが口を押さえてる？ しかも、顔が紫にな
ってきた？

「ま、舞さん？」

すごく嫌な予感。これってまさか、初日ラストの……

そして、

「ひもひわるひ……」

大当たり〜！！

すぐに周りのみんなが行動する。

皆が目指すはたまたま置いてあったバケツ。

みんな！ 僕を助けてくれるんだ！！

しかし、世は諸行無常。

まず、刹那くんが倒れてた龍馬にけつつまづく。

そして、バランスを崩した拍子に彼の手から瓶がすっぽ抜けて、母さんの後頭部に直撃。

そしたら、倒れ込む母さんの手が朱音さんの帯を掴んでしまって、朱音さんの着物がはだけた。

それを見てしまった兄さんが顔を真っ赤にした朱音さんに殴られる。

それに巻き込まれてしまったアルトちゃんが伸ばしていた手でイヴが叩き落とされてしまう。

うそでしょー！！

一瞬で全滅。唯一生き残った朱音さんが慌てて着物を正すけど……もう遅かった。

「うえええええ！」

「いやあああああああ！！！」

結局、運命は僕を再びイジメることを選んだようだった……

その後、みんなが片付けるから僕は風呂に入るのを進められて入ることになった。

そして、夜の部屋にて。

「うーん……」

そばでパタンと寝返りを打つ音。

し、しまった。部屋が舞さんと一緒だつてことすっかり忘れてた。さつきから僕の心臓は狂ったようにバクバク脈打っている。

一応、よそを向いているけど、それが余計に想像を掻き立てている気がする。

うっ……尻尾がピンと立っちゃってるよ。こんな時に限ってイ

ウは母さんたちのところに行っちゃってるし。

にしても暑い。僕の体温が高くなっているからさらに蒸し暑い。ついに欲望に負けてごろんと舞さんの方を向く。舞さんとは五十センチほど離れている。

こつちを向いている以外特に何ともなっていない。首の下まで布団がかかっている。少し安心した。

すーすーと健やかな寝息が聞こえる。

にしても何だか涼しそうだにゃあ。

うん。もしあの布団の中に入り込めたにやらひんやりと快適に安眠できる気がするにゃ。

ああ、やばひ。そんなこと考え始めたら本当にした方がいい気がするしてきたじゃにゃいか。

うんそうだ。きつとそうすべきなんだにえ。

とそこで舞さんがまた寝返りを打つ。

僕はビクツとなった。

落ち着けー、落ち着くんた僕。もしそんなことしたら嫌われるかもしれないじゃないか。

いや、舞さんのことだから別にいいよって言うてくれるかもしれないけど、それでもそれは卑怯者のすることだ。

KOOLになれ、空狐！

よし、何だか落ち着いてきた気がするぜ。

となったら今度こそ寝るんだぜ！！

と、午前三時に六度目の思考を行う。

その後、五時まで後四回ほど同じ思考をして、結局睡眠時間は二時間だった。

第三十八話 宴会ですよ（後書き）

鈴：「狐火の読者数、四万Hitも超えたよ！」

空：「おめでとう！」

鈴：「くうう、最初の頃はこんなに読んでもらえるとは思いませんでしたよ！」

刹：「よし！ 今から宴会だ！ みんな呼ぶぞー！！！」

鈴&空：「それはダメー！！！」

第三十九話 朝ですよ

ちゅんちゅんと鳥の囀りと朝の光に目が醒める。
んっ、もう朝？

昨日は結局あまり眠れなかったなあ……

僕はもう一度布団に潜り込む。

暖かいなあ。それに柔らかくてふにふにで……ふにふに？

……まさかね。

恐る恐る目を開ける。目の前に舞さんの顔が。

「うそん」

と、とりあえず、布団から出ないと……

しかし、出ようとしたら舞さんに抱きつかれてええええええ！？

「ま、舞さん？」

大声を出したけど、変わらず舞さんは楽しい夢を見ているのか、

口元が綻んでいる。

ど、どうしましょ？

「ま、舞さん、ちょっと離して」

声をかけるけどまったく意味がない。

無理やり出ようとする。余計にギュウツと抱きつかれる。

さらに、胸元で二つの柔らかい感触の存在感がああああ！

ぐあっ、起きたばかりだから余計に大ダメージ。

くうっう、や、やばいですよこれ。だ、誰も来ないですよ！

そして、がたんと音を起して窓が開き、

「やっほー！ 空狐、舞、起きてる？」

タイミングわりいよ、イヴー！！

部屋に飛び込んできたイヴはじつと僕らを見て……にっこり満面の笑みを浮かべやがった！

「あらあら、朝からお盛んなことで」

「変なこと言うな！」

イヴはうんうんと頷いて、

「大丈夫よ。みんなにはちゃんと秘密にしとかないから」

そうか、ちゃんと秘密にしとかないのか、よかつ……くない!!
僕はイヴを睨みつける。

「ダメだろ！ それは秘密にしないといけないだろ?!」

しかし、イヴは僕の抗議なんてどこ吹く風といった感じに身を翻して、

「ばああ〜い」

部屋から出ていった。

あいつ、ぜつつつたに言いふらすよ！ 急いで捕まえないと！
舞さんの肩を押して離そうとするけどビクともしない。意外に力が強い。

てか、よく起きないなあ。さっき耳元で大声出したって言うのに。
スリーピングビューティーという単語が頭の中を流れる。

……いや、さすがにそれは怒るよな。うん。

まあ、試しに言ってみるだけでも、

「舞さん」

耳元に顔を近づけて囁く。

「起きないとキスしますよ」

……すっげー恥ずかしい。

少しの間待つと、うつすらと舞さんが目を開けた！

た、助かったあ。無茶苦茶恥ずかしかったけど。

しばらくの間、舞さんは目をしょぼしょぼさせて、

「クーちゃん？」

……えっ？

何か嫌な予感。

柔らかく舞さんが笑う。その目はぼんやりとじていて焦点が合っていない。

「もー、クーちゃんってかわいいなあ。おねーちゃんのふとんにもぐりこむなんて!」

そう言って僕を抱きしめてくる舞さん。寝ぼけていらっしやいますか！

「もがあ？！」

む、胸が、胸が……！！

ああ、でも柔らかくて気持ちいい……少しの間、こうしてたいかも。って、何考えとんじゃ僕は！

と、今度は扉が開く音が。
うそん。

「やつほー、クーちゃん、舞ちゃん。グッドモーニング！」

この声は母さんか！

しかし、部屋に上がる気配はなく沈黙。

「あらあら、おじゃましちゃった？」

母さんが楽しそうな声。

「じゃあね〜」

絶望とともにがちゃんと扉が閉じる音がした。

あああああつ、一番見られたくない人に見られたー！ 里に帰られなくなっちゃうよー！！

妖狐の里というか、妖魔の里はだいたい里の人間（？）どうしの結びつきがとも強い。

まあ、人数が人間より少ないし、何より僕を除けばみんな千年以上生きていけるほど長生きだ。

もし母さんが里に帰ってから、たぶん絶対にこの出来事の話をしてしまうだろう。そして、一日で里中に知り渡ることだろう。

そこからきつと、彼女を通り越して結婚したなんて話になって、そろそろ子供もできちゃってるんじゃない？ なんて無責任な噂が三日で流れ出すに決まっている！ 実際に一時期他の里に出向いていた人がその里で彼女作って帰ってきた時に無責任な噂が流れたのを僕は知っている！ その妖狐は半年ほど苦労してその噂を消す事ができたとか。

里帰りしたらとんでもないことになっちゃってそう。

例えば『木霊 空狐くん。結婚おめでとぅ！』なんて垂れ幕が飾られてお祝いされるかもしれない。式を里で挙げなよ、なんて事態にもなりかねない！

と、頭を抱えたくなくなってから気づいた。力が弱まってる？

「く、空狐くん」

顔をあげると舞さんが引きつった笑顔を浮かべている。

どうやら完全に目を覚ましてくれたみたいだ。

ぱっと舞さんが僕から離れる。

「ええつと……おはよう。空狐くん」

舞さんは顔を真っ赤にして困った感じでそう言ってくれた。

僕は頬をかいて、

「おはようございます。舞さん」

いつも通りあいさつしたのだった。

おまけ

月狐は満面の笑顔で部屋に戻る。

「つきー、おかえりー」

イヴがせんべいを食べながら迎える。

銀狐は朝の鍛錬に出てるためいない。

「うんイヴちゃん。ありがとね」

「いえいえ」

実は月狐が部屋に乱入したのはイヴの報告があったからだだった。

「ほんと、いいもの見れたわ」

ほくほくとした笑顔で月狐が座る。

「でしょ？」

「このままだったら孫の顔見れるの近いかな？ 五年後くらいかな？ クーちゃんと舞ちゃんの子供か。楽しみね」

「うんうん。どうせなら二人が今度里に来たときにそうなるように里全体でなんかしたら？ もう結婚しちゃったって噂流しちゃうとか！」

「いいわね」

空狐がその場にいたら「この悪魔……」と言いつうな会話をする二人であった。

余談であるが、月狐が孫の顔を見たのは五年後ではなかったことだけを明記しておく。

第四十話 兄弟対決

朝ご飯の時間。ひじょーに気まずくて、食べた気がまったくしなかった。

母さんとイヴと一緒に楽しそうにこつちをチラチラ見ながら食べてたし、舞さんもずっと俯きながら食べていた。その様子を見て龍馬とハルがひそひそ話している。

まあ、あんな事あったばかりだもん仕方ないな。

あの後確認したことだけど、布団は僕のだった。

つまり、僕が狼藉を働いてしまったわけじゃなく、寝ぼけた舞さんが僕の布団に入ってしまっただけであつたのだ。

無意識で欲求のまま行動してしまつたわけじゃなくてちよつとだけ安心。しかし、だからといって舞さんの気が晴れるわけじゃなく、やっぱり気まずいままだつた。

そして、朝ごはんが終わってから、

「そういえば君らは久しぶりにあつたばかりだったな？」

朱音さんが思い出したかのように呟く。

「そうですけど？」

確かに三年ぶりの再開だ。でも、それがどうしたのかな？

うんうんと朱音さんが頷く。

「銀狐、久しぶりなんだから空狐の出来具合見てやったら？」

えっ？

兄さんもにっと笑う。

「そうっすね。久しぶりにやってみますか」

なんか兄さんも乗り気だ。いつの間にかその手には兄さんの愛剣

『桜花』が握られている。

桜花は肉厚の野太刀で、長さは兄さんの身長ぐらいで、見た目通りかなり思い。以前、僕が使った時はその重さに振り回されたことがある。

逆に、兄さんにとって今の僕用に調整された天月は軽すぎて物足りないらしい。

このことからわかるかもしれないけど、兄さんの戦法は僕とは対局にある。僕は身軽さを生かした戦い方、兄さんは頑丈さと力が武器の戦い方。妖狐としては、僕の方が主で、兄さんの戦い方は珍しい。

「お手柔らかに」

僕は苦笑いしながら答える。

僕もわりと乗り気だな……まあ、兄さんと戦うの久しぶりだし、気分転換にもなりそうだしなんて言い訳を試みるが、本当は自分より強い相手と戦ってみたいだけかも。

僕もバトルマニアなのかなあ？

旅館の後ろにある山で僕らは対峙する。刹那くんが張ってくれた隔離結界のおかげで人目は気にしなくていい。

観客は母さんや舞さんたち。龍馬とハルも見学している。

「久しぶりだな。こうやって試合をすんのも」

兄さんが笑みを浮かべながら剣を構える。

僕は苦笑。

「だって兄さん、いつもどっかでぶらぶらしてるから、なかなかね」
「違うないと兄さんは笑う。」

僕も刀を構える。

「いくぞ」

兄さんが真面目な顔になる。しかし、やっぱりその頬は緩んでいる。

「はい！」

右手を突き出し、左手に刀を持って地面に水平に構える。そして、息を整える。

兄さんがゆらりと動く。

その瞬間に、足の裏で爆発を起こして一気に突っ込む。射程に入

った瞬間、刀を突き出すが、横に避けられる。

反転、踏み込んで刀を横に一閃。

兄さんが剣の腹で受ける。流されると目の前に桜花の刃。なんとかかいくぐって、兄さんの懐に入る。

切っ先に小さな炎を灯して、爆発。加速させて兄さんの腹を柄頭で殴る。かなり硬い感触。兄さんにはやつと笑って剣を振りかぶる。あまり効いてないみたいだ。振りかぶるその刀身には淡い光。

ヤバイ！

「上弦」

技名とともに刃が迫る。

なんとか後ろに跳んで避けるが前髪が数本空中に跳ぶ。風圧で体勢も少し崩れた。

僕はすぐに姿勢を立て直し刀を振りかぶる。

「烈光斬！」

刀身から斬撃を飛ばす。

しかし、牽制として撃ったけどあっさり兄さんに切り落とされあまり意味がなかった。

迫る兄さんに刀に炎を上乗せして下から一刀で迎撃。

「下弦の月！」

兄さんが使った上弦の炎バージョンを使う。本来、威力はこっちが上だ。

「上弦の月」

だけど、僕の一刀はあっさり兄さんに負けた。

僕は数歩たたらを踏む。すぐに兄さんが迫る。

僕は刀を振る。だけど、踏み込みが浅かった僕は刃の圧力に負けて後ろに跳ばされる。さらに兄さんの追撃。

咄嗟に地面を蹴って高く飛び上がり木の上に退避する。一息つくうとして、兄さんが剣を振りかぶるのを見た。

轟音と共に木が両断される。

「うわ!？」

足場が崩れて下に落ちる。木の破片が頬を切った。何とか着地に成功したけど、そこに兄さんが迫る。

重そうな一撃が来る。横に転がって逃げる。

すぐに跳び退りつつ天月を鞘に戻す。炎術を込め、鞘の中で炎を圧縮、加速。

兄さんも気づいたのか刀を振りかぶる。その刀身に先よりも強く大きな青白い光。

「炎龍」

「精龍」

同時に足を止め前傾姿勢になり、

「「飛翔！」」

これまたどちらも同時に踏み込み、龍を模した力を解き放つ。二匹の龍は僕らの間でぶつかり、喰らいあい、相殺。轟音と共に爆発。

その瞬間に砲撃の後の隙をつくため爆発を隠れ蓑に僕は跳び出す。蒼く燃える炎を乗せた刀を逆手に持ち、柄頭に左手を添える。その切っ先を地面に潜らせて走らせる。

そして、間合いに入った瞬間に刃を地面から解き放つ。これは地面を鞘と見立てた抜刀術。

「迅雷！」

「YA BAの技じゃん！」

龍馬、そういうツツコミは止めて。それに、あれは炎ないよ。

兄さんが避けるが左肩に浅く入る。

すぐに兄さんの反撃。突き。

僕は影を見る。突きは三次元の世界では非常に避けづらい。しかし、二次元の中なら上か下だ。影を見れば簡単とは言わないが、少しは易しくなる。

突きを避けてから横に跳ぶ。同時に牽制の術を編んで発動。

「炎剣！」

燃え盛る炎の剣を八本作り、それを指に挟み投げる！

「アンデルセンか！」

龍馬のツツコミはスルーする。

兄さんが炎剣を弾く。その隙に刀の先に炎を集中する。獄炎クラスの炎がバチバチと音を立てて燃える。

朱音さんに教えてもらった砲撃系の術式をベースに作った新術。その名も、

「桜火砲！」

砲撃術をぶつ放す。避けきれないと判断したのか、兄さんは剣を盾に防御術式を展開する。

直撃、轟音。土煙で何も見えない。

少しして……煙を引き裂いて兄さんの炎が飛んでくる！ 咄嗟に刀で受けて、爆発。後ろに吹き飛ばされる。

い、痛い…… たった一撃の、おそらく抜き打ちで威力が落ちているはずの術なのにそれだけで、僕はダウンしてしまう。もう少し防御面、反省しよっかな？

何とか体を起こすし、兄さんを見る。

兄さんもぼろぼろだ。ところどころ煤けているし、服もちょっとぼろぼろ。感じる魔力もいつもより弱くなっていた。

お互いぼろぼろだけど……今なら使えるかもしれない。あれの反省を込めたあの技。

「兄さん」

僕は兄さんに呼びかける。

「なんだ？」

「うまく避けて」

僕は前傾姿勢をとる。

兄さんは顔を強ばらせる。気づいたかな？

「空狐、まさか……」

そのまさかです。

対抵抗魔術展開……完了。周りの木々が不可視の何かに圧されるように揺れる。

肉体強化……完了。

刀を左右に二回振ってから構える。ここまでで、十秒も時間を使った。もう少し早く展開できればいいのに。

さらに前傾になり、

「秘剣、朔夜」

地面を蹴る。ものすごい音を立てて地面が爆発したと同時に視界が狭まるほどの加速度を受ける。

兄さんが上に跳ぶ。

僕は自分のスピードを制御しきれず、兄さんがいた場所に刀を振る。

「覇っ！」

轟音。地面が深く抉れた。思ったより威力があったな。

少しして兄さんが地面に降り立つ。技の後を見て顔をひきつらせていた。

そして、頭をひっぱたかれた。

「お、ま、え、は、俺を、殺す気、だった、のか！」

兄さんが頭をグリグリしてくる。

「いたい。いたい」

あうっうう。技ができれば試してみたくなるのが人情つてものですしー。

しばらくして兄さんがやっと解放してくれた。

「あと、この技の使用は俺と母さんに止められてただろ？」

ああ、そのこと。

「大丈夫だよ。術式変えて威力はセーブしてあるから死夜ほど負担はないよ」

僕はパタパタと手を振って否定する。

あれは流石にねえ。試しに使ったら全治二ヶ月、意識不明の重症だったもんなあ。

「そっいえばピンピンしてるな」

僕は、はははははと力なく笑う。

「肉体強化も対抵抗魔術も死夜の半分以下だからね。まあ、それでもしばらくは筋肉痛確定かも」

実は今も体中の筋肉が悲鳴を上げている。残りの魔力も半分以下でかなり疲れてもいるし……

ふーんと兄さんは納得して、

「まあ、あれだ。強くなつたなお前は」

そう言つて笑顔でばしんと僕の背を叩いた！

「ぴぎゃー！！」

体中に激痛が走る。

僕はその場にうずくまつた。

「そんなに酷いのかよ」

兄さんが呆れた顔をする。

「お、お願い……しばらく、僕に、触ら、ないで」

僕はそんな情けない懇願をするのであった。

しかし、この後、僕はみんなに体を叩かれまくって危うくお彼岸の住人になるところであった。

第四十話 兄弟対決（後書き）

鈴：「大変遅くなりまして申し訳ございません」

ぶかぶかーつと土下座している気分。

刹：「まあ、遅くても気にする人いないと思うけど、なんで遅くなつた？」

鈴：「いやあ、合宿にいつたりバイト多めに入れたり、今年の夏休みはする事目白押しだったから」

刹：「なるほど」

鈴：「あと、この回は何度も直してたからそのせいも」

刹：「ほほう？」

鈴：「最初は朱音と月狐が戦う予定だったけど、今のに変更したり、描写をがんばろうとして挫折したり、好きなアニメの技とか入れたり抜いたり、プラズマザンバーブレイカー入れたかったなあ……」

刹：「それでは、みなさま。この回は作者の未熟さが現れてる回と思いますので、なにか指摘する部分がありましたらぜひぜひお願いします」

鈴：「こらー、無視するなー！」

刹：「それでは、バイバイ、シューー！」

第四十一話 月狐VS朱音

戻ってからすぐに用意しておいた湿布を貼る。手足はできたけど、背中が無理なので舞さんに貼ってもらおう。はー、なんかおじいさんみたい。

「空狐、お前、漫画の技とかを真似するのを頑張ったりしてんの？」
龍馬が聞いてきた。

その顔はなんか楽しそう。

「うん。昔からそういうのには、けっこーこってるよ」
子供の頃とかは、よく飛天御剣流の技とか、二重の極みとかの真似をしてたりもしてた。

この頃は、雷撃系の術式も得意だから千鳥やジェットンバーの再現を頑張っている。イヴに相談したらさすがに、形状変化能力でもカートリッジの真似は無理だとか。残念。

「そついえば、お前、さらに早くなってたなあ」
刹那くんが思い出したかのように呟く。

その手には野球とかでよく使うスピードガン。
「そつ？」

「おう。瞬間で時速二百キロ前後が何度も出たし。お前新幹線か？
例の秘剣の時は八百越え。音速の半分以上ねえ」
はっはっは。僕は早さに関してだけは定評があるのだ。まあ、そのかわり防御は紙、よりまじだろうけど、段ボール。防御に関して考え直さないとなあ。

と、こんな風な話をしていたらいつのまにか母さんと朱音さんが柔軟体操をしているのに気がつくのが遅くなった。

「何してんの？」
予想はつくけどとりあえず聞いてみる。

「今度は」
「あたしたちが戦うのよ」

そうでした、この人たちもかなりのバトル好きな人たちだったんだっけ。

「それじゃあ、月狐、正々堂々と」

「ええ、お互いの誇りにかけて」

二人はすごくいい顔で微笑みあうのであった。

そして、

「はあ！」

「せやあ！」

鎌と刀がぶつかる。魔力が弾けて火花が散った。

さらに、数合打ち合う二人。

すごいな朱音さん。母さんと互角に打ち合ってる。だけど、少しずつ朱音さんが母さんに圧され始めた。

「月狐さんがんばれー！」

「あかねお姉ちゃんがんばってー！」

舞さんやアルトちゃんが二人を応援する。

と、そこで朱音さんの鎌が母さんの刀に弾かれて懐に入られる。

「くっ！」

母さんが強く踏み込み刀を振る。朱音さんが後ろに跳ぶ。微妙に間に合わない！

しかし、朱音さんは母さんの刀の腹に蹴って軌道を逸らし防いだ。さらに朱音さんが退こうとして、

「萤火」

母さんの術が追いかける。

十数個の炎が彼女に迫る。

朱音さんは直撃コースの炎だけを鎌で弾いて横っ飛びに逃げ！

「朱音さん、そっちはダメだ！」

朱音さんかはっとした顔になったが、気づいた時には遅かった。

数十個の炎の矢に囲まれる場所に自分から飛び込んでいた。

「しまった！」

これが母さんの十八番『鳥籠』

母さん得意の遠隔発火で離れた場所からでも設置できる罫系の炎術。

基本、設置系を除き術は手元で発生させる。離れていたとしても、二、三メートルが限界だ。

しかし、母さんは持ち前の高い術の制御能力と人一倍（妖狐一倍？）強い魔力でかなり広い範囲、だいたい三十メートルほどまで術の発動を出来る。ただし、距離があればあるほど練り辛いのは当然だから主にトラップ系列だ。

「鳥籠」

母さんがぐつと拳を握って告げると同時に中心にいる朱音さんに向かつて炎の矢が跳ぶ。

「ぐっ！」

朱音さんがガードの構えをとって……着弾！

爆発で煙が舞う。

「うわあ」

舞さんが顔をひきつらせる。

「おばさんやりすぎ」

ハルもちよつと引き気味。

「お姉ちゃんやられちゃった？」

アルトちゃんは首を捻る。

しかし、土煙が退くと、そこにまだ朱音さんが立っていた。しかも、昨日見せたりリミットオーバー形態。

「相変わらずやるね月狐」

朱音さんが不敵に笑って構える。

対して母さんも。

「朱音ちゃんもね」

お互いに賞賛しあい、走る。

「シューティングスター！」

朱音さんがいくつもの閃光を撃つ。

「不知火！」

それを母さんが不知火で撃ち落していく。

牽制の術が飛びあい、たまに流れ弾がこっちに来て僕と兄さんと刹那くんが撃ち落とす。

さらに二人の術攻撃が激化していった……母さんの剣が伸びた！刃がいくつにも分かれ、その間に魔力の糸で繋がっている。

朱音さんが舌打ちする。

そうだった。母さんの刀『蒼天』は、連結刃に変化する機能があった。イメージとしてはBLEACHの蛇尾丸やなのはレヴァンティ、シユランゲフォルム。

一瞬で伸びた刃が朱音さんの鎌を絡めとる。

「つく！」

朱音さんがすぐに鎌を離す。と同時に絡めた刃から炎が吹き出す。一歩遅れていたら腕を焼かっていただろう。

でも、まずいな。これで、朱音さんの武器がなくなった。となる。と接近戦に持ち込まれたら素手だとまずい。

しかし、朱音さんはすぐに後ろに手を回して……背中の翼が展開した！

中から出てきたのは、どう考えても収納スペースを無視した大きさのパイルバンカーと剣だ！ どうなつとんの！？

「あれ、武器収納してんの！？」

刹那くんとアルトちゃん以外のみんながびびる。

そして、刹那くんが得意げな顔になった。

「まな。手前側の二本は中に空間拡張のための術式を入れて範囲は見た目の数十倍。いくつかの武器を格納できるようにしてあるぜ」「すご！　どんな技術力だよそれ。」

朱音さんが二つの武器で戦闘を続ける。比較的大きく、絡めとりづらいパイルバンカーを盾にして母さんの連結刃を防ぎ、剣で攻撃をする。

いつの間にか、術は牽制にしか使っていない。って、あれ？

「あのさあ」

「ん、なに？」

僕は何気なく刹那くんに聞いてみる。

「朱音さんって中距離戦が得意なんじゃなかったっけ？」

それが疑問だ。今の朱音さん。どうみても、接近戦に持ち込もうとしている。その顔はすごく楽しそう。

ああ、と刹那くんは思い出すように語る。

「あいつ、元は接近戦型だったんだよ。俺が中距離戦苦手だったから今の戦闘スタイルに変えてくれたんだ。今でも装備変えると性格や、戦い方が昔に戻る」

すごくパートナー思いなんだなあ。

しかし。刹那くんは不満そうな顔になる。

「武器を変えると性能に変化出るように造ってはあるけど、ちゃんと事前にそれように躯体を調整してやんないといけないのに」

なんか、刹那くん変なこと言わなかった？

と、そこで、不穏な空気を感じてそちらに向き直る。母さんの刀が帯びている炎。その周りには帯電して、大気をバチバチ鳴らしている雷。

げっ、あれは……

「雷炎……」

兄さんが呟く。

母さんが発生させた炎は大出力の炎に雷を加えて攻撃力を上げた雷炎と言うもの。普通の炎よりずっと威力がある。

対して朱音さんもあれを使う。彼女の（たぶん）最強技スターダストインパクト。さらに、背中の翼が展開し魔力球の周りを回る。それが魔力球の輝きを高める。

「しかも、こっちはスターダストフルブレイカーあ！？」

なんかおっかなさげな名前だし。

まあ、なんつうか……

「あの二つがぶつかったらヤバイよね」

僕は額から汗が流れるのを感じた。

雷炎は雷をともなつた炎が空高く伸びている。朱音さんの光球も眩しくて直視できない。

「そうだな」

刹那くんも頷く。その額には大粒の汗。

「確かにヤバイ」

兄さんも引き気味だ。

みんなもヤバイ雰囲気を感じたのか落ち着きがない。今にも逃げ出しそうな雰囲気だ。

逃げ出さないのはきつと本能的にここが安全だと感じているからだろう。

まあ、若干安全程度だが。

そこで刹那くんが結界の術式を書き換え始める。

「俺は結界の維持を優先するから防御は頼んだ」

めんどそうに呆れた感じで刹那くんが頼んできた。

あの二人は今、絶対僕らギャラリーのことを忘れてるよな。

「了解」

僕が前に出る。

先の戦闘で消耗しているとか甘えを言ってられないなあ。

苦笑しながら僕は悲鳴を上げる体をねじ伏せて刀を抜く。イヴが

とんとと刃の上に乗った。

「イヴ」

「合点承知！」

イヴが刀の中に入り、刀身が淡い光に包まれる。

僕は額に刀の峰を押し付ける。

「四ノ太刀『顕現』」

体が光に包まれた一瞬後には体が作り替えらる。金髪碧眼の美女、

イヴの姿。

すぐに神力を練って術式を展開。

「神術『聖母の箱庭』！」

防御結界が展開される。

これは、一定範囲内にイヴの特性を広げることではほぼ完全に術による攻撃を防ぎきれる。

まあ、強力な分弱点は目白押し。大量の神力を使うから合体時間は短くなるし、使ってる間、維持を続けるためにそこから動くわけにもいかない。だから、接近されて斬られたら一貫の終わりなのだ。そして、二人の術が完成して、

「全力全開！」

母さんが雷炎を纏う刀を振りかぶる。

「一撃入魂！」

朱音さんがを剣を振りかぶる。

「羽の回転速度が上がった。

来る！」

僕らは身を固める。

「疾風炎雷！！」

母さんが刀を振り下ろす。

その切っ先から爆発のような雷炎が走る。

「スターダストフルバースト！！」

朱音さんの剣が振り下ろされる。

魔力球が炸裂。視界が閃光に満たされる。

二人の奥義がぶつかり合い……轟音！

結界内の木々が折れ、砕け、吹き飛んだ。

爆発が治まると、森はなく、クレーターができていた。

何ちゆう力だよ。見学だけで命懸けかい。さすがはS級の戦いだ。合体を解いて元の姿に戻る。一度変身したため、筋肉痛も治っていた。ちよつとラッキー。

と、母さんと朱音さんがこっちに歩いてくる。

「やっほー」

母さんは朗らかに笑っている。

対して朱音さんは苦笑。

「負けちゃったよ」

朱音さんが小さく呟いた。

「負けた？ 最後の一撃は互角だったと思うけど？」

「最後の最後。術を使った直後に後ろに回り込まれて、気がついたら首筋に刀を突きつけられてたよ」

あの爆発の中を動いてた？ 母さんすげすぎ……

「あ、朱音さん……その腕……」

舞さんがふるふると指を朱音さんに向ける。僕もそっちを見て、

「え？」

思考が止まる。

そこは半分抉れて中が見えていた。

しかし、赤黒い液体が流れるそこから露出するのは赤い肉でも、血でも、白い骨でもなかった。千切れかけ火花を散らすコード、鋼の骨格。

「ロ、ロボット？」

ハルが全員の意見を代弁する。

朱音さんは困ったように頬をかく。

「できれば、アンドロイドって言って欲しいな」

朱音さんがあははと笑う。

いや、違うでしょ。

「女性ですからガイノイドでは？」

僕がツツコミをいれる。

となりで舞さんが「細かいね」と呟いていた。

刹那くんがこきこきと肩をならしながら立ち上がる。

「朱音は、前に俺が自衛隊の人外部門に依頼されて造った機械生命体の試作体だよ」

いや、そんなあつさり言わないでよ。どう考えても今の時代にそぐわないほどの完成度ですよ？

しかし、それで今までの疑問の一部がようやく解決した。

たぶん、朱音さんから感じた違和感の正体。それは生きてる人間なら発する匂いの一部が欠けているからなのだろう。よくできているんだろうけど完全には無理であったのだろう。

ほら、ターミネーターもそうというのがないから、犬が吠えまくるって設定あつたし。

「朱音は試作一号機。正式に採用されていたら89式機械天使『朱音』になってたんだけど、コストが馬鹿高くなっちゃって結局お蔵入り。しかたなく俺が引き取ったんだよ」

ふーん、そういえば聞いた事あるな、対人外用兵器を造ったもの問題があつて採用されなかつたって。

「まあ、できればこの事はあまり知られなくなかったから黙ってたんだけどね」

朱音さんがさびしげに笑った。

なんか、あつたのかなあ……

第四十一話 月狐VS朱音（後書き）

鈴：「お知らせがありまーす！」

刹：「いきなりなんだが……なんだ？」

鈴：「狐火に続く投稿小説第二弾を出す事にしましたー！」

刹：「そう、おめでとー（棒読み）」

鈴：「高校時代に作ってみたものを先日発掘してコメディイにしてみようと思いついて作りなおしてみました」

刹：「短絡的だなあ。狐火は大丈夫なのか？ どうせなら俺が主人公のを仕立て直せ」

鈴：「さりげに自分の欲求入れてたけどそこは無視して、まあ、交互にやるつもり」

刹：「ちゃんとやれよー。初心者だからってちゃんとやらないとな」

鈴：「OK、しっかりやるよ」

刹：「と、もう時間か……それじゃあ」

鈴：「この番組は、退魔士広報宣伝局と」

刹：「常磐学園生徒会の提供でお送りいたしました」

鈴&刹：「それではみなさま、よい一日を」

第四十二話 温泉の帰り

バトル後、結界を消すために外に出る。

結界とは一種の異界を創り出すもので、現実そのもの（僕らのように現実の存在を除いて）に影響を与えない。

だから、結界を消すだけで中で起きたことを消せるのだ。

「じゃあ、帰りますか」

結界を消してから刹那くんが発言した。

荷物を片付けて車に載せる。

帰りは龍馬やハルと一緒に朱音さんの車。運転手は刹那くん。（ペーパーだが免許を持っていた）

兄さんと母さんはバイクで来たようでライダースーツを着ている。

「それじゃあ兄さん、母さん。またね」

二人が微笑む。

「うん。クーちゃんも、たまには里に帰ってきなさいね」

そういいながらギュウつと僕の手を握る。

兄さんはぽんつと僕の頭を叩く。

「今度、ヒマだったら遊びに行くから、ちゃんと修行してるよ」

そう言ってから、二人はバイクに載って走り去っていった。

「バイバイ」

「また」

二人を見送ったあと、車に乗り込む。

そこで気づい。た後部座席に五人乗りは少しキツイし、うちの三人は女子……ぐあっ！ しまったあ！！

右から順に、僕、舞さん、ハル、龍馬と座っている。アルトちゃん舞さんの膝の上だ。

狭い車内にこの人数、うあ、舞さんの体がひっついて……ああ、柔らかくて暖かくてちょっと気持ちいいかも。

ちょっとだけこの状況に感謝。

「じゃあ、出すよ」

刹那さんの言葉とともに車が動き出した。

何となく夕暮れを眺めていると、肩に何かがのっかった。

慌てて顔を向けると、舞さんの寝顔がそこにあった。

起こそうかな？　とも思ったけど、やめた。くすぐったいけどなんか暖かい。

みんなを見ると朱音さんや、龍馬もハルもアルトちゃんも眠っている。

ゆったりとした時間が過ぎていった。

運転手の刹那さんもその雰囲気を楽しんでいるのか目を細めて……？

いや？　あれは船を漕いでる？　そういえばさっきから聞いている寝息が五重奏じゃなくて六重なような？

極めつけにサイドミラー越したがあれはよだれー！？

「起きれー！　刹那くん！　居眠り運転すなー！！」

僕はドカドカ座席ごしに殴る。

この騒ぎにみんなが起きた。刹那くんもはっとする。

「なに、なに？」

「何の騒ぎ？」

刹那くんもぶるぶる頭を振る。

僕はみんなの方に向いて、

「刹那くんが、居眠り運転してたんだよ！」

……沈黙が降りて、

みんなが刹那くんの方に向いて……

『バカー！！』

全員が怒鳴った。

「すまん！　つい……」

刹那くんが慌てたように謝罪をするために振り向く。

そう言ってる間に目の前にトラックがあー！

『前見て前ー！！』

慌てて刹那くんが前を見て、ハンドルを切った。

その後、次のサービスイリアで朱音さんに運転を変わってもらったのは言うまでもない。

二時間後、僕らは常磐市に戻ってきた。

ハル、龍馬の順にそれぞれの家によって降りていく。

そして、ラストは僕ら。

「じゃあ、また明日」

「また今度」

「またね」

僕と舞さんが降りると三人が手を振る。

僕らも手を軽く振る。

まあ、すぐそばに彼らの家があるからあまり意味がない気がするけど。

舞さんと僕は家に入る。

「んー、久しぶりの我が家が」

僕は伸びをしながら呟く。

「まだ一日しかたってないよ」

舞さんが笑いながら指摘する。

その顔は僕が変なことを言っただけなのに、何だか嬉しそうな感じがした。どうしたんだろ？

「舞さん、何か僕、変なこと言った？」

不思議に思っただけ聞いてみる。

「えーっとね」

舞さんは少しだけ考える素振りを見せて、

「秘密」

とだけ言って、小走りに家に入ってしまった。
なんなんだ？

すると、頭の上に何かのがのっかる。イヴか。

「僕変なこと言った？」

イヴにも聞いてみたが、返事はない。

少しして、

「さあ？」

声音的に、何か気づいてるけどずっとぼけている感じがした。

何なんだろうなあ？

僕は釈然としないものを感じながら家に上がったのだった。

第四十三話 引き金

「ん、今日も『くうこ』はかわいいわね」

あたしはつい最近買ったかわいい犬のぬいぐるみを抱きしめる。

この時間は心がとても安らぐ時間。こつやつて人形を愛でて、癒される瞬間が好き。

「あ、もう、そんな眼で見ないで『まい』。あなたもかわいいんだから」

そういつて『くうこ』を置いて羊の『まい』を抱きしめる。

だけど、突然、陶器の割れる音がした気がした。だけど、その音はすぐに消えてしまつて、気のせいだったかなと疑つてしまう。

それでも、わたしはなんか嫌な予感がして、『まい』をベッドに置くと部屋を出るのであつた。

俺は台所で立ち尽くしていた。

や、やべえ。

目の前には、かわいらしい猫の描かれたカップが無残に割れてしまつている。

やばい。マジでやばい！

キョロキョロ周りを確認。大丈夫。見られてない。派手な音がたつたけど、音が起つのはほぼ同時に防音の結界を展開したから大丈夫だ。たぶん……いや、少しは漏れたかも。

考えれば考えるほど不安になるこつらで止めとかなないと、堂々巡りになつてしまう。

俺が割つたカップ。それは朱音が一番気に入っているカップだった。

朱音がカップの手入れをするときにこのカップは特に念を入れて

磨いているのを何度も見ている。よく、このカップで嬉しそうに紅茶を飲んでいるのも何度も見た。

そ、そういえば、これは朱音が親友から誕生日にプレゼントされたものでもあったはず……こ、これが朱音にバレたらー！

後の事を考えるだけで背筋が寒くなる。

すぐに破片を集め始めた。

だが、世は諸行無常。

「何してるのかな？ 刹那くん？」

驚きのあまり、心臓が飛び出るかと思った。

油の切れたスクラップ寸前のゼンマイ仕掛けの人形のようにゆっくりと音を立てながら振り向く。

そこに、朱音が、いた。

その後、俺はリビングまで連行され、アルトが見守る中、全てを白状した。

もちろん黙秘権などこの場には存在しない。

「なるほど」

一通り事情を説明すると、今まで黙っていた朱音が頷く。

「コップを取ろうとして取り落としてしまい、何とかキャッチしたのはよかったけど、その時に置いてあったあのカップに肘が当たって落としてしまった。そういうことね？」

俺が説明したことをもう一度、朱音が口にした。

俺はこくこく頷く。

「それで、証拠隠滅した後には、回収したあのカップを術で直してから、また棚に並べるつもりだった、と……」

俺はこくこく頷く。

気分は肉食獣の檻の中に放り込まれた羊か、閻魔大王に審判を待つ罪人だ。ちらっと朱音の顔を窺ったが、すぐに顔を伏せた。

そして……しばらくしてから朱音はため息をつくと肩を叩いてきた。

えっ？

顔をあげるとその顔には苦笑が浮かんでいる。

「次からは黙っていようとしないだね。ちゃんと喋ってくれたらた
ら怒ったりしないから」

そう言っつて朱音は部屋を出ていった。

俺はちよつと拍子抜けしてしまつた。もつと怒ると思つていたの
に。

「刹那くんよかつたね」

見守つてくれていたアルトがそう言つてくれる。

しかし、この時俺はまだ知らなかつた。この後の恐ろしい出来事
に。

……つうか、予想しとけ。朱音とどんだけの付き合いだ俺。

その晩、刹那が部屋でぐっすり寝ているとき、物音を起てず彼の
部屋に何かが入り込んだ。そして……

第四十三話 引き金（後書き）

どうもです。

更新が滞ってましたが、やっと出せました。

次回も早めに出せるようにしたいと思います。

第四十四話 朱音の仕返し（前書き）

前回のあらすじ

朱音の大切に行っているマグカップを割ってしまった刹那。

その時は、朱音も笑って許したように思われたのだが……

第四十四話 朱音の仕返し

その日、僕と舞さんは朝早くに刹那くんの家に来ていた。

『明日の朝、九時までにうちに来て』

と朱音さんからメールをもらったからだ。

朱音さんは玄関で待っていた。

「おはようございます朱音さん」

「おはよう。待ってたよ二人とも」

朱音さんが笑顔で出迎えた。でも、なんか違和感がある。

「なんだろう？ 笑顔のはずなのに……背筋が寒くなるような顔を
させている気がするの？」

横を見ると舞さんも顔をひきつらせている。

そして、僕らは朱音さんに案内される。

「あの、朝早くにどうしたんですか？」

「ああ、是非とも見せたいものがあつたからね」

「見せたいものですか？」

「うん。まあ、見てからのお楽しみだ」

そうやって、話してるうちにかなり広い客間に招かれた。左手が
縁側で、庭にある猪おどしが軽い音を立てる。

そこで、アルトちゃんが座ってお菓子を食べていた。

「……しかも何故か母さんと兄さんと一緒に。」

「あつ、くうくん、まいちゃん。おはようございます」

「あつ、クウちゃん、舞ちゃん一週間ぶり〜」

「よっ。君らも呼ばれたのか」

ペこりとアルトちゃんが丁寧な礼をする。

「同い年だつて知ってるけど……やっぱりその姿でされると微笑ま
しく感じて、顔が綻んでしまう。」

そして、母さんと兄さんはひらひらと手を振ってきた。

「……なんで二人がいるの？」

一番の疑問を聞いてみる。

母さんはまだいいとして、兄さんはいつも音信不通でふらふらしてるのに、朱音さんどうやって捕まえたんだ？

「俺は、刹那とちよくちよく連絡取り合ってるから、その連絡手段で呼ばれた」

「わたしはね、昨日呼ばれて、大急ぎでここまで来たの」
母さんはのほほんと、兄さんにはやりと答えた。

「って、あれ？」

「そういえば、刹那くん居ませんね」

普段なら真っ先に僕たちを迎えに来そうなのに。

朱音さんは例の背筋が寒くなる笑顔で頷く。

「ああ、刹那なら」

そういつて、朱音さんは襖に向かう。そして、襖を開けた。

襖の向こうの部屋に、安らかな寝顔を浮かべた刹那くんがいた。

……簀巻きの状態で。

……なんだろう、安らかな寝顔と簀巻きのギャップが非常に痛い。

「あの、朱音さん？」

朱音さんはしゅと口の前で指をたててから、時計を確認する。

そして、刹那くんの上で手を広げる。

「……五……四……三……二……一」

順に一本ずつ指を曲げていつて、

「……零」

朱音さんがそう宣言した瞬間。パチツとタイミングよく刹那くんが目を開けた。

じいっとこつちを見て、それからもごもご口を動かすが、何もしやべれない。

当たり前だ。猿ぐつわ咬まされてるんだから。

「おはよ、せつちゃん」

「おはよう刹那」

僕と舞さんとアルトちゃんは、あまりの事態に固まっているのに、

母さんと兄さんは気にせず、刹那くんは軽く挨拶。

……母さん、兄さん、なんでこんな状況で普通に挨拶できるの？
それから、顔を動かして今自分の置かれてる状況を確認。それから僕らの方に視線を戻して、

「もがー!?」

暴れた。だけど、外れない。どうやら縄に術がかけられてるみたいだ。

「なかなか強力な術ね。何重も防護術が重ね掛けされてるからディスプレイも難しそうね」

「ですね。だからと言ってあれを解くとなると、力尽くは無理だな……」

などと、刹那くんにかけられた術の感想を漏らす母さんと兄さん。そっちなんだ二人の関心は。

そして、朱音さんは刹那くんの悲鳴と抜けようと暴れてるのを無視して、どこからかアタッシュケースを持ってくると、

ドスッ。

「びぐー！」

刹那くんのわき腹に勢いよく置いた。というか叩き付けた。妙な、そして痛々しい悲鳴が響く。

布団というクッションがあったものの、そのダメージに刹那くんは悶絶している。もの凄く痛そう。

朱音さんはアタッシュケースを開けて何かを取り出した。それは……大学ノート？

しかも、デザインやその汚れからかなり古そうなものだ。
い、いったい何を？

朱音さんは笑顔でノートを開き、にやつと笑った。

くしゃくしゃに丸められた後のある紙を、朱音さんがノートの間から取り出した。

「早速ですが、詩の発表をさせていただきます」

朱音さんが優雅に一礼。

って、何？ 詩？

僕の思考は追いつかない。だけど、母さんと兄さんはぱちぱちと拍手をする。

「待ってました！」

「朱音ちゃん、早く〜！」

ずいぶん楽しそうだね……

そして、朱音さんが優雅に詠いだした。

タイトル Dear My sister

なんでだろう？ この頃あの子の態度が冷たい。

どうしてだろう？ あの子の言葉がきつい。

なんでかなあ？ この頃あの子がかまってくれない。

Why My Sister?

それは、あの子がそういう年頃だから？

なら僕は待ち続けてあげよう。

前だって時間がかかったんだ。

きつとまた昔みたいに甘えてくれるさ。

I'll wait to the here .

天野 刹那作

制作日 妹に冷たくされた満月の夜

「以上です」

謡い終えた朱音さんがもう一度一礼する。

えつと……なに今の？ 理解が追い付かない。

僕と舞さんとアルトちゃん三人はいきなりのことに呆けてたのに、母さんと兄さんはなにかをわかっているのかうんうん頷いている。

「おお、なかなか痛くて面白い詩だな。意味なく入った英語に、疑問系の三連族。文章からにじみ出る自己陶醉と自虐心のコラボが実にいい。なかなか書けるもんじゃない」

「そうね、せつちゃんらしい内容ね〜。さすが、妹Loveのシスコンお兄ちゃん」

などと感想まで述べている。

見れば、刹那くんは思考停止に陥って止まってしまっている。

そして、僕らがきよとんとしていたら、朱音さんが高らかに宣言した。

「お集まりの紳士淑女のみなさま。お待ちせいたしました！ これより、天野 朱音プロデュース『刹那が私のお気に入りマグカップ割っちゃった記念 黒歴史公開ショー！』を始めたいとお思います。最後まで楽しんで行ってねー！」

パチパチパチ！ と、ものすごおっく楽しげな拍手。

……はい？

呆気にとられたまま刹那くんを見ると、その顔から血の気が引いて、怯えたようにカタカタ震えている。どうやら、理解したようだ。自分の状況を。

そして刹那くんは全力で暴れ出した。

「むが、ふもつふ！？」

猿ぐつわ咬まされてるから何言ってるのかわからないけど、少なくとも、刹那くんがとてつもなく焦っているのだけはわかった。それも、絶体絶命のピンチってくらい。

しかし、朱音さん特製のバインドは外れない。その動きはさながら断末魔入って苦しみにのた打ち回る芋虫だ。

そして、徐に朱音さんがノートのページを捲る。

「最初は刹那が自分のサイトで公開してるSSです！」

そんなことしてるのか。

でも、なんか聞いちゃいけない気がするし、

「あの、帰ってもいいで……すいません。ごめんなさい。なんでもありません」

朱音さんの底冷えする瞳に睨まれて慌てて座り直す。

隣ではひしつとアルトちゃんが涙目で舞さんにしがみついていた。

「だめだよクーちゃん。こういうのは最後まで出てなきゃ」

「そっだぞ空狐」

母さんと兄さん、二人が僕をなじってきた。

こうして、刹那くんの公開処刑が開始されたのであった。

第四十四話 朱音の仕返し（後書き）

鈴：「どうも、鈴雪です」

朱：「朱音です」

鈴：「今回は刹那が簞巻きにされてるので、代理は朱音にさせていただきます」

朱：「よろしくね」

鈴：「次回、ついに刹那が作ったSSが公表されます」

朱：「どっかで似たものを見たことのある方は温かい目で見守っててください」

鈴：「それではみなさま、また次話で会いましょう」

第四十五話 朱音さんの仕返し・重症

僕たちが見守る中、朱音さんはは持つていたテキストを開いた。簞巻きにされて猿ぐつわかまされてる刹那君がもぞもぞと暴れてるけど、完全に無視している。

はやての疑問に答えずにゲンヤは呟く。

「まあ、うちの娘たちも驚くだろうがな、八神、いや……」

恥ずかしい内容のSSが朗読されている。その間、刹那くんは暴れ続けているが、ぜんぜん効果がない。眼は涙目で、むぐーむぐーと悲鳴を上げる。

なんだか、陸に打ち上げられた魚みたいだ。

はい、すみません。現実逃避です。

でもね、そうでもしないと、僕は罪悪感で押し潰されちゃうから逆に母さんと兄さんは楽しそうに聞いている。

たまに「歳離れすぎー」とか、「いいぞゲンヤー！」と内容に対するコメントを入れている。

公開されているのは『魔法少女リリカルなのはStrikers』のSS。

Strikersは、なのはシリーズの第三期作品で、前作『As』の十年後、主人公のなのはさんとその親友フェイトとはやてが新部隊『機動六課』を設立し、新人フォワードたちとともに事件解決のため戦うストーリー！。

その内容から賛否両論ではあるが、僕はいい作品だと思っている。そして、登場しているキャラは八神 はやてとその師匠ゲンヤ。

はやてはなのはさんの親友で、古代ベルカ式魔法の数少ない使い手。四年がかりで自分の部隊『機動六課』を立ち上げ、その部隊長となっている。

ゲンヤは三期の主役キャラ、スバル・ナカジマの父親で、時空管理局陸士108部隊長。はやては一時期彼の部隊で研修をしていたこともあり、彼を師匠と呼び「信頼できる上官」と慕っている。

ゲンヤの年齢はわからないが、その髪と渋い外見。そして、彼の娘であるギンガとはやてが二つ違いであることを考えれば、かなり差があることははっきりしている。

ずっと憧れで目標だった人。不安も迷いもない。

「はい！ 私でよければ……あなたのお嫁さんにしてください！」

「以上です。ご静聴ありがとうございました」

朱音さんが晴れ晴れとした笑顔でノートを閉じて、優雅に一礼までしてみせる。その姿は……すごく楽しそう。

一方、刹那くんは真っ白に燃え尽き、はらはらと涙を流している。ごめん、刹那くん。友の窮地を助られない不甲斐ない僕を許して。

でもね……わかるでしょ？ あの朱音さんに逆らっちゃダメだつて。あとさ、慰めにならないかもしれないけど……割と面白かったよ？ 恥ずかしいけど。

ちらりと舞さんのほうを向くと、

「ねえ、アルトちゃん、アルトちゃんのお母さんってどんな感じ？」

「えっとね、綺麗で優しくてね」

いいなあ。あんな風な逃げ道あるんだ。僕は刹那くんと一緒に拷問ですよ？

「皆さんのご好評にお応えし
好評じゃないです。」

僕は心の中でツッコミを入れておく。口に出す勇氣はない。自分に向けての免罪符です。はい、認めましやう。僕は偽善者です。

僕の葛藤には気づかず、朱音さんは刹那くんのそばに転がって

たトランクの中から、さつきよりも古びた大学ノートを取り出した。「では続いて刹那初SS朗読します」

「むー！」

無慈悲に言い放った朱音さんの言葉に、刹那くんが復活する。

しかし、固く結ばれた縄はビクともしない。さらに、朱音さんがトランクを後ろに放り投げて、それが刹那くんのわき腹、たぶん鳩尾の辺りに角がジャストミート！ うわ、痛そう……

刹那くんは身を縮めて痛みに耐えていた。そんなことは気にせず、朱音さんは読み上げ始める。

「なのはこれ……」

フェイトがなのはにその手紙を渡す。

「えっ？ これってフェイトじゃん……」

いや……朱音さん、これはひどいですよ？

まだ文章が拙くて、誤字までそのまま……しかも百合だし。

さつきから兄さんも「誤字多いぞー」なんて言ってる。

でも、これは……

フェイトは思う。きつと大丈夫だと。

二人はきつく手を結んで、夕暮れの中、変えるのであった。

「以上です！」

数話分のSSを朗読した後、爽やかな笑顔で朱音さんが笑う。

朱音さんの顔はとても光り輝いて見えた。そして、刹那くんの方は突っつけば灰になって散っちゃってもおかしくなくらい燃え尽きていた。時折ぴくぴくと痙攣する以外はもう、動きの欠片もない。見ていて刹那くんの生命力を、文を読み上げることで朱音さんが吸い上げてくる気がしてきた。

うつ、ごめん刹那くん。僕は友達を助ける事もできないんだ。代わってあげたいって気持ちすら全然湧いてこない。だって、朱音さん怖いから。何されるかわからないし、それに君が朱音さんを怒らせたのが悪いんだから。

朱音さんも刹那くんの反応が薄くなつて心配になったのか、後ろを振り向いた。

「もう燃え尽きたの？ まだ数冊用意があるのに」

そう言つて朱音さんがさらに数冊のノートを取り出す。びくんと刹那くんが反応した。

朱音さん。あなたは鬼ですか！？ 僕の眼には、本来白いはずの彼女の翼が黒い……そう、悪魔か墮天使の翼のようにしか見えない。まあ、本物出てないからイメージですけど。

ん〜つと朱音さんは考える素振りを見せて、

「少しは喋らせてあげるか」

そういつて、刹那くんの猿ぐつわを外した。

「ぷはっ！ 朱音！ なんであの詩を持っているんだよ！ あれはお前に会う前に作つて、捨てたはずだ！！」

「遙ちゃんに決まつてるでしょ。あの子がゴミ箱で発見したのをくれたの」

「……あいつ、ゴミ箱で何してたんだ？」

「そんなこと私の口からは言えないよ」

朱音さんが恥ずかしそうに頬に手を当てる。恥ずかしいことなの？

さらに刹那くんは、朱音さんに噛みつく。

「だけど、朱音こんなことするなんて……俺になんか恨みでもあるのか！？」

刹那くんは朱音さんを睨みつける。

朱音さんにはにっこりと微笑み、

「うーん、恨み？ あたしはただね、お気に入りの人形を汚されたとか、お気に入りの服を乾燥機にかけられてしわしわにされたとか、人前であたしがかわいいもの好きなのを暴露したとか、子供がなか

なかできないこととか、猫を愛でてたのをこっそり観察してたりしたこととか、あたしの大嫌いなホラー映画を大音量で流したこととか諸々の仕返しがしたくなっただけだよ？」

刹那くんは視線を逸らした。

まあ、恨まれてもしかたないねそれ。あと、朱音さん、さらりと爆弾発言しないでください！ それにそれで刹那くんを恨むのも酷いと思うんですが！ ええ、ええ、言えませんが！

そんなこと考えてたら、兄さんが「刹那やりすぎー、あと、もう少しがんばったら？」なんてちゃかして「うっさい！！」なんて言い返されていた。

そして、朱音さんは僕らに振り返る。

「それでは、まだまだあります、刹那がサイトに公開してるSSオア自分でも恥ずかしくて消したものの問わずに公表いたしまーす！ちなみに、刹那のサイトは『黒白の図書館』というその構成の拙さ、アイディアのずれ加減が癖になる一日50Hitほどの上級者向けサイトですので、よかったらみんなHit数に貢献してあげてね…：恥ずかしさで身悶えるだろうけど」

にやりと朱音さんが邪悪に笑う。あ、悪魔だ…：悪魔がおるよ！チラツとも一回横を見ると舞さんとアルトちゃんはおしゃべりし続けてる。だけど、その額には汗がいくつも浮いていた。

にしても、本当に大当たりだったよ。朱音さんの言ったサイト、それは、僕がちよくちよく覗きにいくサイトだった。微妙に癖が似てたし、なにより、一話だけ僕の知ってる内容だった。

中身は中二病全開な内容が多く、SSにオリジナルのキャラを出したりして、とんでもない代物になっている。特に、ガンダム系の話ベースにしたSF長編もの『ブレイクガンダム』は、とんでもない展開だった。なのはさんが出てきたりもしたし。しかも、なぜか同人誌はマトモなのが不思議なサイトでもある。僕がそこを覗く理由は背中が痒くなるような話、ツッコミを入れたくなるような設定や展開が癖になってしまって気づけば覗いてしまうのだ。

みんなには言えないけどね。

ちらつと、母さんと兄さんを見ると……

「おっしやあ、もつともつとこつぱずかしいのお願いしまーす」

「セつちゃん、ファイオー。私はちゃんと聞いて里で言いふらしてあげるから」

のりのりだった。ああ、だから朱音さんは母さん呼んだのか、なんて納得もしてしまう。

そして、母さん、それは酷いから止めてあげて。と、言いたいけど、怖くて言えない。

「ちよつとま、もがー!？」

朱音さんの宣言と母さんと兄さんの言葉に刹那くんが何かを主張しようとしたものの、猿ぐつわを咬まされ止められたのであった。

第四十五話 朱音さんの仕返し・重症（後書き）

刹：「殺せ、いつそ殺せ」

鈴：「いや、死なれるのも困るから」

刹：「あとどれくらい続くんだこの拷問は……」

鈴：「あと、一回」

刹：「そうか、まだもう一回あるのか……」

鈴：「ど、どうしたそ、そんな危なそうなハンマー持ち上げて……」

刹：「ふふふ、お前を殺せば、この苦しみから解放されるはずだ

……」

鈴：「いや、待て。落ち着け。そんな事したらお前の活躍が」

刹：「ははは、問答無用！ 光になれ……」

鈴：「Nooooooooooooooooo！」

感想、評価楽しみに待ってます。

第四十六話 朱音さまの仕返し・峠

いくつかのSSの公表が終わると、朱音さんは今度はプロジェクターと映像を映すための暗幕を持ってきた。今度は何をやる気なのだろうか。

朱音さんは手際よくプロジェクターと持ってきたノートパソコンを繋げる。そして部屋を暗くして……

「これが刹那がある仕事で女学校に潜入した時の写真ね」

朱音さんが一枚の写真を映す。すでに刹那くんは諦めたのか朱音さんの宣言や説明の時にピクピクする以外反応が消えてしまった。

そして、映された写真は女生徒だと言われたら信じてしまいそうなほど完璧な姿。

「おお、恥ずかしいぐらいよく似合ってるぞ刹那。同じ男としては羨ましさは微塵も感じないが」

「そうねえ……朱音ちゃん、今度私からも服を送るねえ。あと、この写真データ後でちょうだい」

なんて楽しそうに二人が言うが、まあ、そう言いたい気持ちもわからなくない。

ウィッグ何だろうけど長く艶やかな銀髪と鋭く尖っているけど澄んだ蒼い瞳。長身のすっきりした人で、女子校の制服らしきものを着ている。制服は装飾を極力廃しているけどポイントポイントで女の子に好まれそうな配色とデザインをしている。

その姿は朱音さんと同じ芸術品のような印象を受けた。しかも、触れたら切れてしまう刀剣などの鋭く尖った感じの。

刹那くんも女装が似合うタイプなんだ。ちょっと親近感が湧いたけど、僕の方はどちらかというと、かわいいなんて言われるタイプだからかっこいいタイプの彼が少し羨ましい。いや、羨ましいなんて思っちゃダメだる僕。

「あの時はかわいかったなあ……たった数日で下級生に『お姉様』」

なんて呼ばれるようになったんだから。その後でもしばらくの間『おねーさまー』なんて呼ばれて追っかけられた事もあるのよ。正体がばれてもしばらく追っかけられてたっけ……」

ふーん、うらやま……いや、羨ましくない。そう呼ばれるのって何かが終わっちゃうらしいそんな気がする。それにラストのオチもすさまじく嫌だ。

「で、次はこれ」

そう言っつて、朱音さんが映したのは浴衣に包まれた女の子……つて、これも刹那くんか。化粧で分かりづらくなってるが、その顔は刹那くんの顔だ。

浴衣の方は、青い色の生地、ワンポイントに大きな向日葵が描かれている。すっきりしたプロポーションだから、浴衣とよくマッチしているし、恥ずかしげに顔を赤くしているのも初々しい感じがしてかわいらしい。まあ、こんな評価、本人は嫌がるだろうけど。

「これは、罰ゲームに負けちゃって、妹の遙ちゃんの命令で夏祭りの時にした格好ね。途中で服が脱げて大変なことになったけど……」
同情しよう刹那くん。僕も昔された。あの時はまだ子供だったから許されたけど、この写真を撮った時の歳を考えれば、変態扱いされるのは間違いないだろう。

その後も刹那くんの恥ずかしい写真がいくつか公開すると、朱音さんはふうとため息をついてプロジェクターを止める。

「じゃあ、今日はそろそろお開きね。一度にするとしつこいし」
そう言っつて朱音さんは襖を開く。その顔はとてもきらきらと輝いている。きつとすっきりしたんだな。

お、終わった……

ようやく発表会から解放されて家に帰ってきた。

「ただいま」

「おかえりー」

戸を開けて家に行くとイヴが出迎えてきた。この前の『顕現』

と神術を使用したことで減った神力を回復するために留守番をしていたのだ。

「ずいぶん長かったわね。朱音の用事って何だったの？」

イヴが舞さんの頭の上に座る。本人いわく、僕の頭はいい感じの座り心地らしいが、舞さんの頭も同じくらい座り心地がいいらしい。

「それはね……」

舞さんがイヴに話し出す。

「なっ……」

舞さんの説明が終わった後、イヴが顔を俯かせている。

そして……

「なんでそんな楽しそうなことに私を誘わなかったのよキーーーーッ
クー！」

舞さんの頭の上からイヴが飛び上がって僕にドロップキック！

「ぴきやー！」

僕は蹴り跳ばされて床に叩きつけられる。

すぐにイヴが地面に着地。僕はすぐに逃げようと起き上がって、

「留守番なんてつまんなかったわよパーンチ！！」

すぐにイヴの右拳が突き刺さって僕はノックアウトしたのであった。

俺、天野刹那は公開処刑のあと、やっと簀巻きから解放された。

それから、文句を言う気力もなくノロノロと自分の部屋に戻ってベッドに倒れ込む。

しばらくして、水が欲しくなった。台所行くか……

ベッドから起き上がり台所に向かう。と、途中の部屋で話し声が聞こえた。みんな帰ったはずだよな？ 俺は誰がいるのか気になつて部屋を覗く。中には……朱音とイヴ？

「人の寝言ってなかなか面白いわねー。その人間の心の奥を覗ける気分。刹那の場合はシスコンっぷりとトラウマね」

とイヴが評価するシーンだった。なんの話だ？　そして、みんな
シスコンシスコンって……自覚はしてるけどあまり言われたくない。
とっそこで朱音がテープレコーダーを持っているのに気づいた。
そこから流れてきたのは……

『うーん、はるかぁ、みじんこなんて言わないでくれ〜』
俺の声……！？

声にならない悲鳴を上げる。

「でしょ？　刹那が昼寝してる間にこっそりこっそりっていたのよ」
楽しそうに朱音が語る。ま、まさかまだ続いてたんですか？

そこで、朱音がこっちを見て……にやりと笑っいやがったあああ
あ！！　俺が見てるのに気づいたんだな！

さらに朱音が楽しそうに語り出す。

「本当はね、これも発表しようと思っただけで、文章は最初にか
なりしたからマンネリ気味かなって思っ止めといたのよね」

そう言っ朱音が出したのは……あ、あれっ……俺の作りかけ
の長編『アンダー・ザ・ムーン』じゃないか！

慌てて朱音を止めようと襖を開けようとするけど……ビクともし
ない。術がかけられてやがる！！

いくら力を入れても一向に開かない。そして……

かつて、一人の姫君がいました。名前は舞。愛らしい外見と優し
い心を持つ彼女は国中の憧れ。

しかし、ある日彼女は魔族の王、刹那に殺われてしまいました。

国中の人間が彼女を助けるために立ち上がりました。
その中には彼女の幼なじみの空狐も。これは一人の少年の愛の闘
いの物語。

朱音が朗々と読み上げる。

「くけ……！？」

ついに襖を殴り始める俺。だけど、襖を殴っている感触はなく、

返ってくるのはまるで鉄を殴っているような感触だった。

「あらあら、ついに友達の名前まで使い出しちゃったの……痛さここに窮まれりね」

チラツとイヴもこっちを見て笑った。てめえ、気づいてんなああああ！？

「くあああああー！！」

殴っても意味がなくなついに頭突きをし始める俺。

も、もうやめてくれー！！

しかし、二人は俺を無視したまま第二回黒歴史発表会を続けるのであった。

第四十六話 朱音さまの仕返し・峠（後書き）

鈴：「お疲れ様刹那」

刹：「や、やっと終わった」

鈴：「次で完全に終わるから」

刹：「うわああああん！！」

約一カ月ぶりの更新です。すいませんでした。それでも、評価、感想おねがいしまーす！

第四十七話 朱音さまの仕返し・臨終

朱音が俺の黒歴史を発表した日の夜、俺はパソコンを起動させて自分のサイトを開いた。

もう安らげる場所はここしかない。そう思って今日は更新ができなかったから先に新しいSSをアップして、それから拍手を確認する。

何人かから拍手が届いていて、日記に返事を書こうとして……

「えっ？」

一つの拍手に俺は固まってしまった。

そこに表示された名前は常連さんの『ソラ』さんだったのだが……『今日はお疲れ様。大変だったね。まあ、朱音さんもスッキリしたと思うからしばらくは大丈夫じゃないの？ by空狐』

あいつ、うちの常連だったのか……

さららと自分の体が灰になって崩れた気がした。

次の日の晩、宅配便で荷物が届いた。朱音は晩御飯の準備をしていたため俺が代わりに対応する。抱えるくらいの大きさのダンボールで贈り主は不明。割れ物注意とだけ書かれていた。

不審に思いつつダンボールを開ける。衝撃から中身を守るためのプチプチやシートなどをめくると、その中には……スポン、鰻、山芋、ツチノコの尻尾が入っていた。

さらに調べると段ボールの底にはドリンク剤が大量に並んでいる。ママシドリンクとツチノコドリンクがギッシリ。

この世界ではツチノコは二年前くらいに発見されている。その尻尾は栄養価が高く滋養強壮効果が非常に高い。味の方も一級品で価値段もなかなか。これを取り扱ってる店はまだ少なく、ドリンクも最近発売されたが、値段は四千円ほどするはずである。それが、こんなに……

そして、中に一枚のメモが置いてあった。

『これ飲んで食べて頑張つてね　by木霊』

……………すぐに処分しなければ!!

大急ぎでダンボールを持って逃げようとして、

「あらあら、なかなか高価なものをいただきちゃったわね」

すぐ後ろから声がした。ゆっくりとギリギリ音を起てながら、後ろを振り向くと……………そこにフライパンを持ったままの朱音がいた。

その顔はすごく楽しそうな笑顔であった。

「これは、送ってきた人のために今夜は頑張らないとね」

そう言つて、朱音はダンボールを抱えたままの俺の首筋を掴んでずるずると引つ張つていくのであった。

次の日……………

「せつ、刹那くん、どうしたの?」

教室に入つて、席に行くと、刹那くんはげっそりとして机に突っ伏していた。な、何があったんだ?

刹那くんがノロノロとこっちに顔を向ける。目の下にはクマが浮かんでいた。いや、まさに何があったんだ?

そして、刹那くんはじつと僕を見て……………

「怨むぞ、空狐、お前の兄貴か母ちゃんを」

そう言つてまた机に突つ伏する刹那くん。

……………母さん、兄さん、あんたら刹那くんに何をしたのさ。こんなによつれることを。

その日の帰り、買い物をしていた朱音さんに会った。刹那くんとは逆になんかつやつやびかなような……………そんな感じを受ける。

朱音さんは楽しそうな笑顔で、

「あ、空狐、月狐か銀狐にありがとつて伝えといて」

それだけ言つと朱音さんはよほど上機嫌なのか鼻歌を歌いながら買い物に戻つて行つた。

いや、まじで何したのさ、うちの家族は？

第四十七話 朱音さまの仕返し・臨終（後書き）

刹：「やっと、終わった……」

鈴：「はい、ごくろうさま刹那。次回もよろしく」

刹：「まだなんかあるの!？」

鈴：「これからずっと朱音の尻に敷かれることになるから」

刹：「ぎにゃあああああ!！」

やっと刹那弄り編終了、評価、感想おまちしております。

番外4 狐火 Star Dust Memory(前書き)

悪ノリな内容です。

番外4 狐火 Star Dust Memory

舞さんと再開してそろそろ一年。ドタバタして賑やかな日々がずっと続いていく……そう信じていた。

この時は

それはある日のこと、刹那がパソコンのデータを整理していた時であつた。

- - 666層あるプロテクトがいとも簡単に……

刹那は研究データが何者かによってクラッキングを受けた痕跡を

発見する。

それを引き金に事態が急変する。

突然の倉田家への襲撃。

謎の敵になすすべなく打ち倒される空狐……

- ま、舞さん……

- 空狐くん！ 空狐くん！！

そして、連れ去られる舞。

- 何なんだよこいつら！

- 人間でも、妖怪でもない？

月狐と銀狐に襲いかかる黒い影の群れ。

- 世界はあるべき姿に戻る……邪魔しないでもらおうか！

- ヤバいかもね……

空狐を打ち倒した男と対峙する朱音。

- あなたたちがしていることは正しいんですか？

- 正しい正しくないは関係ない。ただ必要なの……

舞は『敵』と対話する。

- 破壊する。

- なんなのこいつ？

- 邪魔するな！！

舞を捜す空狐とアルトに立ちふさがる刹那がかつて作り上げた悪

夢の兵器『RA-00』

- あなたと一緒に戦うのは久しぶりですね。朱音さん。

- 圭一、無駄口叩かない。

朱音に呼び出され、戦闘に参加するアルトの母圭一。

- 俺も行くか。

そして、ついに刹那も動き出す。

空狐は皆の助けによって敵施設に侵入に成功する。しかし……

- 倒します。

- 舞さん？！

- あれは……私の槍？！

空狐を待ち受けたのはイヴの槍を持った舞であった。

その間に最深部まで侵入した刹那は敵首領と対峙する。

- - あなたが黒幕か。

- - もう遅いよ。誰にもあれは止められない。

戦闘に参加する者たちのまえで浮上する敵本部『箱舟』

- - イヴ、最後まで……付き合ってくれる？

- - なに当たり前のこと聞いてんの？

遙か高みで箱舟に対峙する空狐とイヴ。

- - まさか……やめろ！ 空狐！！ できるわけない！

刹那が止めるが遅い。

- - 破壊する！絶対に！

- - 天月、全神力全力解放。アストラエア・バスター、チャージ！

光の中に消えていく空狐……

- - ごめん。舞さん、約束守れないや……

- - 空狐くん！！

劇場版 狐火 STARDUST MEMORY

2009年秋公開未定！

「いこう……イヴ」

そして少年は星になる。

「って、どこのガンダムだー！！」

僕は盛大にツッコミながら跳ね起きる。そして、いつも通りの自分の部屋を見て安心した。

とっ、そこでコンコンとドアを叩いてから舞さんが入ってきた。

その表情はなんか心配そう。

「大声出すなんてどうしたの？」

「あつ、ごめんなさい。何でもないです」

そう言っていると、舞さんは「そうなの？」と納得してくれて部屋から出てくれた。

あー、おかしな夢を見たー。STARDUST MEMORYつて、ガンダムか？ 頭頂部の狐耳をかき、尻尾をくねらせながらため息をつく。

STARDUST MEMORYは、ジオン公国残党のアナベル・ガトーがガンダム試作二号機を奪って起こした戦役で、主人公コウ・ウラキたちは、彼らが行う『星の屑作戦』を止めるために戦う物語。アルトちゃんはスタイル抜群の背の高い美少女になってるし、噂に聞く圭一さんの装備がアホみたいでかく、火薬庫のように重装備の……例えるならデンドロビウムみたいなもの。

補足としてはデンドロビウムとは『STARDUST MEMORY』に出た主人公機で、ガンダム開発計画で造られた三番目の機体の愛称。モビルスーツとモビルアーマー両方のいいところどりをしようとした野心的な機体だ。

圭一さん自身は簡単に言ってしまうえば、アルトちゃんが成長したらそうなるであろう美人で、目の色が紅くなく瑠璃色だった。

まあ、本人は見たことないから想像するしかないんだけど。

「なんでこんな夢見たのかな？」

僕はポリポリ耳をかきながら悩むのであった。

そして学校で、

「聞いてくれよ空狐」

休み時間に刹那くんがいきなりそう言ってきた。この頃刹那くんとは、前よりよく話すようになった。主にテレビや漫画だ。刹那くんは隠していた趣味はバレちゃったし、僕も話せる相手がいるのはなんかいい。

先日舞さんにはれないようにしながらゲームも借りた。え？ な

んで隠すか？ だって、ばれたらやばいに決まってるからじゃないですかいろいろと。

「なに？」

「昨日さ、友達にメールで同人誌のプロット送ろうとしたら、こっちじゃ届けたことになってんのに、あっちじゃ届いてないことになってたんだよ」

「ふーん」

そんなことがあるんだ。

僕は適当に相槌を打ちながら聞く。

刹那くんは続ける。

「結構自信作だったのになあ。『狐火 STARDUST MEM
ORY』」

ゴガン！

気づくと、僕は机に頭を叩きつけていた。

えっと……今なんて言ってた？

刹那くんが訝しげに僕を見る。

「どうした？」

「いや、何でもないよ。それより、あの、刹那くん……それって？」

ああっと刹那くんが頷く。

「お前が主人公の映画って設定の長編でな、舞さんが謎の敵に浚われて、俺たちが助けるって内容」

それを聞いて、また机にヘッドバット。

もしかして、今朝の夢って本当に電波受信してしまったからか？

何者だよ僕は……

ん？ そういえば、

「なんで STARDUST MEMORY？」

「ラストでお前がお星様になりかけるから」

ひでえ。

その後、僕は病院に検査のために行ったことだけ明記しておく。

番外4 狐火 Star Dust Memory (後書き)

刹：「なあ、鈴」

鈴：「なんだ刹那？」

刹：「お前、馬鹿だろ」

鈴：「君もな。一応君が作る同人って設定なんだから」

かなりアホな内容ですが見捨てないでください。

第四十八話 転校生ですよ。

それは黒歴史公開から一週間後ほど、そして、温泉に行ってから二週間後のことだった。

あと一ヶ月で夏休みと楽しみな頃にいきなり転校生がうちのクラスに編入されると先生が言ったのだ。

一週間前に聞いてはいたけど、てっきり別のクラスに行くかと思っていた。

「じゃあ、入ってきて」

先生がそう言うと、扉が開いてその人物が入ってきて……へっ？ 僕はその入ってきた子を知っていた。舞さんも、刹那くんも知っているはずの子だ。

だって、壇上上がったのは、金髪に紅眼の将来きつと美人になるだろうと思わせる綺麗な造形の顔を持つ見た目は小学生ぐらいの女の子、すなわち……

「アルト・テストロッサです。よろしくお願いします」

そう言っただけだった制服を着たアルトちゃんがペコリと頭を下げる。

教室中で「きゃー、かわい〜」なんていう女子の黄色い声と「おおー」なんていう男子の感嘆の声が上がるのであった。

休み時間になるとみんながアルトちゃんの周りに集まる。アルトちゃんの席は僕の隣の隣、つまり舞さんの横だった。

時々女子から「かわい〜！」「お人形さんみたい！」「はうて、おもちかえり〜」なんて声が聞こえた。いや、最後のは犯罪じゃね？ それより……

「ねえ、刹那くん、なんでアルトちゃんがこの学園に？」

「それは、俺もよく知らない」

知らない？ どうして？

僕の疑問に気づいたのか刹那くんが続ける。

「いやな、朱音がいきなりうちの学校に通わせるからって言い出したんよ。俺が聞いた時はもう編入手続きも済んでたし」

ふん。そう言えばアルトちゃんって僕たちと同じ年なんだっけ。忘れてた。

ちらつとアルトちゃんを見ると、舞さんがみんなに順番に質問するよつに指示を出していた。

「ねえねえ、本当に同い年？」

「本当だよ。アルト、ちゃんと十五歳だもん」

転校生は大変だね。

「完全に馴染んで忘れてるかもしれないけど、お前も転校生だったんだぞ？」

久しぶりに心を読まれたな……

そして、授業となるとアルトちゃんの意外なスペックの高さが浮き彫りになった。たとえば一時間目数学の時間。さっそくアルトちゃんは先生に指名された。問題は、

次の式を因数分解しなさい。

$$(x + 3)(x + 1)(x - 2)(x - 4) + 24$$

である。そして、

「この答えは $(x - 3)(x + 2)(x^2 - x - 8)$ ですか？」

ぱつと見ただけで数学の問題の答えを答えた。たぶん先生にあってられて一秒か二秒、つまり一瞬。あらかじめ答えを知ってるようだ。

先生も啞然としていた。見た目は小学生ぐらいの女の子だから、少々甘く見ていたのだろう。逆に生徒のみんなはかわいらしく小首を傾げて聞くアルトちゃんの姿にみんなおっとりした雰囲気包まれていたのであった。

そして昼休み、四人でご飯を食べる。まわりで女子たちがアルトちゃんの見える位置で昼ご飯を食べていた。

そして、四人で談笑しながら食べている時であった、

「あ、アルトちゃん。ピーマン残してる」

と、舞さんが指摘する。

本当だ。野菜炒めからピーマンだけ取り出して弁当箱の蓋に乗っけてる。すると、アルトちゃんは半泣きの顔で、

「ピーマンきらい〜」

と言った。周りで女子がまた黄色い声を上げる。

アルトちゃん、わかる。ピーマン嫌いなよくわかるよ。苦いし匂いもあまりよくないよね。

すると舞さんが、

「ダメだよアルトちゃん、好き嫌いなんてしてたらママさんみたいな美人になれないよ？」

とアルトちゃんをたしなめる。その一言が効いたのか、アルトちゃんはうーっと目尻に涙を浮かべながらもがんばってピーマンを食べるのであった。偉い偉いよアルトちゃん。

後で、舞さんになんであんなこと言ったのか聞くと、

「えっ？ あらかじめ朱音さんが教えてくれてたんだよ？」

予想してあらかじめ舞さんに対処法を伝えてたんだ。でも、知ってたなら最初から

入れなければよかったのに。まあ、好き嫌いはよくないけどさ……

第四十八話 転校生ですよ。(後書き)

鈴：「みなさん！ ピーマンってあまり食べたくないですよね？」

刹：「小学生みたいな主張すんな」

鈴：「だって……」

刹：「我慢して食べなさい」

鈴：「お母さんかよ」

直しました。間違えてすいません。次からは注意します。

途中の問題ですがXの横の2は二乗の2です。

評価、感想お待ちしております。

第四十九話 演劇部の練習

そして放課後、僕らは部活に出る。それにアルトちゃんがついて来た。

僕らが何をするのか興味があるみたいだ。

龍馬とハルもこの場にアルトちゃんがいることに少し驚いていたが、すぐに気を取り直していた。

「みんな、あと一週間で本番よ！ 気合い入れて……ちゃんと話し聞いてよ」

桜子先輩が肩を落として訴える。なぜならば、女子のみんながアルトちゃんを「かわいい！」と愛でていたり「ねっねっ、君も演劇部に入らない？」と勧誘したり、お菓子をあげたりしているからだ。みんなごめーんと謝って散る。

「こほん、では改めて……気合い入れて行くよ！」

「……おー……！」

「は！」

「ふっ！」

殺陣のシーンで、石田先輩と木刀で打ち合う。

「はいカーッ」

しかし、途中で止められた。桜子先輩がこっちに歩いてくる。

「確かに二人で好きに打ち合えて言ったけど、空狐ももう少し手加減してあげて。一回目は君の方が負ける予定なんだから」

むう。それでも手加減してるつもりなのに。

僕は木刀を見る。天月より短い、小太刀ほどの長さ。普段使わないタイプだけに思ったより手加減できてないのかもしれない。

「なんか、自分の後輩で背も低い相手に手加減されるのも悲しいものがあるなあ」

ぼそつと石田先輩が呟く。それを聞いて龍馬とハルがげつと呟い

た。

小さい？ ふふふ、小さいですか？

「じゃあ、もう一度スタート！」

桜子先輩の合図に僕は笑いながら飛びかかるのであった。

その後、一回目はちゃんと手を抜いて負けてみせた。だが、二回目はちよおっとだけ本気になって木刀を叩き折って勝利するのであった。

もちろんその後には備品を壊したことが、あっさり勝ちすぎと桜子先輩に怒られる僕なのであった。

稽古が終わる頃には外はだいぶ暗くなって夕暮れ時になっていた。日が落ちるのもだいぶ遅くなってきたな。

四人で話しながら帰る。

「くーこくん上手だったよ」

「そうかなあ？」

「そうだよ。初めの頃よりずっとうまくなったよ。きっと才能あるよ」

と舞さんも褒めてくれる。

そうかな？ まだ初めて一カ月くらいだし、自分ではよくわからない。

横では刹那くんは自分に指を指してアピールしているが、誰も反応しなくて肩を落とした。

「みんなが劇するのたのしみ」

アルトちゃんが嬉しそうに笑うのを見て、頑張らなくちゃという気になる単純な僕であった。

〈刹那 view〉

夕飯の時間。我が家はご飯とハンバーグに蒸かしたジャガイモ、そしてサラダと味噌汁であった。

「今日学校どうだった？」

食事中に朱音がアルトに聞く。

「うん！ 楽しかったよ。みんな親切でね、それから」

楽しそうに朱音に今日の出来事を話すアルト。朱音はその言葉に相づちをうちながら答えている。

よし、今なら話に集中してるから！

その隙にサラダに入っていたセロリを大皿に戻そうとして……

「刹那好き嫌いせず食べなさい」

一瞬で横に回り込んだ朱音によって阻止されるのであった。

第四十九話 演劇部の練習（後書き）

鈴：「久しぶりに演劇部の風景かいたな」

刹：「お前この設定忘れてたろ」

鈴：「そんなことないよ〜ぜんぜんないよ〜（棒読み）」

刹：「棒読みになってるぞ」

評価、感想お待ちしております。

第五十話 文化祭は何をする？

「みなさん。二学期に行われる文化祭について相談したいと思います。何か案がありますか？」

壇上で委員長の笹瀬川さんが全体を見回す。文化祭かあ。準備を考えて今から考えるらしい。ふむ……笹瀬川さんって、本当に委員長の姿似合っている気がするな。髪を後ろで三つ編みにし、眼鏡をかけている。なんかぴったり過ぎてわざとやってるんじゃないかと疑いたくなる。

みんなが「喫茶店！」「たこ焼きの屋台！」などなど、どんどん意見を出していく。僕は……いいや。面白いの思いつかないし。

そして、舞さんも手を上げて、

「仮装喫茶なんてどうかかな？」

あらら、誰か言うとは思ってたけど舞さんが言うとは思わなかった。「色んな衣装用意すれば、きっと楽しいと思うよ」

舞さんがチラッと楽しそうに僕を見る。なるほど、僕に女装させる気ですね。わかります。ならば反撃を用意しなければ！部活に続いてこっちでも女装だけは阻止せねば！

「では、これらの中で反対の意見がある方！
すかさず僕は手を挙げる。」

「はい、木霊君」

笹瀬川さんが僕を指す。

「仮装喫茶は衣装を借りたりするのにお金がかかりすぎると思いますが。それに許可がありますか？」

決まった。そう確信した。だけど、

「そこで私の出番！」

朱音さんがトランクを持って教室に入ってきた！なんで？！

「朱音さん！？」

「朱音おねえちゃん！？」

「朱音先生？」

いきなりの朱音さんの登場に驚く僕ら。んっ？ 朱音先生？

小泉先生が朱音さんに笑顔で近づく。

「お久しぶりです。朱音先生」

嬉しそうに朱音さんに話しかける先生。えっ？ 朱音さんって先生の先生だったの？

みんなは突然現れた美人に見惚れてからその言葉に驚いていた。

「久しぶりね小泉さん。先生になったって手紙あったけど直接見れて安心したかな」

朱音さんが先生に微笑みかける。

「はい！ ところで、何で先生がここにいらっしゃるんですか？」

先生の疑問はもつともでみんなが頷く。

朱音さんはああっと微笑んで、

「舞ちゃんに衣装頼まれて持ってきたの。それから刹那、何でさっきから視線を明後日の方向に向けてるの？」

見れば刹那くんは視線があらぬ方向に向いている。どうやら他人の振りをしているみたい。

「いえ、どちらさまでしょうか？」

視線を戻して刹那くんが首を傾げる。その表情、動作は完璧なまであんたのことは知らん。と感ずるほどの役者っぷりだが、逆に白々しさ全開な行動であった。

朱音さんはふむつと頷いてから、スカートの下に手を突っ込んでノートを取り出した！ 常に携帯してるんだそのノート！

「突然ですが詩の朗読を」

「ごめん朱音。俺が悪かった」

刹那くんが土下座した！ 弱い、弱いよ刹那くん！！

先生は首を傾げて二人を見比べる。

「あの……先生は天野くんとお知り合いなんですか？」

「同居人」

二人ともほぼ同時だ！

「なんだ、恋人とかじゃないんですか」

「いやいや」

残念そうな先生に二人とも同時に答えて手をひらひらさせる。息あつてるなあ。

さらに先生が続ける。

「でもお二人ともお似合いだと思いますよ。息ぴったりで」

「そうかなあ？」

「はい。まるで長年連れ添った夫婦みたいで」

「……ありがとう」

二人ともポリポリと頬をかいてから、似たような引きつった笑顔で視線を逸らす。ここまでいくと漫才を見ているようだ。

「で、では、朱音さん？ でしたね。そこで私の出番とはどういうこと？」

笹瀬川さんがやつと朱音さんに質問する。

「ああっ、衣装ならうちにくらでもあるって意味だよ。ほら」

朱音さんがトランクを開けて取り出したのは様々な衣装だった。

メイド服、ゴスロリ、衛士強化服、ピカチュウ着ぐるみ、e t c .
e t c . トランクに入りきったのか不思議なくらいたくさん衣装を取り出していく。

「どう？」

これでは僕の言った衣装の用意云々はなしになって……あれ？
いつの間にか席があんな遠くに？ それに何か苦しい……

それもそのはずだった。舞さんが僕の服の襟を掴んでズルズル引きずってんだから……気づけ！ 引つ張られた時にすぐ気づけ僕！！
舞さんは壇上の朱音さんのところまで来ると、「これ借ります」
なんて言つて、衣装の一つをとつた！

「ま、舞さん……一体何を？」

僕は予想できたけど……舞さんはとてもいい顔で振り向く。

「こんなかわいい服があるなら着せてみなくちゃ！」
「やっぱり〜！」

「ま、舞さんさすがに学校でそれは……」

「うふふ。問答無用」

「ぎゃあああああああ!!」

僕はしくしく泣きながら教室に入る。これは、もういじめですよ

……

僕が着ているのはゴスロリメイド服。舞さんの大好きなフリルやレースをたっぷりあしらった一品で、少し大きかったけど、無理やり着せられた。髪にもすっかりウィッグをつけられている。

教室中でおおっというざわめきが起こる。うう、なんでこんなことに。

「まあ、残念だったな」

ぼんつと僕の肩を叩く刹那くんはいつの間にもやら、僕と同じくウィッグをつけて髪を長くし、髪留めをバツテンにつけて、右と左で長さの違う靴下を履き、腰回りに前が開いたスカートのようなパンツを付けているのはで登場したキャラ、リンフォースツヴァイの格好だった。背が高いし、雰囲気は違うが髪と目の色は近いからまあ似合わなくもない。

「わああ、くうくんかわいい〜」

同じくメイド服に着替えたアルトちゃんが抱きついてくる。君もいつの間に着替えたん？ 困っていると数名が「萌え〜!」とかいって携帯で撮ってる。朱音さんもいるし!

なんだなんだ!? ここはいつから夏や冬の有明の会場になったんだ!?

「ま、まったみんな! まだ学校の許可取れるか分からないし」

そう、こういうものはきつと学校側もうるさいはず。

「許可は私が出そう」

一瞬だけドアを開けて瀬戸先輩が宣言して、すぐに閉めて出て行った。僕の希望も同時に閉められた気がした。何したかったんだあんな。

こうして、満場一致でこのクラスは仮装喫茶の出店を決定した。
僕の女装とともに……しくしく。

第五十話 文化祭は何をする？（後書き）

鈴：「ついに五十話！」

刹：「よかったな」

鈴：「これからも応援お願いします！」

評価、感想お待ちしております。

第五十一話 初舞台です！

公演日がやってきた。僕は指示通りこの学校の女子用制服を着ている。スカート履いても抵抗感がまったくなくなってたな……ううう。

衣装に着替えてからそつと観客席を覗くと、思ったより人が来ていた。

舞さんもいるし、演劇部の人間はなかなか粒揃いではあるから予想してはいたけど、ここまでいるなんて……

「すごいね」

思わずそう呟いてしまう。

「そうだな」

刹那くんも一緒に覗き込んでいる。

しばらく様子を観察してから、楽屋裏に引っ込むと、ちょうど桜子先輩が話を始めるところであった。

「いいみんな、いよいよ本番。練習をみっちりして、リハーサルも上手く行った。あとはみんなが頑張れば絶対に上手く行く。だから……」

そこで桜子先輩が一度切って、

「成功させるよ！」

「……はい！」

こうして僕の初舞台が始まった。

この劇の内容は簡単に言うと、吸血鬼になってしまい引きこもってしまった義妹を持つ兄弟が彼女と昔のような関係に戻ろうと努力する話である。

そして、その一番最初のシーン。姉である忍が妹の遥の部屋に自分を作ったロールキャベツを持って行くところ。

「遥、遥の好きなロールキャベツ作ってみたんだ。お義母さんみた

いにおいしくないかもしれないけど、食べてみて」

僕はそう言いながら震える手で小道具の皿をドアの前に置いて幕の後ろに下がった。

心臓はバクバクで、人前で演技するということに尻尾がぴーンと立ってしまっぐらいに緊張してしまっ。

胸を押さえて呼吸を落ち着かせる。

「大丈夫空狐くん？」

演技を終えた舞さんが心配そうに聞いてくる。

「はは、さ、さすがに緊張してます」

正直に話す。隠しても仕方ないしすぐバレるだろうしね。

すると舞さんが嬉しそうに笑って、次の瞬間、舞さんに、柔らかく抱き締められていた。

えっ？

僕が困惑する前に、

「大丈夫、大丈夫だよ」

ポンポン僕の背中を叩いてくれた。

「ま、舞さん!？」

かなり恥ずかしい。だけど、そうされていて気づいたことがあった。

舞さんの心臓もけっこう強く鳴っていたのだ。舞さんも緊張してるんだ。そう思ったら少し心が落ち着いた。

「ほら、そのバカツプル二人の片割れ、もう出番だぞ」

冷やかすように刹那くんが言うと、舞さんが少し顔を赤くしながら離してくれる。

「ファイトだよ」

舞さんの言葉に頷く。もう、心は落ち着いていた。

そして、僕は舞台に向かった。

「おめでとう遥、武」

僕はウエディングドレス姿の舞さんとタキシード姿の刹那くんに

微笑んでみせる。

困ったような笑みだと賞されたが、忍は義弟の武が好きだという設定があるからこういう表情がいいらしい。

正直に言えば、忍の気持ちはわかる気がする。

自分の好きな相手が自分と違う相手と結ばれる姿、僕にも降り懸かるかもしれない姿、その時、僕はどんな表情をするのだろうか？

幕が閉まり舞台が終わる。そして、

「「「せいこー!!」「」」

みんなて手を叩き合う。

みんな口々によかったや、楽しかったと感想を言う。

興奮しながら僕らは片付けを始め、部室に戻る。

「みんなおめでとう！ 次の文化祭での公演もこの調子で頑張って行こー！」

桜子先輩の言葉にみんなおーっとなを上げるのであった。

次の日、僕らが学校に登校すると……

一切に人が集まってきた。な、なんだ？ 最近はナリを潜めていたMSNか？

しかし、僕の予測は斜め上に抜けられる。なにせ、九割が女子であつたのだ。

そして……

「木霊くん付き合って！」

……はい？

僕が困惑していると矢継ぎ早に女子が言葉を投げかけられる。

「昨日のかわいかった！」

「ファンになっちゃった！」

「でも、どちらかというとかわいい系が似合うと思うな」

ええっと、昨日の僕の姿が意外と受けた？

横では刹那くんが自分を指差して必死にアピールしてたが誰も取

り合ってくれなかったので肩を落としていた。

助けを求めて横を見ると、舞さんは……笑顔だった。しかし、なんだらうこの背筋に走る悪寒は？ 前もどこかで感じたような……ああそうだ、朱音さんの笑みだ。笑ってるけど笑ってない笑顔。そして、

「もてるんだね〜くうくんは」

棒読みのできうる限り感情を抑えたような声でそう言ってから、僕をしり目に先に行ってしまった。その途中、男子の一人が声をかけたが、すごい顔で睨んでその生徒をビビらしていた。ええっと、どうしよう？

僕は女子（+少数の男子）に囲まれながら困惑するのであった。

第五十一話 初舞台です！（後書き）

鈴：「おつかれみんな」

刹：「大変だったよ」

鈴：「文化祭も頑張れよ」

刹：「……嫌なこと思い出させないでくれ」

「これ買って空狐！」

イヴが槍にぶら下がりながら頼んでくる。値札を見れば、『模造槍 三万九千八百円』まあ、大丈夫かな？

「適正価格の三百九十八億で！」

「無茶言うな」

思わずツツコムと、舞さんがトントンと肩を叩いてきた。

「おじさん見てるよ」

まあ、そうだろうな。普通の人間にはイヴは知覚できないから、端から見れば僕は頭がおかしい人間に見えるだろう。

しかし、イヴはお構いなし。

「いい？ 空狐、この槍はね……」

「ごによごによと僕に、この槍をさっき言った価格で買って欲しい理由を耳打ちする。」

それで僕は納得すると同時に彼女と同じ気持ちになった。

ただどね、さっきの金額は無理だから……

舞さんに、槍を見てもらっている間に銀行に行ってお金を卸す。

それから店に戻って、

「この槍を三十八万九千で買います。お釣りはいららないです」
十倍の値段で購入したのであった。

家に戻って新聞紙にくるまれた槍を取り出す。

見た目はファンタジーものに出てきそうな、刀身と柄の間の宝石を中心に装飾がなされた槍。だけど、今は宝石が割れ、装飾が剥げ落ちたボロボロ。しかし、僕らはこれが何なのか知っている。

「あーん、私の槍！ こんなにくたびれちゃってえ！」

イヴが泣きながら槍に抱きつく。

そう、これはかつて天月とともにイヴが所持していた武器の一つ。

神槍『ガングニル』……名前パチモン臭いって言わないでね。

まあ、今回は彼女に同意だ。あの値段は傷つく。だからと言って三百九十八億は行き過ぎだ。買えるわけがない。（本来なら値段が

付けられないほどの価値だから三百億でも安いかもしれないけど）スリスリ頬ずりするイヴを舞さんがいつかのかわいい表情で眺めている。

「よかったねイヴちゃん。空狐くんもこれでパワーアップだね」
確かに。一級クラスの神器を二つも持っているなんて滅多にないだろう。

「ああっ、無理よ。空狐がこれを使うなんて」
スリスリ頬ずりしながらイヴがキツパリと言い切る。そこまではつきり言い切られると傷つくわ。

「普通なら神器は一人一つがやっとね。空狐は確かに私と相性がいけど、それでも荷が重いわ」

あらら。じゃあ宝の持ち腐れ？

「でも、ボロボロよね。自己修復能力もなくなっちゃってるわ」

イヴが悲しそうに槍の宝玉を撫でる。それはそうだろう。力の中核であるはずの宝玉が壊れてしまっただけは修復なんてできるわけがない。

「槍の意志も死んじゃってるし、仕方ないね。私の力を注ぎ込んで直してあげなくちゃ」

そう言っただけでイヴは槍の上で手を広げる。そして、その掌から淡い光が伸び、槍を包み込んで……

甲高い金属音にも似た音を立ててイヴが弾かれた。

えっ？

イヴも尻餅をついたまま困惑した様子で槍を見る。

僕は槍を持ち上げてみる。変わらずボロボロだけど、先ほどより

も神力を感じる。成功したのかな？

「だめね。久方ぶりに神力を受けたからかわかんないけど、槍が突然与えられた力を拒絶しちゃったみたい」

なるほど。例えるなら風邪とかで弱った人にスッポン鍋を食べさせるみたいなものか。胃が受け付けずに拒否反応を出すみたいに。

イヴがパンパンとお尻を払う。

「こついう時はあの子に頼まないかね」

そう言っつてイヴが僕の頭の上に飛び乗ろうとして……

べちゃっつと地面に叩きつけられた。

ありゃ？ 舞さんもキョトンとしているけど、いきなりのこと本人もわかってないみたい。地面に叩きつけられて真っ赤になった顔でこつちを見る。

すぐに起き上がって、もう一度飛んでみようとする。手を振って、屈伸させた足で思いつ切り地面を蹴って飛ぼうとする。だが、すぐに地面に着地した。見た目は殆ど幅跳びだ。

むむむっつとイヴが顔をしかめる。そして、もう一度飛び上がろうとする。今度は目を強く瞑り顔を真っ赤にて、必死に背中中の羽根を飛ばたかせながら。

おっ？ っ少しだけ飛んでいるぞ。がんばれイヴ。舞さんも初めて自転車を漕ぐ我が子を見るお母さんのような顔で「がんばれー、がんばれー」と応援している。

だけど、本来見た目通り飛ぶための機関ではなく、神術を使うための機関である羽根で長時間飛べるわけなくペタンとすぐに地面に着いてしまう。

しばらくみんな黙っていたけど、イヴがあははと笑う。

「力……使えなくなっちゃったみたい」

第五十二話 力をなくしたイヴ

「たぶんあれだ。この槍にも天月みたいにイヴが憑く機能があったんだろうけど、誤作動で力だけ取り込んでしまったんだろうな」

こんこんとスパナで刹那くんが槍を叩く。イヴが言った、神器の修繕ができるというのは刹那くんだったのだ。ビックリだね。世界って狭い。

あと、イヴを舞さんに見てもらってる間に槍を刹那くんのところに持ってきたのだ。

「破損状態も悪いし、完全修復は難しいな……力の中枢の宝玉だけ取り出して直してから新しく身を創るほうが良さそうだ」

槍を観察して刹那くんが結論付ける。大丈夫かな？ いや、疑ってる訳じゃないけど心配で心配で。

「宝玉だけでも直せばたぶんイヴの力も出せるから……まあ、しばらく待ってくれよ」

「うん」

刹那くんはそう言って槍をポンポン叩く。

まあ、専門外の僕は何も言えず、任せるしかないんだけどね。

「で応酬は？」

ちやつかりしてるなあ……

僕は母さん名義の小切手を切って刹那くんに渡す。一言付け加えるとその額は先ほど僕が払った額の百倍である。だけど、

「うーん、できたらもう一声」

無理です。確かに価値に対して安いと思うが、さすがにうちはかなり裕福だからとはいえそこまで出せないのだ。しかし、刹那くんは「神器なんて難しいものやるんだから」なんてねだるけど、

「うっじむし、おっけら、むし〜」

どこからともなく妙な歌が響く。びくりと刹那くんの肩が動く。

そして朱音さんが部屋に入ってきた。どうやらさっきの朱音さ

んの歌だったらしい。にしても陰気な歌だな。

「や、空狐。刹那もいいじゃないか友達の頼みなんだから」

「だけどさ〜」

そういつて刹那くんが口を尖らせると、

「君のファーストキスの相手ばらしていいのかな？」

「すいません。それは勘弁してください」

一瞬で刹那くんは土下座した。いったい彼の過去になにがあったのだろう？

というわけで、交渉は成立。イヴはしばらくの間、力をなくした状態で僕らと生活することになったのだが……

「もう！ 重いわね！」

晩御飯。イヴがフォークを持ち上げながらそう言う。フォークに振り回され、さらにスプーの入ったカップも持ち上げられなくなっていた。一言付け足すならフォークは僕らが普段使うのと同じサイズである。

まさか、飛行能力だけじゃなくて筋力も見た目通りに落ちちゃった？

「はい」

それを見かねた舞さんがイヴの代わりに食卓に列ぶハンバーグをイヴにちょうどいいサイズに切って、口元まで運ぶ。

「あーん」

ぱくんとイヴがハンバーグを食べる。まるで雛のようだ。怒るだろうから言わないけど。舞さんの方も子供にご飯を食べさせるお母さんみたいに微笑んでいる。

そうやって舞さんが少しずつイヴに食べさせてくけど、

「もういいや。お腹いっぱい」

イヴがそう言うって座り込む。いつもなら一人前食べるのに今日食べた量は普段の半分以下だ。

なんか、ヤバい気がしてきた。

イヴを舞さんに預けた僕は部屋で天月を振っていた。

イヴが力をなくした状態でも大丈夫なのか確かめるためだ。

「一ノ太刀」

刀身に淡い光が宿る。いつもより弱々しいけど一応使えて安心した。

普段は理由があつて使わない二ノ太刀、三ノ太刀と試してみる。

そっちも大丈夫であつた。若干能力が落ちているみたいだけど僕は学生だし、仮免だから仕事もないし、大丈夫だな。

天月の状態を確かめた後、鞘に納めてベッドの横に立てかけてから布団に潜り込む。

「おやすみ」

普段ならイヴから返事があるんだけど舞さんに預けたから今日は無い。少し寂しく感じながら僕は眠りの世界に旅立つのであつた。

第五十二話 力をなくしたイヴ（後書き）

鈴：「うゝむ、なんかそうとう戦力ダウン？」

刹：「普段なら空狐持ち上げて飛べるのにな」

鈴：「とりあえず、力のなくしたイヴの戦い、温かく見守っていて
ください」

刹：「それでは」

第五十三話 猫とイヴ

朝、少しの違和感とともに目覚めた。

なんだろう……何かが足りない気がする……そうだ、部屋にイヴの気配がないんだ。

ほんの少しの変化、だけど僕には十分な変化だ。普段はいるのが普通だったからなんか寂しい。

制服に着替えてから時計を確認。いつもなら舞さんが起きてるはずなのにそんな気配がない。なんで？

寝坊してるかもしれないと思って舞さんの部屋に行く。

「舞さん朝……」

「たすけて〜」

部屋にはいるとイヴの苦しげな声。えっ？

慌ててベッドに近づくと……舞さんの口から棒が生えていた。いや、動いてる？ これは……イヴの足だ！ イヴが舞さんに食べられてる?! だいたい胸の当たりまでが口の中に入っている。

えええっ？

どういふ状況がよくわからないけど、とりあえず……

「ま、舞さん起きて、イヴを食べたら罰が当たっちゃいますよ。主に腹痛という名の」

失敬な！ という声は無視。そして、うつすらと舞さんは目を開けて、

「は、おはひょうふーほふん」

薄い笑顔を浮かべながら舞さんがもごもごと口を動かして、

「ひゃん！ いた！ は、早く出して〜！」

イヴの悲痛な叫びが響いた。

「うっ、もうお嫁に行けない……」

「行くつもりだったの？」

頭の上で嘆くイヴにそう聞くと「失礼ね！」と頭頂部に蹴りを入れられた。

舞さんも「失礼だよ」とイヴを擁護する。

そんなもんかね？

家を出て刹那くんちに向かうと、箒を持った朱音さんが掃除をしていた。

「おはよう。刹那とアルトはすぐ来るよ」

朱音さんが柔らかく微笑む。

「あの、」

「ああ、聞いてるよ。今日は私がイヴを預かるんだよね」

昨日のうちに刹那くんと相談したことだが、刀に入れない今のイヴを連れ回すのは少々危ないため朱音さんに預けることにしたのだ。

「はい、よろしくお願いします」

そう言つて頭の上のイヴに手を伸ばして座らせ、朱音さんに差し出す。

イヴは距離が詰まるとぴょんと朱音さんの肩に飛び乗った。

「お願いね朱音」

「ふふつ、よろしく。イヴ」

朱音さんが微笑む。安心する笑顔であつたのだが……これがイヴの大冒険の序章であつたのをまだ僕は知らない。

皆さんこんにちは。私ことイヴは畳の上でゆっくりひなたぼっこをしています。

今この家には私しかない。なぜなら朱音は今晚の夕食を買いに出してしまったから。おかげで私はひとりでのんびりできる。

「んっつ！」

思いつきり伸びをする。どうやら張り替えたばかりの畳みたいでポカポカ陽気と一緒に若草の香りが漂ってきていい感じ。その上に

自慢の髪を広げる。

「あーん、さいごー！」

そうやってゴロゴロしていたら、

「じゃー」

耳元で猫の鳴き声。

……恐る恐るそつちを見ると、真つ黒な猫がいた。その毛色はもう驚くほど黒く、まるで夜の闇のよう。そして目が金色のせいで、闇の中から目だけの化け物が迫ってるように見える。

赤い色の首輪がついているから飼い猫だとはわかるのだけど……その猫がじつと私を見ている。嫌な汗が垂れる。

「そつえば、猫とか勘のいい動物には見えるのよね私」

黒猫が前傾姿勢をとり、飛びかかろうとした瞬間、私は起き上がって走り出した。間一髪飛びかかる猫を避けられたが、猫はまだ私の方を向いている。

「もてる女は大変ね！」

軽口叩きつつ走り出す。普段と比べて涙が出そうなほど遅かったが、それでも飛びかかる猫を身のこなしで避ける程度は動けた。ほぼ紙一重だが……

「こんのー！！」

さすがにずつとこの状況はまずいと思い庭に向かって駆け出す。そして、思いつきり飛び上がる。

「ここまでついてこれるかしら?!」

ぱつと羽を広げてある程度の高さを跳ぶ。

さつき試してみた結果、頑張れば空狐の膝くらいの高さを跳べることがわかった。

もちろん猫は空を跳ぶことはできず、重力の法則 ($N = gn$) に基づいて地面に落ちていく、が、そこは猫。器用に着地してこつちを追いかけていく。

「まったく！ しつこい男は嫌われるわよ?」

ひょいっと避けながらそう言う。だけど普段なら坂野サーカスば

りに飛び回れるのに今日は人間の歩くくらいのスピードと身を捻る程度にしか動けなかった。

今はいいが、そのうち殺られる。

「くー、イヴちゃんピンチ」

と、その時視界の片隅に塀の穴を見つけ。隙間だいたい四、五センチほどで、私ならギリギリ通れる。

よおし！

全力でそこまで羽ばたき……手前で降下。

地面につくと同時に走り出してスライディング。

「イヴちゃんスライディング！」

そうしてなんとか塀の向こうに出る。猫は頭が出せるくらいしかできない。

「へっへーん、悔しかったらこっちに出ておいで。ベーっだ！」

今までの屈辱が晴れる訳じゃないが、何割かはすっきりした。お気に入りのドレスのスカートに泥が着いちゃったけど仕方ないと諦めておこう。

私は家に戻るため飛ばうとして……殺気を感じて塀の上に顔を向け、時よ止まれ。

そこに猫がいた。うん……私を追いかけていた猫だ。

汗がだらだら流れる。いや、確かにこっちに出てこいって言ったけど、そんな律儀に……

そして時は動き出す。

飛びかかってくる猫に対し私は飛び上がり……走りだそうとしていたトラックの荷台に飛び込んだ。猫が着地し、こっちに飛びかかろうとする間に走り出したトラックはかなり距離を離れていた。

「やゝい、追いかけられるもんなら追いかけておいで〜だ！」

ここまで来たら大丈夫でしょ。とりあえず、次にトラックが止まったら降りようと思っていたが……

いきなりガクンと、ブレーキがかかり、体が後ろに投げ出される。

はいっ？

後頭部をしこたま荷物にぶつけて、

「きゅっ……っ」

私は意識を失った。

第五十三話 猫とイヴ（後書き）

鈴：「どうもみなさん。鈴雪です」

刹：「どうも刹那です」

鈴：「力を失ったイヴ、無情にも彼女にとてつもない試練が訪れま
した」

刹：「まあ、ぶっちやけ迷子になるだけだけどさ」

鈴：「さあ、彼女の運命は？」

刹：「根性で家に帰ることだろうな」

鈴：「せつなく、水差すなよ」

刹：「それではみなさんまたの機会に」

鈴：「それでは」

評価、感想お待ちしております。

第五十四話 イヴ、バスに乗る

「ただいま」

買い物を終えて帰ってきた家に人の気配がなかった。あれ？ イヴが留守番してたよね？

「イヴ？ イヴちゃん？ どこにいるの？」

買い物袋を台所に置いてから家の中を探索。

台所、いない。リビング、いない。風呂場、いない。トイレ、いない。研究室、鍵かけてるからなし。地下、鍵かけてるからなし。刹那の部屋、いない。私の部屋、これまた鍵かけてるからなし。

そうしていくつかの部屋を探したけどイヴはどこにもいなかった。

……どこにいるのかしら？

私が首を捻つてると、

「にゃ〜」

と猫の鳴き声。鳴き声の方を見ると、塀の上に黒猫。

「ああ、シャドウ。いたんだ」

その猫を見て微笑みかける。

シャドウはあの猫に刹那がつけた名前。正式にはシャドウ二世。

ノラだったけど昔飼ってた猫に似てると気に入った刹那が餌をやりだして、うちの飼い猫に近い状態。ほとんど外にいるけどね。

首輪も刹那がつけたもの。しかもシャドウ一世の首輪。そうしてみれば確かに似てると思うけど……と、話が横路にそれたね。

「ねえ、シャドウ。イヴちゃん知らない？」

聞いてみたらシャドウは「にゃ〜」と鳴いて塀を降りていった。

まあ、猫の言葉はわからないから冗談で聞いたんだけど……あれ？ そう言えば前にイヴって猫とかには見えるって聞いたような……慌てて探査系の術を発動する。もしかして隠れてるわけじゃなくて……

そしてそれは当たっていた。半径二百メートル以内にイヴの反応

はない。

「ま、まずいわね……」

今のイヴは力を使えない。ということ……

「い、急いで探さなきゃ!!」

私は慌てて家を飛び出した。

「う、うん？」

痛む後頭部をさすりながら私は起き上がった。

えーっと、ここは……

周りを見るとダンボールや包装された家具など。あっ、そうだ。黒猫から逃げるためにトラックの中に逃げ込んだんだっけ。

それで急停車した瞬間に投げ出されて荷物にぶつかって気を失ったんだわ。

……けっこつ長い間気絶してたわね。今どの辺かしら？

荷台から外を見るとちょうど前に見たことあるお店が見えた。

あっ、あれは前に空狐と舞と一緒に行ったファンシーショップ……
……てことは、

「ここ、関条寺だわ」

関条寺、だいたい常盤町から駅で一つほど離れている場所。一応常盤町行きのバスもあったよね？

そして、今トラックは駅の方に向かってる。なら、駅に着いたら降りましようか。

そして駅前、私は信号で止まったトラックから降りた。そして、今はあるおばあちゃんの荷物に腰掛けてる。理由は簡単。このおばあちゃんが常盤町の駅に向かう方面のバスに乗ると言っていたからだ。

むふふ、これで楽しんでお家まで帰れるわ。

そして、おばあちゃんがバスに乗る。よし、あとは常盤町に着く

まで待つてればいいわね。私は足をぶらぶらさせながら鼻歌を歌つてのんびりする。そして、

『鳴瀬行き発車します』

……えっ？

ゆっくり、ゆっくりとこのバスの路線を見ると……常盤町と逆の方面に行くバスであった。

……もしかして、おばあちゃんバスを間違えた？

しかし、おばあちゃんはそれに気づかずのんびりしている。

「お、おばあちゃん、このバス違うわよ！早く降りないと！」

だけでもう遅かった。バスのドアは閉まってしまふ。あー！運転手さん！待つてください。この人乗るバス間違えてますよ！！しかし、無情にもバスは動き出す。

そんな〜！？ 樂をしようとしたから罰が当たったの〜？！

第五十四話 イヴ、バスに乗る（後書き）

鈴：「うわ」

刹：「かなりのうつかりだな……」

鈴：「はてさて、イヴの運命は？」

刹：「それはまた次回だな。がんばれ作者」

鈴：「了解」

刹：「それではまた次回で」

鈴：「また」

第五十五話 小さいって不便ね

手当たり次第に探查魔術を使ってイヴを捜すけどなかなか見つからない。

さつきみたいに一気に二百ぐらいでやりたいけど、あくまでそれは最大の範囲。三十メートル以内にしないとはっきりわからないし、時間もかかって魔力も喰うし……

あーもう、こうなったら仕方ない。

私はケータイを取り出し、

只今昼休み、僕はお弁当を食べてから教室で刹那くんとしやべってた。舞さんは途中から話についていけなくなってクラスの女子と話している。

「吹雪や不知火もいいけどやっぱり武御雷の方がカッコいいよな」

「だね。僕は月 中尉の赤が好きだな」

「俺は冥 の紫の武御雷だな」

ただいま僕らは好きなロボットものの話をしている。純国産系列の機体はいい。ロシア製もいい。ただアメリカ製は嫌い。

そんな風に議論していたら、刹那くんのケータイが鳴った。どーでもいいがギャルゲのメロディーっての止めといた方がいいんじゃないか？ まあ僕も好きな曲だから止めないが。

「なんだ、朱音？」

刹那くんがケータイを取る。なんの用事かな？

「なん……だと？」

刹那くんの表情が変わる。眉間にシワなんか寄ってるよ。一体どうしたんだ？

ああ、わかったと言って刹那くんが電話を切って椅子から腰を上げる。そしてボソツと一言。

「イヴがいなくなったらしい」

はい？ イヴが？ 力無くしてるはずの？

「朱音が買い物に出た一時間の間にだそうだ」

……うそん。

僕と刹那くんは顔を合わせて、走り出した。いきなりの奇行に舞さんやクラスのひとたちが目をまん丸にしていたが、気にしない。

あんのバカ！ どこ行つたんだよ！？

「くしゅん！ うう、きっと誰かが噂してるのね。なんて罪作りな私」

なんて冗談を言いながらパタパタ飛ぶ。できたら空狐や朱音が私を探してくれてたらいいけど……

その後、私は誰かが窓が開けられるのを見計らってバスから飛び出した。一応その前にちゃんと認識率を変化させて、おばあちゃんに乗るバスが違うことも言ってるからね。さすがに放つとかないわよ。まあ、いきなり妖精が現れたのには驚いていたけど。

そして、すぐにガードレール沿いに駅まで引き返して今度こそ常磐町に向かうバスに乗ることができた。何回も行き先を確認したから今度こそ大丈夫。で、今はどこか座るのにいい場所を探してるんだけど……

私は誰かの手が当たって叩き落とされてしまい、顔面から床にぶつかった。その上、スカートも捲れてしまう。

しかし、私を叩き落とした如何にもサラリーマンといった風情の中年男はまったく気づいてない。ええそうね、あなたは悪くないわ。だって私が見えないんだから仕方ないもの。でもね、私はすごく痛かったのよ。それにお気に入りのドレスが余計に汚れてしまった。だから……

「これで許してあげる！」

体を起こし、床を蹴って飛び上がり、その男の手の甲に噛みついた。

「いでっ！」

男が突然の痛みにも手を降る。その勢いで私は投げ出されてちょうど空いていた席に落ちる。も、もうちょっと考えて行動すべきだったわね……目を回しながら私は頭を振る。

男は噛まれた手をさすりながら周りを確かめる。ふふん、犯人は見えないから探しても意味ないわよ。

まあ、ある程度溜飲は下がったから勘弁してあげるわ。さてと、バス停に着くまでのんびり……んっ？ 暗い？

「どっこいしよ」

「びぎゅ！？」

椅子に座ろうとしたおばちゃんに押しつぶされてしまった。

重い、重い、重い……！！

私はじたばた暴れるけど悲しいかなこの勝負はまさに人間VS象、勝てるわけないわね……ってなに諦観してんのよ私！？

もう一度暴れようとして、おばちゃんが腰を上げてこっちを向く。

「おかしいわね。なにか潰したと思ったのに」

いいえ、潰してました。イヴちゃんというかわいい妖精を、

まあいいわ。今は仕返ししても痛い目会うだけってわかってるから許してあげる。でも次はないわ！

ビシッと指を突き付けてポーズを決め、またおばちゃんのでかいお尻が迫ったから慌てて逃げ出した。く、小さいってこんなに不便だったのね！

第五十五話 小さいって不便ね（後書き）

鈴：「なかなかイヴも苦労してんな」

刹：「まあ、俺たちが当たり前に行なっていることができないからなあ」

鈴：「小さな妖精さんに愛の手を」

刹：「それでは、また次回に会いましょう」

評価、感想お待ちしております。

第五十六話 やつと帰ってこれた……

僕は朱音さんと合流してから三手に別れて探索済みである家から半径二百メートルの外を探している。で、今は公園の中を探してた。

普段ならある程度場所がわかるのにイヴは力がなくなってるからわからない。

匂いで探そうにもイヴの臭いは大通りで途切れちゃってたし！ たぶん車かなにかに乗ったもんだと思う。それじゃあさすがに匂いで追跡は無理だし。

そこでケータイが鳴る。取ると相手は刹那くんだった。

「もしもし？」

『こつちにはいなかった、そつちは？』

「だめ。匂いのかけらもない」

『そつか、じゃ、また』

「うん」

簡潔にお互い見つからなかったことを告げてから電話を切る。

「たくもっ！」

最後にキョロキョロ見回してからまた次の場所に行く。

この時、もう少しここで待っていたらニアミスしなかったかもしれない。

常磐通りでバスを降りた私はひたすら飛び続ける。うっ、だいぶ疲れたよ。今朝からずっと羽を飛ばたかせてるもの。

別に普段飛ぶのに羽は使っていないのよね。そもそもこの羽は術を使うための補助機関だし。でも、今力が弱まっているから飛ばたくと飛べるって思いこむことで飛んでるの。うっ、羽の付け根が痛い…… 普段使わないところだもの。

そんなこと考えていたら、あるものが視界に入る。

あ、あれは確かあれはうちのそばの公園ね。となればだいぶゴールが近い……よっしゃあ、あと少しがんばれば休める！

思わずガッツポーズ。しかし……それと同時に背筋に悪寒が走った。

私はゆっくり振り向くと、そこに……犬がいた。そして、目がこっちに向いていて心なしか輝いているように見える。

……見えてるのかしら？

私はすぐに前に向き直って、全力で飛ぶ！ と、同時に犬が走り出す音が聞こえる！

まずい、まずいわ！ 普段ならいざ知らず、今の速度だと絶対にこっちのほうが遅いもの！ しかも、高く飛んで逃げられないし！ 足音が迫ってくる！ 私が振り向けば、もうあと十メートルもない。いやー！ きつと私を食べるつもりよこの子！

私は必死に飛ぶけどスピードは上がらない。そして、もうそこまで……

もう一度振り向けば飛びかかろうとする犬。ああ、もう駄目、食べられる……って、諦められないわよ！

私は飛びかかる犬の前足をなんとかかいくぐり、犬が着地した隙をついて、その背にひつついた。ふっふっふ、さすがに背中にまで足を伸ばせないし噛みつくこともできないでしょう！

私は勝ち誇った。だけど……犬は突然暴れだした。しまった、それがあつたわ！

必死にしがみつくけど、腕力が低下していたせいか私はあつさり背中から投げ出され、地面に叩きつけられた。

もう、ドレスも身体もぼろぼろで、体の節々が悲鳴を上げている。ああ、もう終わりね……私は動けなくなった私に近づく犬を見ながら覚悟した。犬に食べられておしまい。末代までの恥ね。あ、でも私で末代だから恥は私だけね。

そんなことを考えていたら、
「まって、ダメだよダメ！！」

聞きなれた声が聞こえた。

そして、私と犬の間に割って入る影。

「ほら、いい子だから、ね？」

舞だった。

「もう、朱音さん気を付けてください！今のイヴちゃんを一人にしたら危ないのわかってたでしょ?!」

天野邸、客間で正座した朱音が舞に怒られる。あの時、授業が終わって帰宅途中だった舞に拾われて私はやっとお家に帰ることができたのだ。そして、家に着くとすぐに朱音たちを集めてお説教を開始した。

「いや、舞。まさかね買物に連れて行くのも危ないし、だから家に置いて行っただけだ」

「それでもです！今日だって私が割り込まなかったら大変だったんですよ！」

朱音が反論するけど舞は許さなかった。

そこに私が入る。

「もういいわよ舞。私が不注意だったのも悪かったんだから」

舞はそこでしぶしぶ引き下がった。まあ、一番悪いのはあの猫と、その飼い主……あれ？

そこで私は見てしまった。あの猫が庭にいるのに。しかも……刹那が煮干を食べさせていた。

「あ、朱音、あの猫は？」

朱音は振り向いてああと頷く。

「あの猫は最近飼い始めたの。名前はシャドウだから」
私はその言葉に爆発するのであった。

数日後、宝玉だけ修理が終わったということできつそく刹那宅で対面する。

先日まで傷だらけだったそれは、見違えるほど美しい光を放って

いる。よかったあ。

「ほら、イヴ」

そう言って空狐が促してくれて私は宝玉に触れた。途端に何か衝撃のようなものが私の中を通り過ぎる。

戻ったのかしら？ 試しに拳を軽く握ってみると力が溢れだす感覚が私を襲った。

「も、戻ったわ！！」

私は空中に飛び上がって魔術を打つ。と言っても見た目だけの花火のようなものだけ。

「よかったな」

刹那がそう言った瞬間、私はざらりと目を光らせる。

「ええ……これでやっと復讐ができるのよ！！」

高く飛び上がり、宙で身を捻りつつ刹那を見ると妙に優しげな笑顔。

そう、覚悟してたのね。なら思う存分させてもらうわ！ 私は刹那を蹴る。そして、倒れた瞬間にマウントポジション（首の上に乗った）で刹那を殴り続けた。

ドレスをダメにされたのと、ひどい目にあった恨みー！ そして、私は刹那がぴくぴく痙攣するまで思う存分殴るのであった。

それから私はすっきりして怯える空狐の頭の上に腰を下ろすのだった。やっぱりここが一番ね！

第五十六話 やっと帰ってこれた……（後書き）

評価、感想お待ちしております。

第五十六話 魔法教えて

それは何もない休日だったんだけど、僕がゲームをやっていたら、
「ね、空狐くん魔法教えて」

……はい？

舞さんからのいきなりの頼みごとだった。

僕はゲームをポーズにしてから改めて舞さんの方を向く。

「えっと……舞さん、魔法教えてって言ったの？」

僕は聞き間違えたのかと思いき直した。

だが舞さんは嬉しそうに頷く。

「うん 教えて」

はー、僕は額を抑える。

舞さんに魔術を教えるねー。まあ、構わないんだけど、前から感じていたけど舞さんは魔力が非常に強い。もしかしたら僕と同じ位か少し上。その舞さんに魔術を教えた場合を想像してみてしまう。

炎を背景に管理局の白い魔王を彷彿とさせる微笑みを浮かべる彼女の姿。ちよつと背筋が冷えた。

「どうして？」

とりあえず、まずは魔術を学びたい理由を聞いてみる。

「だって、面白そうだから。それに、この前イヴちゃんの出した花火、綺麗だったから自分でも出してみたいなと思ったの」

楽しそうに笑う舞さん。どうやら純粋な興味が理由みたいだ。

まあ、だったら見た目は派手でパーティーの隠し芸になりそうな術程度でいいかな？

「うん、いいですよ」

僕がそう言つと、舞さんは嬉しそうにぱあつと表情を明るくした。

まずは、簡単に術の基礎と制御の仕方を教えてから基礎の術を教えようか。あ、あと魔術使うなら魔具も用意しなくちゃな。

「刹那くんに頼んでみるか……」

この前、ちよくちよく仕事とかで作ってるって言ってたし。

「んっ？ 余ってる魔具がないかって？」

早速舞さんと刹那くんの家に訪れた。

家になると朱音さんが迎えてくれて、案内してもらった。部屋に刹那くんはいて、その部屋で何かの機械をいじっていた。

「いいよ。試作の魔具や型落ちのものとかあるからそれあげるよ」

そう言っただけ刹那くんはいじっていたものを置いて椅子から腰を上げる。気前がいいね。

部屋を出る刹那くんについていく。そして着いたのは、刹那くんの家の角にある石造りの物置だ。

刹那くんはポケットから鍵を出して扉を開けて入る。それから片づけてあったものの中から魔具を探して、

「おっ、これいいかな？」

そう言っただけ刹那くんが取ってきたのは……拳銃だった。オートマチックタイプのを二丁。

「以前注文された魔具を造った時の試作品。試作だけど十分実用品だよ」

そう言っただけ懐かしそうに銃の状態を確認する刹那くん。外見はベレッタがベースで銀に塗られ横に何か文字が彫られている。えっと、

英語で『You will go to hell now』か。物騒な……

「重さはそれほどないし、倉田さんにも使えると思うよ。あと、ギミックとして銃口下にワイヤーを伸ばせるようになってるから」

そう言っただけ舞さんに手渡す。

「ありがとー、私、昔から射的得意なんだー」

と嬉しそうに舞さんが笑う。それから刹那くんが提案してきた。

「地下で試射してみる？」

そして、十分後……

地下で簡易的に作られた射撃場にて、

「嘘でしょ？」

「マジ？」

「すごい……」

僕、刹那くん、朱音さんは目の前で起きていることに驚きを隠せなかった。

なぜならば……

舞さんの持つ銃からパンツと火薬の破裂する音とともに弾丸が放たれる。

その弾丸は真っ直ぐに的の中心に当たる。そして、マガジンを交換。二回マガジンを交換してるから三十発全部当ててることになる。しかも、片手で……

「……拳銃ってさ、反動の小さなベレッタでも一般成人女性が両手で撃つものじゃなかったっけ？」

「あそこまで簡単に当てるなんて……」

僕らが舞さんの腕に驚いていると、朱音さんが、

「ものは試しに」

そう言っパチンと指を慣らすと場所が変化する。なにが始まった？

次々と障害物が現れ、一分後には簡易的ないかにもな訓練所になっていた。

舞さんもいきなりのことにマガジンを変えた状態で動きを止めてしまった。

「舞く、ここにはいくつかターゲットがあるの。それをできるだけ当ててみて」

そう言われると、舞さんは「はい」と返事をして楽しそうに笑う。

「じゃあ、いってみようー！」

第五十六話 魔法教えて（後書き）

評価、感想お待ちしております。

第五十七話 天才ガンマン舞さん

射的場は小さいながら市街地をイメージした構成になっている。そこで出てくる的を舞さんは巧みに両手の拳銃を操り次々と撃破していく。なんかたまーにガンカタみたいな動きをしてるのは気のせいでしょうか？

頭を振ってその考えを逃がしてから朱音さんが出したモニターを覗く。今んとこ外したのはゼロ。しかも、ほとんど真ん中近くだ。す。」。

さらに、舞さんは腰に予備マガジンを六つ装着してあるが、今のところまだ一回も換えてない。今まで出た一六の的、全部に当ててしまってるからだ。でも、残弾はもう四発のはずだから、そろそろ換えないとダメそう。

そういえば、シューティングゲームも得意だったなあ舞さん。この前は紅魔館のルナティックでおぜうさまの所まで行ってたし。

「すごいわね」

イヴが頭の上で感心したように呟いている。

またひとつの標的を撃ち抜いてから、次の的を探して曲がり角から顔を出す舞さん。奥の行き止まりに的が立てられてたが、

「ひゃあ!？」

いきなりボールの雨霰が降り注ぎ、舞さんは慌てて身を隠した。

「く、くっく、秒間六十発のペイント弾の嵐だ。そのクリアは苦労するぜ!」

邪悪に笑う刹那くん。だが、

舞さんはペイント弾に当たらないよう壁に隠れながら向かいの壁にある出っ張りを狙って撃つ。弾の軌道はカーブミラーでチェックしながら一発目、兆弾した弾が明後日の方向に飛ぶ。二発目、的に近づいた。そして、三発目で見事に命中した。

「うそ……」と刹那くんが呟くなか、舞さんは振り返ると満面の

笑顔で、

「コルクガンで試したことあったけど、リフレクシヨットって割と簡単なんだね」

などと言いながらマガジンを換えていた。いえ普通は簡単じゃないはずですよ？ それに、コルクガンと実銃じゃ条件違いすぎですよ！？

刹那くんはうなだれながら「俺だって習得苦労したのに」とか何やらブツブツ呟いてから、

「いや、最後の標的のトラップはこれ以上だからきつと止められる！」

なんか復活した。

そして、さらに七つの的を撃ち抜いて、舞さんは車の後ろにある最後の的に近づくと、またペイント弾の雨。今度は慣れたのか驚かずわりと冷静そうに身を隠す。

舞さんは障害物に隠れてから横を見てリフレクシヨットができるかを確認しているが、当てるのにちょうどいいものがない。

車の中に入って近づこうとするけど、当然鍵がかかっていて、仕方なく車をよじ登ろうとする舞さん。けど、トラップが動いて狙いを舞さんに向け直す。そして、またペイント弾の雨が降り注いだ。慌てて舞さんは下に降りる。しっけーよ！

「く、くく、くくく、あーっはっはっは！ さすがの倉田さんもここはクリアできないだろう！ さすが俺！」

悪役のように高笑いする刹那くん。いや、そこ誇るべきなのか？

「あほの子がいるわね」

ぼそっとイヴが呟く。と、舞さんが突然まだ右に六、左に七つ残ってるのにマガジンを交換してから腰に下げている残りの二つを手取る。そしてこっちに振り返って、

「マガジンっていくらぐらい？」

いきなりの質問。刹那くんはその質問に首を傾げながら、

「そのタイプならそんなにかからないけど？」

返ってきた答えに舞さんの表情が明るくなる。

「なら、二個壊れても大丈夫だよね？」

はい？ そうして舞さんはマガジンを持って標的に近づくと、いきなりマガジンを投げた！

そして、空中のマガジンを撃ち抜く。破片と中の弾丸が宙に舞う。そして、

連続して左右十回ずつ、合計二十発の発射音が鳴り響く。その後、直後にいくつもの火薬が炸裂する音とともに、画面から全ての標的が撃破されたことが知らされた。

僕は舞さんの行った離れ業に啞然とする。

なにせ舞さんは空中に散った弾丸の雷管に弾当てたのだ。何発かはうまく当たらなかったみたいだけど、結果、その衝撃で薬莖内の火薬が炸裂し、デタラメに飛んだ弾の数発が障害物の向こうにある標的に当たったのだ。えっと、的は当たったの十ミリですよ？ もう射的が得意どころの話じゃねえ。

「うそ……」

イヴの呟きに僕らの思考はやっと動き出す。

「終わりましたー！」

ぴっと見よう見まねの敬礼をする舞さんを見て、僕と刹那くんは顔を合わせて頷き合う。

一瞬で舞さんの後ろを取った僕が彼女を羽交い締めにし、

「没収」

と、刹那くんが銃を没収した。舞さんには悪いけどこれで安心だ。

第五十七話 天才ガンマン舞さん（後書き）

評価、感想お待ちしてまーす。

第五十八話 舞さんの杖

まさか、舞さんがこんな特技持ってたなんて……

「あの射撃センスはないだろ。てか、狂ってる」

「天才なんてちやちなレベルじゃないよねこれ……」

「もしかして、銃神デイスの現出か？」

「ないない。てか、何それ？」

銃なんて神話の時代にはないんだから、新興宗教かなにかの神様か？

「ほらスパロボであつただろ？ 銃神デイスの心臓っていう悪魔王の名を冠したロボットの動力炉」

「知らないよそんな細かいネタ。あと、なに人を悪魔扱いしてるの？」

「またもゲームに関してのネタでした。刹那くん少し自重しろ。」

「まあ、人間って妙なところで才能が埋もれてるもんよ。のび太くんみたいに」

「まあ、彼も大概だよな。ドラえもんに助けてもらってばかりなのに、射撃は天才なんだから。なんで悟った顔してるのさ。」

「さっきまでの銃捌きを思い出す。うむ、恐ろしい。舞さんの方は、ちよつと不機嫌そう。」

「なにも没収しなくてもいいのに……」

「あー、そうなんだろうけどつい。刹那くんも額に汗を浮かべながら引きつった笑みを浮かべている。」

「じゃあ、どうする？ 銃がだめなら杖とか持ってくるけど」

「刹那くんがそういうと、」

「持ってきたよ」

「朱音さんが杖を持ってきてくれた。はやっ！」

「僕は朱音さんが持ってきた杖を観察する。見た目は機械的でできた杖で、例えるとなのはのデバイスっぽい。」

長さはだいたい八十センチほど。フレームは塗装はされておらず銀色の地がそのまま。

先端は二股の槍のように別れていて、ロッドとの付け根付近に放熱用と思われるパーツが二つ。横と側面に一本ずつアンテナのような尖ったものが突き出していた。

残念ながらマガジンらしいのはないなあ……

「趣味丸出しのデザインね」

イヴの言葉には僕も同意。一方刹那くんは

「あ、朱音それ、試作の……」

頬をひきつらせながらなにか言おうとしてるが、その前に、

「舞、どうぞ」

「朱音さんありがとうございます」

嬉しそうに受け取った舞さんが礼をする。そして、

「じゃあ、早速『ムーンライト、セットアップ』って言うってみて」

悪魔のように笑った。

「あかね……!?」

刹那くんが慌てて叫ぶ。

な、なんだ？ なにか問題が……

そこで思い至る。見た目なのはのデバイス。もしか……

「ムーンライト、セットアップ！」

そして、刹那くんが止める前に舞さんはセットアップした。途端に杖が輝く。

「わっ！」

目が眩みかけるが少し、彼女の姿が見える。いつの間にか服が袖と裾の短い服に変わり、そこに光の粒が集まったかと思うとローブとスカートがどこからか現れる。そして、胸の前に金属パーツが現れローブを留める。

それからなぜか頭頂部とお尻からよきつと耳とっぽが出てきた。おい！

そして、予想通りまほーしよーじょが出来上がった。

黒いマントを靡かせて、袖と裾の短い白い服に宝石らしきものが嵌った金属パーツで前を留められた白のローブ。ロングのスカート。あちこちに宝石のような装飾が付けられていて、なのはのバリアジヤケットによく似ていた。

そして……ツインテールにまとめられた頭の上で猫耳とお尻の尻尾ががびよこびよこ動いている。

気づけば僕は刹那くんに詰め寄っていた。

「君は、よくも！　ありがとうございました！！」

イヴが「建て前と本音が両方出てるよ」なんて言われたが気にしない。

刹那くんの方は顔に手を当ててうなだれていた。一方舞さんは、「うわー、かっこいい」

嬉しそうに自分の格好を確かめている。

イヴはそれを見て、

「完全に趣味で作ったものねこれ」

と呟く。そこに刹那くんは、

「違う！　装備をつける手間をかけないための自動装着システムだよ！」

まあ、そうは言うが見た目は完全に趣味の世界だからそんなこと主張しても敗訴確定だろう。

まあ、僕は刹那くんにグッジョブなんだけど。

刹那くんはうらみがましい視線を朱音さんに向ける。

「朱音……なんでそれを？」

「面白そうだったから」

がくーっと刹那くんは地面に手をつくのだった。

そんな刹那くんをほっといて舞さんは朱音さんに向き直る。

「まあ、それはまだ試作の段階だから、完成したら舞に合わせて刹那に調整させるから」

それからじろっと刹那くんを睨む。

「くれぐれも、前にした失敗をしないようにね？」

「はい」と刹那くんが答える。いや、なんか朱音さん深刻そうなのに君そんなに軽い返事をするの？

舞さんも心配そうに笑ってる。

「前、何かしたんですか？」

一応聞いてみる。

「いや、前に作った新装備の機動実験時に事故起こしちゃったんだよ」

苦笑しながら刹那くんが答える。すみません君に任せるのすごく怖くなっただんですが……

そこでぼんと朱音さんが肩を叩いてくれる。

「大丈夫。私がちゃんと見張っておくから……少なくとも限界突破とか身体に負担をかけるような特殊装備の実装だけは止めるから」
びくつと刹那くんの肩が動く。付けようとしたのね……

その後、舞さんの魔術の先生は朱音さんが代わりにしてくれることになった。朱音さんは先生もやってたことあるみたいだし、僕がするよりもずつといいだろうと考えて安心だとは思うけど、一抹の不安を覚える僕であった。

第五十九話 夏休みですよ

皆さん、明日から夏休みです。いやっほー！！

「では、皆さんまた二学期に」

小泉先生の言葉とともに委員長の号令で全員が席を立ち、礼をする。そして、先生がいなくなった途端に教室中が騒がしくなった。みんな友達と集まって「どこ行く？」とか「なにをする？」と話している。

それで、僕は舞さんと刹那くん、アルトちゃんと集まって部室に向かう。実はアルトちゃんも先日正式に演劇部の一員になりました。

「やっつと夏休みだねー」

僕が呟くと「うん！」とアルトちゃんが頷く。

「アルト、海行きたいな。海！」

「そうだね。確か合宿先。海のそばって言ってたから一緒に泳ごうね」

アルトちゃん言葉に舞さんが嬉しそうに答える。海かあ。いいなあ……なんとなく、舞さんの水着姿を想像する。あと、スイカ割りとか花火とか、いろんなイベントがあるだろうし、すごく楽しみだ。

一方刹那くんは……ため息をついている。なんで？ このメンツの中で一番喜びそうなのにどうしたんだろ？

耳を済ませば「仕事山積み……がんばらないとなあ」なんて聞こえる。よくわかんないけどご愁傷様。お仕事がんばってね。

それから部室で合宿の日取りなどを改めて確認してからお開き。現在、僕らは家でお昼ごはんです。

んで、お昼ご飯のソーメンを食べてた時、チャイムが鳴った。

「はい。どちらさまですかー？」

舞さんが箸を置いて対応に出る。

んー、もしかしたら宅配かもなあ。重い荷物だったら舞さん大変だよなあー。

そう考えてみかんを飲み込んでから僕も玄関に向かう。そしたら、来客は朱音さんだった。

「あれ？ 朱音さん？」

「あ、空狐くん、朱音さんが用事なんだって」

朱音さんが？ 珍しいなあ。

僕は首を捻りつつ朱音さんの方を見る。今日の朱音さんは普段着ているメイド風にあしらった黒いドレスでなく、丈の長い白いワンピース姿だった。まあもうかなり暑いからなあ。そして、朱音さんがいつもの服以外を着てるのもちよつと新鮮に感じる。

「うん、そうなの。空狐はもう知ってるよね？」

「知ってる？ なにをですか？」

心当たりがない僕は余計に首を傾げる。それを見て朱音さん不思議そうに首を傾げる。

「君はこれからしばらくの間、私の所で研修を受けることになったんだけど、聞いてないの？」

……はい？

『ごめんねーくーちゃん実はね、手違いでこっちにお知らせ届いたのよ。今日知らせるつもりだったんだけどねえ』

電話で間延びした母さんの声を聞く。

どうやら協会の方に僕が舞さんの家に下宿していることがちゃんと伝わっていなかったようだ。

「うん、いいよ。わかったから……うん、うんじゃあ、また。暇があつたらそつちに帰るから」

『またねーくーちゃん』

受話器を置いて電話を切る。あの後、念のため母さんに電話してみたがホントだった。別に朱音さんを疑ってたわけじゃないけどね。

退魔士の研修。僕は試験に合格して一級の仮免は持っている。しかし、それでは二級と実質変わらない。ちゃんと本免許を貰うには現役の一級退魔士の下で研修する必要があるのだ。

そこで今回僕の研修先に選ばれたのが朱音さんのところだったってわけ。

まあ、知り合いの下つてのは少し安心かも。

そう言うことで、僕は明日から舞さんと一緒に朱音さんのところで勉強することになった。朱音さんには前から術に関して何度も相談してたし、ここでいろいろ教わることができるのはいい経験だなうん。

「ファイトだよ！ 空狐くん」

そう言う舞さんに僕はそうですねと答えて、笑った。

第五十九話 夏休みですよ
(後書き)

次回から夏休み編です。

第六十話 測りまっせ

とうとう、夏休みに入り、昨日朱音さんに言われた通り朝から舞さんと刹那くんのお宅にお邪魔する。

「おはようございます朱音さん」

「朱音さんおはよう」

「おはよう二人とも。刹那も待つてるし上がって」

すでに玄関で待つていてくれた朱音さんに言われて、上がる。

それから、この前刹那くんが作業をしていた部屋に案内されると、すでにそこに上下同じ色のつなぎを着こんだ刹那くんが待つていた。その手にはメジャー。

「おっし、空狐と倉田さん来たな。さっそく測らせてくれ」

はい？ いきなりの要求に首を捻る。

「測るって何を？」

「寸法だよ寸法。空狐の新しい式服と倉田さんのアーマードドレス作るからさ」

僕の疑問にそう言って楽しそうに笑う刹那くん。あー。あれアーマードレスって言うんだ……ってちよい待ち。

「あー、刹那くん？ 僕の式服を作るってどういうこと？」

僕はなにも聞いてないが？

「だから、俺がお前の作るんだよ。ああ、金は気にしなくていいよ。俺たちが出すから」

うん、本当に待つて。

式服は非常に高く、まだ見習いの僕だけど二級クラスのを特注で作ってもらった。その式服は維持費込みで百万は下らなかつたのだ。まあ、半分は親が出してくれたんだけどね。母さんと兄さんに感謝感謝。

だが、刹那くんはさらっとそんな高いものを作ると言ってるのだ。しかも二人分。いくらなんでもおかしい。

「試作の式服のモニターやって欲しいんだよ頼めないかな？」

僕の疑問を察して刹那くんは答える。

モニター？

「ほら、どんなものだってある程度データがないと信頼なんてできないだろ？ だから、空狐と倉田さん、二人に使ってもらって試作の欠陥や弱点を比較して見たいんだよ。だから無償提供。問題出たらすぐにでも返してくれればいいし」

ああ、なるほど。ぽんと僕は納得がいつて手を叩く。

「いいよそのくらい」

試作品とはいえ、式服ももらえるならむしろ喜んでだ。

「ちゅーわけで測るから」

で、寸法を測り終える。舞さんは服のための寸法だけでなく、杖のために手のサイズなども測られていた。

「うし。じゃあ、後はそれに合わせて調整するだけだ。数日もあればできると思うからちゅーち待っててくれ」

そう言って作業に戻ろうとする刹那くん。僕らも部屋を後にしようとして、

「と、ちゅーと待った空狐これ見てくれ！」

そう言って刹那くんは丸めた用紙を持ってきた。

「なにこれ？」

ふふ、っと刹那くんが笑う。なんだどうした？

「これはな……今俺が研究している魔導駆動式のロボットの設計図だ！ しかも、テストパイロットはお前」

そういつてびしっと僕を指さす。

な、な、な……

「なんだってー！ー！！」

なんとロマンあふれる研究！ しかも僕がパイロット？ どんなのか見たい読みたい！ まあ、冗談だろうけど！

僕はわくわくしながら刹那くんから設計図を受け取り、それを広

げる。

リアル頭身の機体で、スラリとしたデザインだが、肩や太もみにポリウムがあり、頭には横に二本のアンテナがあり、額から角が伸びている。そして全体的にどこか鎧武者然の印象を受ける姿で色は赤。

ようするに、あいとゆうきのおとぎばなしに出る月詠中尉の武御雷だった。

「武装は主に長刀で」

それを聞いた瞬間、僕は右手を引き絞る。

首、肩、腰、股関節、膝、足首と、関節と言う関節をフルに駆使し、螺旋の力をその拳に集める究極奥義！

「どりるみるきいぱーんち！ー！」

「エアバークー！」

そして、僕の拳を受けた刹那くんは天井を突き抜け、成層圏すら越えて再び地上に落ちてきた。そして、

「ち、地球は青かった……」

その一言を残し、力尽きるのであった……

「って、死ねるかあ！！」

そう叫んで刹那くんは立ち上がる。しぶといなあ。

それから朱音さんに下へ連れられて、いつも入る地下訓練所とは反対の方に入る。

そういえば、前からそこにドアあったけど何があるのかな？ 僕と舞さんも続いてそこに入る。

……そこに青空が広がっていた。へ？

周りを見ると、地平線の先まで海があり、僕たちがいるのは何かの塔の頂上だった。後ろにはどこでもドアよろしくはいつてきたドアだけがぼつんと立っている。

「ようこそ、当家自慢の『アトリエ』に！」

朱音さんが両手を広げてそう言った。

第六十話 測りまっせ（後書き）

鈴：「巨大ロボットの建造、冗談だよな？」

刹：「冗談だよ。そんなもの作るのにいったいいくらかかると思ってる？」

鈴：「……………金があればやんのか？」

刹：「アハハ……………ソナナワケナイダロー」

鈴：「セリフ棒読みになってんぞ」

評価、感想お待ちしております。

第六十一話 天月の能力

僕はいきなりの状況に口をあんぐり開けてしまう。あれ？ 僕たち地下室にいたはずだよな？ でもなんでいきなり海に囲まれた塔の上には？

「ここは結界で作った圧縮空間だよ」

僕が混乱していると朱音さんがさわやかな笑顔で教えてくれる。

「圧縮空間？」

うんと朱音さんが頷く。

「結界でかなり広い空間を圧縮してこの場所を作ったの。何重にも結界補助を重ねてるから余程のことがないと壊れないよ」

ふへへ、そう言えば前に聞いたことがあるなこんな研究。

でも確かまだ実用化されてないんじゃないかな？

「まあ、これはまだ研究段階で外の二時間分使ったら丸一日は使えないんだけどね」

残念そうに朱音さんが苦笑する。現行技術ではそれが限界か……
つてあれ？

「外ではつてどういうことですか？」

ああつ、と朱音さんが僕の問いに頷く。

「ここでは時間も圧縮されてるの。外の一時間はこっちは一日だよ」

な、なんと！？ そんな恩恵が！

んっ？ そういえば……あまり驚いてない舞さんを見る。

「舞さんは知ってたの？」

「うん。この前からここで勉強してたよ」

つて、ことは舞さんが朱音さんに魔法を教えてもらい始めたのは一週間前だから、もう二週間分教えてもらってるってわけか。しかも、おそらくだけど休憩を除けばそれこそ二日分の時間でみっちり。「もう式の勉強も始めたよ」

と舞さん。

「舞って物覚えがよくてね、三日目、つまり六日で空気中のマナの魔力変換を覚えちゃったよ……さすがにびっくり」

へへ、すごいなあ。僕は物心ついた時からできたけど、人間ならある程度訓練必要みたいだし。

「それじゃあ、訓練始めよっか。あ、舞は四階でこの前の課題やってて。私は空狐を訓練部屋に案内するから」

はいと舞さんが返事をしてそばにある階段で下に降りていく。それを見送って朱音さんはくるっとこっちに向き直った。

「じゃあ私たちも行こうか」

そして、朱音さんに連れられて僕も階段を降りるのであった。

連れてこられたのは一階。目の前には南国リゾート顔負けの綺麗な砂浜が広がっていた。

……もう突っ込むの止めよう。でも、一言。あなたたち、単に海で遊びたかったからこれ作ったんでしょ？

そして、脱力しそうな僕に、

「じゃあ、天月の他の姿見せてもらえないかな」

なんて朱音さんがいつてきた。はい？

朱音さんの要請に僕は視線を逸らす。

「ナ、ナンノコトですか？」

「いや、棒読みになってるから……大丈夫。私はもう天月については知ってるから」

……木霊家の秘密ははずなんですけどね。天月のことは。

まあ、イヴも知ってたし、母さんたちとも付き合い長そうだから知っててもおかしくないなあ。

「天月、木霊家が代々受け継ぐ神剣。特性は形状変化。現在の名前は真名を守るための守護名、本来の名は」

『ストーリーップー!!』

イヴと一緒にストップをかける。まずいです！ それ以上言われるのはまずいですよ！

朱音さんはごめんね」と笑いながら謝ってくる。

「で、なんで見たいんですか？」

とりあえず、理由を聞きたい。

信頼できる相手だけど、手の内をあまり見せたくないってのは少しある。できたら見たい理由を教えてもらいたい。

「しばらくの間は仕事も手伝ってもらうし、天月は持ち主によってできる形状変化が変わってくるからね。できたらどんなことできるか知りたいからかな」

ああ、そういえばそうだった。僕は三つの形態だけど、母さんは二つだけだったもんなあ。

「じゃあ、見せてくれる？」

「はい」

今度は素直に頷くのだった。

砂浜で天月を構える。後ろで朱音さんが僕の様子を見ている。

まずは二ノ太刀『夢想』から。

鞘を左手で逆手に持ち、天月と同調。一瞬で鞘が小太刀ほどの長さの刀に変化し、それを軽く振ってみせる。

さらにそこから三ノ太刀『桜花』へ。

両手の刀の柄頭同士を合わせて念じると形状が変化。一体化し、僕の身長よりもずつと長い、だいたい二百三十センチほどの弓になる。これは弓自体が刀にもなっており、いざという時に変化させなくても接近戦に対応できるようになっている。

「と、この二形態ですが」

振り向くと朱音さんはじつとこっちを見ている。

「……あのさ、天月の形態に槍ってないの？」

「？ ないですけど？」

なんだろう？ 僕が質問に首を捻る。

「近、近ときていきなり遠ねえ……中距離はどうするつもり？」

あ、そういうことか……

確かに、中距離用の武器がないな。

「少し、装備のバランスが悪いと思うよ。新しい形態考えといた方がいいかもね」

「新しい形態ですか」

一応魔術があるけど、決定打を撃てる武器も準備した方がいいかもしれない。まあ、二ノ太刀の夢想はそれ用の仕掛けがあるけど、これだつて言えるほどじゃないしね。

僕は考える。中距離用の武器かあ。新しい形態を作るのは時間がかかるからできる限り早めに作り始めた方がいいだろう。

ならどんな武器がいいかな？ 槍もいいけど、母さんみたいな連結刃もいいよなあ。

少しそんな思考に耽るのであった。

第六十一話 天月の能力（後書き）

鈴：「どうもみなさま作者の鈴雪です」

刹：「相方の刹那です」

鈴：「今回、砂川さんからご質問を受けましたのでこちらのスペースで回答させていただきます」

刹：「え、刹那と朱音さんは神様なんですか？

（何話か解らないけど彼らの会話に入ってたので）」

刹：「来たな……」

鈴：「来ちゃったな……じゃあ、刹那解説よろしく」

刹：「おう……ではお答えしましょう。一応俺と朱音は神です。千年前からい前に神格を得て人間から神になりました。まだ、若輩の身だけだね」

鈴：「くわしいことを書くとなんか長くなってしまいますので今日はこの辺りで失礼します。また、ご質問などがございましたら、感想または作者ページのメッセージからいつでもどうぞ。それでは、この番組は自衛隊人外部門と」

刹：「常磐学園空狐ファンクラブの提供でお送りしました」

鈴：「それでは、また次回に。さよなら」

第六十二話 空狐 vs 刹那

そして、この中に入って三時間後。

だいたいの持ち技（あたりまえだけど切り札除く）を見せ終えると刹那くんが現れた。

「おーす、やってるなあ。でもそろそろ飯にしない？
と提案してくる。」

「そうだね。そろそろ舞も課題終わってる頃だろうし」

ということ、朱音さんは舞さんを迎えに、僕と刹那くんは先に食堂へ行くことに。食堂はだいたい地上四階のあたりにあり、それなりに広く、そばには最新のシステムキッチンまである。

少し待っていると朱音さんに連れられて舞さんが食堂に入ってくる。

「それでは、お昼にしますか」

刹那くんが楽しそうにテーブルに豚肉と思われる肉の野菜炒めの入った大皿を置き、それぞれご飯とスープを配る。今回は刹那くんが作ったものらしい。

「んじゃいつたできま〜す！」

『いただきま〜す！』

そして、刹那くんの野菜炒めを一口……こ、これは！

肉が堅い……しかし、香ばしくて噛めば噛むほど味が出てくる。

野菜の方も肉から出た油や調味料が絡まって妙にうまい。スープはトマトとかきたまのさわやかな一品。いや、うめえ。

「ねえねえ、これってなんて言うの？」

おいしそうに刹那くんの料理を頬張っていた舞さんが刹那くんに聞く。うん、確かに普通の野菜炒めじゃないよな。

「ん？ ただのホイコーローだけど？」

……へ？ ホイコーロー？

「うっそだあ。キャベツ使ってないじゃん。味付けもテンメンジャ

ンだけだし」

「いや、四川ではこう作るんだよ。お前の言ってるのは日本人好みに作り直したものだ」

……あ、そうなんだ。知らなかった。って、よく知ってるねそんなこと。

「刹那って中国料理が好きだね。趣味が高じて中国で料理修業までしてたんだよ」

すごいなそれ。趣味でそこまで……

それからもくもくとみんなで昼ごはんを食べてると、

「そういえばさ、空狐って刹那が戦っているところ見たことないよね」

「ないですね」

正直特級の退魔士の力は見てみたいと思う。うん。きっとすごいんだろうなあ。

と、考えていたらぱんつと朱音さんが手を叩く。

「なら、この後刹那と戦ってみる？」

……え？

というわけで僕は刹那さんと模擬戦をすることになりました。まあ、強い人と戦いたいって欲求はあるし……意外とノリノリな精神状態。やっぱり僕ってバトルマニア？

僕は砂浜の上で天月を構え、刹那くんは……鉄塊を握っていた。

いや、よく見れば布を巻いた細い柄のようなものがある。いや、柄じゃないな。茎だなあれは。

何というかブリーチの斬月をもっと酷くした感じ？ こっちは完全に刃がでかい鉈に見える。刃渡りは長く、柄も入れれば彼の身長くらいになるだろう。

……なんか刃があるけど剣というより鈍器っぽい。あれで殴られたら切り口からぐちゃぐちゃになるだろうなと漠然と思った。

「んじゃよろしくな空狐」

そう言つて、笑う刹那くんはぺこつと頭を下げる。

「お手柔らかに……しなくていいよ」

正直、手加減はあまりされたくない。まあ、僕はそんな偉そうに言える立場じゃないけどね。

「では、はじめ！」

朱音さんの合図と同時に……刹那くんは後ろに逃げ出した。いきなり？

ちよつと呆然……つてこのままじゃ射程外に出られる。追いかけないと！

砂浜から駆け出す。すでに刹那くんは水上を走つてるため、こつちも水上を走るための術を使って刹那くんを追いかける。対して刹那くんは魔力を込めた左手を突き出し、そこから拳大の黒い魔力を十個撃つ。

速さはそれなりだけど、これなら十分避けられ……

紙一重で避けようとして背筋に悪寒が走った。直感に従い水を強く蹴って距離を離すと、爆発するように広がる魔力弾。もし紙一重で避けてたら巻き込まれてたな……

「おっしー！」

刹那くんは悔しげに言うけどその表情は楽しそうな色が占めていた。

あぶねー、いつも通りに避けてたらやられてたよ。

僕は気を引き締めなおす。そしてもう一度ダッシュ。また撃ち出される黒い魔力弾。今度はだいたいの範囲はわかったから、それにいくらか大きめに想定して……

その瞬間、眼前に黒い壁ができた。

中間の位置で刹那くんが魔力弾を炸裂させたのだ。しかも、さっきより弾の炸裂する範囲を広げてほとんど隙間ができないように！
やばい！ とっさに左上にある弾幕の切れ目に飛び込み……

そこに黒い槍が飛んできた。

見れば投擲を終えた体制の刹那くん。魔力で編んだ槍か！

「二ノ太刀、『夢想』！」

二本の刀で槍を斜め後ろに弾き……

轟音。何かに当たった音がする。そして、同時に目の前の刹那くんが大きく目を見開いていた。どうしたんだ？

第六十二話 空狐vs刹那（後書き）

評価、感想お待ちしております。

第六十三話 特級の力

塔に刹那くんが投げた槍が突き刺さり、刹那くんの顔が青くなつた。

……もしかして、あそこに重要なものがあつたのかな？

すると、刹那くんは猛スピードでその当たった辺りに飛んでいった。

僕も何があるか気になつたので塔に引き返し壁伝いに登る。ビルで言えば四階ほどの高さだからすぐに登りきる。

だが、途中から妙な匂いに気づく。アルコールのつーんとした匂いとブドウをはじめとした果物の匂い。ん？ 米の匂いまで。まさか、

そして、槍でできた穴から部屋に侵入する。

そこは……予想通り酒蔵だつた。

レンガでできた壁。大小様々な樽やビン。そして、床に散乱したガラスの破片と……床にぶちまけられた酒。

そこで刹那くんは膝をついていた。

「おおおお、俺のさ、酒がががが……」

その背は小さく震えていた。声も震えている。

えっと、刹那くんは酒のコレクションが趣味なのか。

「ドンペリ……ロマネ・コンティ……雄町……グラン・クリュ……」
その右手には割れた酒瓶。

ドンペリもロマネもかなり高い酒だよな。片やシャンパンの王様片や安くても三十万は余裕で突破するワインだし……後のも高級だつたような？ グラン・クリュも一級のワインだし。雄町は知らないけど名前からしてたぶん日本酒かな？

そして、しばらくすると刹那くんはふらりと立ち上がった。そして、また背筋に悪寒。

寒くなつた背筋に押されて後ろに飛ぶ、というより塔から飛び降

りる。と、同時にさっきまで僕が立っていた場所が吹き飛んだ。ほんと直感の鋭い自分を褒めてやりたい。あと、押されてるというのは後ろに飛ぶとはこれ如何に？

「てめー！ 逃げんなー！！」

無茶言うな！！ 僕は砂浜で着地してからすぐ海上を走る。

飛び出してきた刹那くんはさっきの魔力弾を撃ってくる。もちろん全力で回避。範囲はどれもランダムだが、先の戦いで見た中の最大のサイズは越えてないからそれを基準に避けていく。

にしてもこんな連射できるなんて…… どんだけ魔力持ってるんだ？

しかし、そのうちのいくつもが水面に着弾して水しぶきを上げ前が見えなくなる。やば……

上に飛んで逃げると槍が足元を通過した。さらに、

「斬魔閃！」

長さ二メートル幅五センチほどの黒い魔力の斬撃が飛んでくる！
こんなにでかいの兄さんくらいしか見たことない！

それを足元の空気を固着させて足場を作り、横っ飛びで回避。だが、

「散！」

目の前で散った！

「くっ！」

ばらばらになった斬撃を両の刀で弾く。一発の威力は落ちてたからなんとか捌き切る。

だが、一瞬で間合いを詰めた刹那くんが目の前で剣を振るう。斬撃を二刀で捌くけど、早い！

そして、五合目で刀を上に乗ね上げられる。そして、刹那くんはまるでバットのようになんか剣を振りかぶる。やば！

跳ね上がった刀を全力で高速で振るわれる剣に叩きつける。見た目通り重い一撃。ボールのように海に叩きつけられる。腕もしびれる。だが、すぐに腕を振って体勢を立て直し足の裏の水を魔力で固

着。それを蹴った瞬間に足の裏を爆発させて一気に水中から脱出する。なにか、刀が鳴いてるような感じがするけど、痺れのせいかな？
しかし、僕が水上に出た時には、たぶん足元の空気を固着させているのだろうか、刹那くんはかなり高い位置におり……かざした手の先には闇を集めたようにでかく黒い魔力球。なんかやばい！
どのくらいであれが発動するかわからない。逃げられるかわからない。だから遠距離用の装備である桜花を発動。最大出力で弓を生成する。

「力よ集え」

「貫け疾風」

二人同時に口上を述べる。

「シユヴァルトツ・ヴァルト」

「桜龍飛翔！」

刹那くんが魔力球を投げる。僕が魔力を籠めた矢を放つ。二つの攻撃は中間でぶつかり……僕の矢は魔力球を貫いた！

よし！ と思った瞬間、魔力球が大きく広がる。え？ なぜ？

少し考えて……あ、もしかして、術式が破壊されて蓄積された魔力が解放されたとか？ 逃げるが正しい選択肢だった？

迎撃してもあまり意味ないなんてえげつない攻撃だな。

「まだあれ飲んでなかったのに……！！」

君の術のせいだろ……！！

しかし、僕はそんなことも叫べず、闇に包まれた。

目が覚めるといつかのようになまた舞さんに膝枕してもらっていた。

「あ、起きた？」

「ん、起きました」

名残惜しいけど僕は舞さんの柔らかな膝から頭を起こす。

まだ、身体のおちこちが痛いけど、まあ動けないことはない。

「刹那くんは？」

すっと舞さんが指をさす方向を見ると、正座して朱音さんに説教

される刹那くんがいた。

「まったく、ここであんな広範囲術を使うなんて正気!？」

「すいません……でも、お叱りの前に治療をお願いできませんか？
肩に矢が当たったんですよ？」

あ、本当だ。肩から血が出てるよ刹那くん。

しかたなく、説教を中断し、刹那くんの傷を見る朱音さん。

「まったく、たかがお酒割れたくらいであんなに怒るなんて」

「何を言うか！ あれを集めるために俺がどれだけ金をかけたことか」

イヴの言葉にキレル刹那くん。しかし、「終わりっ！」「と言って傷口を朱音さんに叩かれて悶絶する。

なんだかなあ……

「では、今日はありがとうございました」

あの後、二日分の時間僕らは訓練を受けた。主に舞さんは朱音さんに、僕は刹那くんに。

そして、外に出るとまだ二時間。つまり、外ではまだ十二時ほどだった。

「うん、また明日」

朱音さんが手を振ってくる。といっても、まだ昼だけ。

「にしても今日はごめんね刹那のせいで」

「ああ、いえ……」

昨日……じゃなかった、今日はぼっこぼこにされたな！。

「また、明日もびびり鍛えてあげるからね」

そういつて笑顔でぼんつと肩を叩かれた。

僕は苦笑を返して、

「お、お手柔らかに」

とだけしか言えなかった。

第六十三話 特級の力（後書き）

空狐ぼこぼこにされるの回。

刹那と空狐では今はこのくらいの差があるって表現のためぼこぼこにしました。

評価、感想お待ちしております。

第六十四話 話し合い

空狐VS刹那が行われた晩、私は刹那宅に訪れた。

そして、屋敷内に入ると真っ直ぐ刹那のいる作業部屋に入ると、刹那はコーヒーを飲んでいた。

「邪魔するわよ」

「ああ、イヴ。コーヒー煎れようか？」

「お願いするわ」と言うと部屋の隅にあったコーヒーサイフォンのコーヒーを入れる刹那。

「ミルク二杯に砂糖三個ね」

肥るぞ〜と返しながら刹那は用意してあった砂糖とミルクを入れて私に差し出す。

私はそのコーヒーカップを受け取って一口。

「うん、おいしい」

「……ブレンドしてる当人としては、あまり嬉しくないのだがな」
うるさいわね〜。おいしいんだからいいじゃない。

刹那も自分の分を飲む。

「で、空狐はどうだった？」

ここに来た理由である質問をする。あの戦いの中、剣を共鳴させて探しね。

「なかなかだったな。相性でいえばお前以上に高いと思う」

それは重畳。三つのうち一つを任せられるってわけね。

「ならあれは空狐に任せるとして、本気である子にあれ使わせるの？」

「朱音は相性がいいだろうから持たせてみるつもりらしいな」

空狐の話を終えて、次の話に移る。朱音がねー。

あつちは彼女の方が詳しいだろうけど問題は……

「知ったら空狐がキレルわね」

「だなー」

刹那が苦笑しながら頬をポリポリかく。

まあ、今は以前からの問題だった三つの武器の使い手が決まったことを喜びましょうか。

それから視線を作業台に移す。

「で、それが例の式服？」

「んっ、そうだよ」

そう答えて刹那はそれを広げた。

デザインは今までの式服からかなり離れている。

今までののは胴着や袴などが基本であったが、それはもっと機能優先なデザインだった。

紺色のインナーシャツとジャケットとジーンズにマント、所々にあるファスナーや金属の装飾には宝石が混じって、意匠の一部は舞のアーマードレスと共通している。

「今まで見た空狐の戦い方から、見た目以上に動きやすく仕立ててあるし、かなり頑丈にしてある」

ほほう。あの子は防御を重視してないしそういうのは大歓迎ね。

「それにいくつかギミックも仕掛けてあるし、なによりこれ！」

刹那が持ち上げたのは鉄甲。銀色の装甲に甲の部分の紅い宝石と、そのデザインは見覚えあり。もしかして！

「お前の最後の武器のレプリカ作ってみたんだ」
「やっぱり！」

「流石に性能は比べものにならないけど聞いた限り近いものに仕立ててみたよ。表面はミスリル製だから少しの傷なら勝手に直るし、能力を再現するためのギミックも内蔵してあつて……」

「ありがとう！」

途中で私は刹那に抱きつく。

「お、おい！」

「すごく嬉しい！」

私はグリグリ胸を押し付ける。

「や、やめ……!!」

「No! No! No! No! No! No!」

えっと、もしかしてこの展開は……

「も、もしかして全部ですかー!!!」

「Yes! Yes! Yes! Yes! Yes!」

「もしかして、ブーストありですかー?!」

「Yes! Yes! Yes! Yes! Yes! Oh M

y God!」

朱音が鎌を構える。

「サンダークローウ! サンダーブロウクン! サンダーランス・フ

アランクス! サンダースマッシュャー・マキシマム! スターライ

トレイ!

一・撃・入・魂! スターダストオオオオフルバアアアアス

ト……!」

目の前で雷と星の命が乱舞する。や、やりすぎたかな?

やっと落ち着いた後、

「まったく、ああいう冗談はやめてね」

朱音が不機嫌そうにそう言うが、充分以上に刹那は罰を受けている。

「ま、まあ……そうだ朱音! 頼んだ酒どうなった?!」

包帯でぐるぐる巻きになった刹那が朱音に聞く。

「ちゃんと直したよ。で、約束のお願いね」

あ、お酒直せたんだ。

まあ、朱音ならね。

「わ、わかってる。新しいドレスと人形な。ちゃんと約束は守るって」

そう言っつて刹那はぽそつと、

「でも、いいのか? 自分でも買うことできるのにそんなので不思議そうに問う刹那。

……この子、本気で言ってるの?」

「大変ね朱音……」

「まあ……ね」

遠い目をする朱音。一体刹那はどれだけ女心がわからないんだろうか？

翌日、またも例の訓練空間で舞さんには朱音さんが、僕には刹那くんが担当に訓練することになったんだけど……なんか包帯ぐるぐる巻きで若干生気がない。ど、どうしたんだ？

「あの……刹那くんどうしたの？」

「いや、昨日キレた朱音にボコボコにされてから散々……なんでもない」

イヴが「昨日のあれだけですまさなかったのね」と恐れ戦いている。なにがあったか知ってるのか？ まあ、とりあえず、ご愁傷様？

第六十四話 話し合い（後書き）

鈴：「憐れ刹那……でも浮気はいけないよ？」

刹：「だから誤解だ……」

評価、感想お待ちしております。

第六十五話 刹那くんの頼みごと

夏は暑い。しかしながら木陰は程良い気温であり、日課の訓練のあと汗を拭きながら涼んでいた。

風鈴の涼しげな音、鳴った電話の音を聞きながら青々とした空を眺めて夏だなあと思いを馳せる。そんなとき、

「空狐くん、刹那くんから電話、なんか緊急事態だって緊急事態？ 刹那くんが？」

少し心配になって家が上がって電話を取る。

「もしもし、刹那くんなに？」

『頼む空狐、ちよっと手伝ってくれ。詳しいことは後だが、とりあえず、五日ほど手伝ってくれ。三食付きは約束する。もちろん給料付きだ』

五日かあ……まあ、特にすることないしいつか。それに給料をもらえるってのも魅力的だし。

「いいよ。すぐそっち行くから」

『わりい、恩に着る』

そう言って刹那くんが電話を切った。

「舞さん、刹那くんと呼ばれたからちよっと行ってきます」

「うん、わかったよ。後でわたしも見に行くから」

僕は身支度を整えて舞さんにそう伝えてから家を出た。

刹那くんの家は静かだった。まるで人がいる気配がない。どうしたんだ？

不審に思いながらも家に行くと刹那くんが出迎えてきた。その目には隈がくつきり浮かんでいた。な、なにがあった？

「よう悪いな空狐」

「あれ？ 朱音さんは？」

いつも出迎えてくれるのは朱音さんなのに。

「ああっ、アルトと友達のところ泊まりに行ってる。予想してたんだなたぶん」

予想？ なにを？

「まあ、いいから上がってくれ」

そして、居間。僕らしかいないせいで非常に静かだ。

「で、緊急事態ってなに？」

改めて僕は聞く。隈が浮かんでいるのもそのせいだと察しはついている。

すると刹那くんは視線を逸らす。

「実はな、終わりそうにないんだ」

終わりそうにない？ なにが？

「夏コミの新刊」

……わお。そりゃ大変だ。刹那くん確か、今年は壁際じゃなかったか？

「連載分先終わらせてたらあと五日の今日まで半分もやっていなかったんだ」

ふーん、そうなんだ。大変だね……いや待て、連載？

恐る恐る聞いてみる。

「連載って、漫画描いてるの？」

「うん、黒瀬トワってペンネームなんだけど知ってる？」

知ってるも何も売れっ子ですよー！ 僕も漫画全部買ってますよー！！

黒瀬トワ、十年ちょっと前に『月刊飛翔』でデビューした漫画家で、性別その他一切不明。噂では編集部も知らないとか。

代表作の名は『天使の約束』。現在五年間、連載してその間にアニメやゲームにもなっている。

「サイン頂戴！ サイン！」

いいぞっつと刹那くんが嬉しそうに答える。

んっ？ でも……

「アシさんいないの？」

「朱音がいるからアシはいないよ。あいつ早く正確に作業できるし、そう言えば朱音さんってアンドロイドだっけ。なら、正確無比な動きもできるのではろう。」

「だから空狐手伝ってくれ！ 報酬は夏コミの新刊と俺の持つてる同人から好きなもの持って行っていいから！ 頼む！！」

と刹那くんが土下座までして頼んできた。ま、まあ、面白そうだし、報酬も魅力的。手伝うくらいならいいか。

「いいよ」

僕は頷く。この時、もし伏せられた刹那くんの顔がとても勝ち誇った顔に気づいていたら、この後、すぐ後悔しなかっただろう……

「ここが作業部屋」

刹那くんがドアを開けるのをドキドキして見る。正直漫画家の仕事場を見る機会なんてそうそうないだろうと思い、少しワクワクしていた。

部屋の中に入る。

真ん中に机が二つ。その上にはライトテーブルがあり、その周りに羽根ペン、Gペンなどが差されている。

そのそばに本棚があり、横に番号が振られた棚があった。と、ここまでなら、まだよかったのだが……

その机の下には丸まってしわくちゃになった紙。空っぽのカップ麺、空になったカロリーメイトの箱、ほかお手軽に栄養補給ができる食べ物など所狭しとゴミが散乱している。ソファアの上に転がった寝袋、おそらく仮眠道具。

そして開けっ放しの棚からトーンやらなんやらがはみ出していて、さながら腐海という表現がピッタリだった。

しかし、僕が一番最初に感じたのは、その汚さより臭さだ。

片付けられてない空のカップ麺や、ビンから立ち上る臭いとインクなどの独特の臭いが混ざってなんとも言えない異臭が立ちこめて

いた。

なぜ開くまで臭いの気づかなかったんだ？　いくら僕が半妖とはいえ人間よりかなり鼻がいいのに気付かないのはおかしい。

鼻を抑えながら強烈な臭いに耐え部屋に入る。

「そついえば、あとどのくらいなの？」

聞き忘れた肝心なことを聞く。

「あとペン入れが十七ページ、仕上げが四十ページ」

……あの、それってあと五日でできる分量じゃないと思うのですか？

「表紙も線画だけ。この後パソコンで仕上げる」

おいおい、ヤバいですよそれ？　そんな状況に素人巻き込むつもりかな君は？

「飯が食いたくなったらそこにカップ麺やカロリーメイト入ってるから勝手に食って。昼寝もできれば一、二時間で。ああ、地下の『アトリエ』は今、整備中で使えねえから」

刹那くんが指したダンボールの中を見る。中にはカップ麺やらカロリーメイトがたくさん入っている。まさか、三食ってそのこと？

さ、最悪の労働条件だ……絶対に労働基準法違反だよ。

「帰らせていただきます」

僕はくるつと反転してこの場から逃げようとする。しかし、

「逃がすかあ！」

泣きながらシャツの裾に捕まる刹那くん。

「こんな条件で仕事できませんから」

刹那くんを引きずりながら、淡々と僕は答える。んなもんやってられるか！

「萌え萌えコレクションインバー・A-01全部やるから！　なあ、

頼むよ！！」

「いや、いらないよ」

構わず進む。それなら好きなキャラ分は持つてるし。

「今ならりゅーみんの限定本もセット！ これならいいだろ？ だから！」

「い、いや、いって……」

ちよつと足取りが遅くなってしまう。りゅ、りゅーみんかあ……
「なら持つてけドロボー！ スタジオかちゅーしゃの秘蔵同人誌！
これ、どんだけプレミア価格付くって思ってたんだ！？」

「……つく、無駄無駄！」

かなり足取りが遅くなってくる。か、かちゅーしゃ……あのかわ
いくてそして、なんかエロいあの絵かあ。

「出血大サービスで結衣姫の武御雷をやる！ 前欲しいっていつ
ただろ！？ なあ！？ どうよ！！！」

「……………」

動きを止めた。あの結衣姫の？ 再販なんてしないであろうあの？
僕の前に僕に白い羽の生えた天使っぽいのと、黒い羽の悪魔っぽい
いものが浮かぶ。

「私はあなたの理性です。ここは逃げるのです。誘惑に負けたらど
うなるのかわかってますか？」

「俺はお前の欲望だZE。こんなに色々くれるって言うてるだから、
引き受けちゃいなYO」

戦いを始める天使と悪魔。天使は防戦一方で今は悪魔のターンだ。
「よし、秘蔵の黒帝の画集も渡す、これならどうだ！」

天使を桜花砲でぶっ飛ばす悪魔。ふ、さらば我が理性。君の頑張
りは忘れない……

「分かったよ、刹那くん」

満面の笑顔で僕は頷いた。

「……なんであんなに必死に食い下がったんだろ？」

よく考えれば、どう考えても俺、割に合っていないよな？

だが、もう後の祭りだった。小躍りする空狐が憎たらしい。

第六十五話 刹那さんの頼みごと（後書き）

できる限り夏コミ前の修羅場を表現したいと思っています。

第六十六話 作業開始

そして作業が始まる。

刹那くんは残りのペン入れを始め、僕はそれにベタ・トーンを入れる。後はホワイトでの細かい修正だ。

ちなみにこういった作業に分身は使えない。

実体を作るのと制御にはけっこう集中力と制御能力を問われるのだ。こういう細かい作業には残念ながら向いてない。

最初の一時間で大体の作業の仕方を覚え、刹那くんにも筋がいいと褒められた。だが……

「だー！ 床は汚いし、棚も整理がなってねー！」

トーン探しの途中思わず頭を抱える。なんせ、トーンが番号問わずグチャグチャの状態なのだ。

さらに床にペンや消しゴムを落とす度にゴミをひっくり返して探すのも嫌になる。死ぬ、一時間前の僕よ。死んで償ええええ！！

「空狐」

さらに追い打ちのような刹那くんの情けない声。

「今度はなに！」

「わりい、また修正頼む」

そう言っただけ刹那くんが見せたのは、インクのこぼれた原稿であった。

「また!？」

作業を始めて二時間なのに、すでに三回目だ。

僕は額を抑える。君は本当にプロの漫画家なのかとか、このまま期限までにできるのかとかいろいろ問いただしたくなった。

くそ、こつなつたら……

「刹那くんはさっさとペン入れをして！ その間に僕は片づけるから！」

そう言っただけ僕は掃除を始める。このままじゃどこに何があるかわ

からない！

ゴミを処理して、床を掃除する。それから、ベタやトーンなど道具を指定の場所に揃える。そんなこんなで片付けが終わりかけ……がこ、つと何かが落ちる音がした後、びちゃつと床に何かがぶちまかれる音がした。

恐る恐る振り向くと、引きつった笑みを浮かべる刹那さんと床にぶちまけられたインク……

「ば、ばか……！！！」

僕は怒鳴った。刹那くんが耳を抑える。

すぐにインクを拭き取る。こんな君よく漫画描けるのさ！？

「て、手伝うか？」

「いいから、君はさっさと線画を終わらせる！ そしたらパソコンに入れてある表紙を仕上げる！ さっさとやって！」

僕はそう指示をしてインクを拭く。線画が終わらないと、僕も何もできないんだから！

刹那くんは「わ、わかった」と答えると作業に戻る。

「ちくしょー、ちくしょー！！！」

僕は泣きながら掃除を続けた。

作業を始めて三日が経った。

何度か仮眠は取ったもののまだ眠い。さらに刹那くんのペン入れはまだ終わっていない。

あー、もう見捨てて帰っちゃおうか？

「疲れた……」

「言うな……頑張ってくれ」

昨日から作業を手伝ってくれているイヴからトーンを受け取りながら呟く。

三日目に突入してから二人とも黙々と作業をしていた。もう言い合う気力も根こそぎ奪われ、淡々と自分の席で作業を続ける。

たまに舞さんが見に来るけど、碌に会話もしていない。

そして四日目を迎える。

「ふ、ふふふふ……あーっはっはっはっはっは！」

僕は笑いだした。すでに変化の術をしてる余裕もなくなった状態で。

もう今がいつでなにがどうなったのか欠片もわからない。ただただ高いテンションに身を任せている。

「見える、僕にも会場が見えるウウウ!!」

僕のテンションはすでにレッドゾーン!

血をインクに、骨をペンにした漫画マシーンなのだ! 自分でもなにを言ってるのかわかんねえけど!

「震えるぞハート! 燃え尽きるほどヒート! 刻むぜ血液のビートオー!!」

「うるさい空狐! あと、尻尾をばたつかせるな!」
怒られました……

最終日……

外ではちゅんちゅんと鳥が鳴いている。僕らは……机に突っ伏していた。残り数ページ。だが、すでに気力も体力も、魔力すら枯渇していた。

本当に、割に合わない依頼だったよ……

「空狐、生きてるか……?」

「死んでるよ。あと、五時間寝ないと」

せめてそれくらい寝られれば残り数ページくらい……

そこに届いたのは絶望的な宣告。

「入稿、今日の昼」

かみはしんだ……

そして、残った気力を振り絞って全てが終わった後、僕は死んでいた。いや、だって、五日間で睡眠時間五時間程度。もうひたすら

眠りたい。

刹那くんは入稿に赴いたから僕は遠慮なく眠り続けたのだった。

次頼まれたら全力で逃げちやる……

だが、これすらまだ序曲にすぎないのであった。

第六十六話 作業開始（後書き）

お疲れ様空狐。でも、まだ君の仕事は残ってるんだ……がんばれ。

第六十七話 コミケの戦い 前編

そしてイベント当日の日を迎え、八時くらいに僕らは会場に訪れていた。僕が来た理由は刹那くんが販売を手伝ってくれと頼んできたからだ。僕は断ろうかなとも思ったけど手伝ったことだし売れるか気になったから手伝うことになった。

訪れた会場の前にはすでには多くの猛者がひしめいている。す、すごいな。初めて見たからか余計に強烈な印象だった。

「うわゝ、すごい人ねゝ」

イヴが呟くのと同音する。

「ほら、さっさと行くぞ」

大きなトランクを抱えて僕らは会場に入るのだった。

そして、更衣室で刹那くんが用意した売り子用の服に着替えるけど……

「なんでやねん」

思わず自分の姿につっこんでしまった。

最初、スカートを履いた時に首を傾げた。

そして垂れたウサミミをつけた時に確信した。また女装させられる！ それより問題なのはナチュラルに着替えてた僕だよ!?

「おー、似合ってるな。後は目の色だけが合格!」

「確かにねゝ。本当にそういうところには才能あるんだから」

満足そうに笑う刹那くんの言葉に周りからもおゝ、と感嘆の息を吐かれている。あとイヴ、その評価は悲しいからやめて……

僕の格好はロングのスカートの黒い服に青いネクタイ、そして……ウサミミ。髪はちゃんと持ってきたウィッグでツインテール。

ようは、『あいとゆうきのおとぎばなし』に出てくる人の心が読めるウサギさんというわけで……ちなみに刹那くんは基本は濃い灰色で縁が水色のスーツと黒いシャツ、縁と同色のネクタイを縛った

つまりは国連軍の制服。

「でもなんでこの格好なのさ!? 説明して!」

「似合うと思ったから!」

予想通りのその言葉に僕は強く踏み込み体中の螺旋を集めた拳を叩きつける!

キャラが違うと言うなかれ。きっとホームステイ先から伝授されてるはず! そうあの恋愛原子核を成層圏外まで追放する奥義!!

「どりるみるきいぱーんち!!」

だが、渾身の拳は見事刹那くんにかやつちされる。

「ふっ、二度も同じ技で……」

偉そうに講釈を垂れる刹那くん。だが、彼は忘れていた。もう一つ奥義があることを!

本家とは違うかもしれぬがあえてこの名で撃とう! そう、封印されし禁断の左……

「どりるみるきいふぁんとむー!!」

「ガガーリン!!」

刹那くんは屋根を突き抜け成層圏まで吹き飛んだ。

「たーまやー」

イヴの眩きだけが後に残ったのであった。

結局、僕はあの格好のまま自分たちの席に座っている。他にまともな衣装が少なかったのだ。

プラグスーツよりぴったりお肌ヒット、訓練兵は前面すけすけだけど正規兵は色付き、だけどあえて訓練兵の強化装備だとか、最終兵器彼女チックなヒロインの強化装備とか、日本帝国斯衛軍の零式強化装備の赤とか。

なんだかなあ。最後のにはときめいてしまった時は自分が情けなかったが……

それからあと二人来るといってお手伝いさんを待っていると……
「お待たせしたっす刹那さん」

「うー、久しぶり天馬」

……あつれー？ 今聞いたことある声と名前聞いたよ？

振り向くと、そこに僕と同じくらいの年の背はさほど高くないが
つしりした褐色の少年。屈託のない表情を浮かべる顔にスポーツ刈
りに刈り上げられた白髪。対して瞳は黒い。服はこれまた国連軍の
制服。

つて、君は！

「天馬くん!？」

「んっ？ お嬢さんなんでオレの名前知ってるんですか？」

不思議そうに首を傾げる天馬くん。知り合いにお嬢さんって言わ
れたー!!!

僕はショックで仰け反る。それからぐんつと身体を戻す。

「僕だよ！ 空狐、木霊空狐!！」

少しの間、天馬は反応を返さなかったが、しばらくして目を丸く
して大声を上げた。

「あー！ 空狐？ なんでそんな格好してるんすか!？」

「好きでしてるんじゃない!！」

彼は烏天狗の天馬。前に母さんと仕事で天狗の里に訪れた時に知
り合った相手だ。

彼が手伝いなのか！

「なんだ知り合いだったのか？」

まあね……ちよつとショック大きかったけど。

久しぶりに会った天馬くんとお互い近況について話す。

「でも、男も化けるもんなんすね」

「それ前に聞いたよ……」

そんな風にしゃべりながらもう一人のお手伝いの人を待っていた
ら……

パシャッと写真を撮られた！

「誰! ……つて、兄さん!？」

「よっ、空狐」

ぴつと笑顔で兄さんが片手を上げる。あんたが手伝いか！！

この前まで数年に一度会う程度の相手だったのに、この頃よく会うなあ……

「はよ〜銀狐」

「おはよ刹那」

二人が挨拶を交わす。で、これでメンバーが揃った。刹那くんが頷いて立ちあがる。

「あー、本日は集まってくれてみんなありがとう。一度礼を言う。そして、頑張つてこの戦いを成功させよう！」

刹那くんの言葉にみんな笑つて頷く。そして準備をし始める。看板を立てかけ、商品の入った段ボールを開けて並べる。それからそれぞれの役割を確認して準備完了。イヴも衣装に着替えて顕在率を調節し具現化している。ようはフィギュアの代わりとして客引きしているのだ。

さあ、行くぞ。戦いに！

結論から言おう。滅茶苦茶しんどい戦いだつた。

流石は壁際、最初はゆるゆるだつたが少しずつ人が集まつて次第に列が出来上がった。

「こちらサークル黒白の図書館、列は三十分待ちです……」

僕は看板を持って誘導を手伝う。

僕の担当は売り子だけでなく看板で列の整理もすることになった。刹那くと兄さんが販売をして、天馬くんが足りなくなった商品の補充を行う。刹那くんには「キャラの個性を出すため」ということであまりしゃべらないと言われた。まあ、確かに彼女が饒舌なイメージないし。まるで誘蛾灯に集まる蟲のようにファンが集まったのはびつくり。僕の魅力も捨てたものじゃないね

………すいません。言つて悲しくなりました。

そして、買う人の何人かが僕らに「がんばつて」「毎回楽しみに

しています」「かすみたん、萌え」と励ましくれた。最後のは励ましじゃないし、主に僕だけだけど。

差し入れとって何かを貰えるのも嬉しかったな。で、お昼時になる頃には少し勢いがなくなってきた。

「にしても、だいぶ減ったなー」

「だね。もうダンボールが半分切ったよ」

売れ行きは好調で昼を迎えに来る頃にはダンボールは半分以下になつていた。ふむ。思ってたより人気なんだなここ。

「ここからは交代で休憩入るか。空狐、一時間だけ抜けていいぞ」

「えっ、いいの？」

まだそれなりに人がいるのに？ だけど刹那くんは

「いいよ。それにさお前コミケ初めてだろ？ ちよっと見て回ってみてこいよ」

うーん、ならお言葉に甘えて！！ 僕は一時間だけ回ってみることにした。

第六十七話 コミケの戦い 前編（後書き）

コミケ編前半戦。
後半は次です。

第六十八話 コミケの戦い後編

で、現在、僕はコスプレ広場にいます。なぜか？ 企業ブースに入ろうとしたらその手前にあるから捕まったんだよ！！

「うわー！ 霞たんだー！！」

「すげー、本物みてえー！！」

「はあはあ、お嬢さん、お兄さんと遊ばない？」

はい、こういうことです。写真を撮ろうとした人たちに囲まれたんです。あと、僕は男だー！ 誰か気づけよー！ むしろ気づいてくださーい！

無遠慮に焚かれるフラツシユに僕が困惑していたら……

「こら！ あんたたちなにしてるの！？ その子怯えてるじゃない！！」

他のコスプレした人たちが見かねて助け舟を出してくれました。

その後、大勢の人間にモラルやマナーについて注意されすこすこ去っていくオタクたち。た、助かった……

「大丈夫だった？ まったく、こういうイベントではちゃんとマナーを守ってほしいよね！」

すぐにリーダー格らしきお姉さんが声をかけてくる。彼女は心底憤慨しているのか表情も厳しい。

お姉さんはすらつとした長身で、黒い髪に上から二つほどボタンを外したワイシャツと黒いブレザーと模造刀、ああ姉御ですねわかります。

「あ、大丈夫です。ありがとうございます」

ぺこりと頭を下げるとお姉さんはいいのよと手を振る。

「コスプレ仲間を助けるのは当然のことよ。まあ、君かわいいからしかたないかもね。そうだ。よかつたら」

ささっとお姉さんがメモに何かを書いて渡してきた。

これって……

「私が運営してるコスプレサイト『衣装好きの集い』のURLよ。よかつたら覗いて見てね」

それだけ言うとお姉さんはじゃねー、っと去っていく。その颯爽とした後ろ姿はとてもかっこいい。でも僕が男だっけしったらどんな顔するかな？

「いい人だね」

横からの舞さんの言葉に頷く。

「ですね。なかなかあいう雰囲気踏み込むのは勇気が……って、舞さん!？」

振り向くと髪をツインにして白いバリアジャケットと杖……つまり高町なのはさまの格好をした舞さんがいた。

髪の色が違うけどあまり違和感がないよ!

舞さんは楽しそうにやっほーと笑っている。

「な、な、なんで舞さんがいるの!？」

「私が呼んだから」

そう言ったのは、にやにやと底意地の悪そうな笑みの朱音さん! な、なんでここに?

「なんでって、私も参加してるからよ」

二重でびつくり。あと、久しぶりですが心読まないで。

「あ、朱音さんも?」

「うん。『木漏れ日喫茶店』ってサークル知ってる?」

またも有名サークル!?

透明で綺麗な絵を書くことで有名なサークルで、僕も好きでサイトによく行っている。

「まあ、ご苦労様空狐。舞から事情は聞いたわ。ありがとう」

そう言っただけで朱音さんが肩を叩いてきた。

それから僕の顔を覗き込んで、

「でも、ここに私がいたのを刹那に話したら……どうなるかわかっているわね?」

僕は笑顔だけど目が笑ってない朱音さんに必死でこくこくこくこ

くと首を振る。それに満足そうに笑って、

「じゃあ、早速写真撮影しましょっか」

楽しそうに、本当に楽しそうに朱音さんが告げて、もちろん逆らえない僕は貴重な休み時間を撮影に消費されることとなった。

パシャパシャと焚かれるシャッター。

「目線下さい！」

「すいませーん。次こっちお願いします！」

「あ、ポーズもお願いします！」

「決め台詞も！」

なぜか、カメラのフラッシュ攻撃に晒されていました。後決め台詞ってなんだー！ この子にはそんなものは……はっ！

僕は悲しげな顔になって、

「絶対、忘れません」

言った。途端に周りが盛り上がる。ううう、なにしてるんだ僕は？ 疲れてるはずなのに、すごく疲れてるのに……

僕は確か刹那くんの同人制作を手伝っていたはずである。それなのにいつの間にか会場にまで来て、気づくとコスプレさせられて、ブースではんばいをしていて休憩に行くことになって訪れた先で人の壁にじゃまされていまではこんなところでしゃんとられて、ウサミミが垂れてて、人類のために憐れにも敵の捕虜になってしまったしょうじょのこころをよんでひとのいいせいねんにしんじつを黙って、くるくるせかいはまわって、かくもうつくしくははかなくそらはめぐって剣を取ってえいえんにたたかいつづけて……

ぶっつん！

心の中で何かが切れた。あー、なんかなにもかもがどーでもいーぜ！ー！

「はい、みなさーん！ ばんばんとっちゃってくださいー！！」

私はそう言っつてポーズを決める。なんか朱音さん驚いてるけどどしたのかなー？

いろいろポーズを決める私にずっとシャッターは焚かれたのでした。

しばらくして撮影会が終わってブースにもどってきました。

「お、空狐遅かったな……どうした？ やつれてるぞ？」

「あはは、そんなことないよセツナちゃんは心配性だね」

私の言葉にセツナちゃんは首を捻る。

「どうしたんすか？ 空狐？」

「む、天馬か。私はなんともないが？」

天馬のおかしな問いに私は答える。委細問題はないのだが？

だが、兄上まで私に心配げに声をかけてきた。

「いや、キャラが変わってるぞ？」

「あはは、お兄ちゃんはしんぱいしようです。クーコはなんの問題もないですよ？」

クーコのキャラが変わってるってどういうことですか？

だけどみんなクーコのことを心配そうに見ています。

「ほんとーに、大丈夫なのか？」

「だから大丈夫よ！ さつきからんなのあなたたち？」

まったく、まるで私がおかしな人間みたいじゃない！

しかし、私の主張にみんな首を振って、否定する。

「いや、だからキャラが違う。しかもランダムに変わってるぞ！……」

「あはは、みんな何言ってるの？ 僕はいつも通りだよ？」

「いつも通りと思わせて実は別のキャラだろ！？ 空狐帰ってこーい……」

刹那が叫ぶけど本当に僕は問題はないんだよ？

「……疑惑？」

「くウこおオオオ！！ しっかりしなさアアアい！」

こうして僕のコミケは終わって行った。

後日、天野宅に訪れる僕。

「じゃあ刹那くん、約束のものを」

僕の言葉に刹那くんは顔をそむける。ふむ……

「刹那くん、君が約束したんだよ？ だから早く出すもの出しなよ。」

H A L L Y、H A L L Y、H A L L Y、H A L L Y、H A L L Y！！」

僕の言葉に刹那くんは悔しげに顔をしかめながらわかったと返す。そしてダンスの中から一つの箱を取り出す。

それは黄色い鎧武者のようなデザインのロボット。結衣姫の武御雷。僕はそれを受け取って……

あることに気づいて返した。

「これはダメ」

「なんで!？」

刹那くんが目を見開いて叫ぶ。まさか付き返されるとは思わなかったのだろう。

ダメな理由？ ふつ、わかってるだろうに……

「確か君、保存用観賞用に後二つ持ってっていったよね？」

僕の言葉に刹那くんはうっと唸る。そして、

「ほらよ……」

すぐに諦めて悔しそうに新品同然の箱を差し出してきた。それを受け取りチェック。うむ。傷もないしこれならよし。

僕は頷く。

「ほら、他の同人誌とイラスト集も」

刹那くんは反論せずにダンスに向き直ってそれからあつと、呟いた。

「そういえば、空狐、もう何ともないのか？」

なんともない？ なんのことだ？

「なんのこと？」

僕が問い返すと刹那くんは途端に神妙な顔になる。な、なんだ？ 「いや、お前休憩終わった後壊れたじゃん」

壊れた？ ははは、何言ってるのせつなくん？ ヒトがそうかん

たんに壊れるわけないじゃないですか。

「だけどなんでしようこの背筋のオカンハ？　すごく嫌な予感……」
「だって、お前、なんか銀狐の膝の上に座って満足げになってたり、恥ずかしそうに『っ、次もちゃんと来なさいよね！』とか言ったりとか」

「ぬがー！ー！ー！」

僕は頭を壁に打ち付ける。突然の奇行に刹那くんはドン引きだ。

「ど、どうした空狐？」

「な、ナンデモナイデスヨー？」

僕は赤くなつた額を押さえながらくると刹那くんの方に向き直る。

まったく刹那くんはおかしなことを言う……

「あと、『あたしアイス食べてーな』って」

「ふおおおおおおー！」

知らない！　僕はそんなこと全く知らない！！

しばらくの間刹那くんの部屋には何かを壁に打ち付ける音が響くのだった。

そして家に帰ろうとして、玄関まで刹那くんは見送りに来てくれた。

「じゃあな、空狐また明日の訓練で」

「うん、またね刹那くん」

額に包帯を巻いた僕は刹那くん家から出ようとして、

「あ、まって空狐、これ！」

朱音さんが駆け寄ってきた。で、なにかを渡される。それは一枚の封筒だった。

中身は触ってみるとなにか少し硬い紙のような薄いものが入っているのがわかる。

「部屋で開けてね」

朱音さんの言葉に頷いて僕は今度こそ家に戻った。

で、部屋に戻って渡された封筒を開けています。

何が入ってるのかな？　もしかして刹那くんを手伝ったお礼に図書カードとか？

僕は期待して封筒を開けて……

……っは！　僕が気づくとガムテープでぐるぐる巻きになった封筒を持ってタンスの一番下の段を開けていた。

あ、ありのまま今起こった事を話すぜ。

『僕は封筒を開けて中を見ようとしたら、いつの間にかガムテープでぐるぐる巻きにしていた』

な……何を言っているのか分からないと思うが、僕も何が起こったのか分からなかった……

頭がどうにかなりそうだった……催眠術だとか超スピードだとか、そんなチャチなものでは断じてない。

もっと恐ろしいものの片鱗を味わったよ……

とりあえず僕は自分の直感を信じてその封筒に邪神封印級の処置を施すことにした。これで二度と開けられることはないぜ……

なぜか隣でイヴがくすくす笑ってたけど僕にはなんなのかぜんぜんわかんない。

第六十八話 コミケの戦い後編（後書き）

コミケ編前編後編に分けました。

お疲れ様空狐……

第六十九話 極秘計画

「こちらアストレア？。アストレア1応答せよ」

携帯の画面のみが光源の夜の部屋。少年は携帯で目当ての人物の電話番号を出して通話ボタンを押す。そして、電話が繋がるとすぐに呼び掛け。

『……こちらアストレア？。アストレア？、そちらの様子はとうだ？。』

携帯から聞こえるのはまだ若い女の声。少年は頷く。

「対象に特に動きはなし。こちらの行動にも気づいてない模様」

少年は簡潔に相手に自身が集めた情報を述べる。

『了解した。作戦決行は明日だ。アストレア？、合流前によく準備をしておけ』

相手の言葉に頷く少年。

「了解したアストレア？。明日、マルキュウマルマルにそちらと合流する」

向こうでにやりと笑う気配がする。

『ま、明日は忙しいだろうし今日は早く寝といたら？ 空狐』

「そうします。朱音さん」

くすつと相手の、朱音の言葉に少年、空狐は笑った。

『では、アストレア？、通信を切る』

「アストレア？了解、御武運を」

『そつちこそ、一つ屋根の下なんだからばれないようにね』

そう言って、二人は電話を切った。

ふつと僕はため息をつく。

それからベッドに倒れこむ。その時視界に入ったのは机の上に置いてある小さな小箱。それを見て僕は表情を緩める。

「明日、舞さん喜んでくれるかな？」

「喜ぶんじゃないの？」

そばにいたイヴの返事に僕はそうならいいなと笑った。僕からの贈り物に喜んでくれる彼女をイメージして。

この日の翌日、その日は僕らにとって重要な日。舞さんの十六歳の誕生日なのだから。

第六十九話 極秘計画（後書き）

えー、いろいろ考えた結果、今回のバトル話は作品全体のバランスを崩すと思ったので、こちらに変更です。

削除された話は機会をみて投稿します。

ご迷惑おかけしました。

第七十話 準備開始！

「じゃあ、行ってきます」

僕がそう言っただけで家を出ようとしたら、

「あ、空狐くん」

舞さんに呼び止められた。振り向くと寂しそうな彼女の表情。ちよつと胸が痛む。

「なんですか？」

少し、舞さんは悩んでから聞いてきた。

「あのね、今日、何の日か覚えてる？」

「え？ なにかありましたっけ？」

僕はまったく心当たりがないようなふりをする。少し、心が痛むけど、こんなところでみんなの作戦を水泡に帰すわけにいかない。

僕は心を鬼にしてそう聞き返した。

「ううん、なんでもないよ。じゃあ、行ってらっしゃい」

寂しそうに僕を送り出す。舞さん。ごめんなさい。

僕は舞さんのサプライズパーティーの準備をするはみんなと合流する前に頼まれたものを買いに行く。で、必要なものを買って、重みで破けそうなビニール袋を片手に下げながら刹那くんの家へ上がる。

当然ながら中はパーティーの準備でドタバタしていた。刹那くん宅に到着。すぐに台所に食材を持っていくと、そこは……戦場だった。いや、比喻とかじゃなくてさ。

荒れ狂うガスコンロの火、空中に踊り出す食材、軽快な包丁の音、そして……

「軍曹、次の料理まで、あと何分かかる？」

「あと六分ほどですサー」

「遅い。貴様は新兵か？ 時間もない三分で仕上げろ」

「サーイエツサー」

朱音さんが聞くと、フライ返しを握り、鍋と格闘する刹那くんは料理だけを見て振り返らずに返事を返す。

「アルファ、ブラボー、チャーリー、フォクストロット状況は？」

「アルファ、飾り付け順調です。予定時間内には完了します」

「こちらブラボー、料理盛り付け完了、これよりチャーリーの補助に入る」

「チャーリー、予定ノルマの八割を消化」

「こちらフォクストロット、ターゲットにまだ動きなし」

朱音さんの持つレシーバーからハル、龍馬、アルトちゃんの声がした。

「まるで軍隊ね」

僕の頭の上に座っていたイヴに頷く。

なんだこの会話？ 僕がいないうちに何があった？

「朱音さん、材料ここに置いとくね」

朱音さんは振り向くと非常に真面目な顔、少なくとも戦場には似合うがパーティーには絶対に似合わないと思える表情で頷く。

「たった今デルタが帰還した。軍曹、予定時間になったぞ」

「申し訳ございませんサー、あと一分下さい」

すると朱音さんはレシーバーを放し、

「このバカ者が!!」

すごい跳び蹴りをしました!? 刹那くんは吹き飛び、壁にぶち当たって跳ね返ってから地面をバウンドする。そこにさらに朱音さんが背中を踏みつける。

「デルタ、料理が焦げる。すぐに盛り付ける。軍曹、貴様自分が何をしたのかわかってるのか!？」

さらに朱音さんはげしげしと刹那くんの背中を蹴る。うわ、やめてあげて。と言いたいけど、怖くて言えない。すまない刹那くん、また僕は君を見捨てるよ。恨むなら自分を恨んで。

そんな風に心で呼びかけながら僕は中華鍋の中の料理を大皿に盛

り付ける。中の料理は野菜炒めで、パリパリのキャベツ、鮮やかなニンジンを始めとした緑黄色野菜にほどよく火の通った豚肉。見るだけで食欲がわいてくる。少なくとも失敗は見当たらないが？
「わかりません。サー。自分は盛り付けを行ってただけです」
「うわ、まだ軍隊ごっこ続けてるよ。スゴいのかバカなのか判断しかねるが。」

僕はそつちにはむかずに盛り付けをしてから鍋をコンロに戻す。
「貴様は盛り付ける時に皿を取り出しに鍋から離れた。それでは料理が焦げてしまうのではないか愚か者！」

朱音さんはそう言っつて背中につま先をぐりぐり押しつける。

「このミジンコ、シスコン！」

容赦のない罵倒の中、

「……いくらなんでも俺泣くよ？」

いや、もう泣いてるじゃん。何だかなあ……

そんなこんなでパーティーの準備が完了した。

刹那くん家の広い庭が会場で、庭に出したテーブルの上に白いマツトを引いてその上にはご馳走が並んでいる。一部には見たことがない料理もある。

その中心には舞さんの誕生花の向日葵が飾られている。

さらにテーブルから少し離れた場所ではバーベキューの準備も行われている。

「よし、そろそろ舞さんと呼んできて」

準備が終わったのを確認して刹那くんが僕にそう指示を出した。

「おっけー」

僕は指を立てて返事をした。

というわけで僕は家に戻ってきた。ふふふっ舞さん喜んでくれるかな？僕は驚く舞さんの顔を想像してほくそ笑みながら舞さんの部屋の前につく。

よし、僕はドアノブに手をかけて、

「舞さん」

「うふふふふ、いい考えかも」

……はい？ 部屋の中心で舞さんが陰気なオーラを垂れ流していた。

えっと、舞さん？ あなたの背後から非常に邪悪なオーラが見えるのですがどうしたのですか？

「ふふふ、色んな人と関わっちゃったから、わたしの誕生日忘れちゃったのかな？ なら他の誰も見ないようにわたしだけ見てくれるようにすれば」

……ヤンデレになつとる！ ヤンデレになつちゃつとる！ このままだと誰かが犠牲になる！

急いで部屋に入る。

「ま、舞さん！」

ボタンと扉を開いて部屋の中に入る。

すると舞さんはクルツとこっちに向き直りいつもの笑顔で笑いかけてきたが……その手にはロープが握られている。怖い！ 怖いよ！！

「あつ、ちょうどよかったあ空狐くん、今縛、会いに逝こうとしたところだったよ」

なんか、言葉の一部に狂気なるものが混じってたのは気のせいでしょうか？ そして、今はその笑顔が逆に怖い。

僕は恐怖と身の危険に尻尾が縮こまりそうになる。

「あ、なんか弁明ある？ 今日が何の日か忘れてたことについて」
僕は舞さんから感じる威圧感にすぐにでもここから逃げ出したい衝動に駆られながらもなんとか耐える。

背を向けたら最後であることはわかるから。

「あ、あ、あのね、じゅじゅ準備ができたからみんなが呼んでこいって」

声を裏返しながら舞さんに伝えると舞さんはきょとんとした表情

になる。
「みんなが？」

第七十話 準備開始！（後書き）

舞の誕生日イベント。

さて、ここで皆様にお聞きします。今回、舞さんの誕生日花として登場した向日葵の花言葉はなんでしょう？

答えは次回です。

それでは、また。

第七十一話 向日葵

舞さんを天野邸に準備した会場に連れていくと、

『ハッピーバースデー！ 舞！！』

クラッカーの炸裂音が鳴り響いた。

頭に紙吹雪とか乗つけたままキョトンとみんなを見る舞さん。

それなりに広い庭に三つの白いカバーが被さったテーブルとその上に置かれた料理に、生けられた向日葵。

それからみんなが次々とおめでとう。と言う言葉をかけられると、少しづつ表情が変わり、ついには泣き出してしまった。

「み、みんなありがとう……わ、忘れられちゃったのかと思ってた……」

舞さんの言葉にハルが笑う。

「なに言ってるの舞？ 忘れるわけないじゃない」

龍馬も頷くと舞さんは涙を拭って笑顔になる。

「ありがとうみんな」

笑顔になる舞さんにみんなが笑う。

「よっしゃあ！ まずはプレゼントからだな！」

刹那くんは楽しそうに布に包まれた何かを持ってくる。その先端は二周りほど大きい。

「見よ！ 我が技術の結晶！ 最新にして最高の機械魔術具！！」

そう言いつつ刹那くんは舞さんにそれを渡す。あ、見よって言うたけど自分で見せるつもりはないのね。

舞さんがいそいそと布を剥がすとその全貌がわかった。

それは杖だ。この前見せてもらった舞さんように作り直すと言っていたあれ。

完成品なのか以前のように銀の地は出ていない。先端のパーツの中心にある青い宝玉に二股の槍のような金色のパーツ、柄と先端を繋げる青いパーツにカートリッジ。

「わ！ まるで手に吸い付くみたい」

舞さんが楽しそうに杖を握ってくるくる回したり構えたりする。

「当然！ 舞さんの身長と手のサイズ、さらにはこれまでに得たデータから可能な限り合うように作ったのだから！」

胸を張る刹那くん。まあすごいっちゃあすごい。でもなんか変態チックにも聞こえるんですが？

「これが取り扱いマニュアル。緊急時用マニュアルも入ってるからよく読んで」

そう言っただけ刹那くんが渡したのは辞書並の厚さを持つファイル。

機械式になるとそういう弊害もあるのか……

「今回の杖には出来る限りの工夫を盛り込んでみた。術者を補助するためのAIに、カートリッジも出力補助だけでなく特殊弾頭を使うことで、」

刹那くんが杖の素晴らしさを説明しだすが僕らは無視してプレゼントを続けた。

「バカはほっというて次いきましょー！！」

イヴの言葉にみんなが頷く。

まず先鋒は朱音さん&アルトちゃん。

「じゃあ次は私とアルトちゃんから」

「まいちゃん誕生日おめでとう！」

朱音さんに促されてアルトちゃんが綺麗に包装された贈り物を渡す。

丁寧に舞さんが包装を解くと、中身は桜色の可愛らしいワンピースだった。

舞さんがわあっと目を輝かせる。

「アルトちゃんと色々見て買ってきたんだ。好みだったらいいんだいけど」

舞さんが首を振る。そして、ぎゅっと抱きしめる。

「すごく素敵です。ありがとうございますー！」

嬉しそうな舞さんに二人が微笑む。

「じゃあ、あたしからも」

そう言ってハルが渡したのは……本？ しかも片方はずいぶん年期入ってそうな……

「舞が欲しがっていた『今日の献立百選』シリーズに草壁宗治著『料理の心』だよ」

舞さんはそれを受け取るとすぐにパラパラ捲って内容を確認。嬉しそうに笑う。

「『料理の心』は絶版なのに！ ありがとうハルちゃん！」
喜ぶ舞さんを見て笑うハル。

そして龍馬が続く。

「じゃあ、俺からはこれ」

龍馬が出したのは虎柄の猫のクッションだった。強く抱きしめるとにゃあと鳴く機能まである。

「りよーまくん、ありがとう！ この子すごくかわいい！」
嬉しそうにクッションを抱きしめる舞さん。

さて、ラストは僕ですか。僕はポケットから手のひらに乗るほどの大きさの小箱を取り出す。

「僕からはこれです」

そう言って舞さんに箱を開けて渡す。中身は指輪です。

「舞さん、前にそれ欲しがっていたよね？」

そう、前に遊びに行った時に舞さんが欲しそうに小物店で見ていたものです。

舞さんは顔を紅くして僕の言葉にこくこく頷く。

「ありがとう……すごく、嬉しい」

そう言ってそっと指輪を胸元に抱きしめてくれます。

「空狐のくせに気の効いた贈り物ね」

イヴが揶揄してくるけど気にしません。

と、舞さんがあれっと思を捻っていた。

「く、くうこくくん、これサイズ小さいよ」

えー！？ しまった！ サイズとかちゃんと考えてなかった！！

「ただ、朱音さんが助け船を出してくれました。」

「あ、なら」

と言つて、すぽっと、指輪を嵌めてしまふ。

舞さんの左手の薬指に……えええ！？ ぼんつと赤くなる僕ら。

「あ、朱音さん！！」

何をしてるんですか！？ 舞さんも恥ずかしそうに指輪を見る。

「なにつて、ちょうどよく嵌りそうだったから嵌めただけだよ？」

だからつて、そこはないでしょ！ そこは！！

舞さんも真つ赤な状態でうわ言のようになにか呟いてた。

そんなこんなでパーティーは楽しくみんながぶつ倒れるまで続いてお開きになりました。

………うん、みんなごめん。こつそりイヴが酒混ぜてたのに全然気付かなかつた。あいつ、僕とアルトちゃんには入れなかつたんだもん。

そして、僕と朱音さんにアルトちゃんはみんなの介抱に奔走することとなった。

「ごめんなさい。僕がちゃんとイヴを見張っていれば……」

「いいの。それにいつものことだし」

朱音さんはそう笑ってくれますがやっぱり心苦しい。今度、保護責任者としてガツンと言つてやらんと。

僕はそう決意して、

「ところで空狐、あれ」

朱音さんが何かを示します。それは……生けられた向日葵。

「向日葵がどうしたんですか？」

朱音さんはくすつと笑います。その笑みはとても艶っぽくドキッとします。

「あの花の花言葉ってなにか知ってる？」

向日葵の花言葉？ 僕は首を振つた。朱音さんの質問の意図がよくわからない。

そう、と言つて朱音さんは再び向日葵に視線を戻す。そして、

「向日葵の花言葉、それは」

一度区切つて、柔らかく微笑み、

「『あなただけを見つめてる』」

教えてくれました。まるで大切に抱きしめていた言葉を放すように、そつと。

「大切にしてあげなよ」

朱音さんの言葉に僕は小さく頷いた。

第七十一話 向日葵（後書き）

ハッピーバースデー舞。
そして僕。

第七十二話 僕と舞さんの口論

舞さんのサプライズパーティーを終えて数日後、僕はいつも通り訓練を受けに天野邸の『アトリエ』に。舞さんも貰った杖の調子を見るために来ていたのだが……

アトリエ内の砂浜で、舞さんがオートマチックタイプの弾装を杖に取り付ける。そして、一回だけガシャッと給弾。

「よろしくねムーンライト」

「よろしくお願いします。マイマスター」

返事を返すムーンライト。あ、本当にAI入ってるんだ。無駄にすごいことで……

僕は鋼系の練習をしながら見るともなしに見ていた。

大体十メートルほど離れた場所にターゲットとなる、二色に塗り分けられた七つの丸太が海面から突き出ている。

えっと、ターゲットが四つ、障害物が三つ……密集部は斬るのは後回しかな。先にそばのを引っこ抜いてどかすか。別にどかしちゃいけないなんて言われてないし。

僕はそう結論して絡めようと鋼系を投げて……

『レディ』

「スターダスト・バスター！」

真横から強い魔力反応とそれに伴う凶悪な光が視界を焼いた。すばんと力加減を誤って目標を切断してしまう。

なんだろう、今、すごく見逃してはならない事態がそばで起こるとるようだが……

あえて僕はそっちを見ないように意識して、

「うわ、舞すごいわね。これだけの術を制御できるんだ」

イヴが舞さんに賞賛の声をかける。

「そうね。たった一カ月でここまで腕を上げられるなんて思ってな

「かったわ」

朱音さんが感嘆の声をあげ、

「まいちゃんすごいー！」

アルトちゃんが純粹に尊敬の念を言葉に籠める。待て。色々待て君たち。

「俺が作った杖を使ってるから当然！　と言いたいけど、こりゃ才能だな」

と刹那くんが感心し、

「えへへ、そうかな？」

と嬉しそうに舞さんが笑う。

「やっぱり待ったあ！　あんたらなにしとんの！？」

我慢できずに振り返ると先端から煙が出て、横のパーツが展開して放熱しているムーンライトを持った舞さんと、その舞さんを囲む三人。

みんなぐつと指を立てて、

「舞さんを誉めてる」

「まいちゃんかすごいって言ったんだよ？」

「舞さんがすごいって言った」

三人とも待とうか。だけどすぐに追い討ち。舞さんが胸を張る。

「魔術の練習！」

うん、君ら色々待とうよ。むしろ待て！

「なんで攻撃魔術教えてるのさ！？　確か舞さんには手品用の魔法を教える筈だったよね？！」

僕の主張に朱音さんが渴いた笑みを浮かべる。

「いや、最初はそのつもりだったんだけど……」

だいたい一週間前、

むー、と練習用の杖を持って舞が唸っていた。

「どうしたの舞？」

私が声をかけると舞は頬をかいて、

「えっと、もう少し派手なのできないかなあ〜って思っちゃって」と零す。うーん、そう言うなら……

「砲撃魔術覚えてみる?」
と聞いてみて……

「結果、熱が入り過ぎちゃって……」

てへつと可愛く笑う朱音さん。かわいく笑ってもこの心の炎は消せませんぜ?

それから舞さんがむつつと唸る。

「いいじゃん私が知りたいから教えてもらってるんだから」

少し怒ったように言うけど、でもなあ……やっぱり心配だ。

「付き焼き刃だと逆に危ないし、あまり舞さんがこっちに関わるのも心配で」

僕がそう宥めようとすると、

「いいじゃん別に。私がしたくてしたんだから空狐くんが怒ることじゃないでしょ!」

舞さんが怒ったように言う。そ、そりゃそうだけど……

うっ、これ以上言ってもかたくなになるだけかな? なら少しの間様子を見ておこうかな?

僕はそう決めて、

「それに、空狐くんの方がよっぽど心配だよ。いつつも負けてるじゃん!」

舞さんの言葉にちよつとカチンと来た。

「ま、舞さんに心配されるいわれはないよ! 僕はこれでも子供の間から鍛えてるんだからさ! それに今までののはみんなが強かっただけだよ!」

よく考えると、ここ数力月に戦った全員僕より格が上だったなあ……非殺傷設定とはいえ、よく生き延びた僕。

「だけど、この前刹那くんにまでほこぼこにされちゃったじゃん。

あの刹那くん!」

「せ、刹那くんは普段あんだけど、実はすごく強いんだよ！ 仮にも特級だよ特級！」

僕らの言葉に刹那くんが膝を抱えて泣き始めたけど気にしない。僕らの口論はまだ続く。

「ふーんだ、どうだか！！ 私なら勝てるよきつと！」

「な！ ちょっと待て舞さん！ それ俺が弱いと思うのか！」

復活した刹那くんが叫ぶ。

「だって、いつつも朱音さんに尻にしかれちゃってるじゃん！！」

それは単に弱み握られてるからじゃ？ と、言いたいけどこれは勝機！

「ふーん？ そお言うなら僕の前でやってみせてよ。もし負けたら攻撃魔術覚えるの禁止！」

「いいよーだ！ やってみせるよ！」

舞さんはあっさり条件を呑んでくれた。一方刹那くんは舞さんの言葉にいいじとのの字を書いているのだった。

こうして、舞さんの攻撃魔術習得を賭けた戦いが決まるのであった。

第七十二話 僕と舞さんの口論（後書き）

舞、刹那と戦うことになるの回。

予定では彼女の意外な才能を垣間見る予定。

第七十三羽 前夜祭

さて、一週間後に舞と刹那が戦うことになった時、思わず私は頭を抱えてしまった。

舞は刹那が弱いと思いきりでいるがそれは間違い。かなりなんて言葉が生易しいくらい刹那は強い。まずはそれを説明する必要があるそう。

というわけで舞が刹那に宣戦布告した後、

「さて、来週刹那と戦うってことだから、今日は講義を始める前に刹那について説明するよ」

いつものブリーフィングルームで舞がはいと元気に返事を返す。

「『己を知り敵を知れば百戦危うからず』ですよね！」
そうその通り。

だからこれは非常に大切な話。舞にどれだけ無謀な挑戦をしたのかちゃんとわからせないと。

「まず、魔術的な面では刹那は特級のS+ランクに対して君は無免許のおそらくBランク相当。それに刹那は接近戦でも空狐よりも強い銀狐と互角に渡り合えるんだから、近づかれたら勝ち目はないよ」
刹那は別に運とかではなく自身の力と努力で特級などの地位を勝ち取っている。それに、私との模擬線でもほぼ互角。

さらに、いくつか勝てない要因を語る。最大魔力保有量と最大出力の差など。さらに以前、龍と喧嘩した時の話などもする。

「こういうのもあれだけだった一ヶ月鍛えたからといって勝てるような相手じゃないよ」

と、いうと舞はうーんと、首を捻る。

「そういえば、空狐くんがこっちに来る前ってクールな感じでしたよね」

まあ、あの頃は気取ってたって言えるし、うう、そういえばいる

いる恥ずかしい目にも合わされてるわね。今度そこんところの落とし前つけないと。

でも、なんで最近あそこまでへたれちゃったんだろ？ まあ、それは今度考えようかな。

「とにかく、舞じゃあまだ正攻法では無理だから」

と、言うつと舞はうんと力なく頷く。

「なら、手段を選んでられないんですね」

この時、私は気づかなかつた。舞の意外な才能に……

僕は刹那君の部屋に来ていた。理由は簡単、一週間後についてだ。ぶつちやけ僕は心配していた。確かに刹那君は強い。実際手合わせしたことからそれをよく知っている。

だが、二つほど気になることがある。舞さんの成長速度と、朱音さんだ。

正直言って、舞さんの成長速度は非常に早い。たった一ヶ月で、あんな高出力の魔術を使えるようになったというのはとてつもない脅威だ。

さらに、セコンドの朱音さんの存在。なんか、嫌な予感がひしひしとしてくる。

うん、心配して損はないね。そのことは刹那くんもわかってるだろうから部屋で作戦を練ってるだろうが、僕も一緒に考えてみよう。

「刹那くん、いる？」

さっき部屋に戻るつていつてたし、ちゃんといるとは思っけど……

「おう、空狐、入っつていいぞ」

返事をもらつてドアを開けて部屋に入ると刹那くんは前のめりに机に向かつていた。作戦でも考えてるのか？

そう思つて僕は彼の方に近づく。

「あのさ、今度の決闘なんだけど……」

だが、近づくにつれてだんだん僕の言葉は尻すばみになっていつてしまった。

「問題、彼はいつたい何をしている？」

それを見かねて頭の上のイヴが僕に問題を投げかける。

「回答、机に向かつて機械弄りをしている」

僕も投げやり気味に答えてから頭を抱えた。なんだこりゃ？ てつきり作戦を考えてるとばかり思ってたんだが。

机ナンバーが振られた細かいパーツの入った袋に、工具箱が置いてあり、それを隅に寄せて刹那くんは設計図片手に半田ごてのようなものを持って作業をしていたのだった。

「なにしてるの？」

「見てわかんないのか？ メカ作ってる」

こっちに向き直ろうとせずそばに置いてある袋から部品を取り出して作業を続けつつ刹那くんは答えた。

「いいの来週の決闘の用意しなくて？」

僕の問いにふふんと刹那くんは笑う。

「いいか、空狐、今度の決闘に関して俺にも考えがちゃんとあるんだ」

おお！？ だからこんな余裕があるのか。僕の杞憂みたいで安心したよ。

「で、考えってなによ？」

頭の上のイヴが刹那くんに問いかける。

「ふ、俺の考えか？ それは……」

わくわく。

「なにもしない！」

胸を張って答える刹那くん。

ずでんと僕たちはこけた。

「な、なにもしないって、考えじゃないわよ！！」

すぐに頭の上に乗っていたイヴが飛び上がり怒鳴る。

その間に僕はそばのタンスにしがみつきつつ起き上がる。

「で、どんな理由なのさ？」

僕の問いに刹那くんは、こちらに向き直って腕を組む。そして、

「男の意地だ」

神妙な面持ちでそんなことのたまわりやがりましたよこのやろつ。

こうして刹那くんを作業机から引き摺り下ろし正座させての質問会が始まった。

「で、どういうことなのかな刹那くん？」

事情聴取する刑事よろしく窓を閉め、部屋を暗くし、作業机から引っ張ってきたライトを唯一の光源としてコタツを挟んで向き直りながらイヴが問いかける。

カツどんも置いてあるが、別に刹那くんは食べない。そもそもドラマで犯人に食べさせるのはフィクションだ。本当は刑事が食べる。「言葉通りの意味だ。あそこまで言われてただ黙っていられるか？ いや、無理だ」

反語で強調する刹那くん。

「うん、そこはわかったから。それがなんでなにもしないと直結するのかな？」

「だからこそ、俺が弱くないことを証明するためにも、なにもしない。そして、一週間がんばっていた倉田さんをあつと言わせるのさ」僕の質問にっつと笑う刹那くん。うーむ。

「きみ、亀とウサギの話知ってる？」

「知ってるけど？」

そうか、知ってるか。ならあえて言わないけどウサギだよ。今の君はそのウサギだよ。頼むからこの質問の意味を察してくれ。

「ま、大船に乗った気で期待してくれ！」

察してもらえなかったヨ……大船だけど、底が浸水してるね。気づかないくらいゆっくりと。気づいたときはおしまいだ。

そして、席に戻ろうとする刹那くん。僕は仕方なく用意したカツどんを食べ始めるが、

「あ、ところでお前ってさあ、性能高いけど武器一個の銀のスーツと性能は劣るけど汎用性が高い赤のスーツどっちが好き？」

と、途中でこっちに振り返って聞いてきた。

「ん？ どっちも好きだけど、なるなら僕はたっくんのほうが……
ってなに作っとなんじゃあ！」

質問の意図を一瞬で理解して僕は狭い部屋の中で飛び上がる。

「レディ、エクシードチャージ」

それに対し投げやり気味にイヴが呟く。

そして、僕のクリムゾンスマッシュが刹那くんの背に炸裂したの
だった。残念ながら灰化しなかったけどね！

第七十三羽 前夜祭（後書き）

鈴：「余裕過ぎるだろお前？」

刹：「ふっ、獅子はウサギを狩るにも全力を尽くすと言うが、俺はそうじゃないんでね」

鈴：「その余裕どこまで続くのかな？ まあ、それは置いて、

俺はたつくんもいいけど啓太郎が好き。あいつはいいやつだ」

刹：「俺は木場と草加だな。あの二人はなかなか」

鈴：「ネタについてこれない方すいません。それではまた次回」

第七十四話 前夜祭パート2

舞と朱音は今度の刹那との決闘のための猛特訓を続けていた。

「短時間で多くは詰め込めない。なら得意なところをとことん鍛える！」

「はい！」

朱音の言葉にアーマードドレスを纏った舞が自身の杖、ムーンライトを構えながら力強く答える。

その先には舞の砲撃で破壊されたいくつものターゲット。

「刹那は重く堅い叩ききる剣。なら舞、あなたは槍になりなさい！」

鋭く研かれた全てを貫く槍に！」

「はい師匠！」

ムーンライトの先端に魔力が集まり、澄んだ蒼い魔力光が輝く。舞はそれを標的に向ける。

「砲撃の極意は!?!」

「敵に先んじて撃ち、貫き、押し通す！」

朱音の問いかけに舞は叫びに近い声で答える。

「よし！ 行きなさい！」

朱音の言葉に舞がトリガーを引き絞り、極光が解き放たれた。

僕は二人の特訓を離れた場所から眺めている。

決闘が決まって数日、朱音さんは舞さんに力を入れてるせいかわはたまにこんな風に暇になる。いや、普段はちゃんと自主トレやるよ？ でも今は休憩。

朱音さんの指導の元、舞さんの砲撃はドンドン化け物じみてきている。得意なもの一本に鍛えてるとはいえ、この成長速度は異常だとしか言えないくらい。

一方刹那くんはというと……

「おーい、空狐これ見てくれよ！」

だいぶ興奮した刹那くんが塔からこっちに走ってくる。

その手には銃とビデオカメラを足して割ったような銀色のもの。
まさか？

「ついにできた！ デルタムー」

言い切る寸前にその手からそれを奪う。ミッションメモリーがインサートされていることを確認しつつ距離を取る。

「Check!」

『EXCEED CHARGE』

引き金を引きながら音声入力すると、電子音と共にエネルギーが充電される。

よし。銃口を刹那くんに向ける。

「やあ!」

引き金を引けば銃口から光弾が飛ぶ。

「げふ!」

その光弾が命中すると、相手をロックオンするための束縛が伸び、刹那くんを拘束する。

動けなくなったことを確認し、一気に助走を付け、砂浜を強く踏み込み飛ぶ。

クルツと空中で一回転して足を突き出す。

「君は一体何を作ってるんだあ!!」

そして、僕のライダーキックが刹那くんに叩きつけられた。

「ぐおあああああああ!」

の紋章を刻みながら刹那くんは遠く砂浜から十メートルほど先まで吹き飛ばされた。そして、一拍置いて爆発。高い水柱が沖合いである。

「本当のバカね」

「まったくだ」

頭の上に座るイヴの呆れ果てた言葉に同意する。

あんなものまで作る技術はびっくりだけど、その才能をもっ少し有効に活用するべきだと思つづく。

数分後、僕たちは土左衛門みたいな姿で浜に打ち上げられた刹那
くんを発見。

「大丈夫？」

とりあえず近付いてしゃがみ込む。あんな爆発を起こしたはずな
のに特に外傷はない。刹那くんはゆっくり顔を上げて、
「痛いだろ」

とだけ言っただけで済む君はスゴいよ。

「お疲れ様でした！」

二時にアトリエを出て、その後も軽く訓練をしてから四時に解散
する。

「明日もお願いします」

「うん、がんばろうね舞」

うん、こういう風に僕も別れたいんだけど……

「次は馬鹿なことしないでね」

「うるせえ」

僕らはこうなんだよなあ。

で、今日の分の特訓を終え、家に帰るのだが、最近は少し家が辛
い。だって……

「ほら、空狐くん、ちゃんと食べてよ。お代わりだってあるんだか
ら」

舞さんが笑顔で催促するが、僕の手はなかなか動かない。別に食
欲がないわけじゃない。ただ、食卓に並ぶものが問題だった。

ご飯は普通、だがおかずはピーマンの肉詰め、レバニラ、生のセ
ロリとオニオンのサラダなど僕の苦手なものばかり。

「ご丁寧に味噌汁すら具にピーマンが入っている。」

最近の食卓はこんな感じで必ず僕の嫌いなものが入っている。僕
が出されたものは例え嫌いでも食べるんだから、僕に対する嫌がら
せ以外に意味がないよなあこれ。

「一杯食べてね空狐くん、好き嫌いしちゃだめなんだからね?」

「ほらほら、さっさと食べなさいよ空狐」

舞さんとイヴに急かされて僕は夕食を掻き込む。ああ、もうどっちが勝ってもいいから早く終わって。普通に楽しいご飯を食べさせて……

後、数日は続く苦行を思い、僕は今日も枕を濡らすのだった。

第七十四話 前夜祭パート2（後書き）

鈴：「お、お久しぶりです」

刹：「今回ずいぶん遅かったなあ」

鈴：「いやあ、教習所とか学校の用事とかでなかなか筆が進まなく」

刹：「言い訳はいいから」

鈴：「はい、ごめんなさい……」

一ヶ月ぶりの投稿です。忘れられてたりしないですよね？

第七十五話 決戦！ 舞VS刹那

決戦当日、愛剣の『永久』を携え、俺はアトリエの砂浜で舞を待っていた。

「頼むぞ永久」

『うん、僕らを甘く見た彼女を驚かせて上げるさ』

永久もやる気満々、さあ、いつでも来い！

一時間後、見学の為に空狐とアルトがアトリエに入ってきて、急遽砂浜の一角に造られた観戦席に座っている。そろそろ舞も来るかな。

さらに一時間後、俺は膝を抱えて波打ち際を眺める。

『彼女来ないね』

「うん」

永久の呟きに小さく俺は頷く。

見れば空狐とアルトは暇つぶしに水切りで遊んでいた。あ、六回跳ねた。

そして、さらに二時間後、イヴが必殺大車輪山嵐水切りを完成させた頃にやっと、やっと舞と朱音がアトリエに入ってきた。

ふっ、巖流島の宮本武蔵を参考にしたんか？ だが、しかし、俺は船のオールで倒されたりはせん！！

「ごめんね、ちょっと遅れちゃった」

舞が笑いながら謝る。

「三時間くらい待つなんてどうってことないさ」

そう、この程度ならまだ我慢できる。だが、俺の言葉にえっと舞が零す。

「七分遅れじゃなくて？」

……おりよ？

少しの間、静寂が走って、ポンと朱音が手を叩いた。

「ああ、アトリエ内は時間が加速してるから」

あっ、忘れてた。

その途端に舞は引きつった笑みを浮かべる。

「ご、ごめんね刹那くん！ 私気付かなかった！」

謝る舞にいいよいよと俺は宥める。

この時に気づけば良かった。彼女が小さく笑っていたことに。

アーマードドレスを着込みムーンライトを構えた舞と俺は砂浜で対峙する。

「それでは、『ドキドキ 舞の魔術習得なるか決戦！』を開始します。協会ルールに従い、非殺傷設定でお互いの良心にかけて全力を尽くし、降参、もしくは気絶した時点で決着の一本勝負」

間に立つ朱音が朗々と口上を述べ、

「それでは、始め！」

朱音の号令とともに動き出す。

舞は砂浜を強く蹴って後ろに飛び、水の上を走るための術『虚脚』を展開し、足元の水を固着して水上を走る。対してこっちもそれを追いかける。さて、まずは始めに……

手元に魔力を集め、舞に向けて打ち出す。空狐にも使った炸裂式の魔弾だが……目の前でいきなり弾が炸裂した。

「うわっ！」

体勢が崩れる。見ればムーンライトの先端に魔力の残光。

撃った瞬間に撃ち落としたのか。正確な射撃なのはわかってたが、一週間前より早くて鋭い。むう。

『すごいね彼女』

永久の意見に同意する。

次に展開するのは空狐戦に使った魔力の槍。これなら、そう簡単に撃ち落されないはず。魔力を手に集め、槍状に収束しようとして、

ぼそつと舞が俺に聞こえる程度の声で呟いた。

「Why my sister」

……はい？　なんて言っただのかな、かな？　Why my sisterでしたっけ？

槍の収束が乱れた。

ななな、なんでそれを！？

「なぜたった二人の家族なのに、なぜたった二人の兄妹なのに、なぜ僕を嫌うのかな？」

びし！

紡がれた一説、に体が石になる。

あ、あ、ああああ！！

「うふふっ」

そして、舞のまるでなんでも知っているぞと言いたげな笑み。言い知れない悪寒が全身を襲い、止まっていた術式の構成が一気に制御を失い崩れる。

「スターライトバスター！！」

撃ち出される砲撃魔術。それが、術の制御を離れた魔力の塊を撃ち抜く。あ、やば……

制御を失い、外部から力を加えられた魔力が暴発する。

視界が俺の魔力の色と舞の色、黒と蒼に染まった。

「ぎゃっ！！！！」

自分の悲鳴がまるで他人事のように感じる。

自身の集めた魔力の暴発に巻き込まれる。不意を突かれた程度だからダメージは低い。でもこんなものありなのか？！

朱音がオブサーバについているから予想すべきだったが、まさかこんな手を使うなんて。

だが、大丈夫だ、落ち着け。冷静になって対処すればどうにかなる……はず。そう自分に言い聞かせながら剣を構えなおす。しんどい戦いになるとは思うけど……耐える俺。

前に飛び再び牽制用の術を編む。動きながらなら、言葉で構成を

崩せても暴発を狙うって遣り方は難しいはず！！

だが、冷静に舞は優雅な、だけでも俺には悪魔にしか見えないような笑みを浮かべながら杖を動かす。

「Sky high」

うげ！ 昔の大学ノートに書き込んだもの？！ なんでそこまで知ってるんだよ！！ あれはもう処分したはずだ！！

構成が崩れかけ、足も止まりかけるが、無理やり足を動かす。水面を蹴って、水飛沫が上がる。

心の底から楽しそうに舞は微笑みながら朗読を始める。

「空は青くて、綺麗で、いつまでも眺めていようよ、泳いでみよう」

耐えろ、動いてんだから正確には当たらな、

「トルネードバスター！」

カートリッジを消費して撃ちだされる砲撃。

先ほどの砲撃の倍近くの速度でそれは迫り、手元の術を寸分の狂いもなく撃ち抜く。

「ぐあ！！」

再び炸裂する術、くそ！ まさかここまで正確に当てられるなんて！！

舞の才能に戦慄する。だが、かっこつけた以上、このまま終われるかあ！！

私は空狐の頭の上で二人の戦いを観戦。

舞は初めての戦闘に対する緊張なんて微塵もない不敵で楽しそうな笑みでなにかを呟く。そのたびに刹那は術の構成を乱し、制御を失いかけた術に追い討ちのように砲撃を撃ち込む。なんていうか、空回りしている刹那が滑稽ね。

ちよつと周りに視線を移す。

空狐は舞と刹那の戦いに戦慄していた。まあ、びっくりよね。優しいお姉ちゃんみたいな印象を舞に持っていただけに。

「い、一体なにを言われてるの？」

戦いどころではない刹那にどうしたんだ！？ と狼狽している。まあ、がんばんなさい。きつと、これから尻に敷かれるだろうからいや、元から半分しかれてたわね。

「ふーん、私の時よりも思ったより効くんだ」

朱音がなにやら感心したように呟くが、空狐にはよく聞こえなかつたみたい。

朱音、あなた悪魔ね。自分の旦那の黒歴史を切り札にさせるなんて。

「舞ちゃんたのしそー」

アルトは無邪気に二人の戦いを見ている。中身はそこそこの歳だしたただそれだけじゃないのもわかってるわねきつと。本当に面白いものを見ている笑顔だもの。

「そうねえ」

そう返しながら視線を戻すと、一気に戦いの流れが進んだ。

ああ、くそ！ なんなんだ、なんなんだよこれ！！ さっきからこっちは攻撃一つできないじゃないか！！

焦りが募る。しかも舞は構成を崩した術だけを狙って、俺にはまだ直接攻撃を入れていない。つまり、まだ余裕があるとも取れる。

くそ、本当に負けるぞこのままじゃ！

ああ、だから落ち着け、こう言う時こそ落ち着くんた。素数を数えろ、素数は孤独な数字、俺に勇気を与えてくれる。

ゼロ、一、三、五……あれ？ ゼロって素数だったっけ？ って、違うだろ！

こ、こうなったら接近戦だ！ バスター使えない距離で魔術を使わずに！！

足の裏に集めた魔力を炸裂させ、前に飛ぶ。だが、

「わんわん事件」

ぴしっと、体が固まる。そ、それは……

思い出したくない。ブラックホールに放り込みたい記憶が、脳裏に浮かび……

は！ そういえば、そろそろあの映画の前売り券発売の時期だった。忘れてた。

せつかく朱音と一緒に見に行こうと思ってたのについ忘れてたよ。まったく、すっかりしようぜ俺。明日、買いに行こう。

映画ならコーラだな。ポップコーンと一緒に食べる。ポップコーンならキャラメルだ。あの香ばしさと甘さのコンビネーションがなんとも言えないのさ。

「魔道実験中に起きた事故で……」

きゃうん！

面白そうな舞の声が現実逃避すら許さず、俺の意識を無理やり現実に戻す。

「刹那くんは犬耳と尻尾が生えた事件だったんだってね。副作用の犬の本能のせいで穴を掘って靴を埋めたり、朱音さんにリードを持ってもらって散歩に行ったりしたんだってね？」

あ、あはははは。

何だろう、舞を見ていたはずなのに、だんだん海面が近づいてるぞ？

ああ、舞の言葉に足場を作る術の構成も崩れたのか。だから空中でバランスを崩し、水面に激突していたのか。でも、もうどうだっていい。

止めどなく流れる涙と水しぶきで霞む視界が一瞬悪魔の姿を捉えた。

「勝った」

満面の笑みで舞が呟きと共に穂先をこっちに向けるのが見えた。

おう、さっさとトドメを……

突然、空中で刹那くんがバランスを崩した。

え？

そして、水面に叩きつけられる刹那くん、舞さんはなにかを呟いてから、腰打めに構えた杖の穂先を刹那くんに向ける。そして、「スターライトバスター！ アクセルバスター！ トルネードバスター！」

バスターの三連撃、操り糸が切れた人形のように力なく吹き飛ばされる刹那くん。

だが、そこで終わらない。舞さんはムーンライトを突き出す。

「一撃入魂！」

その先に集まる魔力の塊……って、これってまさか！！

「スターダストオオオインパクトオオオオ！！」

収束された魔力が解き放たれ、奔流と呼ぶのも生易しい光の球が刹那くんを撃ち抜いた。

やっぱり朱音さんの十八番、スターダストインパクト！！

「朱音さん、こんなのも教えたんですか！？」

追い討ちをかけたことよりもこっちに驚く。だが、朱音さんも引きつった笑みを浮かべて首を振る。

「ううん、練習で一回せがまれて見せたつきりだけど」

なん、だと？ つまり、見ただけで再現したってこと？

どうやら朱音さんも同じ答えにたどり着いたらしく、二人して絶句するのだった。

舞さんの手によつてずたぼろになって浜に打ち上げられた刹那くんを回収する。

「へっへーん！ 見てたよね空狐くん！ 私、刹那くんに勝ったよ！！」

そんな僕に嬉しそうに舞さんが胸を張る。

「え、ええ、そうですね」

僕はなんとか笑顔を浮かべながら朱音さんに刹那くんを渡す。正直、今は舞さんがすごく怖いです。特級退魔士の刹那くんを駆け出しの舞さんが倒す。正直、才能どこの話じゃないよなこれ？

イヴは楽しそうに「ああ、この子が成長するのが楽しみね」なんて言ってるけど僕はちよつと不安です。てか、戦闘中の笑み、あれは演技ですよ？ 演技！

「だから、魔術の練習これからも続けるからね！」

舞さんの言葉に頷く。約束だもんなあ……

僕はしぶしぶ答える。刹那くんが勝てなかったんだ、僕が勝てるわけないしね……才能って怖い。

「うっ、ああ、朱音、なんであんなことまで教えたんだよ……」

治療を終えてから恨みがましく朱音を睨む。

わんわん事件。正直忘れたい記憶である。危うく本能に従って電柱にマーキングしたくなったりとか、お手をしてしまったりとか……ぐああああ！ 思い出したくない！！

「まあまあ、でもあの時の刹那はかわいかったよね。お手したし、おかわりしたり。頭を撫でると千切れそうなくらい嬉しそうに尻尾を振って……」

思い出しながら朱音はほうつとため息をつく。

そ、それ以上言わないでください！！

第七十五話 決戦！ 舞VS刹那（後書き）

刹：「ぐふあああああ！！」

鈴：「ええどうも鈴雪です。お待たせしてすみません。約一ヶ月ぶりに狐火投稿しました」

刹：「ぐおおおおお！！」

鈴：「刹那、舞に黒歴史攻撃で敗れるの回です。舞のサディストっぷりをしっかり見せられてたらと思っています」

刹：「いうつうつうつ！！」

鈴：「えー、横でうるさく悶絶してる馬鹿がいますが気にしないでください。それでは、また次回に」

刹：「きゃんきゃんきゃん！！」

第七十六話 舞の才能

舞さんと刹那くんの決闘から一晩がたった。

朝、物音がしないからどうしたんだろ？ と、こっそり部屋を覗いてみたら、いつもなら起きる時間になっても、舞さんは泥のような深い眠りにについている。やっぱり疲れたんだね。

にやーと緩む笑みになんか怖くなったのは秘密である。

とりあえず僕は舞さんを起こさないように、気をつけながら代わりに家事をこなして家を出る。

目的は天野邸、朱音さんに少し聞きたいことがある。

インターホンを鳴らす。

「はい、つて空狐？」

「こんにちは朱音さん」

すぐに朱音さんが出てきてくれて、頭を下げて挨拶する。

そして、居間に案内してもらってから意を決して聞いてみる。

「今日はどうしたのいきなり？ 訓練は休みって言ったと思っただけだよ」

「えっと、舞さんのことなんですけど、昨日のあれ、どうやったんですか？」

はつきり言っただけ昨日の戦いは異常の一言につきる。

確かに舞さんのお父さんは退魔士の名門『蔵杜』の分家筋の人だったから、魔術の適正が高くても驚かない。

だが、たった数週間かそこらの訓練で、なにをしたのかわからないけど特級退魔士に勝てたのは異常でしかない。

なんか策とかあったみたいだけど……

だから、朱音さんに聞くことにした。なにせ舞さんに魔術を仕込んだのは朱音さんだ。朱音さんならなにか知っているはずだ。

対して朱音さんはポリポリ頬をかいてから、

「これを見てみなさい」

と一つのバインダーを差し出してきた。

ええとこれって、退魔士用の身体検査の記録？

なんだろうと考えながらピラツとページを一枚捲る。そこには舞さんの名前と顔写真があった。これは、舞さんのデータ！？

「魔法を教え始めた時に、試しにやらせてみたのよ」

朱音さんの言葉を聞き流しながら、すぐに目を走らせる。体重と胸囲に関しては黒塗りされてて見ることはできないが、今は関係ない。

ぴらぴらとページを捲り、パタンとバインダーを閉じる。

……ふむ。

「そういえば今日は『不屈なのは』の発売日でしたね」

プロモカード付きの初回限定版を予約しといたのに忘れるところだった。危ない危ない。

「いや、それ来週だし。現実を見ようよ」

「はい……」

朱音さんにつつまれて再びバインダーに目を向ける。

そこに載っているデータで身体能力自体は至って普通。

だが、次の項目、動体視力、反射神経、空間把握能力など、神経を使う能力が突出している。

「なんとアンバランスな……」

僕は冷や汗をかく。朱音さんも困ったように苦笑を浮かべる。

「なんていうかあの子、直感や空間把握に関しては異常なのよ。試しに振り子が動き回る部屋に目隠しして入れてみたんだけど、一回も被弾せずに出てきたんだから」

なんと、まさかこんな異常な才能の持ち主だったとは……

今更ながら戦慄する。でも、

「確かにこれだけでも凄いですけど、それで刹那くんには勝てるんかなあ？」

舞さんが磨けば直ぐに光る原石だったってわかったけど、まだピ

「スが足りないと思う。」

やはり戦闘中に舞さんが呟いたなにかの力なのか？

何だろう。聞きたいけど、聞いたらいけない気がする。」

「まあ、そこはあの杖のお陰でしょうね。」

頭の上に寝そべっていたイヴがボソツと呟く。ああ、そういえば乗っかってたね。」

「杖のお陰って？」

イヴに問い返す。刹那くん特注の杖。確かに性能はすごいけど、どういうこと？

「空狐は気づかなかったみたいだけどあの杖、私の GANG 二ルがベイスになってるのよ。」

え？ まじ?!

「で、GANG 二ルは持ち主に闘法を与えるの。舞が闘えたのも、たぶんそのお陰もあるわね。」

そ、そんな機能があったのか。だから舞さんはあんな風に動きまわったり、朱音さんのスターダスト・インパクトをコピーできたのか？

でも、これだけ材料が揃えば刹那くんにも勝てるかも？

「まあ、いずれにしろ舞には異常なまでの才能があるって納得しな

さい。」

「はい。」

なんとなく舞さんとの将来が不安になる話だった。

空狐が帰ってから部屋に向かうと、未だに唸り声が響いていた。

まったく……まだ悶えてるの。私が断りもなく部屋に入ると刹那は布団に包まって悶えていた。

「刹那、いい加減起きたら？」

「うつつ、父さんと母さんの馬鹿……。」

私の呼びかけに返事を返さない上に、ついには両親のせいに出したよこの子。

まあ、言っておくと、刹那の趣味は両親譲りである。

刹那の父親がポエムを作るのが趣味で、刹那も子供の頃、おばさんにお父さんのポエム集を見せてもらったりして、知らぬうちにポエム作りが趣味になったみたい。

ただ、刹那の感性は母親譲り。なにせ、おばさんはメルヘンな人だったものね。

刹那と一緒にポエムを作ったのを聞いた時、あまり似てない二人も『ああ、親子なんだ……』とついつい納得した覚えがある。体中が痒くなったこともよく覚えている。

懐かしいなあミアおばさん……余談だけど、実験好きなのは父親譲りらしい。

「ほら、早く出なさい！」

無理やり刹那を布団から引きずり出す。

「むづむづ」

いやそうに起き上がる刹那に、私は何度目になるかわからないため息をつく。

「なんなら、またリードつけて散歩してあげようか？」

ああ、あの時はかわいかったなあ。電信柱見たらマーキングしたくてうずうずしてたり、頭を撫でると嬉しそうに尻尾を振ったりして。またやってみたいわ。

「起きました!!」

しゃきつと、刹那が立ち上がる。よろしい。

「まあ、元気出さない。もう、こんなことはないだろうし」

「ないことを願うよ」

げっそりと刹那はそれだけこぼした。

第七十六話 舞の才能（後書き）

鈴：「と、空狐に無理やり舞の才能を納得させた回です」

刹：「次回からは合宿編だったか？」

鈴：「うん、それで夏休み編はおしまいになる予定だよ」

刹：「ずいぶん急だな……」

鈴：「いい加減物語がダレて来てるので足を早くしようかと」

刹：「そうか……」

感想お待ちしております。

第七十七話 出発！

さて、明日から演劇部は合宿です。

なので……しつかりと荷物を確認せねば！

「小遣いよし、着替えよし、しおりよし、ティッシュよし、OK！」
確認をし終えて旅行用バックに詰め治す。

何度も入れるものを厳選したからそこまでバックは大きくない。
立てかけておいた天月の鞆袋の幻術ももう一度チェック、なんか
の事故でもないかぎり、おそらく三日間は問題なし。

うん、大丈夫！ きっと、たぶん……不安になってもう一度チェック。

「また確認してるし……これで五回目だっけ」

机の上のミニチュアベッドから呆れたようなイヴの声。だけど聞こえませーん。

翌日、常盤学園正門に来たバスに乗り込み、僕らは合宿先の宿に向かう。

「さて、皆さん合宿です！」

顧問の小泉先生がマイクを持って前に立つ。

って、小泉先生が顧問だったんだ。全然知らなかった……

「今日のためにスペシャルゲストも用意してあります！」
ゲストですか？

「どんな人かな？」

「楽しみですね」

隣の席の舞さんと小声を交わす。

そして、小泉先生が一番前の席に座る人を呼ぶと、その人はすつと優雅に席を立つ。

歳は二十歳ほどだろうか？ ふんわりしたピンク色の長い髪を踊らせ、すらっと伸びた背の高い体を黒い衣服に包んだ女性……って、

「数日だけ皆さんのご指導を務めさせていただく、天野朱音です。よろしく願います」

そう言って頭を下げるのは、あ、朱音さん？
アルトちゃんは無邪気におねーちゃんと喜ぶ。だが、対してすつてーんと席から倒れる人がいた。刹那くんだ。

「あ、あか、あか、朱音がなんでここに!？」

慌てて起き上がった刹那くんが、朱音さんに問いかける。

ああ、可哀想なくらい狼狽してるよ。てか、君も知らなかったんだね。

「なんでつて、小泉さんに頼まれたからに決まってるじゃない」

「なんで俺に言わないの?!」

確かに一個屋根の下で暮らしてるんだから言う機会はいつでもあっただろうに。

刹那くんの叫びにうーんと朱音さんは悩む。そして、すっごくいい笑顔を向けた。

「面白そうだったから」

いつかとは逆の立場だなあ。

しくしく泣く刹那くんが席に戻ってから、朱音さんは再び僕らに笑顔を向ける。

「なにか質問ある方」

朱音さんの言葉にすぐに小泉先生が立ちあがる。

「天野先生っていい人いるんですか？」

すぐに小泉先生が手を挙げる。そこな教師。今聞くことですか？
だが、今のやり取りに僕ら知り合い以外は興味津津なのがなんとなくうかがえた。

確かにこの凸凹コンビの関係は気になるのかもしれない。

そして、ニヤリと朱音さんが笑う。ああ、あれはなにか企んでる顔だ……まあ、たぶん直接被害は刹那くん、僕にはないだろうから別にいいけど。

そして、朱音さんは一瞬で刹那くんの横に来て、その腕に自分の

腕を絡めて立たせる。

「この刹那だよ」

刹那くんが朱音さんの行動にげつと呻く。

「な、なんだってー！？」

僕と舞さん、そしてアルトちゃん以外の全員が驚く。

ああ、龍馬たちも知らなんだっけ。

「天野が、あの天野がこのお姉さまと?!」

「ちよつと待て! あのとてどつという意味だよ?!」

刹那くんが妙な抗議をするが、誰も取り合わない。

「い、一体なぜ?!」

「昔、刹那が「幸せにしてあげるから」って言うてくれたから」

これだけだと、見た目の歳の差と小泉先生とは先生と教え子の関係から、マセたお子ちゃまが仲のいいお姉さんに、カッコイイところを見せたかっただけだと想像しちゃうよな?

実際みんな生暖かい目で刹那くんを見ている。そして、石田先輩がぼそつと零す。

「天野さんって年下しゅ」

ひゅんと空気を切る音とともに、不用意な発言をした石田先輩の頬を黒いナイフが掠る。座席に刺さらず、撓んでから弾かれるから、おそらく練習用のゴム製ナイフ。

僕にも辛うじて、ナイフを袖から抜き出して投げたのがわかったほどの早業だ。

それにナイフと風系の術式の組み合わせで空気抵抗を減らしてるのも辛うじて見えた。後で術式教えてもらおうかな。

「なにか言ったかな?」

ブルブル頭を振る先輩。怖かっただろうなあ……

僕は朱音さんの恐ろしさが、よーっくわかってるから、そんなこと絶対に言わないもの。

第七十七話 出発！（後書き）

鈴：「で、真実は？」

刹：「いや、確かに言ったよ？ 五歳くらいの頃に。でも、その時は別にお姉さんじゃなかったからな！」

鈴：「いや、知ってるから。いつのまにか見た目の歳に差ができたのは」

刹：「くう、もう少し身長があれば……」

鈴：「それだけじゃないような……」

刹：「なんか言ったか？」

鈴：「うんにゃ」

こんばんわ。合宿編スタートです！

第七十八話 さっそく練習！

バスが旅ホテルに到着してみんなで荷物を降ろす。

ほとんどは個人の持ってきた荷物であるが、部の衣装を含める練習で使う小道具もいくつかあるので、それらは男のメンバーが運び入れる。男子は301、女子は303、先生と朱音さんが304号室となっている。

ホテルはなかなか広い。さすがに練習するのは近所にある体育館だが、居心地はよさそう。

そして、荷物を部屋に運び込んで、刹那くんが真っ先に倒れた。

「せ、刹那くん、どうしたの？」

おそるおそる声をかけると、隈はないけど、どんよりとした目を僕に向ける。

「疲れた……」

それだけ呟いた。まあ、バスの中で色々な目にあつたもんなあ……やれ、どういった経緯で知り合った。名字が同じ理由はなんだ、卒業したらすぐに結婚なのかetc・etc。特に女子が色々聞いていたか。

まあ、表向き刹那くんは僕と同じ十五つてことになってるからなあ……あれ？ そういえば、なんで高校に通ってるんだろ？

ふと、気になったけど、事情があるのだろうから聞かないほうがいいのかな。

それから、お昼にお弁当を食べてからさっそく、歩いて数分の場所にある体育館で朱音さんに僕らの演技を観てもらおう。

今回、見せるのは文化祭で行う『魔王と一緒』というもの。

内容はある事情で隠居してしまった魔王が気まぐれで捨てた娘を従者として傍に置き、次第にその彼女に特別な感情を抱くというものだった。

なんかそのあらすじをハルが発表した時、刹那くんはずいぶんと複雑そうな顔をしていたっけ。

今回、僕はその魔王に使える少女、ななせの役。また女装かよ……あとの役は魔王役、舞さん、近くの村の村長役、山田先輩、村娘役、鈴宮先輩に桜子先輩、聖騎士役、刹那くんと石田先輩、その従者役、アルトちゃん。毎度のことながら龍馬とハルが裏方。てか、なぜこつても重要どころに一年生を？　そして、舞さん男装かいな。「ヴィジュアル。あとは、似合いそうだなっていう私の独断！」と、聞いてみたら返ってきた。まあ、誰も不満言わないしいのかな？

そして、僕らの練習を朱音さんが全体を見れる位置から観てもらう。

「あそこで照明、軽く揺らしてみるといいかもね。あと空狐、もう少し感情籠めて。あ、舞もここでの笑み小悪魔っぽくてよかったよ？　石田くんも、演技なかなかよかったわ」

反省会で、次々と朱音さんは、僕らの改善すべき点を指摘する。そして、いいところをしつかり褒める。

ただ、小悪魔っぽいっていうのはどうかな？　と思う僕は若いだけ？　まあいいや。僕は自分の役を全力で演じればいい。

「細かいところを除けば全体的にいい感じね。学生のレベルにしては高いと思うよ？」

全体を通して見て朱音さんがしきりに感心している。

桜子先輩がよっしゃあとガッツポーズを決める。みんな結構喜んでるしね。

「でも、今日の朱音はずいぶん優しくかったなあ……」
ぼそつと刹那くんが零す。

「優しい？」
結構厳しい時は厳しかったけど……

と、僕が思っていたら刹那くんはああと頷いた。

「俺を鍛える時なんか、このウジ虫！　とか海兵隊風の罵り方だけ

べー！」

刹那くんが僕に語っていたら、朱音さんの真空飛び膝蹴りが刹那くんの顔面に突き刺さった。

しゅたつとスカートを綺麗に翻し着地する朱音さん。

「で、なにか意見あるかな？」

笑顔で振り向いた朱音さんに、全員ぶんぶんと首を振った。

「いったあ」

練習後、晩御飯を食べてから、男子部屋に戻った刹那くんは着替えを出しながら、蹴られた頬を擦る。

まあ、自業自得ってことだな。僕も風呂の用意をしながら冷めた視線を送る。

さて、風呂に入りますか。

そして、風呂。かぼーんと桶を叩くような音が聞こえてくる。

「はあ、いいお湯だなー」

風呂の温度は熱すぎず、それでいて温くないちょうどいい温度。疲れと言つ老廃物が身体からにじみ出るようだ。

「だなあ、疲れが取れるぜ」

そう言つて刹那くんは縁に寄りかかりながら目を細める。まあ、君は特に今日お疲れだろうしね。

うんうん、平和平和。今は部員しかいないからゆっくり入れるし。

僕はゆったりと身体を広げる。

「くうこくーん、そっちはどお？」

仕切りの向こうから聞きなれた声が飛んでくる。

「いいお湯ですよー！」

すぐに返すと今度は朱音さんの声。

「あははー、刹那とまた覗きなんてしてないよねー？」

「っつて、うおい！」

「してねえよー！ー！」

「ないですよ!」

すぐにそう返して……は?!

先輩達から『お前らそんなことしたんか?』といった白い目。

そして、風呂からあがると、女性陣から軽蔑の眼を向けられてたような……しくしく。

そして、就寝時間、僕は眠って……いなかった。

布団から顔を突き出して話をしている。

「で、木霊って本当に倉田さんと付き合っていないのか?」

「いや、付き合ってるなんかいませんよ、ただの弟分としか思われてませんって」

石田先輩の言葉に首を振る。こういった行事での恒例というべきか、いつの間にか好きな相手の話とかになっただけ。

「まあ、君がそういうならいいが、もう少し自分に自信を持たないと」

と山田先輩が漏らすけど、僕は曖昧に笑った。自身を持って言うってもね……

そんな感じで、合宿の一日目は深けていく。

第七十八話 さっそく練習！（後書き）

鈴：「どうも、鈴雪です」

刹：「刹那です」

鈴：「合宿編一日目終了」

刹：「次は二日目か」

鈴：「予定では三泊四日の合宿なのであと数話は合宿の話な予定」

刹：「俺はその間どれだけいじられるんだ？」

鈴：「まー、まー」

刹：「てめえのせいだろうが！」

感想、お待ちしております。

第七十九話 二日目はバーベキュー！！

朝、何時もの時間に起きて、布団から出て着替える。
着替え終えたらタオルと天月を持って部屋を出た。

顔を洗ってから、セミナーハウスの外で人払いの結界を張って、僕は日課の素振りを始める。はあ、山の中だから空気も美味しい。素振りにも気合いが入る。

が、そこで気づいた。なにかの物音、しかも同じように人払いの結界？

なんとなく気になって、一端素振りを止めてそっちに行ってみる。草をかき分けると少し開けた広場がある。そこで舞さんが動き回っていた。

いや、ただ動いているわけじゃない。杖の筈のムーンライトをまるで槍のように扱い、目の前の虚空を突き、薙ぎ払う。

数回の攻防の後に顔をしかめて後ろに飛びすさり仕切り直す。

僕の目にはだんだん、目の前の対戦相手が誰なのか見えてきた。身長は舞さんと同じくらい。得物は剣だろう。

舞さんはそんな敵に対して、槍を動かし逡巡、そして、意を決して飛び出す。槍のリーチを生かし、敵の剣の届かない距離から突きだが、流され、懐に入られる。

槍の長所、リーチはこの時点で殺されるどころかデメリットとなる。相手も剣を構え直し、剣を振るい、消えた。舞さんはふうつと息をついて体を弛緩させる。

「当たり前だけど、まだまだだね」

「いえ、この短期間では十分過ぎるほどかと」

そうだけどさー、とムーンライトに返しながら、舞さんは今のイメージトレーニングを反省し始める。

僕は黙ってこの場を去った。

僕は再び素振りを始める。だが、心ここにあらずというべき状態だろう。僕の心を占めるのはさっきの光景だった。

正直、未だに舞さんがこっちに関わるのは反対だ。

確かに舞さんの周りには関係者が多くいるけど、それでもだいたい舞さんはなんで退魔士に関わるようなことを習い始めたんだ？
考えてみたけど、わからなかった。

僕は切っ先を下ろす。

人を理解するのは簡単じゃない。話を聞いたりして知るしかない。
一度ちゃんと話さないといけないか。

僕は大きく息を吐いて、

「空狐くん？」

声に振り向いた。そこに舞さんがいた。

「おはようございます舞さん」

「おはよう空狐くん」

にっこりと舞さんが笑ってくれた。

お昼に僕らはセミナーハウスに近い場所に位置するキャンプ場に訪れる。今日はここでバーベキューでの交流会！

男性陣はかまどなど肉を焼くための、女性陣が肉や野菜など食材の準備を行う。

そして、準備を終えると桜子先輩が前に出る。

「えー、本日はお日柄もよく」

と言って周りを見れば今にも肉に食いつかんと飢える部員たち。

「まあいいや。喰えー！」

「いただきます！！」

桜子先輩の号令とともにみんなが肉に群がった。

肉、肉、肉、肉、

次々と網に載せられ、じゅ〜っと美味しそうな音を奏でる肉たち。

炭火に滴る脂が焼ける匂いも素晴らしい。

どんどん減っていく肉。

と、舞さんがすすっと前に出る。

「先輩そのお肉はもう少し焼いて、あ、こっちは食べごろですよ。ハルちゃん、空狐くん、お肉だけじゃなくて野菜も食べないとダメだよ」

的確に舞さんは肉を配る。

焼き肉奉行だ！ そういえばそんなところあったよ！

さ、さすがは舞さん。みんなもなんとなく舞さんに従っている。

「はい、朱音さん特性ダレだよ」

そう言っつて朱音さんがみんなに特性ダレを配る。

さっそく頂くと、ピリリと辛く芳醇な香りのタレ。流石は朱音さん。

刹那くんはある程度せつせと食べると持参してきたクーラーボックスを抱えてなにかを準備している。

なにしてるんだろ？

そして、ほとんどの肉を食べ終えてしまった。

はふう、うまかった。

「はい、締め焼きそばですよ」

そう言っつて、舞さんが鉄板で焼いた焼きそばをみんなに配る。

ソースには朱音さん特性ダレが入っているのか少しピリツとして美味い。

「はあ、満足」

思わずそう呟いて、

「まだまだぞ空狐」

そう言っつて現れたのは、スイカを抱えた刹那くん。

桜子先輩が待ってましたと言うことはそういう係だったのか？

まあ、おなかいっぱいだけけどデザートは別腹だしね！

刹那くんはテーブルにスイカを置く。デザートにスイカ？

と思つたらよく見ればスイカは彫り物がされている。

あれは、飾り切り?! タイ王国の食材芸術の「カービング」か?!? なんちゆう技術力だ!!!

そして、ふっふっふと笑いながら刹那くんはスイカの天辺を外す。あ、外れるんだ。

「最後は俺特性フルーツポンチです」

……見た目派手なくせに中は地味だな。

皿にフルーツポンチを入れてみんなに配る刹那くん。スイカの入った普通のフルーツポンチ……じゃなかった。

水餃子が入っている。

「ちよつと待てい!」

桜子先輩以外は中身に突っ込みを入れる。

桜子先輩は普通に餃子を食べて、刹那くんはふつと笑って親指を立てる。

「一食即解(食べばわかる)」

……まあそういうなら。少なくとも桜子先輩は普通に食べてるし。水餃子を一口頂く。ん?

「これ、杏仁豆腐?」

餃子皮が破れると中から出てきたのは少しミルクの味を感じる杏仁豆腐だった。

「こっちはマンゴープリンだよ!」

舞さんも驚きの声を上げる。

さらに甘い黒酢やら、フルーツが入っている餃子まで出てくる。

「っしゃあ! びっくり餃子のフルーツポンチ成功!」

あ、そんなの企んでたんだ。驚くみんなに喜ぶ刹那くん。朱音さんは呆れたようにため息をついてから笑う。

いつも思うけど、夫婦ってよりは手の掛かる弟と、しっかりものの姉って感じだよな。

「桜子先輩は刹那くんの企み知ってたんですか?」

フルーツポンチをおかわりしながらハルは先輩に尋ねる。

「んっ？ 天野がやりたいつて言ったからね。特技を生かした交流
つてことでいい感じじゃん」

そういつてにかつと笑う先輩。

そんなもんなのか？

まあ、みんな楽しんでるし、いいか。と、口の中に中身が赤く透
けた水餃子を放り込んで……………ごふあああああ！！

辛！ まず！！ 水餃子の中にラー油がたつぷりいいいい！！

「あ、外れ引いたか」

刹那さんの呑気な声を聞いた瞬間、身体が動く。

「はあ！」

「ウエイク・アップ！！」

右足を高く上げる。その脚の周りをイヴがくるくる回る。そして、
僕は高く飛び上がって……

「てやあああああ！！」

「テレキネシスウウウウウ！！」

僕のダークネスムーンプレイクを真正面に受けて刹那さんは吹き
飛んだ。てかなにテレキネシスって？

第七十九話 二日目はバーベキュー!!! (後書き)

鈴：「どうも鈴雪です」

刹：「刹那です」

鈴：「二日目はバーベキューです!」

刹：「お前、最後のあれがやりたくて書いただけだろ?」

鈴：「いや、こういうのにはバーベキューはお約束だろ?」

刹：「まあ、そうかもな」

鈴：「それでは!」

刹：「また次回に」

第八十話 肝試しだよ！

三日目の夜、肝試しが行われる。だが、その前の前哨戦として、なぜか怪談対決をすることとなった。

「おじいさんは動揺したんだ。そんなはずはない、そんなはずはない。そう思いながら何度もシューマイの箱の蓋を開け閉めするんだけど、そのたびに、一つ、また一つ、シューマイが消えていくんだ」
まずは刹那くんの話。僕は朱音さんと一緒にがたがた震えていた。ああ、そういえば、朱音さんもホラーや怪談が苦手だって言っていたけどと漠然と思いつく。僕もお化けは嫌い。

「あー、そこな人？ 半妖なんてお化けと似たようなものじゃないかと言っけど、はつきり言おう。怖いものは怖いと！」

刹那くんは自分の時だけただでさえ暗かった部屋の照明を完全に消し、蝋燭に火までつけて怖い雰囲気を作り出す。

「とうとう十二個全部箱から消え失せて、そして、最後に気づいた。消えたシューマイ。それが全部、箱の裏側にい！」

「ぎゃああああー！」

「いやああああー！」

裏？ 裏にくっ付いてたあ？！

二人揃って悲鳴を上げる。僕は頭を伏せて、朱音さんはその自慢の髪を振り乱しながら、頭を振る。

「怖がるのはまだ早い。この話には続きがある。そのおじいさんはある日とうとうシューマイを喉に詰まらせ死んでしまって、その葬式でのこと。最後の出棺を前に故人と対面することになったんだ。最後ですからって」

楽しそうに、本当に楽しそうに刹那くんはいい笑顔で、本当にいい笑顔で笑っている。

「それで葬儀屋さんがみんなの前で棺桶の蓋を開けたんだ」

そこでみんなの反応を見るように一拍区切って、息を吸い込む。

「開けたんだけど、なんとおじいさんが蓋の裏側に！！」

そして、刹那くんがおしゅーまいと言うと同時に確かになにかがキレる音が聞こえた。

朱音さんが膝を抱えてすんすんと鼻を鳴らし始めた。

「あ、朱音さん？」

舞さんが声をかけるとうるうる目に涙を溜めた朱音さんが舞さんを見る。

「うわ、普段とは違ってなんか可愛いぞ！！」

「あのね、せつちゃんがね、あたしのことをいじめるの」

「すいませーん、朱音さん、なんか口調が全然違うんですが？」

「おねえちゃんだいじょうぶ？」

アルトちゃんが心配そうによしよしと朱音さんの頭を撫でる。

「ダメなの。せつちゃんがひどいことするの」

「よ、幼児退行しとるよ朱音さん。」

「では続いて、猫娘ていーあにゃんの怖いお話を」

『やめんかー！！！！』

調子に乗って続きをしようとする刹那くんにみんなの拳が突き刺さった。

地に倒れる刹那くん。うっ、でもこれで怪談対決も、

「ねえねえ空狐くん」

「ぼんぼんと舞さんが僕の肩を叩く。」

振り向くととてもいい笑顔を浮かべている舞さん。それを見た瞬間尻尾がしゅるっと丸まる。

「あのね、空狐くん、昔聞いたんだけど、うちの町のある神社にね」

その後、舞さんはみんなが片づけを進める間、僕の耳元ですっと怪談を語り続けた。

ファイブ・ミニッツ・アフター……

「おねえちゃん、クーコはおねえちゃんに嫌われてるんですか？」

クーコは悲しいのです。

クーコはおねえちゃんのことを大好きなのに、なんでおねえちゃんにはクーコにこんな仕打ちをするのですか？

「そ、そんなことないよ？ おねえちゃんはいーちゃんが大好きだよ？」

はあはあと荒い息を吐くおねえちゃん。

「なら、どうしてクーコをいじめるんですか？」

そんな荒い息を吐くぐらい怒らせることをクーコがしてしまったのでしょうか？

おねえちゃんは両手で口元を隠しながら目じりを下げます。

「そ、それはね」

「それは？」

そして、

「くーちゃんがかわいいからあああああ！！」

そう叫んでおねえちゃんが抱きついてきました。

「あああ、空狐くん、くーちゃん！ かわいい！ かわいいよお！！」

ぐりぐりとおねえちゃんがクーコに頬ずりします。ああ、よかったです。別にクーコが嫌われてたわけじゃないのですね？

なんか、安心したら、少し意識が……

怪談が終わった後、僕は首を捻る。なんか少しの間意識が飛んでるみたいなのに、なにか、すごく幸せなことを忘れてるような気がしてならない。

あと、なんかみんなの目がすごく優しい気がするのはいのせいかな？ それから、冷静になった朱音さんが真っ赤になって刹那くんを折檻してから脅かす役として連れて行った。

なんでも桜子先輩が準備するはずだったけど朱音さんと先生がかって出たそう。なんでも、

「私ひとり醜態さらしてなるものか」

だそうだ。い、いつたいなにするつもりなんだ？

さらにくじ引きで二人一組に別れる。

僕は舞さんとだ。ちよつとラッキーと思いつつも、できれば避け
たかったペアだ。

夜の山自体は修行で何度か放り込まれたから平気ではあるけど。
昔から苦手なんだよこつという雰囲気って。

まあ、肝試しなんてあくまで人が化けてたり、トラップがある程
度なんだろうけど、それでも、ね。

ま、まあいいや。とにかく舞さんには醜態を見せないぞ！

で僕らの番。普通に山道を歩く。

「うわ、ドキドキするね空狐くん！」

そう舞さんが笑ってくれるが曖昧に笑うしかない。

な、なんたるな。普段は平気なはずの山道が異形の巢に見える。

とにかく黙って進むが、ちらつと横手を見て、ぼんやりと苦しむ
人の顔が見えた！

「ひいつ！？」

僕は数歩たたらを踏んで尻もちをつく。

「く、空狐くんどうしたの？」

僕の突然の反応に舞さんが驚くが、僕は震える指で気を差す。

「あ、あそこにひ、人の顔が……」

え？ と舞さんは振り向くと、すぐにこつちに向き直った。

「大丈夫だよ。あれ、模様だよ」

え？ 僕は震える足を押さえこんで立ち上がり、もう一度見る。

僕が人の顔に見えたもの。それは確かに木に浮かんでいる模様だ
った。な、なんだ。あんなものだったのか……

軽く息を吐く。こつというのをシュミクラ現象っていうんだった
かな。くそ、完全に雰囲気呑まれてる。平常心平常心……

そう精神集中していたら、手に暖かい感触。目を開けると、舞さ
んが僕の手をそつと包んでくれていた。

「怖いなら手をつなご？ きつと怖くなくなるよ」
そういつて柔らかく微笑む舞さんに気恥ずかしさとともに、感謝の念を抱く。

敵わないなあ。そう思いながら僕は小さく舞さんに頷いた。

舞さんと手を繋いで、さらに奥に向かって歩く。予定ではこの奥にある古びた社で先生からお札を貰う予定だけど……

ぼんやりと光が横切る。

「ひ、人魂あ!？」

がしつと僕は舞さんの腕に抱きついてしまった。

「く、空狐くん、あれ蛭だよ？」

舞さんの落ち着いた言葉に従って、もう一度見れば、確かにそれは人魂なんかではなく、蛭だった。

な、なあんだ。思わずほつと安堵の息をつく。

そういえばそばに綺麗な小川があったよね。耳を澄ませば、虫たちのざわめきの中にさらさらと流れる小川の音も聞こえてくる。

そして、再び歩き出そうとして、前触れもなく、目の前に死に神が現れた。

「うわ!」

全身を包む真っ黒なローブ、骸骨のような白い面と骨だけの腕、そして、血を固めたような妖しい光を放つ宝石が埋め込まれた鎌。

「きゃあ!」

「ちよ、ちよつと舞さん?!」

と、舞さんが驚いて僕に抱きついてきた!

ぎゅゅつと舞さんが僕の腕に身体を押し付けてくる。ああ、柔らかい感触が二の腕に……じゃなくて!!

「お、落ち着いて舞さん、あ、朱音さんだよ」

僕がそう言うと、えつと舞さんが顔を上げる。

舞さんはじつと鎌を見て、ああと頷いた。

「空狐、さっきから見てただけでなんでこれで驚かないの? 驚

くところずれてないかな？」

ぼそつと呟く朱音さん。だ、だって気配と匂いで朱音さんだってわかつちゃうし、死神なんて本当はいないの知ってるし。

と、言うのは無粋かなあ。

「ところでそろそろ離れたら？」

そう言われて、舞さんは僕に抱きついてるのに気づいて顔を赤くしながら離れた。ああ、せつかくの感触が……じゃないよ！

「ご、ごめんね空狐くん！ い、いきなり抱きついたりして！」

「あ、へ、平気だよ！ こんなのもしろんどんと来いって感じ！！！」

お互いにお互いをフォローしあっていたらいつの間にか朱音さんはいなくなっていた。

なんか「ラブい雰囲気」って呟いてたような？

そして、社で大量の蝋燭を灯した中心でお化けの格好をしていた先生にありがたい札を貰って元来た道を引き返す。てかなんでお化けありがたいお札を持つてるんだよ。

札は無駄に手が込んでいて、簡単なものだが、被う力が付加されていた。それを持っているからか帰り道はなにも襲ってこない。

ふう、助かつ……

「ぎゃおー、食べちゃうぞー！！！」

吸血鬼が飛び出した。そして、僕の肩を掴んで大口を開けて……ぶち。

「獄えええええん！！！」

気づけば、目の前の吸血鬼に獄炎をぶち込んでいた。

「うあちゃあああああ！？」

炎に包まれた吸血鬼が地面をのたうち回る。

さらに追撃の炎を振り上げ、

「だめえ！ それ以上やったら刹那くんが死んじゃうー！！！」

……えっ？

地面に転がることで、炎を消した吸血鬼が立ち上がる。腰まであ

る長い銀髪、青い目。所々炎で煤けてる真っ黒な女吸血鬼と言つべき姿。

でもよく見ればその顔は見知った顔。

「危ないだろうが！」

「ごめんなさい」

怒鳴る刹那さんに、僕は直角に体を折って謝った。

「たく、死ぬかと思った」

そう言つて体についた埃を払い落とす刹那くん。

いや、死ぬつて言う割には火傷一つないね君。

「まあいいや、さつさと合流してこい。おまえ等が最後だろ？」

「う、うん」

そう促されて、僕はそそくさと合流ポイントに向かった。

セミナーハウスに戻るとめいめいに肝試しの感想を語り合う。

「いきなり死に神が目の前に現れた時はびっくりしたね」

「うん、それに鎌もまるで本物の刃みたいだったな」

本物なんだけどね。

「最後の吸血鬼かわいかったね」

「ど、どうも」

刹那くんは桜子先輩にいじられている。朱音さんも少しは溜飲が下がったかな？

「にしても、空狐くんが怖がる姿はかわいかったなあ」

「言わないでください……」

しばらくの間これだからかわれるのかなあ……

そして、翌日、僕らは学校に帰るバスへと乗った。楽しい合宿も終わり、もうすぐ学校、さて、本番の公演もがんばらないとなあ！

第八十話 肝試しだよ！（後書き）

鈴：「どうも鈴雪です」

刹：「刹那です」

鈴：「ついに合宿編終了」

刹：「なんか感慨深い」

鈴：「そして、次回、とんでもない人物が登場！」

刹：「びっくいけど、まだ秘密」

鈴：「それでは、次回をお楽しみに！」

？：「ふっふっふ、ついに私の番ね」

第八十一話 美狐のいる日々（前書き）

今回、宮座頭数騎氏の作品『妖狐玉藻伝 - 幻惑の美狐 -』の主人公玉藻 美狐がゲスト出演するお話です。

この場を借りて宮座頭数騎氏へ感謝の意を表させていただきます。ありがとうございます。

第八十一話 美狐のいる日々

それは、ちょっと遠出しての買い物帰りだった。丁度青空の天辺に太陽が昇る頃、道を歩いていた僕は、公園の前で足を止めた。

何だ今の？

「どうしたのよ空狐」

頭の上のイヴが問いかけるなか、僕はもう一度鼻を鳴らす。

たぶん今は……

「いや、公園から弱いけど人外の匂いがするんだよね」

確信は無いんだけど、イヴは『はあ？』と気のない返事を返してくる。

「この街なら、どこにいても不思議じゃないけど？」

まあ、確かに今更事だね。人外関係者が通う学校があり、町の住人の半分とは言わずとも、関係者もそれなりにいる以上、珍しくはないんだらうけど……

だけど、引っ掛かるんだ。

「なんていうか、刹那くんとか、そう言うのと似た感じがするんだよね」

僕の曖昧な発言に対し、イヴが眉をひそめて納得を示した。

前から僕はイヴに刹那くんを感じる匂いの違和感を話しているから、すぐに意味を理解してくれたんだらう。それに、この公園はここでは霊脈が比較的集中している位置にある。なにかあるかもしれない。

「なら」

「確かめないとね」

僕の言葉に続けてイヴが答える。

声共に互いに見合わせて意志を確認して、僕は公園へと踏み込んだ。

匂いの残滓を追うと、公園の奥の雑木林から漂ってくるのがわかる。しかも、僕の眼には強い魔力に似た何かも見えている。いったいこの奥になにが？

再び匂いを嗅ぎ直す。近寄ったからか、少し匂いが判別ついてくる。これは、女の人？ でも、なんかずばらそうというか、攻撃的でワイルドそうな匂い……

なんでわかるのかって、そんなものは勘だ。余談だけど、舞さんの匂いはどこかバナラエッセンスのように甘く、クリームのようにふんわりとしている。

そんなことはまあともかく、僕は人払いの結果を張ってから入るなという立て看板を無視して柵を越え、奥へと進む。ある程度進み行くと、そこに倒れている人影が視界に入った。

「大丈夫ですか?!」

急いでに駆けよって、僕はその人を抱き起こした。倒れてるのはだいたい二十歳くらいかも少し下かな。大人びて見えるし、幼くも見える。女の人ということを除いても、兄さんよりも綺麗な白銀色の髪と、どきっと胸が高鳴りそうなほど綺麗な造形の顔立ち。まるで西洋の人形を彷彿させる美しさだ。

しゃがんでざっと、身体に外傷などはないか状態を確認してみた。服は土汚れ以外なにもなく、ぱっと見た限りは外傷は見当たらない。念のため頸部に指を当てれば規則正しい脈。どうやら気絶してるだけのようだ。

小さくほつと息を吐いてから、肩に手をかける。

「あの、大丈夫ですか？」

軽く揺すってみると、その人物はんつと小さく呻いてから目を開く。よかった。すぐに目を覚ましてくれた。

その人は唸るようにして額に右手を添え、ゆっくりと身体を起す。

「あの、大丈夫ですか？」

問いかけるが、『彼女』はせつかくの綺麗な顔を洗面で覆ったま

ま、なにも答えない。

まあ、こんなところに倒れてたんだなにか事情があるのだろう。いろいろ聞いてみたけど、目の前の人物は頭を手で押さえながらダンマリを決め込んでいた。

「なんでこんなところに倒れてたんですか？ その、よかつたら救急車でも」

「ちよつと……黙れ」

やっと口を開いたと思ったら、鈴が鳴ったような綺麗な声で凄みのある言葉が出てきた。鋭く横目で僕を睨む。その満月を連想させるつぶらな瞳から、強いプレッシャーを感じ、思わず口を噤んでしまった。

「思い出せない……くそっ」

そう言つてそっぽ向くと『彼女』は忌々しげに毒づいた。

えつと、もしかして、記憶喪失とか？ いや、それは突飛すぎるか。なにかの影響で目を覚ますと、前後の状況がわからないってことはよくあることだ。

「あの、本当に大丈夫ですか？ 今日は何日かわかりますか？ 自分はどこにいたか思い出せます？」

この後も続けてできる限り効果がありそうな言葉を並べてみる。だが、

「だったらなに？ さっきからウザいわよあんた。何なわけ？」

相変わらずの凄みある睨みを僕に差し向け『彼女』は心底ウザつたそつに返す。

……うん、なにこの返答？ 僕そんなこと言われるようなことしたっけ？

だが、ぶるぶると頭を振る。負けるな僕！ ここで放っておくのは絶対にダメだ。えつと、まずは、

「僕は木霊空狐と言います。ここから近くにある常磐学園の生徒です。あなたは？」

ひとまず自己紹介からだ。とにかく相手の素性を知らない。

「玉藻美狐よ……多分ね」

多分、ね。本当に記憶喪失なのかも。でも。名前はわかった。美狐さんか。

「いい名前ですね。あ、それより、本当に大丈夫ですか？ あの、こういうことなら相談できる宛があるんですけど」

そう声をかけるが、美狐さんは頭を抱えて再び何かを考えだす。たまに悪態をついてることから、僕が思う以上に結構まずい状況なのかも。

「よかつたら、案内しますよ。それに、僕もなにか協力できるかもしれないし」

人外だとは思っし、刹那くん相談したらなにかわかるかもしれない。まあ、本当に頼りになるかわからないけど。

美狐さんは黙ったままだったけど、少ししてこっちに怪訝そうな顔を向ける。

「余計な親切、大きなお世話　と、言いたいところだけど、手掛かりがない以上、あんたを利用することにするわ」

……真顔、いや、面倒くさそうにはつきりきっぱり言い切る美狐さん。照れもなにもない。たぶん発言通り、本気で僕を利用するつもりだとわかる。

絶対この人、友達いないな。と失礼なことを考えながら、とりあえず頷いて行動に移る。余計なことといってこじらせるわけにいいし。

「とりあえず、ここを出しましょう。一応、立ち入り禁止の場所です」

「わかったわ」

美狐さんは頷いて、服の汚れを払いながら立ちあがった。

「ところで、あんたの頭の上のそれなに？　人形？」

「失礼ね！　妖精よ！！」

「あ、こいつイヴっていうんです」

イヴが憤慨して立ち上がる。とりあえず名前を覚えておく。

「妖精……ね。にしてはずいぶんと」

そう言っつて美狐さんが見てるのはたぶんイヴの胸やお尻だろう。

まあ、妖精というには、胸や太腿から尻にかけてのラインはエロスを詰め込んだような逸品。

てか、肉感的な妖精つてのも珍しいよな。

「……ふん」

イヴはそっぽを向いた。もしかしたら、相性が悪いかもねこの二人。

「とりあえず、こういうのに詳しそうな人のところに行きます」

「わかった。ところでそいつ使えるの？」

使えるのかつて……

「まあ、優秀ですよ？ 国内で数人しかいない特級退魔士ですし」

ふうんと気のない返事を返す美狐さん。まあ、優秀だろうけど、頼りになるかは別だけどね。まあ、それなら朱音さんに相談すればいいし。

そして、公園を出て、家の方に向かおうとして、不意に叫び声が聞こえた。

叫び声が聞こえた方を向く。見れば赤ちゃんを乗せたベビーカーが少し離れた下り坂から加速度を増して下りてくる。

その前は普段は車は多くない車線、だが、今は右から10トントラックが迫っている。トラックからは死角であり、ベビーカーが飛びして来た瞬間にしか捉えられないだろうが、その時にブレーキが間に合うはずもない。

脚力強化の術をかけて飛び出そうとして、辛うじて視界の隅に捉えた。疾風怒濤の風を残して美狐さんが颯爽と駆けだしていた。

トラックとベビーカーの間に割って入り、瞬時にベビーカーから赤ちゃんをすくい上げて抱き締め、トラックを四本の尻尾で押し止めた。赤ちゃんを抜き取ったベビーカーは、勢い良く電柱にぶつか

った。もし、赤ちゃんをすくい上げてなかったら、大変なことにな
っていただろう。

それを見越して一瞬の判断で赤ちゃんを救い出したんだ。すごい

……

って、僕と同じ四尾だ。でも、力すごいなあ、兄さんくらいあ
るんじゃないかなあ？ …… って妖狐！？ 全然気づかなかったん
だけど！

「あら、気づいてなかったの？」

イヴの言葉にぶんぶん頭を振る。だ、だって、僕の知る妖狐の匂
いと全然違う。言われたら似た感じがするけど、それだけじゃ気づ
かないよ！

それから、慌てて坂の上から下りてくる女性が視界に入る。たぶ
んあの子の母親だな。

「あ、ありがとうございます」

肩で息をしながら、母親は美狐さんにお礼を言う。

「何でこういうことになったのか、説明して」

美狐さんの言葉にお母さんは事情を説明しはじめる。

なんでもそのお母さんはご近所と世間話をしていたらしく、

「それでブレーキもかけ忘れてほったらかしてたら、下りの勢いに
乗ってベビーカーが……ってわけ？」

「はい、すみません。そして本当にありがとうございます」

と、お礼を言いながら母親は美狐から赤ちゃんを返して貰おうと
両手を差し出す。

まあ、なにもなくてよかったと僕はほっとするけど、美狐さんは
違った。

「あ、あの赤ちゃん返してもらえますか？」

返さないで赤ちゃんを左腕に、美狐さんは右手を差し出して能面
のような無表情で言った

「礼金」

『へっ。』

美狐さん以外その場の全員が呆けたようなセリフを呟く。

「何呆けた面してんのよ。礼金払えつつってんのよ」

「そ、そんな」

れ、礼金？ 美狐さんなにをいつてるんですか？

「あんたアホ？ 有難う、すみませんで済むほど世の中甘くないのよ」

いや、そうかもしれないけど、そんな追い打ちかけるような真似すんの？

「で、でも私お金は」

「ああ、そうやってとぼけるわけ？ じゃあいいわよ。さっきのシンをリプレイしてあげる。今度は助けないわよ」

ベビーカーに赤ちゃんを乗せて、美狐は悪質な笑みを浮かべながら坂を登ろうとする。

「い、いやああ！ 止めて、払うから、礼金払うから止めてください！」

涙目になりながらお母さんは頭を下げる。

「さっさとそうすれば良いのよ。大まけにまけて一万円にしてあげる。感謝なさい」

「……鬼だ」

「鬼ね」

と思わず僕らは呟いた。さっきまで何だかんだで良い人と思っていたのに。

「鬼じゃない。狐よ」

クールに美狐は艶笑する。が、よしてください、妖狐全員がそういう目で見られるのは嫌です。

「ま、これに懲りたらせいぜい赤ちゃんから目を離さないことね」

と、涙ぐむ母親に一言告げた美狐さんを連れてその場を後にする。トラックの運転ちゃんには先に前後の記憶が曖昧になる術をちゃんとかける。簡単な暗示程度の効果だが、まあ大丈夫だろう。この術は

異常事態には効果的だし。

「ところで、なんであんなことしたんですか？」

「どうにも気になってしまい、僕は問いかけた。」

「ありがとで済んだら、あの赤ん坊が可哀想だからよ」

もしあの場であつさり許したら、必ず母親は同じ過ちを犯す。頭では注意しても、深層心理では『きつと誰が助けてくれる』という、甘い期待が生まれる。そんな状態では何の解決にもならない。と、美狐さんは説明してくれた。

まあ、そうかもしれないけど、あんな助け方あなた以外できませんよ。僕なら、引かれながら受け身とるしかないだろうし。

「最初から最後まで子を守ることができるのは、誰でもない。親なのよ」

だからこそ美狐さんは悪役を買って出たのか。改めて親であることがどれだけ責任重大かを戒めてもらうために。

すごい、そこまで考えてあんなことを、つい僕は彼女に尊敬の眼差しを送ったが

「さてと、早速この金を使って腹ごしらえでもしましょうか」

歩きながら美狐は喫茶店に目を向けた。ああ、確かここはスイーツが美味しいと評判の店だ。

「あんだ達も何か食べる？ おごるわよ」

「え、いや、僕は」

さすがにそのお金で食事はしたくないんだけど　と、そんな言葉が喉から出掛かったところで、美狐さんは先程の邪悪な笑みとは真逆の、ふわりとした穏やかな微笑みを見せた。それは不敵でクールにも見えるけど、どこか愛らしさを感じさせる。そんな、魅力的な笑顔だった。

か、可愛い……と、いかんいかん！　思わずドキツと胸を高鳴らせてしまった。気を取り直そうとする僕だったが、更なる追い討ちを掛けるように、彼女は目と鼻の先までずいっと顔を近づけてきた。

うわわっ！ 近い！ 近いよ美狐さん！

満月を彷彿させる彼女の瞳には、上がった状態の僕の真っ赤な顔が写し出されていた。

「相手からの親切は、素直に受け取っておくべきよ」

慌てて身を退こうとした矢先、美狐さんに額を指で小突かれた。

「痛たっ！」

「んふふ」

うっ……クラクラするよう。なんか美狐さんって、見掛けによらず力あるんだよなあ。ひっくり返りそうになったよ。

「というか、刹那くんのご行きましようよ」

小突かれた額を撫でる僕の横で、イヴが言った。

けれど

「まあ待ちなさいよ。急がば回れって言うわよ」

「寄り道よねこれ？」

「私は今、何か食いたい気分なのよ。言うでしょ、腹が減っては戦ができぬって」

そう言うなり、美狐さんは喫茶店に入って行く。まったく、自分勝手というかマイペースというか、ほんと強引なんだから。何かとことわざの使い方もどこか屁理屈っぽいんだけど。まあ、どうせそのツッコミを入れたら『屁理屈も理屈よ』だなんてカウンターを返されそうだから、口に出すのは止めておくか。

にしてもちよっと驚いたな。美狐さんって、あんな笑顔も出来るんだ。

第八十一話 美狐のいる日々（後書き）

刹：「やった……」

鈴：「やったな」

刹：「他の作者とのコラボ作品！」

鈴：「いえーいー!!」

刹：「どちらの作品も楽しんでもらえたらいいな」

鈴：「それでは、美狐さんと空狐の出会いのお話を楽しんでいただけたら嬉しいです」

第八十二話 美狐のいるデート風景？

喫茶店で、僕は胸焼けを起こしそうになっていた。

いや、だって美狐さんスイーツばかり注文するのだから。

「次はこのケーキとパフェをお願い」

ついに全てのスイーツを注文する。周りで見ている人たちも純粋に驚いたり、僕と同じ気分なのか口を押さえている。

僕だって甘い好きだけど、流石に美狐さんほどじゃない。

さつきから飲んでるお代わり自由のコーヒーが甘い気がする。にまったく砂糖入れてないのに。

てか、肥りませんかそんなに食べて？

「あ、空狐、私はこのイチジクのタルトお願い」

普通のフォークを使いながらイヴがそんな注文してくる。これ見てよく食べられるね……

喫茶店を出てからも美狐さんは寄り道をし続けた。

スポーツセンターにあるパンチングマシン。美狐さんは拳を振りかぶり、思いっきり拳を叩きつけた。

結果、ミットの支柱が折れ、マシンの画面に突き刺さる。

「パンチングマシンがッ！」

「どれだけバカ力？！」

「脆いわね」

それだけですか！？ あと強い。強すぎるよ！

さらに、バッティングセンター。大リーガーよろしくバットを突き出すホームラン宣言。

そして、飛んでくるボールを全てピッチャー返し。余さずバッティングマシンにぶつけて壊す。

「ああっ！ バッティングマシンが！」

壊れたら次のマシンに移るといっつうのを続けてマシンはあと二つ。

そして、ついにまた一台を破壊する。

あまりの出来事に野次馬は全員あんどりと口を開いている。

「あと一つで全て破壊ね」

「狙って当ててたの!？」

いや、僕だってあれくらいの球は見えてるから打てるけど、こんな無理!!

爆発しそうな店員から逃げるために、最後のバッティングマシンに移ろうとした美狐さんをなんとかスポーツセンターから引きずり出す。が、次に向かったのはゲーセン。

まずはクレールゲーム。

「これで全部」

と、最後の人形を取る。ぜ、全部一回だけで?!

「ちょ、これは多過ぎ!」

あ、でもなのちゃんの人形は貰っていい……ぶふ!?

だぶりの人形を持っていいこうと思ったらデコピンされた。

「これは私の」

さいですか……

くそ、なにか彼女を止める方法は……そこで目に入ったのはある体感ゲームの躯体。そうだ!

「美狐さん、あれやりましょう! あれで僕が勝ったら刹那くんのところに行きますからね!!」

ふっふっふ、あのゲームの名前は名作アーケードゲーム、ウォーズリンク。

僕はあるシリーズの大ファンで、かなりやり込んでいる。自分で言うのもあれだけど、上級者を名乗っていいと思う。

「いいけど」

あつさり美狐さんは頷く。よっしゃあ!

「じゃあ、始めましょう!」

僕は意気揚々とゲーム機に乗り込んだ。

十分後、結論から言えば僕は負けた。

「僕のスサノオが……」
がっくり地に手をつく。

僕が選んだのはスサノオ参式。扱い易い万能機のスサノオ壱式を上級者向けにした機体。

近距離に特化させた結果、中距離武器と格闘にクセがあるもの、うまく扱えればかなり強いんだけど……

対して、美狐さんが使ったのはムラマサ。これまた中級者以上のクセのある機体。

重武装、高機動を両立した結果APが最弱クラスになった機体で、当たらないように戦わないといけない。

そして、美狐さんはこれをすごく上手く使った。

見事なヒットアンドアウェイでこっちのAPを削る。僕が仕掛けたオプシヨンの地雷を避ける。奥の手のキャストオフでの高速形態もまったく歯が立たなかった。

てか、絶対に初心者じゃない。あんな流麗なカットバックやデルタターン（どっちも上級テク）はやり込んでいるとしか思えない！

くそ、まったく戸惑わずに操作している時点で気付くべきだった！

「さあ、もう少し付き合ってもらおうわよ空狐？」

すっごく、すっごくいい笑顔でそう告げられた。もう好きにして

……

それから、美狐さんは脱線した行動が続いた。

「はあ、いい加減行きましようよ」

散々遊び回って今は中央公園にいる。僕はベンチで一息ついて売店で買ったタピオカジュースを飲む。うまいよねタピオカ。ナタデココに並んで好きな触感だよ。

美狐さんがソフトクリームを舐めながら

「はいはい、わかったわよ」

と生返事を返す。本当にわかってくれたんですか？

「てか、何で僕は律儀には付き合ってたんだろう？」

今更疑問が湧き上がる。案内するとは行っただけど、ここまでする義理はないんじゃないのか？

「旅は道連れ世は情け、そしてあんたは私の下僕」

……をい。

「いつ下僕になったのさ！」

つい声を荒げてしまう。初対面なのに下僕にされる覚えはない！舞さんなら下僕になっても……アホか僕！！

「ソフトクリーム飽きたから、飲み物と交換ね」

「そこはスルー！？」

ずいっとアイスクリームを突きつける美狐さん。

つーっと、コーンの縁に溶けたアイスが今にもこぼれようとしている。

しかたないなあ……呆れておとなしく受け取り、ソフトクリームを舐める。

「間接キスね」

美狐さんのニヤニヤとした笑みにぶーっと吹き出す。は、謀ったな！？

だが時既に遅し、美狐さんも口をつけて僕が飲んでいたジュースを流し込む。勢いよく流れ込んだからか、美狐さんの口の端から僅かに漏れた滴が彼女の白い喉を伝っていく。

もうツツコム気力もなくアイスクリームを口の中に放り込む。そして……

「空狐くん……」

驚きに再び嘔き出しかけて、なんとか飲み込む。

振り向くと、そこに……

「ま、舞さん」

どこか、光の灯らない目を僕に向ける舞さんがいた。

第八十二話 美狐のいるデート風景？（後書き）

鈴：「コメントが欲しい」

刹：「いきなりか」

鈴：「というわけで、美狐編第二話です！」

刹：「いきなり話題変わったな」

鈴：「舞も出てきたし、これからどうなることか」

刹：「まあ、空狐ご愁傷様ということでは……」

評価、感想、拍手お待ちしております。

第八十三話 美狐さん vs 舞さん

「くーくん、なにしてたの？」

「あ、その」

な、なんだこのプレッシャーは？ ま、舞さんが放ってるのか？！
ベンチから立ち上がり直立体勢を作る。わからないが、自然と作
ってしまった。

「その、この人美狐さんって言ってたまたま知り合って」

「へー、そうなんだあ」

「そ、その、よくわからないっていうから道案内してて」

「それで？ 間接キスするくらい仲がよくなったんだ」

また、一段とプレッシャーが増したよ？！

「だから、その、えっと、妖狐仲間みたいで」

「そーなんだ。同じものだからすぐに仲良くなれるんだ。私人間だ
からそうなのよくわからないんだあ」

関係ない。関係ないよお！！ なぜか、周りに人はいなくなつて、
何人かが遠巻きにこちらを見守っている。なんだその昼ドラに出る
嗜好きのおばさんのような目は。

目じりに涙を浮かべながら必死に僕は弁明する。

そしたら、視界の片隅で美狐さんがニヤリと妖しい笑みを浮かべ
る。

「悪いわね。空狐は私の下僕となつたのよ。これからもっと遠くに
行くところよ」

沈黙が落ちる。

……なに言ってるんですかあなたはあああああああ！！

舞さんは少しの間ほかんとしてしてから美狐さんを見る。

「下僕？ いったい空狐くんはいつ、あなたの下僕になつたんです
か？」

「今さっきよ」

美狐さんがさらつと告げる。

い、いや、あの美狐さん？ ちよつと雰囲気読んで。なんかどん
どん舞さんからどす黒いオーラが立ち上ってるんですが……

「く、空狐くんは誰かの下僕でもなんでもないです！ 帰ろう空狐
くん！」

舞さんが僕の手を掴もうとして、僕と舞さんの間に割って入った。

「なあにあなた？ 別にこいつの彼女でも何でもないんでしょ？」

美狐さんの言葉に舞さんは

「ほ、保護者です！」

と、普段聞かないほど大きな声を上げる。

でも、美狐さんはそんな舞さんの言葉を受け流す。

「へえ、保護者ねえ。保護者程度で割り込むのはどうかと思うわよ
？」

更に煽る美狐。舞さんは顔を赤くして、美狐さんに噛みつく。

こんな舞さん見たことない。で、でも、まず僕がするべきなのは
……

「あ、あの、二人とも。僕の話す」

「黙れ下僕」

「空狐くんは黙ってて！」

「……はい」

すぐに返された二人の言葉に僕は口を海にした。

「絶対に空狐君をあなたと行かせません。私が連れて帰ります」

「ふうん。だったらどうするわけ？」

舞さんはうつとうなって黙る。口ではたぶん勝てないんだろつな
と見てて思った。だって美狐さんはすごくやりてっばいし。

そして、舞さんは、

「け、決闘です！ 私が勝ったら空狐くんは私と帰る。あなたが勝
つたら空狐くんを煮るなり焼くなり好きにしてください」

つて、えええ？ 舞さんなにを言ってるの？！

「乗った」

うっおい！ 美狐さんも乗らないでください！！
……えっと、僕の意見は、入る余地ないねきつと。

私はムーンライトを口寄せし、マーマードドレスを纏う。

空狐くんのためにも、絶対に負けられない！ 負けたくない！
ムーンライトを構える。

「えっと、では……ファイト」

結界と審判両方を担当する空狐くんが号令をかけるとともに、バスターを撃つ。

開幕に全開のバスター。まだバスター以外の魔術は練習中というものもあるけど、でも相手も初手からバスターなら不意を！

だけどあつさり美狐さんは避ける。やっぱり甘く見すぎか。

さらに、アクセルとヘヴィで緩急を付けて撃つ。でも当たらない。なんで掠りもしないの？！

冷静に考えればバスターなんて、普通は当たる状況を作らなければ当たるわけない。

刹那くんに当たったのは単に彼が冷静さを欠いてた状態だっただけ。でも、熱くなった頭は、そんな当たり前のことすら考えられない。

美狐さんは余裕で私のバスターを避け続ける。

「どんなに高威力でも、当たらなきゃ無意味なものね」

「~~~~っ！」

バカにして！！

普段なら冷静に、軽く流せるはずなのに、舐めきつた声色が余計にイラつかせられる。

『バスター！ 頭を冷やしてください！』

うるさい！ よく狙いもせずにバスターを撃つ。

「へつたくそ。これじゃあ歩いてでも避けられそうだが」
どうすればいい？ どうすれば……そうだ！

地面をバスターで撃ち抜く。バスターに仕掛けた『対象物に魔力を纏わせる』力でただの石つぶてよりも強力になっている。

バラバラの散弾が美狐さんに迫る。直撃

と思つたら、美狐さんの姿が歪曲に揺れてふわりと消えてしまつた。

まさか幻術？！

そんな、何時？！ いや、それよりも本物は

直感に従い振り向く。

「残念だったわね」

私の後ろで腕を組み、不敵な笑みを浮かべて佇んでいた。

この！

『スピアモード』

ムーンライトをスピアモードに変更、先端に魔力刃を発生させて振る。

けど、美狐さんは既にムーンライトを握る私の腕を捕まえていた。

「派手に舞うわよ」

美狐さんがターンをしながら掴む腕を上には振り上げた。

その瞬間、ぐんと私の視界が跳ね上がりながらぐちゃぐちゃになる。

なんとか体勢を立て直そうとして、一回転を終えた美狐さんに、お姫様抱つこでキャッチされた。

「へえ、軽いわね。もうちょっと重いつつてたわよ」

何が起きたか判らずポカンとしていたけど、美狐さんの一言に頭に血が上る。

抱っこされたまま攻撃をしようとしたら、美狐さんが私を放り投げる。

それでも構わずに空中で私は美狐さんにムーンライトを向ける

その瞬間。美狐さんが指を鳴らす。
わからないけど、直感に従いとっさに体を振る。けど意味はなかった。

突然アーマードドレスが爆発。白い爆炎が燃え広がり、体を振ったこととその影響で狙いが狂う。

美狐さんの横をギリギリに通り過ぎたけど、彼女は微動だにせず、分かっているかのように澄まし顔で彼女は佇む。

何が起きたか解らない。

ただ、私を放り投げたのは、自分が爆炎に巻き込まれないようにするため。それだけは理解できた。

着地して膝を突く。そういえば朱音さんの練習以外で当たったの初めて……

いつの間にか美狐さんが目の前まで駆けていた。腕から白い炎が浮き出ている。

空狐くんの炎と違う。なんとなくそういう感想が浮かぶ。

マズい 後方にステップ、飛ぶ。

私が出たポイントの地盤が爆発を起こす。ムーンライトで狙おうとしたら、飛び散る石つぶてに阻害されてしまう。

爆発後に巻き起こった煙幕を抜け、鯨の顎門の形状をした白い炎が私に襲い掛かる。

さっきのは目眩まし！ バスターで軌道を逸らす。

さらに流れるような攻撃が続くのを必死に防ぐ。

朱音さんが言っていた“技の繋ぎ”が取れた連携に、私は息を飲む。

私に攻撃を出させない。私の心身を無駄に消費させる効率的な戦い方、それはきつと彼女の、私には想像できない重厚な経験によって確立されたであろうスタイル。

だからといってまだ負るつもりはなんて！ バスターで牽制しようとして がくつと膝が折れる。

えっ？

その途端、身体が重くなった。

「マスター！ 限界です！！」

練習とは全然違う戦い。後先考えないバスターの乱射。すでに体が限界になっていた。

一瞬諦めが思考をよぎる。

圧倒的な実力差、限界を迎えた魔力と体。このペースは美狐さんが勝つ流れ……一瞬、一人家で泣いている自分が脳裏をよぎる。

いや……絶対いや！ くーちゃんを渡すのは絶対にいや！
必死に折れる足を支え、

「スターライト」

穂先を向けて、ありったけの魔力を集める。

ちらつと視界になにか映ったけど私は無視してしまった。

「バスター！！」

また避けられるかもしれない。

そんな考えが横切るけど、美狐さんは私の放ったスターライトバスターを躲さず。突然前方に駆け出して屈み込む。四本の尻尾で身をタマネギ状に包んで防御する。

着弾、爆発 辺りを煙が包み込んだ。

どうして？ わざわざ私の攻撃を喰らいに……。

理由がわからない。

そして、煙が晴れる。

「く……」

体から熱気を発しつつ、美狐さんは胸に抱えていたものを下ろした。それは野良猫？

まさか、さつき視界に入ったものって……

もしかして、彼女は私の気づかなかった野良猫を庇うために、自ら盾になったの？

っ！！

胸を抑える。私は私の不注意で危うくあの猫を傷つけるところだった。でも、彼女は気づいてあの猫を助けた。

「邪魔が入ったわね。続けるわよ」

そう美狐さんは意気軒昂を發する。

強がりなんかじゃない。ここからが本領發揮だというのが、気圧でビリビリ伝わる。

が、もう私に戦いの意志も力も無い。ムーンライトを下ろす。

それを見て拍子抜けだと思ったのか、美狐さんも構えを解いた。

「どうしたのよ？ やらないわけ」

やりませんよ。全てにおいて私の負けだった。でも一つ聞きたかった。

「あなたは、一体何者なんですか？」

「通りすがりの女狐よ」

間髪入れずの答えに沈黙……すぐに笑いがこみ上げてきて二人で笑い始めてしまった。

「すみません、いきなりこんなことして」

私は目尻を拭う。はあ、なにやってたんだる馬鹿らしい。

頭が冷えた今ならからかわれてただけだってわかる。

「ふん、そうね。まあ私は別に構わなかったけど」

そう言って笑う美狐さんの笑顔はさつきから見ている嫌な笑顔じゃない、月の光のような優しい穏やかな微笑み。思わず私も見惚れてしまった。

「さてっと、空狐！」

「は、はい?!」

ことの成り行きについていけなくなっていた空狐くんが立ち上がる。

「そろそろあなたの言う専門家のところに連れて行ってもらうかしら」

第八十三話 美狐さん vs 舞さん（後書き）

鈴：「コメントこないなあ……」

刹：「そういう愚痴をすると余計に敬遠されるぞ？」

鈴：「すみません……」

刹：「さて、次回ついに俺が話に絡むのか。楽しみだ」

鈴：「どういう恥をさらしてもらおうかな？」

刹：「おい……」

第八十四話 美狐さんと刹那くん

美狐さんと舞さんと一緒に天野邸に向かう。

「そうですか、さっきの決闘はそのために」

「ええ、戦ってたら体が妙にうずうずと血が騒いだし。体を動かす毎にはつきりとしてきたわ」

と、美狐さんが話す。ああ、そういう目的だったんだ。

てか、さっきまで戦ってたのにもうそんなに仲良くなれるって、女の子はやっぱりわからん。

「空狐、あんたとよろつき廻っていた時にもね」

僕？

「なんとなく思い出したけど、あんた、うちの兄貴と雰囲気そっくりよ」

「記憶戻ったんですか?!」

お兄さんいたんだ。美狐さんみたいな妹って苦労してんだろうなあ。

そこまで考えてデコピンされた。あいた!

「断片的なのよ。さっきからの思い出したところはいくつかあるけれど、肝心のところはまだ思い出せないわ。あと、あんた今失礼なこと考えたでしょ?」

ああ、そうですか。勘がいいですね。

とぼとぼと歩けばうちが見えてきた。対面の天野邸も十分見える。さて、刹那くんはこの難題を解決してくれるかな?

インターホンを鳴らすとはーいと朱音さんの返事が帰ってきた。

「や、空狐、舞。なにか用?」

朱音さんが家から出てくる。いつも通りの格好に、僅かなバナラビーンズの匂い。もしかしてシュークリームとか作ってたのかな?

そして、朱音さんは美狐さんを見ると目を細めた。

「そちらの方は？」

「あ、この人は」

僕が紹介しようとしてずいっと美狐さんが前に出た。

「玉藻美狐よ。あんたがこいつの言う専門家？」

お互い観察するような視線が絡まる。

「正確にはうちの旦那ね」

不穏な気配が空気を支配する。えっと、どうしたんだろ？

そこでびびびとなにかが鳴る。朱音さんはポケットからキッチン

タイマーを取り出す。

ふうと息を吐く。

「とりあえず上がったら。お茶出すわよ？」

僕らの目の前にお茶とシュークリームが並べられる。

「君らはコーヒー派だったわね」

と僕とイヴはコーヒー。

美狐さんはじっとシュークリームを見つめている。なぜかアルトちゃんは美狐さんに懐いて隣に座っている。

「焼き加減は合格、香りもいい。後は味ね……」

「あのね、お姉ちゃんのシュークリームってスツゴク美味しいんだよー！」

アルトちゃんも誇らしげに笑う。

確かに、朱音さんのシュークリームは有名店に見劣りしないくらいすごく美味しいからね。

「まあ、食べながら話しましょうか」

朱音さんの言葉に美狐さんの状況を話す。美狐さんはシュークリームを口に入れて、目を見開く。

「これは！ 絶妙の焼き加減のサクサクのシュー生地材料の持ち味を殺さない絶妙な甘さのとろーりクリーム。適度に作られた空間が軽さを演出して、全てにおいてパーフェクト……！」

うわ、美狐さんべたほめ。

「あんだ、なかなかやるわね」

ニヤリとクリームのついた顔で笑う美狐さん。

「恐悦至極」

にやつと笑う朱音さん。なんとなくその笑みを見て、二人は割と似た者同士だと思った。

「で、記憶ねえ。ずいぶん厄介なもんなくしたものね」

朱音さんがずっと紅茶を飲む。

「そうなのよね。ところで、あんだの旦那、専門家って聞いたけど？」

「ああ、それなら待って。あと十秒」

十秒？　なんか前にも似たことあったような……

「三、二、一……」

朱音さんがコーヒートを淹れる。

「朱音、コーヒー」

作業着姿の刹那くんが現れた。

ゴシゴシと目元を拭う刹那くん。その顔や服のあちこちに油污ね。

「ふあ、腕の回路がうまくいかないなあ……構造から見直すっかな

あ？」

そう呟きながら椅子に座って、朱音さんが差し出したコーヒを飲む。

そして、眠そうに丸まっていた背筋がだんだん伸びていって、ぴんとなる。

「あ、おはよう空狐、そちらのお嬢さんは？」

ひしひしと美狐さんからの、本当に大丈夫か？　と言いたげな視線が刺さる。

大丈夫ですよ。多分……

「へえ？　記憶ねえ。ずいぶん厄介な」

「そうよ。自分が記憶を失った状況と場所に、自分が何者だったのかも含めて雲隠れしているのよね」

刹那くんはポリポリ頬をかく。

「じゃあ、朱音よろしく」

そしていきなり朱音さんに丸投げして僕は滑った。

「なんで私よ？」

「お前、記憶逆行の術持ってたろ？」

何気ないその一言に朱音さんはへっ？ と首を傾げ、ぼんと手を打った。

「忘れてた」

忘れないでください！ 精神関係の術は割と高度なんだから！

ああ、美狐さんの視線がさらに痛く！

「朱音さん、記憶逆行ってなんですか？」

舞さんが手を挙げて尋ねる。

「大まかな範囲の記憶を引っ張り出すものでね。前にド忘れを思い出すために組んだ術があるのよ」

「スゴいけど理由がシヨボい！！」

「それで一度幼児退行しちまったんだよなあ」

不用意な発言をした刹那くんが朱音さんに殴り飛ばされる。

幼児退行……大丈夫ですか？

「それは試作品。今は必要な分まで遡れるから」

朱音さんがそういうなら大丈夫かな？

そして、朱音さんは美狐さんの後ろに立ち、両手を美狐さんの頭に触れない程度の空間で構える。

「行くわよ？」

「ええ」

術が発動する。

淡い光が美狐さんの頭を覆う。数秒すると光は消えて朱音さんが手を離す。

「どう？ なにか思い出した？」

美狐さんは少しの間動かずに、そして、ぼんと手を叩いた。

「そういえば明日、近場に新しい喫茶店がオープンする予定だった」

その一言に僕ら全員がつくりした。

「他はなにかない？」

「残念だけどないわ」

朱音さんはうーんと唸る。

「術に問題ないはずだけど……聞きにくい体質なのかしら？」

朱音さんがうーんと悩む。

「じゃあ、刹那よろしく」

そして、あっさり刹那くんに譲った。

「オッケー」

そう言つて刹那くんが取り出したのは……紐の付いた五円玉？

「まさか催眠術なんて言わないわよね？」

美狐さんが汗を垂らして僕と同じ疑問を問いかける。

「なわけないよ。ただの気分」

なんか安心したよ。

刹那くんは糸を垂らして五円玉を揺らす。そして、空いている左手を翳し、たつた一言。

「『思い出せ』」

その場のなにかが変わつた訳じゃない。だが『どこかを変えた』それだけは理解できた。

それがなんなのかわからない。そして、美狐さんは……

「言われただけじゃねえ」

がくつと刹那くんは肩を落とした。

刹那くんと朱音さんが相談し始める。

「術も『言霊』もダメってどうなってんだ？」

「これって彼女自身の法則が……」

「なら、やっぱり四……」

「だとしたら……だけど」

僕の耳でも聞き取りづらい距離と音量で話す二人。

一方の美狐さんは、アルトちゃんにおねだりされて尻尾をもふら

れていた。

「ふかふかー」

楽しそうに尻尾をもふるアルトちゃん。

美狐さんは少し不機嫌そうに尻尾を動かす。

「くーこくんの尻尾も綺麗だけど、お姉ちゃんの方がきれー」

そりゃあ、男よりは女の方がねえ？

そこで舞さんに肩を叩かれる。

「ねえ、空狐くん。尻尾出して」

はいはい。

舞さんに頼まれて尻尾を出す。すでにもふられることにはなれた。そして、話が終わったのか刹那くんたちがこっちに来た。

「魔術関係は全部ダメだったということであんなに俺が発明したこの『記憶野復元メット』まさに、眠り姫だ』を使って、記憶を……」

そう言っただけで刹那くんが取り出したのは怪しげな機器やコードが大量に取りつけられたヘルメット。それを見た瞬間、全員が動いた。

朱音さんと僕と美狐さんが同時にグーパンチ。

「そんな！」

「怪しげな道具！」

「使つなあああああああ！」

叩きこまれる拳に刹那くんがひっくり返る。そして、取り落としヘルメットは、

「やあ！」

舞さんの槍で両断され、

「えい！」

アルトちゃんのハンマーで叩き潰された。あ、アルトちゃんってハンマーなんだ。

刹那くんは残骸の前で号泣していた。

「おおおおお、ひでえ、ひでえよお」

発明した本人にしては子を奪われたような感じかもしれんが、す

まん。それは信用できん。

朱音さんは咳払いして、

「とりあえず、原因もわかりませんし、暫くはここに滞在していた
だいて」

「やだ」

即答だった。言葉を途中で止められた朱音さんも呆気に取られる。

「あんだ達から不穏な気を感じるからよ」

その言葉にいつの間にか泣きやんだ刹那くんが、じっと美狐さん
を見ていた。いつものおちゃらけた感じじゃない。

「もしや、今までののは演技か？ 美狐さんにキャラを誤魔化すため
の。」

「でも、どうするんですか？ 住む場所もお金ありませんよね？

」

「別に良いわよ。どこでだって寝れるし、腹が減ったらトンボや蝶
とか虫を食べばいいし、喉が渴いたら公園の水を飲めばいい話よ」

「なんつーワイルドな……」

「確かに、意外とトンボやミミズとかつてうまいしな」

と頷く刹那くん。こらそこの悪食納得すんな。

朱音さんに叩かれる刹那くん。

「でも、お風呂とかどうするの？ 原因調べるならここには色々あ
るか、raithの方がいいと思うよ」

さらに、朱音さんが美狐さんを説得しようとする。

そして、美狐さんのため息をつく。

「わかった。そこまで言うならなら少しの間、ここに居させてもら
うわよ」

美狐さんのその返答に朱音さんはにっと笑った。

第八十四話 美狐さんと刹那くん（後書き）

鈴：「どうも作者です」

刹：「どもー」

鈴：「美狐邂逅編はこれにて終了、次回からは本編に戻ります。にしてももう後二カ月で今年も終わるかあ」

刹：「確か今年中に終わらすって言ってたか？」

鈴：「頑張らせていただきます……」

刹：「おうがんばれ」

第八十五話 刹那の妹、遙登場！

夏休みが終わり、学校が始まった。

それは、同時に久しぶりに妹と会える日が来たと言うことを意味していた。遙に会うのは久しぶりだから楽しみだなあ。

と、ホームルーム中にそんなことを考えていたらポケットの携帯が震える。取り出すと朱音からのメールだった。なんだ？

すぐに開いてメールを開くと、『遙ちゃんが来たよ by朱音』というメッセージ。え？ 本当？

遙に会うの久しぶりだしなあ。ちょっと頬が緩む。
早く学校終わらないかなあ？

「文化祭楽しみだねー」

アルトが本当に楽しみに笑う。と、あれ？ いつの間に帰り道、少し浮かれ過ぎてたかなあ？

少し注意しないと。

まあ、話は戻して、そういえばアルトはノエルたちが見にくるんだっけ。

俺も遙が見に来るし、わざわざ見に来てくれる妹のためにも完璧な演技を見せてやろう。

「だね。月狐さんや銀狐さんも来るかな？」

と、舞が空狐に問いかける。空狐はあははと困ったように笑う。

「あー、一応言うだけ言うておきます。でも、兄さんがなあ……」

「あの子、あんたに連絡先おしえてないものねえ」

空狐の頭の上に座るイヴが呆れたように笑う。

ああ、そういえばあいつ、空狐に連絡先教えてないんだっけ。あいつも事情があるからなあ。

「銀狐は任せとけ。俺が連絡する」

まあ、代わりに近況報告がてらに俺が連絡しとくか。

「うん、ありがとう。そういえば刹那くんの妹さんは来るの？」

お、空狐、お前気になるか？

「ああ、遥ならさつき、うちに来たって朱音から連絡があったよ」

「あ、遥おねーちゃんも来てるんだ」

アルトが懐かしげな笑みを浮かべる。

俺も会うのは久しぶりだからなあ。ちゃんと元気になってくれてればいいんだが。

「そういえば、遥さんってどんな人？」
舞が訪ねる。

「ああ、かわいい妹だよ。両親が早く居なくなつた俺にはただ一人の肉親さ」

父さんは物心つく前にいなくなつたし、母さんもなあ……
と、そこで、

「お兄ちゃん！」

久しぶりに聞く声。え、これって……

見れば目の前に一人の女の子が立っていた。

見た目の歳は俺よりちょい下に見える十五歳くらいの女の子、背は俺よりもちよつと低くて、すらつとスレンダーな肢体を包むのは普通つていた学園のセーラー服。

黒いセミロング程度の長さの髪に、宝石のように澄んだ瞳。嬉しそうににっこりと笑う笑顔は昔から変わらず、ほつとする。

遥！

「お兄ちゃん久しぶり！ 元気だった？ 朱音お姉ちゃんに迷惑かけてない？」

遥が小走りでこっちに近づいて、ぼすんと抱きついてきた。

「遥、久しぶり、家で待ってたんじゃないか？」

久しぶりに会った遥の頭を撫でながら聞くと、えへへへと遥は恥ずかしそうに笑う。

「待ち切れずに迎えに来ちゃった」

くう、嬉しいこと言ってくれるなあ！

「あ、刹那くんその人は」
空狐が問いかける。ああ、紹介しないとな。
「はじめまして。刹那の妹の天野遥です。うちの兄がいつもお世話になってます」
と、思ったら先に俺から離れた遥が頭を下げる。
「あ、いえこちらこそ」
空狐と舞もペコッと頭を下げたのだった。

そして、遥は俺にべったりくっつきながら歩く。

「遥、歩きづらい」

「えー、久しぶりの愛しの妹にそんなこと言う？」

遥が口を尖らせる。ああ、そんな目でみないでくれよ。

「仲がいいね」

苦笑気味に空狐は呟く。

「まあ、私たちも色々あったもんねえ」

と、遥が笑う。

はあ、昔一時期、全然遥が甘えてくれなくてさびしかったなあ……

「そうだな、例えば」

ぼんやりと昔のことを思い出す。

ある寒い日、俺はあったかい鍋を作って遥の帰りを待っていた。

はあ、遅いな遥。

その時、電話がなった。ハイハイ、ちよつと待ってよ。

「はい、天野です」

『あ、兄さん、私。京子のところでご飯食べてくから、私晩御飯いらない』

そして、電話が切れる。

……泣いてないよ？ 泣いてなんかいないよ？ ただ鍋がしょっぱいなあ。

「ちよつと待つてよ。今のがいい思い出?!」

空狐がすごい形相で突っ込む。なんだ? 今つっこまれること言
つたか?

「貴重な遥の思春期の思い出だから大切なんだよ」

と、そこまで言うてくいくいと遥が俺の袖を引っ張る。

「お兄ちゃん恥ずかしいから……」

遥はそう言うけど、止まらんぞ俺は!

「なあ、ウサ吉、カメ公、俺がなにかしたかな? 遥が最近冷たい
んだよ」

ちくちくとワタが出てきた二匹を修繕しながら問いかける。

両方とも大切なもの。遥が家族になった時に、俺と母さんがそれ
ぞれ贈ったものだ。

年期が入ったそれは解れた箇所も出てきたから俺が修繕していた。
だが、ぼすんと、頭にクッションが叩きつけられる。

「兄さんのミジンコ」

そう言うて遥が二匹を抱きかかえる。

「ごめんね? 兄さんすつごくウルサかったでしょ?」

そう二匹に話しかけながら遥は自室に戻る。

はっはっは、別にお礼が欲しくてやってたんじゃないよ。だから
平気さ。

「あ、兄さん。言い忘れてたけどありがとう」

それだけ言うて襖が閉まる。

ああ、なんだろう。視界が滲むよ。

「僕は心の泉が枯れ果てそうだよ」

空狐が顔を押しさえて涙を流す。

そうか、そんなに感動したか。でも、凄まじき戦士にはならない
でくれよ。

「まあ、昔の遥は素直になれない子だったんだ」

うんうんと俺が頷いていたら遙はとて面白い笑顔を浮かべていた。なんだ、やっぱり自慢されて嬉しいか妹よ？

「兄さん……ちょっと反省して」

そう言つて遙は俺を遠慮なく全力でぶん殴つた。

うむ、妹ながらいいいパンチだ。天国の父さん母さん、遙は元気ですよ。

俺の顔を見た空狐が無言のまま引いていったけど、気にしない。

月×日 晴れ

友達の刹那くんが、妹に殴られてすごく気持ちよさそうな顔をしていました。

特級退魔士と聞いてたからすごい人なんだと少し尊敬してたけど、思っていたよりも色々と駄目な人でした。

これからもちゃんと友達としてやっていけるか、ちょっと心配です。できたら他の人の所で研修受けたいなあ……

空狐の日記より抜粋

そして、晩御飯。

「お姉ちゃん、サラダちょうだい」

「はい」

久しぶりに我が家に遙がいるということでごちよつと豪華な食卓となつた。

「はあ、おねえちゃんのご飯、三十年ぶりだよ」

と、嬉しそうに朱音と俺の料理を頼張る遙。

あ、それくらい経つのか。

「ほれ、コロッケ。お前好きだろ？」

「お兄ちゃんのお手製コロツケ！ 久しぶりだなあ」

美味しそうに母さん直伝のコロツケを頬張る遙。本当においしそうに食べる姿は作り手には嬉しい。

「えへへ、お兄ちゃんありがとう」

遙がすり寄ってきたから喉元をくすぐってやる。なんかこれが好きらしい。

「仲いいわねあんたら。私には真似できないわ……」

呆れたように美狐が呟く。むっ、昔甘えてもらえなかった分を取り返したいだけだぞ俺は？

「だねー」

アルトもそれに同意したのだった。

えっと、そんなにおかしいかな？

第八十五話 刹那の妹、遙登場！（後書き）

鈴：「ようやく遙登場です！」

刹：「いえーい！ 遙と会うの久しぶりだぜ！」

鈴：「と言つても狐火に出てくるのは文化祭までだけだな」

刹：「それでも十分！ さあて、俺らの兄弟愛を見せつけてやるぜ
！」

鈴：「文化祭編、あと数話で突入なんだけどな」

刹：「ん？ 何か言ったか？」

鈴：「なんも」

刹：「そうか、よし、文化祭までに俺と遙の話を五話くらい」

鈴：「却下」

感想、拍手お待ちしております。

閑話 舞の思い

どうもこんにちは。倉田舞です。

今日は演劇部でみんなの服のお披露目会があります。楽しみです！

そして、放課後順番に服のお披露目がされ、刹那さんと石田先輩と私が終わって、次は空狐くん。

準備室のドアが開きます。

「さあ、空狐、観念しなさい！」

「すでにしてるよ……」

ハルちゃんに連れられてとぼとぼと空狐くんが部室に入る。

入ってきた空狐くんは真っ黒なゴスロリ調のドレス姿。

空狐くんのウィッグをつけられた銀に近い灰色の髪と黒い服がどことなくコントラストを彩り、フリルをたっぷりあしらったかわいらしいデザインでした。

「はは、いいぞ空狐！」

騎士風の服を纏った刹那くんが楽しそうに笑います。

はあ、空狐くんかわいい。

昔からかわいかったからね。

私と空狐くんが出会ったのは私が六歳の頃。

お母さんが病気で倒れて、月狐さんがそのお見舞いに来た時でした。

『はい、この子が私の息子の空狐だよ』

『は、初めまして。木霊空狐です……』

月狐さんに押されて、自己紹介のために前に出てきたのは可愛かったなあ。

昔の空狐くんは大人しくてかわいくて、いつも誰かの後ろを着いてきてました。

『くーちゃんこつこつち！』

『ま、待ってお姉ちゃん』

お母さんが入院してたから私は自然と空狐くんと一緒でした。兄弟が欲しかった私は、同じ年だけど誕生日が私の方が早いからってお姉ちゃんって呼ばせてたっけ。

ちょっと無理があつたけど、まるで弟ができたようで嬉しかったなあ。ハルちゃんと竜馬くんと友達になったのもそのくらいだったね。

友達がいなくて一人で遊んでばかりだった私の世界が空狐くんのおかげで広がりました。

楽しかったなあ。

そういえば、空狐くんが女の子と思われてて、竜馬くんに告白されたこともあつたっけ。

それ以来長かった髪を切っちゃったのは残念だったけど。

それから空狐くんは毎年大型連休ごとに遊びに来た。私は空狐くんが遊びに来るときがすごく楽しみだった。

ただ、一時期を境に来なくなつて、すごく寂しかったです。なんで空狐くん来なくなつたのかな？

それから、私が高校に上がる頃に、お母さんとお父さんが事故で死んでしまいました。

ありふれた交通事故。それで二人は帰らぬ人になってしまった。

悲しかった。寂しかった。一人広い家に残されたことが余計に辛かった。

お母さんとお父さんは駆け落ち同然で私たち家族の親しい親族は月狐さんたちくらいしかいなかった。

ハルちゃんや竜馬くんも心配して色々してくれたけど、家にいるとすぐに自分が一人なんだって思わされた。

悲しくて寂しくて、私は死んじゃおうかと思ったことも何度かあった。だけど、

ある日、一本の電話がありました。

「はい、倉田です」

『こんにちは舞ちゃん』

明るい声。これって、

「月狐さん？」

『うん、久しぶり』

お母さんたちの葬式であったのは二ヶ月前だからうん、久しぶりかな。

まったく変わらない月狐さんを思い出す。くーちゃん、ううん、空狐くんはずいぶん背が伸びてかっこよくなってたなあ。

「なんですか？」

『うん、あのね、くーちゃんが常磐学園に転校することになったんだけど』

えっ？ 空狐くんが？

『それでね、住む場所が見つからなくてよかったら舞ちゃんのとこで住まわせてもらえないかしら？』

空狐くんがくーちゃんがうちに住む？

「いいですよ！」

私は即答していた。

それから、私はその日が待ち遠しくなった。

空狐くんとまた会える。一緒に住める。それだけで私は寂しさがなくなった。

そして、あの日、公園に行けば約束の時間より早く来ていた空狐くん。私はそれを見てすごく嬉しくて、約束より早く来てたことにやっぱりかわらないことがおかしかったです。

空狐くんは私が辛い時にいてくれた。空狐くんは私が寂しい時にいてくれた。

空狐くん。これからずっと一緒にいてね。私を独りにしないでね。

閑話 舞の思い（後書き）

鈴：「ひ、久しぶりに狐火投稿できた……」

刹：「ははは、今年中に終わらすのは絶対無理だな」

鈴：「言うな……」というところで、今回はメインキャラである舞に焦点を当ててみた」

刹：「空狐に対する思いの原初だな」

鈴：「本来、舞はもつと空狐への独占欲やらなんやらが強いキャラを考えてた。でも、いつの間にかこの形に落ち着いたんだよな」

刹：「ふーん、まあ、片鱗は少しだけあったと思うな」

鈴：「それでは、また次回！」

刹：「アデュー！」

第八十六話 文化祭始まるよ！

さて、ついに来ました文化祭！

演劇部は体育館を一番最初に利用するから、校長先生の挨拶を聞きながら僕らは大道具をセツトするなど準備を進めています。

「舞さん、服これでいいかな？」

と、僕は自分の着ているメイド服を見まわす。特におかしいところは……男が着てるくらいかなあ。

「うん、大丈夫！ ばつちり似合ってるから！」

はは、まあいいか。

にしても、学園祭ということで地域の人など学生以外の人もいるから緊張するな。

それに、リハーサルで失敗はありませんでしたが、本番がどうなるか心配です。

でも、今まで頑張ったんだから、絶対に成功させるぞと意気込みました。

そして、公演五分前、衣装に着替えた僕は舞台袖からそつと外を覗く。

思ったよりたくさん来てるなあ。あ、朱音さんと美狐さんいた。母さんと兄さんも。

うっ、やっぱり身内を見ると緊張する。

そこでポンと肩を叩かれた。

「空狐くん、大丈夫、大丈夫だから」

振り向いたら、そう舞さんが笑いかけてくれた。その舞さんも少し手が強ばってるように感じる。

それを感じて、僕だけが緊張してるんじゃないと少しほっとした。そうだね。後はやれる限りのことをするだけだ。

僕は気合いを入れ直す。

「ほら、集まって！」

と、そこで先輩がみんなを呼んだ。僕らも戻るとこほんと咳払いをした。

「えー、では、これから私たちの成果をお客さんに見せます。練習してきたことを見せてみんなをビックリさせよう！！」

と、桜子先輩が笑う。

『はい！』

それに、みんなが気合いの入った返事を返す。

「では各員配置について！」

先輩の号令にぱつと、みんながそれぞれの位置に移動した。

よし、やるぞ！

そして、公演が始まる。

幕が上がると共に僕はモップ片手に舞台に飛び出す。

「急げ、急げ」

僕は魔王の従者ななせとして、魔王トワの館の掃除をする姿を演じる。

と、そこに魔王トワを演じる舞さんが出てくる。

「ななせ、掃除は終わったか？」

と低く声を作った舞さんが問いかけてきた。

「はい、トワさま！」

僕も笑顔で返す。ななせは拾ってくれたトワに、感謝しているって設定だからね。

よしと頷く舞さん。

「なら、私の手伝いをしてくれ」

「かしこまりました！」

僕らは舞台袖に引っ込む。

そして、袖に入って溜まっていた息を吐き出す。最初の場面っていうのもあるけど、すっごく緊張したあ！！

二回目の公演だから、少しは大丈夫だろうって思ったけど全然そんなことはなかった。

むしろ一回目は生徒だけだったけど、今は外から来てる人もいるから、より緊張する。

大丈夫、大丈夫だ木霊空狐。リハーサルはうまくいったんだから、今度も大丈夫。

そして、話は進んでいく。と、一応物語の説明をしておこう。これは隠居する魔王トワが、一人の少女ななせを拾って従者にしたという設定。

ハルが設定を説明した時、刹那くん少し複雑そうだったけど、どうしたんだろ？ それに、役も立候補しようとして止めてたし。

ななせは魔王という不吉な呼び名に反し、優しいトワのために一生懸命に働き、充実した毎日を送っていた。だが、ある日、近くの村にななせたちが買い出しに来た時に、その日常は破綻する。

異端を狩る教会の聖騎士が、その村に訪れており、魔王であるトワを追ってきたのだった。

なにもしていないというのに、しつこくトワに迫る教会の聖騎士。それから逃れようとするトワ。だが、ある町でトワはななせを置いていってしまう。

それは、彼女を巻き込みたくないから。大切に思う彼女には幸せになってもらいたいから。

だが、ななせは自らの力でトワを追ってきた。

「なんでついてきた？」

トワのセリフに微笑みを作る。

「それは、私がトワさまの従者だから、だからお供します。この大地の果てまで……」

それが、ななせの出した結論。平穏な世界よりも一生トワと共に生きることを選んだ。

そうかと頷くトワ。

「なら、ついてこい。その命が尽きるまで」
「はい！」

トワのセリフに頷く。

そして、ナレーションとともに、みんなが舞台に出てきます。

『演劇部、"魔王と一緒に"でした』

きれいにみんなが揃ってお辞儀をすると、盛大な拍手が響きました。

演劇終了後の舞台裏。

「みんなお疲れさまー！！」

桜子先輩の言葉とともにみんながわー！！と歓声を上げる。

確かに大成功。正直、リハーサルよりもうまくいったと僕は思う。
ヒロイン役としてはすごくほっとした。

「やったね空狐くん！」

舞さんが満面の笑みで僕の手を掴んで上下に振る。

「舞、お……トワ役御苦労さま」

と、刹那くんが舞さんの肩を叩く。

僕らはお互いに今日の星光を讃えあう。そこでもちやっとドアが開く。

「御苦労さま、みんなすごくよかったよ」

と、朱音さんが準備室に入ってきた。

「朱音先生！」

みんなが慌てて並ぶ。

「先日はご指導ありがとうございました！」

『ありがとうございます！』

みんな揃って礼をする。

実は、朱音さんは合宿の後もちよく練習に見てくれてたんだ。

「うっん、私はちょっと手伝っただけ。今日の成功はみんなの力だ」

と、朱音さんがほほ笑む。

「いえ、先生がそう思われてても、あの指導が今日の成功に繋がってます！」

桜子先輩が憧憬の目で朱音さんを見る。

ふと思っただけど、桜子先輩つてもしかして演劇とかの道に進むのかな？ 練習はいつも一生懸命だったし、ちょっと気になるかも。

「空狐、舞、おめでとう」

と続いて美狐さんも部屋に入ってきた。

ただ、僕を見ると、ぶほっと吹きだしてお腹を抱える。

「改めてみて思うけど空狐。あんたのメイド服とドレス、無駄に、似合ってたわよ……くくく、アツハハハッ！」

あー、言わないでください。自分でも半分諦めるとはいえ、人に指摘されると余計に哀しくなります。と、高笑いをする美狐さんに心の中で訴える。

にしても美狐さんって、こんな高笑いするんだ。クールに見えて、この人って意外と感情表現が豊富だよなあ。

「それにしても、やっぱりあなたたちお似合いね。演劇見ててよく思ってたわよ」

目許に溢れる涙を指で払いながら、美狐さんが感想を述べた。にやにやとした笑みは相変わらずで。

「はい、ありがとうございます！」

と、舞さんが美狐さんに笑顔で返す。

お、お似合いかあ舞さんと……すごくうれしい。

でも、舞さんはどう思ってるのかなあ？

そして、着替えを終えた僕らは美狐さんも入れて校内を散策しようとして、

「ん？ アルトは？」

へ？

いつの間にかアルトちゃんがないことを、美狐さんの言葉で気

づいたのだった。

第八十六話 文化祭始まるよ！（後書き）

鈴：「ひ、久しぶりに狐火投稿できた……」

刹：「ほんと久しぶりだな。約三ヶ月か」

鈴：「色々忙しかったのもあるけど、うう、こんなペースでほんとに完結するのかなあ？」

刹：「まあ、頑張れ。うん」

評価、感想お待ちしております！

第八十七話 アルトが迷子

アルトside

「ねえ、つぎは……あれ？」

三人に提案しようと振り返ると、くーくんとまいちゃん、そして美狐さんはいませんでした。

場所は一号棟と二号棟を繋げる二階の渡り廊下。きよろきよろと周りを見ますが、くーくんとたちはいません。宣伝をしてる人、どこに行こうか話してる人たち。あとは、図書委員の古本市。

あちゃー、私って背が低いからみんなたまに見つかられなくなっちゃうんだよね。

うーん、まあもう迷子なんて歳じゃないし、学園もそこまで広くはないからそのうち合流できるよね。よし、一人で色々回ってみよう！

そう考えて私は歩き出しました。

三階の廊下を歩きながら、はあっと、私はため息をつく。

一人で色んな場所を回ったけど、行く先々で私は子供扱いされました。同年代の子も、私の見た目や口調から子供扱いです。

くーくんやまいちゃんたちもなんだよね。二人のことは好きだけど、そこは不満。一応同い年なのになあ。

「アルトちゃん、よくできたね」

練習中うまくいけば、まいちゃんは私の頭をいい子いい子と撫でてくれて、

「大丈夫アルトちゃん？」

と、私が転んだら、心配そうにくーくんが抱き起こしてくれた。うとう、本当は子供扱いは嫌なのに。

なんで私は成長しないんだろう？ 自分で自分の体質が憎らしくなる。せめて精神面と同じスピードならいいのに……

「ママみたいになるのはずっと先かあ」

本人はなりたくてなっただんじやないって言うけど、やっぱりあいう、ぼんきゅっぼんな身体は羨ましいなあ。まあ、私の身長でそんなにあつたら不気味だろうけど。

と、考えながら、一号棟三階にある3-Bの喫茶店に入ろうとして、歩いていたら誰かにぶつかってしまった。

「あ、ごめんなさい」

私は謝ってから、離れようとして、

「あん？ それだけかガキ？」

いかにも不良に絡まれた。しかもメンチを切ってくる。

不良は二人、それぞれリーゼントとモヒカンで、どちらもサングラスをかけて、チエーンをアクセサリーにしてる。リーゼントは特攻服、モヒカンの方はカプコン破れしてる。

わー、今時リーゼントやモヒカンって珍しいんじゃないの？ しかも鎖じゃらじゃらって、まるで二十年前の漫画から出てきたみたい。

見れば、他の生徒たちは不良たちを見ようとしないし、何人かがびくびくと怯えてるし、しかも、内装も、机や椅子がひっくり返ったり、飾り付けが外れて少しばかり荒れてる。もしかして、嫌がらせ受けてたのかな？

「子供だからってナメたら承知しねえぞ、あつ？」

と、リーゼントの不良……面倒だし、リーゼントでいいや。見た目小学生を脅すなんてなんて器量が小さいなあ……どうしよう？

今の私自身は見た目通りの小学生程度の力しかないし、でも手元にあるあれを使えば……

私は腰の後ろに手を伸ばし、躊躇う。

この場に人は多い。人外関係者の学園だけど、一般の人もいる。なにより……

『化け物!』

イヤだった。またそう言われるのは。

「なんだその目は? 文句あんのか?」

と、躊躇していたらリーゼントが手を伸ばしてきて、

「あら、ずいぶん珍しい生き物がいるわね」

後ろから伸びた細く綺麗な手がリーゼントの頭を掴みました。

「あただだだだ?！」

ギリギリとその白い指が頭蓋骨にめり込むような音がします。

振り向けば、そこに空狐くんよりも綺麗な白銀色の髪の人、美狐さんがいました。

「美狐おねえちゃん?」

「どうも、アルト。探したわよ」

み、美狐さんいつの間にも後ろにいたの?

「て、てめえ、ブラザーを離せ!」

もう一人の不良、命名モヒカン。が飛びかかるけど、無駄な犠牲が増えただけでした。

ジャブ、フリッカー、ストレート、アッパー、リバーブロー、ガ

ゼルパンチ、デンプシーロール

肘打ち、裏拳、正拳、てりゃあああああ

無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄アツ、WRYYYYYYYY!!

圧倒的ではないか美狐さんは……

喧嘩、いえ、不良は反撃一つできないから、一方的な虐殺が目の前で展開されます。

「跪けッ!」

ぼこぼこにしたリーゼントとモヒカンに美狐さんが命令します。

一応、急所を外していたので、そんなに酷いケガではありませんが……いえ充分に酷いです。顔が腫れて膨らんでるけど、ほとんど血は出ていません。せいぜい鼻血くらい。教室を汚さないような配慮でしょうか?

「ひい……」

ひざまずかせた二人の手前に、美狐さんはそばのテーブルにあつた皿を取るなり、載つた食べ物を床に零します。そして……

「食べなさい。ただし口だけでね」

えええ！？ い、今の学校はみんな土足で歩いてるのに？！

「え、いや、汚っけふっ！」

跪きながらも文句をいいかけたモヒカンの顔面を、椅子に腰掛け、てふんぞり返つてる美狐さんが、蹴り飛ばしました。

「口答えすんじゃないわよ駄犬が。そんなに嫌なら、屋上から紐なしバンジーする？」

ひ、紐なしバンジーって、大怪我じゃすまないよ？

半泣きになりながら蹴られなかつたリーゼントは首を振る。ま、まあ、怖いよね。助けられた私もちよつと怖いし。

「じゃあ食べよクソガキ。ちゃんと綺麗に食いなさいよ。少しでも残つてたら、鼻にフォークぶっ刺すわよ」

お箸じゃなくてフォークですか？！ 股が三つだから間に刺さっちゃうよ！

不良達がすんごく可哀想に思えたのか、嫌がらせを受けてた側の生徒もつい助け舟を出そうとします。

「も、もう許してあげても」

「安心なさい。ちゃんと許してあげるわよ。尤も、今日一日中こいつらがタダ働きしたらだけど」

ま、まあそれくらいは当然かもとは思つかない。ちらつと見れば、結構手間をかけたと思う装飾の数々。

「や、やらせていただきます」

こくこくと従順に頷くモヒカンとリーゼント。もう完全に心折れてるね……

「ああ、壊れた器材の弁償と、こっちの客の料金も、あんたらが支払いなさいよ」

と、美狐さんが勝手に零したお菓子を食べるはずだったお客さん

を示す美狐さん。

「ええ?!」

「あ? あんたたちに選択肢はないのよ。わかった?」

嫌そうな顔をしたリーゼントの顔の前に、どすつと床がへこみそうなほどの勢いで床を踏みつけ、美術品のように精緻で綺麗な顔を、鬼のような形相へと変貌させ不良を睨んで脅す美狐さん。

これは、怖い。かなり怖い。

「ひい! わ、わかりました!!」

凄む美狐さんに震え上がる不良達。この光景に、場にいるメンバーが私を含めて思わず口にする。

「鬼だ……鬼がいる」

すると、美狐さんが振り向いてクールに艶笑する。

「違うわよ。鬼じゃない。狐よ」

訂正した瞬間、彼女の影が狐の形に変わってにやけていたのは、恐ろしくて誰もつつこみませんでした。

「大丈夫だったアルト?」

「ごしごしと床を拭くモヒカンとリーゼントに背を向けると、美狐さんが聞いてきました。

えっと、やりすぎだと思えますけど助けてもらえたんですから、ちゃんとお礼を言わないとね。

「ありがとうございます。お姉ちゃん」

と、私が笑うと、美狐さんは一瞬遠くを見る目になりました。

「……心花」

ぼそつと美狐さんが呟きます。え?

「え? どうしたのお姉ちゃん」

「え、あ……ああ、何でもないわ。行きましよう」

と、美狐さんは私の手を掴んで歩き出しました。

心花……か。美狐さんの記憶に関係ありそうだし、せつなくんに教えておこうかな?

「美狐さん、アルトちゃん！」

と、教室を出たらくーこくんたちがこっちに駆け寄ってきました。

「あ、まいちゃん、くーこくん」

はあはあと息を荒く息を吐く空狐くん。

「もう、心配したよ。でも、安心した」

「あはは、こんなに人いるから迷子にもなっちゃうよね」

と、二人が笑う。

むう、やっぱり子供扱い。でも、いいです。二人が私のこと心配してくれてるのはわかりますから。

「心配させてごめんね」

私は二人の手を掴んで謝りました。

第八十七話 アルトが迷子（後書き）

鈴：「すごい地震でした。東京にいた僕も立つてられないくらいで、がしゃんがしゃんってグラスやらが割れる音がしました。タンスやらも位置がずれ、高い位置に飾られていた写真やらも落ちてきました」

刹：「亡くなられた方、行方不明者も多いしな。テレビで惨状を見た時は驚いたな」

鈴：「この場で地震で亡くなられた方々のご冥福を祈らせていただきます」

刹：「そして、こんな状況でも、これを読んでいたただければ幸いです」

第八十八話 文化祭終了

まあ、アルトちゃんを見つけない安心していたんだけど……

「なんで僕はここにいるんだろう？」

しくしくと僕は舞台裏で泣いていた。

「まあ、元気出せ……」

刹那くんがポンポンと肩を叩く。その彼もタイトミニで、ポイントに青の線を配した紺色の制服。

一方の僕は黒いゴスロリ調の服とロングヘアに見せるためのウィッグ。

僕らは女装して、出番を待っていた。

この学校には『ミスタートキワ』というコンテストがある。

まあ、簡単に言えばミスコンの男子の部で、僕たちも出る予定だった。

なんで男も参加するコンテストにわざわざ女装か？ そんなの朱音さんと舞さんの仕業ですよ。

『絶対似合うから！』

そう言って押し切られてしまった。僕を見て美狐さんが、

「く、空狐、あんた、ほんとさいこ、あはははははははははっ！！」とお腹を抱えて笑い出した時は死にたくなった。

現在、女子の部で、舞さんが出てる。

練習用の胴着を着て、ムーンライト代わりに長刀で演舞を行っている。

最近、魔法だけじゃなくて朱音さんから槍術も習ってるからなあ。舞さんは運動は苦手な方だったけど、見る人が見れば、本来の得物が槍だっただけでわりそうなくらいは堂に入ってる。

にしても舞さんどうしたんだろ？ 今じゃ殆ど退魔士としての訓練になってるし。

やっぱり何が何でも攻撃魔術習得に反対しとくんだったな……
僕は溜め息をつく。関わって欲しくなかった。日常でいてもらいたかった。

そして、舞さんは本日トップの47点を取って戻ってきた。

「どうだった空狐くん！」

と戻ってきた舞さんに微笑む。

「かっこよかったですよ舞さん」

僕の返事に舞さんは嬉しそうに笑った。

女子の部が終わり、ついに男子の部……と思ったら、僕は舞さんに腕を引つ張られ体育館裏にいた。

なぜ体育館……古い漫画なら果たし合いや告白の場、って、まさか?!

僕は緊張する。こ、このタイミングで?!

「空狐くん……」

そして、舞さんが非常に真面目な顔で、ああ、待って。まだ心の準備が!?

「ポーズ取って！」

舞さんがばつとカメラを出す。

はい?

自然と僕は前かがみのポーズを取っていた。あれえ?!

ぱしゃつとシャッター音。ああ、そうか、最近のパターンは残念でしたっけ……

「次お願いね！」

はいはい。

僕は再びポーズを決める。だんだんどうでもよくなってきた。シャッター音が増えていく。

「空狐、こっち向きなさいよ」

美狐さんの言葉にきらつとポーズを決めながら振り向く。

全く、なんで僕なんだろう? ポーズ決めて、ウサギがピョンと

跳ねて、狐が遠吠えして、魔王はロリコンで、女神は妖精になって
剣に宿り、滅びの地平に咲く命の花、かくして世界は仮初めの平和
でくるくる回って、私は流星に手を伸ばして、業火に焼き尽くされ
て、人の善意と可能性は一角獣に託され……うにょー……！！

「かわいいポーズ！」

ミス常磐に私はなる！

「せいこー！」

まいおねーちゃんがやりと笑ったけどクーは知りません！

私は舞台裏に戻る。

「く、空狐大丈夫か？」

なぜか心配そうに刹那くんが問いかけてきた。

「ほええ？　なんでそんなこと聞くの？　クーどこがおかしいです
か？」

おかしいところなんてないと思うんだけど……

と、なぜか刹那くんは憐れむような、遠い目になる。

「そうか、まあ、頑張れ……」

ぽんぽんと私の肩を叩くとすたすとステージに向かってしま
いました。

うーん、刹那くんがなにを言いたかったのかはわからないけどク
ーも頑張るよ！！

ぱつと舞台に出る。

「はーい、空狐でーす！」

はっ！？　なにが起きた？　僕は確か舞さんに呼び出されて……
何も思い出せない。

ま、まあ思い出せないならいいか！　いつの間にか46点取って
いたなんて僕は知ーらない！！

「あははははははは！　空狐、あんたほんと面白……ぶははははは

「!」
美狐さんが笑っているけど気にしないんだからね!

そして、出し物は全て終わり、片づけをしてから後夜祭となりました。

ぱちぱちとグラウンドの真ん中で燃えるキャンプファイヤーを見つめる。

「きれいですね」

「うん、でも……空狐くんの火の方がきれいだよ」

なんて舞さんが笑ってくれる。

え、あ、うう、脈絡がおかしい気もするけど、なんか嬉しいな……と、僕たちがのんびりと火を見ていたら、軽快な音楽が流れてきた。

そっちに振り向く。確か、ステージが設営されてた場所だけ……

……
そこで美狐さんがダンスを披露し、そのバックで朱音さんと刹那くんがギターを弾いていた……っていいのか部外者がそんなことして?

と、思っけど、みんな喜んでいるし、いいのかなあ?

こうして、僕らの文化祭は終わりを告げた。

第八十八話 文化祭終了（後書き）

鈴：「文化祭編終了です」

刹：「日常編はこれで終わりだな」

鈴：「おう、次からは一気にラストまで駆け上がる」

刹：「そういえば、これが始まってもう三年か」

鈴：「区切りを付けるにはちょうどいいかもな」

評価、感想お待ちしております。

閑話 舞の努力

「いやいや、そこはユーなのフェでしょ？」

「はっはっは、何言ってるんだバカ。やっぱりユノフェかユーなのだろ？　なのフェは売れるからできりゃ作る。どうせならまどほむも行くか」

笑顔で空狐くと刹那くんが話しているけど、お互いその眼は欠片も笑ってない。

「なにいつてるのかな刹那くん。やっぱり世にいるなのフェどもを嘲笑うためにもユーなのフェは必要でしょ？　アリすずがつくならなお結構！」

「ハーレムなんて現実にできるか。一気に数人なんて作画する方も大変なんだよ」

「そこを夢とロマンと妄想でカバーするのが同人でしょ！！」

「読み手の理屈と理想を押し付けんな！　こっちは締切と作画っていう現実があるんだよ！！」

なんかどんどんヒートアップして顔を突き合わせる二人。

「いったい何のお話なのかなあ？」

「さて、バカはほつといて今日の訓練始めるよ」

と、朱音さんに言われて私は地下のアトリエに向かいました。

最近、近接戦のためのムーンライトの使い方を習っています。

「ほら、そこが甘い」

と、朱音さんが訓練用の槍で私の足を叩く。

私はさらに踏み込んで穂先を突き出して、朱音さんに柄を掴まれてしまう。

「槍使いが得物を掴まれたら駄目だよ」

そういつて朱音さんが懐に入ってくる。私はムーンライトを手放して離れようとするけど、朱音さんは早くて……

どすつと私のおなかに朱音さんの膝が入りました。

「かつ、は！」

私はお腹を抱えて膝をついてしまつ。

痛くて痛くて仕方ない。まだ、痛いには慣れない。

「うーん、ここ一か月でだいぶ力をつけてきたとは思つけど、まだまだね」

と朱音さんが感想をいいながら、私の横にムーンライトを突き刺す。

「とりあえず、一度休憩にしようか」

「い、え……」

私はムーンライトを執つて立ち上がる。

「もう少し……お願いします」

震える足を支えて私は立つ。

「……あまり無理しない方がいいよ。休むのも訓練のうちなんだから」

そう、かもしれないけど……

「でも、頑張らないと……追いつけない」

私はほとんど積み重ねがない。お父さんの残した本で少しそつちの知識があつた程度だから、頑張るしかない。

朱音さんはため息をつく、槍を構える。

「じゃあ、あと一本行ってみようか」

空に月が浮かんでいる中私はムーンライトをふるっている。

アトリエには太陽も月もない。でも、擬似的に昼夜が作られている。

朱音さんは仮眠室のベッドで寝ているけど、私はまだ頑張っている。

「ぶつ……」

目の前にイメージを作る。背は私より少し上位で、武器は刀。防御力ではなくて速さをメインに置いた相手。

ムーンライトの手助けでなんとか作ったイメージに向かって穂先を向ける。

「行くよ、空狐くん」

私はムーンライトを突き出した。

それから十分後、私は砂浜の上に転がっていた。

やっぱりたった数か月頑張った程度じゃ、イメージ相手でも追いつけないよね。

でも、少しだけ、イメージの中でも動きが見えるようになってきた。

「早く追いつきたいな……」

「誰に？」

いきなりかけられた声に私は振り向く。そこにはきれいな銀色の髪。

「美狐さん」

「やあ」

ひらひらと手を振りながら美狐さんが近づいてくる。

「さっきのイメージは空狐？」

すっぱりと私のシャドーの相手を言い当てられた。

隠す必要もないし頷く。

「追いつきたいのは空狐ってことね。なんで？」

また当てられた。それに、なんでって言われても……

「追いつかなくちゃ、始めた意味がないんです」

もともと魔術を教えるって言い出したのだから、少しでも空狐くんの仕事を知りたかったから、そうすれば、空狐くんに近づけると思ったから。

だから、空狐くんの好きなアニメのこともいろいろと勉強している。今日空狐くんと刹那くんが話していたのはカップリングっていうのことだというものってことはわかってる。

でも、そのうち退魔士になれば、ずっと、一緒にいられるんじゃない

ないかって思ってしまった。空狐くんが危ない場所に行っても私も着いていけるんじゃないかって。

空狐くんはそっちに近寄らないように私に注意していた。まあ、模擬戦を見せたりとかしてたから言葉だけでいいとか思ってたのかもしれない。

でも、私はできれば、空狐くんのそばにいたい。もっともっとそばにいたい。

離れられたら嫌だから。知らないところに行かれるのは嫌だから。わがままとはわかってる。空狐くんに負担を負わせるかもしれないのもわかってる。それでも……

「これでくっついてないなんて、信じられないわね」

美狐さんが呆れたように息を吐く。

「まあ、頑張んなさい」

そういつて美狐さんは腰を上げて、立ち去った。

ふう、あと一回やってから私も休もうかな？

私はもう一度ムーンライトを執って、立ち上がった。

それからアトリエを出れば現実では夕暮れの時間。

あれ？ 空狐くと刹那くんが、なぜか夕日を見ながら涙を流してる。

「そうだよね。一人一人ちゃんと描かないと心はわからないよね……」

「いや、俺もみんなですっていうことまで考えてなかったさ」

二日間、あ、アトリエだから二時間の間になんかわかりあったみたい。

むう、空狐くんとなんでもいいから分かり合えるなんて、少し刹那くんがうらやましいなあ……

閑話 舞の努力（後書き）

鈴：「どうも、最近なんか筆の進まない鈴雪です」

刹：「携帯を変えたもんだから書き辛いって言ってたな」

鈴：「うん、今流行のスマートフォンにしたんだけど、タッチする部分が小さくて打ち辛くて、しかも打っている気がしないし」

刹：「そこらへんは便利だけど考え物だな」

鈴：「技術の進歩は必ずしも便利っていうわけじゃないって言うのを実感したよ」

刹：「複雑化して煩雑になったりするもんな」

鈴：「それでは、また次回！」

第八十九話 里帰り

朱音さん自慢のマイカーに乗って僕らは妖狐の里に向かう。なんではわからないけど、いきなり刹那くんが行くから着いて来いって言ったのだ。

乗っているのは運転手の朱音さんと刹那くん、美狐さんとアルトちゃん、舞さんに僕だ。

「ふーん、あんたも来るの」

「はい、一度行ってみたって思ってたんです！」

美狐さんにそう返す舞さん。

ああ、そういえば、舞さんって一度もうちに来たことないなあ。

「で、美狐さんは？」

ふと気になって尋ねてみる。

「こいつらが妖狐の里で情報収集してもいいんじゃないかって言い出してね」

ああなるほど。それもいいかもしれない。

そんな話をしているうちに里のある山が近づいてきた。

里から少し離れた場所にある寂れた駐車場に車を止め、そこから歩きとなった。

なんでも、車というものが当たり前になったから、外から来た人間のためにこんな辺鄙なところに作ったけど、結局、里まで来る人間が少ないせいか管理も適当になってしまった場所だ。

なんかいつの間にか刹那ちゃんと朱音さんが「わりい、ちょっと急用思い出したぜ！」なんて書き置き残していなくなっていた。まあ、仕方ないから僕が里に案内することとなった。

鬱蒼と茂る森の奥にある古びた神社と繋がっている石畳を進んでいって、途中で横に曲がる。そこに向かい合うように立っている二つの岩、通称双子岩という里の入り口を見つけた。その岩の間を潜

ると、景色が一変した。

「わっ」

「わあ」

「へえ」

舞さんは普通に驚き、アルトちゃんは楽しそうに、そして、美狐さんが感心したように呟く。

「妖狐の里にようこそ」

鬱蒼とした森はなく、代わりにそれなりの規模の街が広がっていた。

基本的に瓦屋根の日本家屋が並んでいる。昔ながらの平屋や、中には二階建ての屋敷もある。古いのも新しいのも混っじっている。

まあ、基本的に日本に住まう妖狐の大半はここに住んでいる。まあ、中には妖狐と結婚したとかで他の人外も住んでるので、妖狐はだいたい九割くらいかな？

ちなみに僕みたいに人間の中で暮らすのは割と少数派だ。

「お、空狐帰ってきたのか？」

と、結界に入っただけに、妖狐警護隊、ようするに妖狐版のお巡りさんである古志さんに会った。

古志さんは浅黒い肌がちりちりした体格で、長刀を使う凄腕の黒狐の妖狐だ。確か二級退魔士だったっけ。

なお、里にはある程度の政治能力がある。司法関係は基本、退魔士協会に任せているが、妖狐間の問題を解決するための警察に代わる警護隊なども存在している。

「お久しぶりです。古志さん」

「おう、久しぶりだな空狐！」

にかつと古志さんが笑うと、僕が帰ってきたことに気づいたみんなが集まってきた。

はは、みんな変わらないよねえ。僕と違って……

「お帰り空狐！」

「元気にしてたか？」

「空狐くんおひさ！」

と、僕はもみくちやにされる。

なんか、帰ってきたなと思えて嬉しい。

「あはは、空狐くん人気だね」

と、舞さんが笑う。

「はあ、狐さんがたくさん。あ、ネコさんもいる！」

アルトちゃんがみんなを見て目を輝かせる。

そして、みんなの視線が舞さんたちに移る。

「空狐、お前」

あ、なんか嫌な予感。

「嫁さん連れてくるなら、先に連絡しろよ！」

その言葉に舞さんが赤く、アルトちゃんは楽しそうに、そして、美狐さんは意地悪な笑みを浮かべる。

あ、いや違うんですが……

「ようこそ、妖狐の里に！ たく、空狐お前も隅に置けないなあ。

三人も相手作ってくるなんて。誰が本命なんだ？ ん？」

古志さんに肘でつつかれる。つて、ちよつと三人つて！！

「まったくだな空狐、清楚なお嬢さんに、将来有望な幼女、しかも、年上のお姉さんの妖狐、両手に花どころかハーレム作るつもりか？」

と、さらに他の妖狐にも、つつかれる。

「あ、あの、私そんなわけじゃ」

困ったように赤くなつた舞さんが言い、美狐さんは、

「私は空狐の嫁なんかじゃないわよ。私は空狐の御主人様」

美狐さんの発言におお！ とみんながざわめく。

ちよつと待つてください！！

「お前、少し見ない間にずいぶん成長したんだな。まあ、俺たちの倍成長が早いから当然か」

古志さんがポンと、肩を叩きながらしみじみと呟く。

いや、そこで通常の妖狐と半妖の違いを出されても……

「ちがーう！ 美狐さんも変なこと言わないでください！！」

「うっさい、下僕」

僕がガクツとうなだれていたら、ほんと、アルトちゃんに叩かれる。

「くーくん」

「アルトちゃん」

慰めてくれるのかと、一瞬思っ

「ふつつかものですが、よろしくお願ひします」

三つ指組んでお願ひされた。

「ノオーーーーー！！」

止めでしたよ。

第八十九話 里帰り（後書き）

鈴：「ついにラストエピソード妖狐の里編です」

刹：「ついにここまで来たか」

鈴：「さあて、頑張るか！」

刹：「おう、俺の活躍もよろしくな!!」

第九十話 木霊邸

「ねえ、アルト、あんたあいつのこと好きだったの？」

「うん、クーくんのこと好きだよ？ でも、まいちゃんも好き」
なんて、会話が後ろで交わされるが、僕は聞かないようにしていた。あれだ、アルトちゃんのあれはからかいなんだから。うん。

あの洗礼のあと、僕らは里の奥にある一際大きな屋敷、僕の実家である木霊邸の門の前まで来た。

純和風の作りで長い堀に囲まれている。敷地の面積は舞さんの家の倍以上はあるだろう。

左手にはかなりの広さの庭、その奥に蔵があり、向こうには道場もある。うん、改めて見るとかなり広いなうちって。

「空狐くんの家ってこんなに大きかったんだ」
と、舞さんは目を丸くする。

「わー、おっきー」
と、アルトちゃんは目をキラキラ光らせる。

「あんた、実はいいところのお坊っちゃんだったのね」
それぞれの感想を聞きながら僕はため息をつく。

まあ、確かにお坊ちゃんと言えばそうだろう。妖狐の中でも相当古い家だし。

「ただいまー」
門を潜る。と、

「クーちゃんおかえりー！」
ぐふうー！！

横から灰色の腰まで届く長い髪と紅い眼の、フリフリレースを多用した服を纏った妖狐、母さんが抱きついてきた。

「ちよ、母さん！」

予想してはいたけど、やっぱりやめてほしい。てか、タックルを受けた脇腹が地味に痛い。

「帰ってくる気配なかったけど、ちゃんと帰ってきてくれたのねえ。ママ嬉しいわあ」

「はあ、本当は母さんが言った通り帰ってくる気はなかったけど、言わない方がいいよな。」

「あ、舞ちゃんもいらっしやーい！ 挨拶に来てくれたのねえ！」
と、今度は舞さんに抱きつく母さん。

「え、月狐さん、あ、挨拶って、あわわわ」
母さんに抱きつかれて真っ赤になる舞さん。

あ、挨拶って、か、かあさーん！！

「こんにちは月狐おねーちゃん」

「あ、こんにちはアルトちゃん。遊びに来てくれて嬉しいわあ」

と、アルトちゃんの頭を撫でる母さん。アルトちゃんも嬉しそうに目を細める。

それから美狐さんに向き合う母さん。

「初めまして。空狐の母の木霊月狐です。息子がお世話になっています」

身内向けの顔から一瞬で、キリツと表情を変えて美狐さんに挨拶をする母さん。

早い、早いよ母さん。あと、そういう格好してそんな顔しても説得力がないよ。

「玉藻美狐よ。あと、無理して作らなくていいわ」

と、美狐さんが呆れ気味に笑う。

まあ、目の前であんなことしてたんだからねえ。

「あらそーお？ じゃあ、よろしくねえ美狐ちゃん」

またも一瞬で元に戻る母さん。我が母ながら見事な変わり身。

「あ、そうそう、くーちゃん、おじいちゃんと呼んでたわよ」
じいちゃんが？

ちらっとじいちゃんの自室と化している離れの方を見る。

あそこにいるんだよね。

「じゃあ、さっそくゴー！」

と、母さんに引つ張られる。

なんか、うちの家って押しが強い人多いよなあ。

「空狐くんのおじいちゃんってどんな人？」

なんて、舞さんが聞いてくる。

どんな人かあ……こつちに来る前の豪快に笑う姿を思い出す。そんなすぐに変わってないよな。

「元気だよ、すつごく。この父にしてこの娘ありって感じ」

母さんの若々しさはじいちゃんの遺伝だと僕は思っている。

「まあ、親子なもの」

と、母さんが笑う。異様に説得させられる一言だった。

で、屋敷の奥、じいちゃんの暮らしている離れまで来た。見た目は普通の和風の家なんだけど、まあ、離れだけでも普通の一軒家よりちよつと小さい程度というのはちよつと呆れてしまう。

「空狐入ります」

一言断ってから入る。広く作られた和室の奥でじいちゃんが座っていた。

「おお、空狐がよく帰ってきたの」

と、じいちゃんが笑顔で迎えてくれる。

「ご無沙汰しています」

木霊 雷狐、見た目は大柄のご老人。年齢から灰色だったという髪も今では白髪に、しかし、赤い瞳は今も強い輝きを放っている。皺の深く刻まれた顔だが、今も昔の精悍さも窺える。

現在妖狐でも最高齢の九百十歳。人間でいえば九十歳過ぎの老人である。

しかし、その服の下は年齢に不相応にむきむきなんだよね。僕や母さんよりも兄さんに近い。

しかもこの年齢本人のうる覚えで、もしかしたら、もう少し歳が行ってる可能性もある。

「元気にしとったか？」

「はい。あつちでもいい友達ができましたから
そうかそうかと嬉しそうにじいちゃんが笑う。

「だが、もう少しこっちに帰ってきてくれんかのう。銀といい、じいちゃんさびしいぞ?」

と、少し寂しそうに言われる。それは、少し悪いと思うけど……
それから、じいちゃんは舞さんに向く。

「君は倉田くんの娘さんだったな。孫が世話になっているよ」

と、じいちゃんが舞さんに頭を下げて、慌てて舞さんもぺこっとお辞儀をする。

ああ、そうか、おじさん退魔士だったから、じいちゃんとも知り合いだっただけ。

「あ、いえ、初めまして、倉田舞です！ えっと、お父さんのこと知っているんですか?」

不思議そうに舞さんが尋ねると、じいちゃんはうむと頷く。

「退魔士としての腕はそこそこだったが、気持ちのいい御仁じゃったわ。事故のことはお悔み申す」

意外な場所でおじさんの知り合いに会ったからかちょっとだけ舞さんは複雑そうにありがとございますと返す。

おじさんかあ……確かに突然すぎた。結構かわいがってもらってたからさびしい。おばさんもなあ。

「と、そちらのお嬢ちゃんは……」

「はじめましてアルト・テストロツサです！ くーくんにはお世話になってますー!」

元氣よくアルトちゃんが挨拶を交わす。

「おお、元氣じゃの。初めまして、わしが空狐のじーちゃんじゃ。よろしくのアルトお嬢ちゃん」

と、じいちゃんも返す。

それから、じいちゃんは僕らをじいっと見てからふむと頷く。

「空狐、近いうちに曾孫が見れるのかのお?」

と、そんなことじいちゃんは言いやがりました。

ちよ、じいちゃん!?

舞さんも真赤になってる。

「銀には相手おらんし、空狐はじじ孝行しとくれるのか、嬉しいの
お」

からからと笑うじいちゃん。あ、あのねえ!

僕が文句を言おうとして、

「でも、アルトはもう少しおおきくなってからだから、おじいちゃんのご期待に沿えられるかなあ?」

アルトちゃん!? なんでこっち来てから変なことばかり言うの君!!

なんか、少しだけアルトちゃんを見る舞さんの視線に敵意が籠ってるのは僕の願望の入った気のせいなのか。

「はっはっは! わしはあと五十年は生きるつもりじゃから大丈夫じゃよアルトお嬢ちゃん!!」

そっかーとアルトちゃんと、じいちゃんは仲良く笑い出した。

えっと、冗談だよな? 冗談なんだよね?!

第九十話 木靈邸（後書き）

鈴：「ひ、久しぶりの投稿」

刹：「は、早く俺の活躍書けよ！ 今年中って言ってたる完結！

もう半年もないぞ！！」

鈴：「が、がんばるよお！！」

第九十一話 美紀

じいちゃんと会ってから母屋に戻ったら、いつの間にか来ていた刹那くんが客間でのお茶を飲んでいるとお茶をしていた。

「刹那くん、もう用事終わったの？」

「まあな。簡単な用事だったし」

僕が尋ねると答えが返ってきた。

「かちやつと湯呑を置く刹那くん。」

「まあ、予想通りと言ったところね」

刹那くんの頭頂部にいたイヴが、頭を蹴ってこっちに飛んで、今度は僕の頭の上に乗った。

「いないって思ったら刹那くんについて行ってたんだ。」

「あれ？ 朱音さんはいないの？」

「気づいた舞さんが尋ねる。」

「ああ、朱音なら月狐さんと買い物いつてるよ。『クーちゃんが帰ってきたからごちそうつくらないと』って言ってたな」

「ごちそうかあ。母さんの手料理なんて久しぶりだから楽しみだなあ。」

「なお、普段はこの家には使用人が二、三人いるけど、今は家に帰って年末の準備をしているはずだ。」

「ねえねえ、くーくん、まだ時間あるし、この里の案内して」

「あ、そうだね。初めて来たんだから、案内してほしいな」

「なんて僕はアルトちゃんと舞さんにせっつかれる。」

「えっと、刹那くんは……」

「俺は疲れたからパスな」

僕が声を掛ける前に、刹那くんはそう言って僕らに背を向けた。

「あー、私も手伝い疲れたから残るわ」

「イヴもそう言って僕の頭から降りてお茶菓子を食べ始めた。」

「なんだか本当に疲れているみたい。簡単って言ってたけど相当し

んどの作業だったのか？

というわけで、舞さんとアルトちゃんに美狐さんに里の案内をすることになった。

しかし、屋敷を出たところできなり足を止める事となった。

「久しぶりね空狐！！」

一人の妖狐が僕らの前に立ちふさがる。

見た目の歳は十歳前後の少女で、身長は僕より頭一つくらい小さいで、動きやすそうなオーバーオール。肩ぐらいで揃えた茶色がかった黄色い癖毛に頭頂部でピコピコ動く狐耳。吊り目気味だが整った顔立ちに、いかにも怒ってますとさらに目を釣り上げている。

「あ、久しぶり美紀」

と、僕は久しぶりに会ったこっちの幼馴染に答える。

「なにが久しぶりよ！ 帰るなら帰るってちゃんと言いなさ……ひやあー！！」

途中で言葉が途切れた。なぜなら、疾風迅雷の速度で舞さんが抱きついたからだ。

「か、かわいい！ すっごいかわいい！！」

舞さんが美紀に頬ずりしだす。そういえば、舞さん可愛いもの大好きだっけ。

でも、今の動き、僕よりも早いというかキレがあったって言うか……なんか敗北感感じるよ。

「ちよ、ちよっと助けなさいよ空狐！！」

舞さんに頬ずりされながら、美紀が僕に助けを求める。

ああ、しまった。

「あー、あの、舞さんそろそろ離してあげて」

と、僕が言うと、しびしび舞さんが美紀から体を離す。

それに、ふうつと美紀が人心地ついたのか、息を吐く。

「ねえねえ、空狐くん、この子の知り合いなの？」

若干荒く息を吐きながら舞さんが聞いてくる。な、なんか怖いよ。
「ん、あ、うん。彼女は信濃美紀、その、こつちでの僕の幼馴染」
と、舞さんに美紀を紹介する。

「ど、どうも。信濃美紀よ。こ、こつち見えてもあたしはあんたたち
と同じ年よ、子供扱いしないでよね！」

と、美紀がふんぞり返る。

それを、舞さんが微笑ましそうに見る。まあ、見た目完全に背伸び
びしている女の子だもんなあ。

「美紀、こつちが今、僕が下宿させてもらっているところの家主の倉
田舞さん」

と、美紀に舞さんを紹介する。

「倉田舞です。よろしくね美紀ちゃん」

「く、空狐がお世話になつてるみたいね。よろしく」

と、舞さんが微笑みかけながら手を差し出す、美紀は少し引きな
がらも握手をする。

ああ、完全に苦手意識できたな。

「私、アルトだよ！ よろしく美紀ちゃん！」

「玉藻美狐よ、よろしく」

続いてアルトちゃんと美狐さんも自己紹介をした。

で、それを終えてから、

「美紀ちゃん、まるでお人形さんみたいだね、ねえねえ、も一回抱
っこさせて」

舞さんがはあはあ息を吐きながら美紀にお願いする。いや、怖い
ってそれ。

「こ、子供扱いしないで！ 空狐もなにか言いなさい！」

美紀は目じりに涙を浮かべ怯えているようだけど、気丈に舞さん
を睨む。

「舞さん、やめてあげてね」

僕が釘を刺すと、残念そうに舞さんが肩を落とす。

それに対し、アルトちゃんは何度か僕と美紀を見比べて、

「にしても、美紀ちゃんって、私たちと同じ年ってぜんぜん見えな
いね」

と、こぼした。

「あんたに言われたくないけど、妖狐としてはあたしが普通よ。空
狐が特別なだけ」

無然と美紀が答える。それに対しははっと僕は笑う。

「空狐くんが特別って、どういうこと？」

舞さんが聞いてくる。

「普通の妖狐と半妖狐の差、って言ったところかな？ 僕みたいな
半妖は普通の人外と違って人間と同じ成長速度だけど、純粋な妖狐
は人間の半分くらいの速度かな」

なお、特に力の強い者は成人後、老化が始まるまでかなり間があ
るが、うちの母さんがいい例だ。四百になってもあの若々しさはす
ごいと思う。

故に美紀と僕では同じ年でも見た目に差が出てしまう。僕が成人
することは美紀はまだ人間でいえば十一か十二位の歳だろう。

それが僕がここから出て行った大きな理由でもある。

みんなは普通に仲間の妖狐として僕を扱ってくれるけど、それで
も僕という存在にみんなが違和感を抱いているのが……はつきりわ
かる。

特に学校、中学校の頃は成長の違う僕はみんなとは違うカリキュ
ラムだったし、以前までのクラスメートたちとも付き合いづらくな
った。

でも、そこまで説明するのもあれだから、僕は行くよと、今度こ
そ、案内の為に歩き出した。

第九十一話 美紀（後書き）

鈴：「二か月近く放置してすみませんでしたー！！！」

刹：「こつちもちゃんと監督できなくてすみませんでしたあー！！」

鈴：「ううう、放置してたんじゃないよ？ ただ、何度も書き直しては、没にして、やり直してたんだよ？」

刹：「少し言い訳臭いな」

鈴：「すみません……」

それでは、感想、コメントなんでもお待ちしております。本当にすみませんでした！

第九十二話 喫茶フォックス

美紀も入れて五人で僕らは里を見て回る事となった。

と言つても年末休みでほとんど見るべき場所、たとえば退魔士が使うような道具を作る、もしくは取り扱うような場所は休みなため、外から見ただけになった。

あとは、普通の街にあるようなものばかりだ。こんな隠れ里でも現代的なものは進んで取り込んでいるんだよね。

ゲーセンには最新のアーケード躯体があるし、おもちゃ屋にはマニアが欲しがる絶版の古い玩具から、最新のものまで置いてある。ただし店長は常に情報を手に入れてるため、そういったものは時価である。

「ねえ、そつちで空狐上手くやってる？」

「うん、毎日楽しそつだよ。くーこくんたちといるのは私も楽しいよー！」

アルトちゃんの返答に美紀がほつと息をついて笑う。

「よかつた。たまに連絡はあつたけど、やっぱり周りの人からも聞きたいからねえ」

「ああ、なんとなくわかるかな」

あははとアルトちゃんと美紀が笑う。

すぐにアルトちゃんと美紀は仲良くなった。

相性がよかつたのかな。

「うん、私もね、空狐くんがいてくれてさびしくなくなったなあ」
なんて舞さんが言ってくれた。

さびしくなくなった、か。確かにあの家に一人はちょっと広すぎそつだしな。

「へ、へえ、そつなんだ」

対し舞さんには警戒しつぱなし。最初のインパクトがきつかつたかな。

そして美狐さんは、途中で買った妖狐の里限定『稻荷サブレ』と『稻荷マン』に舌鼓を打っている。

「こっちのサブレはお土産としては定番だけど、買っていく人間がいるの？ でもなかなかいけるわねこの稻荷マン」

妖狐の里らしい土産でことで作っただけ、稲荷マンは饅頭の皮の代わりに油揚げに餡を詰めたものだ。皮の味付けに試行錯誤したらしく、意外とおいしい。

「と、こんな感じかな」

ぐるっと妖狐の里を一回りして、里の中心にある十字路についた。

「ちよつと待ちなさい空狐、忘れ物があるわよ」

美紀が頬をひくひくさせながらそんなことを言い出した。

えっ？ 忘れ物？

僕は腕を組んでうーんと唸る。

「なんだっけ？」

僕はわざとらしく小首を傾げて尋ね返した。

瞬間、美紀が爆発した。

「うちよ、うち！」

怒鳴る美紀に冗談だよと答える。

いや、覚えてたけどさ、今は美狐さんがいるからなあ。

きつと、行けば砂糖を吐きたくなる姿を見せてくれるだろう。

「美紀ちゃんのお家って？」

「里に一軒だけの喫茶店『喫茶フォックス』よ！」

アルトちゃんの問いに美紀は胸を張って答えた。

美紀の家、『喫茶フォックス』はレトロな雰囲気のお店で、里の中心から離れたところにある。

「ただいま！」

「お邪魔します早紀さん」

からんとドアにかけられた鐘が鳴る。

「おかえり美紀、久しぶりねーくん」

店に入ると店長である美紀のお母さん、早紀さんが出迎えてくれる。

早紀さんは、見た目は三十前後で、美紀と同じ髪の色だけど、綺麗なストリートで、腰くらいはある。そして、美紀と同じ釣り目だが、柔らかな笑みを常に浮かべてて、どことなく優しげな印象を与える。

白いシャツに赤茶色のスカートの上にかけてるクリーム色のエプロンにはデフォルメされた狐のアプリケがあしらわれている。

それから、舞さん、アルトちゃん、美狐さんと続いて店に入る。

「あなたたちははじめましてね。美紀の母の早紀です」

三人に自己紹介をする早紀さん。

「あ、倉田舞です。はじめまして」

「アルトです。はじめまして！」

「玉藻美狐よ」

と、みんなも挨拶する。

それを見てあらあらと早紀さんが笑う。

「あのくーくんがこんなに彼女作ってくるなんて、美紀も頑張らないとねえ」

「ちよ、ちよつと、ママ！」

早紀さんの言葉に美紀が慌てる。

「ここでもか？　ここでもそのネタでいじられるのか？！」

僕はつい眉間を抑えてしまう。

「冗談はよして。とりあえず、珈琲とケーキ全種類ね。順番は……」
なんて返しながら美狐さんはカウンター席に優雅に座りながら注文する。

「って、全部なんですか美狐さん……予想通りですが、太りませんか？
「うっ、か、彼女って」

真っ赤になりながら舞さんも座る。

「くーくんモテモテだね。私はシュークリームとハーブティー！」
アルトちゃんはよいしょつと、少し苦勞しながら席に座って注文

した。

「はあ、まあいつか。気にしなければいいんだしね。僕はそう自分に言い聞かせながら、席に座った。」

「じゃあ、またね空狐」

「みなさんもまた遊びに来てくださいね」

ケーキをおいしくいただいてから美紀と早紀さんに見送られて僕は店を出た。

にしても、またも美狐さんがケーキ全品制覇は圧巻だった。もういいですって言いたいくらい。

「いい感じのお店だったね」

「ねー！」

舞さんとアルトちゃんが上機嫌に笑う。

「確かに早紀さんのお店は里でも人気だからね」

冬だから空はすでに星と月が出始め、街灯に明かりがついている。冬らしい肌寒さの中、三人で思い思いに店の感想を話しながら帰路について……あれ、三人？

舞さんとアルトちゃんが出て、美狐さんがいない？

「あのさ、美狐さんがいないんだけど」

僕の言葉に二人がきよるきよると周りを見て、

『本当だ！』

声を上げる。

「ど、どの時点でいなかったっけ？ 確か、店を出た時はいたはずだし、そう遠くには行ってないか？」

くんくんと鼻を鳴らすと、不快な残滓が漂ってきた。獣臭にも似た野性的且つ妖艶さを含めたこの感じは、美狐さん？

「こっちだ」

僕はそれをたどって美狐さんを探すこととなった。

第九十二話 喫茶フォックス（後書き）

鈴：「ども〜狐火続きUpしました！」

刹：「まだか、俺の活躍は！」

鈴：「まだだ、もう少し辛抱してくれ」

刹：「そうか……はあ、いろいろと準備してるのになあ」

鈴：「まあまあ、今までの鬱憤は晴らさせてやるからさ」

刹：「おう……」

鈴：「それでは、また次回に！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6049d/>

狐火！～狐少年の奮闘記～

2011年9月30日03時29分発行